

# 西長岡宿遺跡（2）

（縄文時代編）

北関東自動車道（伊勢崎～県境）地域  
埋蔵文化財発掘調査（その2）報告書

2010

東日本高速道路株式会社  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

西長岡宿遺跡は、太田市西長岡に所在し、北関東自動車道（伊勢崎～県境）の建設工事に伴い、平成13年度から15年度と3年にわたり、発掘調査が実施されました。

本遺跡の周辺からは、成塚住宅団地遺跡、駒形神社埴輪窯址や古墳時代前期の方墳が発見された成塚向山古墳など古墳時代の遺跡が多く調査されている地域です。西長岡宿遺跡は、縄文時代、弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡として、調査されました。弥生時代以降の調査につきましては、先に「西長岡宿遺跡（1）」としてその調査内容と成果について、報告したところであります。

今回の報告は、縄文時代の遺構・遺物についてまとめたものですが、当地域に於ける同時代遺跡の発掘調査例はまだ少なく、未解明なものも多い状況にあります。そういった中で、本遺跡では、縄文時代早期後半と縄文時代後期中頃の資料がまとまって発見されております。

縄文時代早期後半では、出土例の少ない沈線文系土器と押型文土器が伴って出土するなど、当該期の土器研究に重要な発見がありました。また、縄文時代後期中頃の配石遺構や配石墓などが数多く発見されており、縄文時代の祭祀や葬送について、重要な見解が得られると考えております。

本書には、これらの成果がまとめられており、考古学の研究者はもちろん、郷土の歴史に関心をお持ちの県民の皆様、さらには、学校教育における郷土学習にも大いに役立つものと確信しております。

最後に、東日本高速道路株式会社、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会及び地元関係者の皆様には発掘調査から報告書刊行まで終始ご協力を賜りましたことに心より感謝申し上げます、序といたします。

平成22年10月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田 栄 一



# 例 言

- 1 本書は、北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設工事に伴い発掘調査された西長岡宿遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。本書では、縄文時代について掲載した。弥生時代以降については、群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第490集『西長岡宿遺跡（1）—弥生時代以降編—』2010で報告している。
- 2 西長岡宿遺跡は、群馬県太田市西長岡395番地他に所在する。
- 3 事業主体 東日本高速道路株式会社関東支社（旧日本道路公団）
- 4 整理主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成13年4月1日～平成14年3月31日  
平成14年4月1日～平成15年3月31日  
平成15年4月1日～平成16年1月31日  
平成16年6月1日～平成16年6月30日
- 6 発掘調査体制は次の通りである  
平成13年度 石塚久則（主幹兼専門員）・金子伸也（専門員）・大塚俊和（専門員）  
小林 徹（主任調査研究員）・久保 学（調査研究員）・石田 真（調査研究員）  
平成14年度 石塚久則（主幹兼課長）・坂井 隆（主幹兼専門員）・金子伸也（専門員）・伊平 敬（専門員）  
小林 徹（専門員）・植崎修一郎（専門員）・本間 昇（主任調査研究員）  
黒澤照弘（調査研究員）・齋田智彦（調査研究員）  
平成15年度 坂井 隆（専門員）・谷藤保彦（専門員）・矢村 哲（専門員）・大澤 務（専門員）  
小林 徹（専門員）・本間 昇（専門員）・黒澤照弘（主任調査研究員）・山田精一（調査研究員）  
平成16年度 谷藤保彦（専門員）
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。  
平成20年4月1日～平成21年3月31日  
整理担当：関根愷二（主任専門員）・齋田智彦（主任調査研究員）  
保存処理：関邦一（係長） 遺物写真撮影：佐藤元彦（係長）  
委託 石器実測：株式会社 アルカ  
平成21年4月1日～平成22年3月31日  
整理担当：関根愷二（主任専門員）・齋田智彦（主任調査研究員）  
保存処理：関邦一（係長） 遺物写真撮影：佐藤元彦（係長）  
平成22年4月1日～平成22年9月30日  
整理担当：関根愷二（主席専門員） 遺物写真撮影：佐藤元彦（補佐）
- 8 本書作成の担当者は次の通りである  
編集 関根愷二・齋田智彦  
執筆 岩崎泰一（第2章石器観察表）、橋本淳（第2章2節、7節縄文時代早期土器観察表、第3章1節）、  
関根愷二（上記以外）
- 9 出土石器の石材同定については飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）にお願いした。
- 10 発掘調査資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査及び報告書作成には、小林達雄（國學院大學名誉教授）、谷口廣浩（國學院大學准教授）、中村耕作（國

學院大學考古学研究室助手)、鈴木徳雄(本庄市教育委員会)、綿田弘実(長野県埋蔵文化財センター)、寺崎裕助(新潟県立歴史博物館)、秋田かな子(東海大学文学部講師)、長田友也(南山大学文学部講師)、大工原豊(安中市教育委員会)、塚本師也・江原英(栃木県埋蔵文化財センター)、佐藤雅一(津南町教育委員会)、阿部昭典(國學院大學伝統文化リサーチセンター)の方々を始め関係機関ならびに多くの方々のご協力、ご指導をいただきました。記して感謝致します。

## 凡 例

- 1 遺跡に使用した座標系は、日本測地系を用いた。遺跡地は、第IX系第三象限に当たる。遺跡図には、X・Y値を用い、北は座標北を指し、真北との偏差角は、調査区中央部X=38000.000(世界測地系38354.6239m)、Y=-44800.000(世界測地系-45092.5029m)で $-0^{\circ}17'51.809''$ である。
- 2 本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用している。そのため、遺構名称の重複があるものは、一方に統一した。また、図面等の欠落によるものは、欠番としている。
- 3 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。尚図中に縮尺を記入している。  
遺構図 住居 1/80 配石墓・配石遺構・土坑・ピット 1/20、1/40  
遺物図 土器 1/2、1/3、1/4  
石器 1/2、1/3、1/4、1/6
- 4 遺物写真の倍率は原則として遺物実測図と同等にしたが、一部異なるものもある。
- 5 本報告書で使用したテフラの略号は以下の通りである。  
浅間A軽石(1783年)As-A、浅間B軽石(1108年)As-B、榛名二ツ岳伊香保テフラ(6世紀中葉)Hr-FP  
榛名二ツ岳渋川テフラ(6世紀初頭)Hr-FA、浅間C軽石(4世紀中葉)As-C。
- 6 本報告書で使用した地図は、以下の通りである。  
国土地理院 地形図 1:25,000「桐生・上野境」 地勢図 1:200,000「宇都宮」
- 7 遺物の色調については、農林水産省農業水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』による。
- 8 縄文土器の胎土に繊維を含むものには、断面図に・をつけた。
- 9 本報告書で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

焼土



炭



# 目次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
写真図版目次	
第1章 調査に至る経過と遺跡の概要	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 西長岡宿遺跡調査経過（日誌抄）	4
第4節 遺跡の位置と周辺の遺跡	6
第5節 遺跡地の環境と基本層序	9
第2章 検出された遺構と遺物	14
第1節 調査の概要	14
第2節 I区の調査	15
第3節 II区の調査	33
第4節 III区の調査	44
第5節 IV区の調査	62
第6節 V区の調査	177
第7節 VI・VII区の調査	195
第3章 発掘調査の成果と課題	210
第1節 縄紋早期沈線紋土器について	210
第2節 後期中葉の出土遺物	213
第3節 後期中葉の遺構	219

# 挿図目次

第1図	西長岡宿跡配置図	1	第54図	N区42号・124号・127号・131号・142号道構	79
第2図	西長岡宿跡グリッド配置図	2	第55図	N区6号・24号・37号・48号・78号・98号道構	81
第3図	西長岡宿跡調査区域全体図	3	第56図	N区39号・58号・79号・80号・82号道構	82
第4図	西長岡宿跡周辺道跡分布図	7	第57図	N区40号・55号・56号・81号・136号道構	84
第5図	西長岡宿跡周辺地形分類図	9	第58図	N区92号・104号・105号・111号・138号道構	86
第6図	西長岡宿跡基本土層図(1)	12	第59図	N区63号・93号・115号道構	87
第7図	西長岡宿跡基本土層図(2)	13	第60図	N区1号・4号・5号・34号・83号・88号・91号・112号・116号道構	89
第8図	I区全体図	15	第61図	N区110号・113号・117号・123号・132号・134号・135号・140号・141号道構	90
第9図	I区5号道構	16	第62図	N区109号・114号・133号・139号道構	92
第10図	I区13号・14号道構	17	第63図	N区67号・68号道構	94
第11図	I区5号道構出土土器	23	第64図	N区21号・22号・64号道構	95
第12図	I区出土土器(1)	24	第65図	N区23号・27号・103号・107号道構	96
第13図	I区出土土器(2)	25	第66図	N区101号・102号・108号道構	98
第14図	I区出土土器(3)	26	第67図	N区106号道構	99
第15図	I区出土土器(4)	27	第68図	N区19号道構	100
第16図	I区出土土器(5)	28	第69図	N区2号・3号・4号焼土	101
第17図	I区出土土器(6)	29	第70図	N区1号住居出土土器(1)	104
第18図	I区出土土器(7)	30	第71図	N区1号住居出土土器(2)	105
第19図	I区出土土器(8)	31	第72図	N区2号住居出土土器(1)	106
第20図	I区出土土器	32	第73図	N区2号住居出土土器(2)	107
第21図	II区全体図	33	第74図	N区2号住居出土土器(3)	108
第22図	II区6号道構	35	第75図	N区2号住居出土土器(4)	109
第23図	II区6号道構出土土器	36	第76図	N区3号・4号住居出土土器(1)	111
第24図	II区29号・30号・35号・36号・37号道構	37	第77図	N区3号・4号住居出土土器(2)	112
第25図	II区道構外出土土器(1)	39	第78図	N区5号・6号住居出土土器	113
第26図	II区道構外出土土器(2)	40	第79図	N区4号・5号道構出土土器	116
第27図	II区道構外出土土器(3)	41	第80図	N区6号・9号・21号道構出土土器	117
第28図	II区出土土器(1)	42	第81図	N区21号・23号道構出土土器	118
第29図	II区出土土器(2)	43	第82図	N区23号・24号道構出土土器	119
第30図	III区全体図	45	第83図	N区24号・27号道構出土土器	120
第31図	III区1号・2号・3号・4号道構	46	第84図	N区27号・37号・42号・43号・44号・63号・65号道構出土土器	121
第32図	III区5号・6号道構・17号溝	47	第85図	N区68号・81号・109号・118号・122号道構出土土器	122
第33図	III区1号・2号・3号・4号配石	49	第86図	N区95号・106号道構出土土器	123
第34図	III区5号・6号・7号・8号配石	50	第87図	N区19号・131号道構出土土器	124
第35図	III区1号・2号・3号・4号・5号道構出土土器	53	第88図	N区19号道構出土土器	125
第36図	III区5号道構出土土器	54	第89図	N区盛土	127
第37図	III区1号住居・出土土器	55	第90図	N区盛土断面図	128
第38図	III区道構外出土土器(1)	56	第91図	N区盛土出土土器	129
第39図	III区道構外出土土器(2)	57	第92図	N区道構外出土土器(1)	135
第40図	III区道構外出土土器(3)	58	第93図	N区道構外出土土器(2)	136
第41図	III区道構外出土土器	59	第94図	N区道構外出土土器(3)	137
第42図	III区出土土器(1)	60	第95図	N区道構外出土土器(4)	138
第43図	III区出土土器(2)	61	第96図	N区道構外出土土器(5)	139
第44図	IV区全体図	63	第97図	N区道構外出土土器(6)	140
第45図	N区1号・2号住居	65	第98図	N区道構外出土土器(7)	141
第46図	N区3号・4号住居	66	第99図	N区道構外出土土器(8)	142
第47図	N区5号・6号住居	67	第100図	N区道構外出土土器(9)	143
第48図	N区43号・44号・45号・85号道構	69	第101図	N区道構外出土土器(10)	144
第49図	N区57号・86号・87号・90号・94号道構	70	第102図	N区道構外出土土器(11)	145
第50図	N区9号・38号・77号・89号・100号道構	72	第103図	N区道構外出土土器(12)	146
第51図	N区59号・61号・95号道構	74			
第52図	N区118号・120号・121号・129号・130号道構	75			
第53図	N区54号・122号・125号・126号・128号道構	77			



第104図	Ⅳ区道橋外出土石器 (13)	147
第105図	Ⅳ区道橋外出土石器 (14)	148
第106図	Ⅳ区道橋外出土石器 (15)	149
第107図	Ⅳ区道橋外出土石器 (16)	150
第108図	Ⅳ区道橋外出土石器 (17)	151
第109図	Ⅳ区道橋外出土石器 (18)	152
第110図	Ⅳ区Ⅰ号・5号・6号・19号道橋出土石器	157
第111図	Ⅳ区Ⅰ9号・24号・27号道橋出土石器	158
第112図	Ⅳ区37号・40号・45号・54号・67号 81号・82号・83号・93号道橋出土石器	159
第113図	Ⅳ区57号・132号・133号道橋出土石器	160
第114図	Ⅳ区98号・100号・104号・106号・107号 115号道橋出土石器	161
第115図	Ⅳ区101号・128号・135号道橋出土石器	162
第116図	Ⅳ区道橋外出土石器 (1)	163
第117図	Ⅳ区道橋外出土石器 (2)	164
第118図	Ⅳ区道橋外出土石器 (3)	165
第119図	Ⅳ区道橋外出土石器 (4)	166
第120図	Ⅳ区道橋外出土石器 (5)	167
第121図	Ⅳ区道橋外出土石器 (6)	168
第122図	Ⅳ区道橋外出土石器 (7)	169
第123図	Ⅳ区道橋外出土石器 (8)	170
第124図	Ⅳ区道橋外出土石器 (9)	171
第125図	Ⅳ区道橋外出土石器 (10)	172
第126図	Ⅳ区道橋外出土石器 (11)	173
第127図	Ⅳ区道橋外出土石器 (12)	174
第128図	Ⅳ区道橋外出土石器 (13)	175
第129図	Ⅳ区道橋外出土石器 (14)	176
第130図	V区全体図	177
第131図	V区Ⅰ号遺物集中出土石器	179
第132図	V区Ⅱ号遺物集中出土石器 (1)	180

第133図	V区Ⅱ号遺物集中出土石器 (2)	181
第134図	V区Ⅱ号遺物集中出土石器 (3)	182
第135図	V区Ⅱ号遺物集中出土石器 (4)	183
第136図	V区Ⅱ号・4号遺物集中出土石器	184
第137図	V区道橋外出土石器 (1)	187
第138図	V区道橋外出土石器 (2)	188
第139図	V区道橋外出土石器 (3)	189
第140図	V区道橋外出土石器 (4)	190
第141図	V区道橋外出土石器 (5)	191
第142図	V区道橋外出土石器 (6)	192
第143図	V区道橋外出土石器 (1)	193
第144図	V区道橋外出土石器 (2)	194
第145図	Ⅵ区道橋外出土石器 (1)	198
第146図	Ⅵ区道橋外出土石器 (2)	199
第147図	Ⅵ区道橋外出土石器 (3)	200
第148図	Ⅵ区道橋外出土石器 (4)	201
第149図	Ⅵ区道橋外出土石器 (5)	202
第150図	Ⅵ区道橋外出土石器 (6)	203
第151図	Ⅵ区道橋外出土石器 (7)・Ⅶ区道橋外出土石器 (1)	204
第152図	Ⅶ区道橋外出土石器 (2)	205
第153図	Ⅶ区道橋外出土石器 (1)	207
第154図	Ⅶ区道橋外出土石器 (2)	208
第155図	Ⅶ区道橋外出土石器	209
第156図	本道跡出土の縄紋早期沈埋土器	211
第157図	神奈川県宮ヶ瀬遺跡群出土土器	212
第158図	西長岡宮遺跡土器集成図 (1)	215
第159図	西長岡宮遺跡土器集成図 (2)	216
第160図	配石遺構分類図 (1)	221
第161図	配石遺構分類図 (2)	222
第162図	配石遺構分類図 (3)	223

## 写真目次

PL. 1	Ⅰ区調査区全景 (東) Ⅰ区14号道橋石囲炉 (北) Ⅰ区14号道橋石囲炉 (南西) Ⅰ区14号道橋石囲炉 (東) Ⅰ区14号道橋石囲炉 (西)	Ⅲ区縄文時代埋層面 (東) Ⅲ区縄文時代埋層面 (南) Ⅲ区縄文時代埋層面 (北)	
PL. 2	Ⅰ区13号道橋遺物出土状況 (東) Ⅰ区13号道橋遺物出土状況 (南) Ⅰ区13号道橋遺物出土状況 (北東) Ⅰ区13号道橋遺物出土状況 (北東) Ⅰ区13号道橋遺物出土状況 (南西) Ⅰ区5号道橋遺物出土状況 (東) Ⅰ区5号道橋遺物出土状況 (西) Ⅰ区16号道橋全景 (南西)	PL. 6	Ⅲ区縄文時代埋層面 (南) Ⅲ区縄文時代埋層面 (北) Ⅲ区Ⅰ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅰ号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅰ号配石中央土坑掘り方 (南) Ⅲ区Ⅰ号配石中央土坑掘り方 (南) Ⅲ区Ⅱ号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅱ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅱ号配石断ち割り状況 (北) Ⅲ区Ⅱ号配石断ち割り状況 (東)
PL. 3	Ⅱ区調査区全景 (東) Ⅱ区調査区全景 (南)	PL. 7	Ⅲ区Ⅲ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅲ号配石全景 (北) Ⅲ区Ⅳ号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅳ号配石全景 (西) Ⅲ区Ⅴ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅴ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅵ・7号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅷ号配石全景 (南)
PL. 4	Ⅱ区6号道橋 (南) Ⅱ区6号道橋埋理 (南) Ⅱ区29号道橋 (東) Ⅱ区35号道橋 (西) Ⅱ区36号道橋 (東)	PL. 8	Ⅲ区Ⅲ号配石全景 (北) Ⅲ区Ⅳ号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅳ号配石全景 (西) Ⅲ区Ⅴ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅴ号配石全景 (東) Ⅲ区Ⅵ・7号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅷ号配石全景 (南) Ⅲ区Ⅷ号配石全景 (南)
PL. 5	Ⅲ区調査区全景 (東)	PL. 9	Ⅲ区Ⅰ号集石全景 (南) Ⅲ区Ⅱ号集石全景 (南)

PL-10	Ⅲ区1号道槽全景 (東)	PL-11	Ⅳ区48号道槽 (北)
	Ⅲ区1号道槽全景 (西)		Ⅳ区55号道槽 (東)
	Ⅲ区2号道槽遺物出土状況 (北)		Ⅳ区57号道槽 (東)
	Ⅲ区2号道槽遺物出土状況 (北)		Ⅳ区58号道槽 (東)
	Ⅲ区3号道槽遺物出土状況 (北)		Ⅳ区59号道槽 (東)
	Ⅲ区4号道槽遺物出土状況 (東)		Ⅳ区61号道槽 (西)
	Ⅲ区5号道槽遺物出土状況 (西)		Ⅳ区63号道槽 (東)
	Ⅲ区5号道槽遺物出土状況 (西)		Ⅳ区64号道槽 (東)
	Ⅲ区6号道槽遺物出土状況 (東)		Ⅳ区67号道槽 (東)
	Ⅲ区6号道槽遺物出土状況 (西)		Ⅳ区68号道槽 (西)
PL-11	Ⅲ区b 1号住居石罌炉 (南)	PL-12	Ⅳ区77・78・79・80号道槽 (東)
	Ⅲ区b 1号住居石罌炉 (南)		Ⅳ区77・78・79・80号道槽 (東)
	Ⅲ区b 1号配石道槽 (西)		Ⅳ区81号道槽 (北東)
PL-12	Ⅲ区b 1号配石道槽 (南西)	PL-13	Ⅳ区82号道槽 (北東)
	Ⅳ区調査区全景 (東)		Ⅳ区85号道槽 (南)
	Ⅳ区調査区全景 (南)		Ⅳ区88号道槽 (東)
	Ⅳ区1号住居全景 (東)		Ⅳ区89・90号道槽 (東)
	Ⅳ区1号住居炉 (南東)		Ⅳ区91号道槽 (東)
	Ⅳ区1号住居炉 (南東)		Ⅳ区95号道槽 (東)
	Ⅳ区1号住居遺物出土状況		Ⅳ区95号道槽 (西)
	Ⅳ区2号住居全景 (南)		Ⅳ区100号道槽 (東)
	Ⅳ区2号住居炉 (南西)		Ⅳ区100号道槽 (西)
	Ⅳ区3・4号住居全景 (南西)		Ⅳ区106号道槽 (南)
PL-13	Ⅳ区3・4号住居炉 (南西)	PL-14	Ⅳ区106号道槽 (東)
	Ⅳ区3・4号住居炉 (西)		Ⅳ区108号道槽 (南)
	Ⅳ区3・4号住居炉 (東)		Ⅳ区109号道槽 (東)
	Ⅳ区5号住居全景 (東)		Ⅳ区110号道槽 (西)
	Ⅳ区5号住居炉 (南)		Ⅳ区111号道槽 (北)
	Ⅳ区6号住居全景 (東)		Ⅳ区111号道槽 (東)
	Ⅳ区6号住居全景 (南)		Ⅳ区112号道槽 (南東)
	Ⅳ区1号道槽 (東)		Ⅳ区113号道槽 (東)
	Ⅳ区4号道槽 (東)		Ⅳ区114号道槽 (南)
	Ⅳ区5号道槽 (西)		Ⅳ区115号道槽 (東)
PL-14	Ⅳ区9号道槽 (南東)	PL-15	Ⅳ区116号道槽 (北)
	Ⅳ区9号道槽 (南西)		Ⅳ区117号道槽 (南)
	Ⅳ区9号道槽 (南)		Ⅳ区118・120・121号道槽 (東)
	Ⅳ区21号道槽 (南)		Ⅳ区118号道槽 (東)
	Ⅳ区21号道槽 (南)		Ⅳ区118号道槽掘り方 (北)
	Ⅳ区21号道槽 (南)		Ⅳ区119号道槽 (東)
	Ⅳ区21号道槽 (南)		Ⅳ区120号道槽 (東)
	Ⅳ区23号道槽 (東)		Ⅳ区120号道槽掘り方 (北)
	Ⅳ区24・98号道槽 (南)		Ⅳ区120号道槽掘り方 (東)
	Ⅳ区24・98号道槽 (北)		Ⅳ区121号道槽 (北)
PL-15	Ⅳ区24・98号道槽 (南)	PL-16	Ⅳ区121号道槽 (東)
	Ⅳ区24・98号道槽立石復元 (南)		Ⅳ区121号道槽掘り方 (北)
	Ⅳ区24・98号道槽立石復元 (北)		Ⅳ区122号道槽 (東)
	Ⅳ区34号道槽 (南西)		Ⅳ区123号道槽 (東)
	Ⅳ区34号道槽 (南西)		Ⅳ区123号道槽 (北東)
	Ⅳ区37号道槽 (東)		Ⅳ区123号道槽掘り方 (北東)
	Ⅳ区37号道槽掘り方 (東)		Ⅳ区124号道槽 (北東)
	Ⅳ区38号道槽 (南)		Ⅳ区125号道槽 (北西)
	Ⅳ区39号道槽 (北)		Ⅳ区125号道槽掘り方 (北)
	Ⅳ区40・56号道槽 (東)		Ⅳ区126号道槽 (北東)
PL-16	Ⅳ区43号道槽 (南)	PL-17	Ⅳ区127号道槽 (西)
	Ⅳ区44号道槽 (東)		Ⅳ区128号道槽 (西)
	Ⅳ区45号道槽 (東)		Ⅳ区129号道槽 (北)
		PL-18	
		PL-19	
		PL-20	
		PL-21	
		PL-22	
		PL-23	

PL-24	IV区129号道横(南)	PL-38	I区出土遗物(5)
	IV区129号道横(北)		II区出土遗物(1)
	IV区130号道横(北東)	PL-39	II区出土遗物(2)
	IV区130号道横(北西)	PL-40	II区出土遗物(3)
	IV区131号道横(北東)	PL-41	II区出土遗物(4)
	IV区132号道横(北)		III区出土遗物(1)
	IV区133号道横(南東)	PL-42	III区出土遗物(2)
	IV区134号道横(東)	PL-43	III区出土遗物(3)
PL-25	IV区135号道横(北)	PL-44	III区出土遗物(4)
	IV区136号道横(北)	PL-45	IV区出土遗物(1)
	IV区138号道横(北)	PL-46	IV区出土遗物(2)
	IV区139号道横(南)	PL-47	IV区出土遗物(3)
	IV区140号道横(南東)	PL-48	IV区出土遗物(4)
	IV区141号道横(南東)	PL-49	IV区出土遗物(5)
	IV区142号道横(東)	PL-50	IV区出土遗物(6)
	IV区142号道横(東)	PL-51	IV区出土遗物(7)
PL-26	IV区1号烧土(南西)	PL-52	IV区出土遗物(8)
	IV区2号烧土(西)	PL-53	IV区出土遗物(9)
	IV区3号烧土(南西)	PL-54	IV区出土遗物(10)
	IV区4号烧土(南)	PL-55	IV区出土遗物(11)
	IV区19号道横(西)	PL-56	IV区出土遗物(12)
PL-27	IV区盛土調査状況A地区(東)	PL-57	IV区出土遗物(13)
	IV区盛土調査状況A地区(東)	PL-58	IV区出土遗物(14)
	IV区盛土調査状況B地区(東)	PL-59	IV区出土遗物(15)
	IV区盛土調査状況B地区(西)	PL-60	IV区出土遗物(16)
	IV区盛土調査状況D地区(南)	PL-61	IV区出土遗物(17)
	IV区盛土調査状況D地区(南東)	PL-62	IV区出土遗物(18)
	IV区盛土調査状況E地区(西)	PL-63	IV区出土遗物(19)
	IV区盛土調査状況E地区(西)	PL-64	IV区出土遗物(20)
PL-28	IV・V区調査区全景(西)	PL-65	IV区出土遗物(21)
	V区縄文包含層(南)	PL-66	IV区出土遗物(22)
PL-29	V区西部縄文包含層(N)	PL-67	IV区出土遗物(23)
	V区北東部縄文包含層(南)	PL-68	IV区出土遗物(24)
	V区1号遺物集中(東)	PL-69	IV区出土遗物(25)
	V区2号遺物集中(東)	PL-70	IV区出土遗物(26)
	V区2号遺物集中(東)	PL-71	IV区出土遗物(27)
	V区2号遺物集中(東)	PL-72	IV区出土遗物(28)
	V区3号遺物集中(東)		V区出土遗物(1)
	V区4号遺物集中(東)	PL-73	V区出土遗物(2)
PL-30	VI区縄文包含層(空堀)	PL-74	V区出土遗物(3)
	VI区縄文包含層(東)	PL-75	V区出土遗物(4)
PL-31	VI区縄文包含層(西)	PL-76	V区出土遗物(5)
	VI区縄文包含層(西)	PL-77	V区出土遗物(6)
PL-32	VII区縄文包含層(空堀)	PL-78	V区出土遗物(7)
	VII区縄文包含層(北東)	PL-79	V区出土遗物(8)
PL-33	VII区縄文包含層(空堀)		VI区出土遗物(1)
	VII区縄文包含層(空堀)	PL-80	VI区出土遗物(2)
PL-34	I区出土遗物(1)	PL-81	VI区出土遗物(3)
PL-35	I区出土遗物(2)	PL-82	VI区出土遗物(4)
PL-36	I区出土遗物(3)	PL-83	VII区出土遗物(1)
PL-37	I区出土遗物(4)	PL-84	VII区出土遗物(2)

#### 附图

西長岡宮I区~III区縄文時代遺構全体図

西長岡宮IV区縄文時代調査図

西長岡宮IV区縄文時代遺構全体図

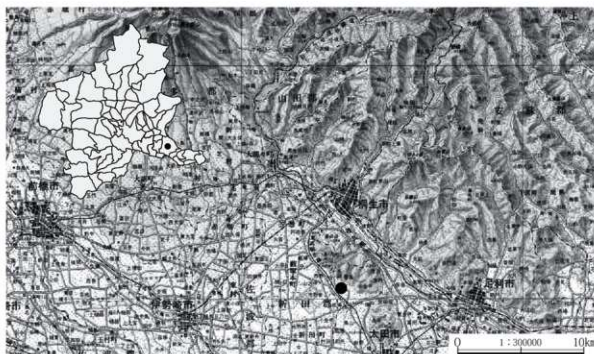


## 第1章 発掘調査に至る経過と遺跡の概要

### 第1節 発掘調査に至る経過

当事業は北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設に伴う伊勢崎インターチェンジから栃木県境までの17.7kmについて発掘調査が開始されたのは平成12年度である。本建設事業に先立ち、平成7年から調査を開始した北関東自動車道（高崎～伊勢崎）の発掘調査事業を平成12年7月までに終了し、12月まで基礎整理作業を行うこととなっていた。平成12年6月12日、日本道路公団東京建設局高崎工事事務所において公団・群馬県土木部道路建設課高速道路対策室・群馬県教育委員会文化財保護課・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の4者により、第1回目の伊勢崎～県境についての打ち合わせ会議を行った。公団からは用地買収等の状況、文化財調査と工事工程（カルバートボックスや橋梁等の下部工事発注）について説明があり、平成12年8月から調査開始の要請があった。当事業団としては、用地買収があまり進んでいない状況であること、残土処理場確保、側道部分の調査地の明確な区分等について問題点を出し合い調査への基礎固めを行うこととした。各所属で検討が進み文化財保護課の

調整のもとに日本道路公団東京建設局・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の3者は「北関東自動車道（伊勢崎～県境）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を平成12年8月1日に締結し、この協定に基づき日本道路公団東京建設局と当事業団が「平成12年度北関東自動車道（伊勢崎～県境）埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を結び、8月からは、書上遺跡から開始することとなった。平成8年度に道路公団から県教育委員会に北関東自動車道建設事業地内の埋蔵文化財包蔵地の状況について、問い合わせが行われ、県教育委員会は沿線市町村の協力のもとに詳細遺跡確認作業を行った。西長岡宿遺跡は、八王子丘陵を背景に古墳群の分布や駒形神社埴輪窯跡、西長岡横塚古墳群、成塚住宅団地遺跡など隣接諸遺跡との関連から、遺跡地として周知化され、北関東自動車道事業地内が発掘調査対象地となった。西長岡宿遺跡は太田市西長岡に所在し、発掘調査区域は北関東自動車道事業予定地内、延長600mの区間である。近世～縄文時代の遺物が散布していることから、事業予定地全面が調査対象地となり、平成13年4月1日から調査を実施することとなった。



第1図 西長岡宿遺跡配置図

## 第2節 調査の方法

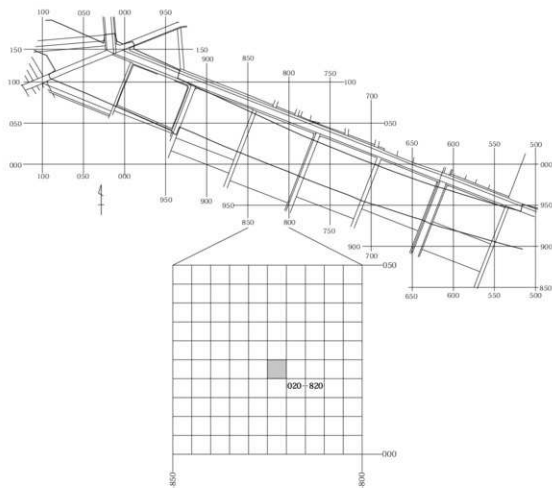
調査にあたってのグリッド設定は、国家座標IX系（本遺跡では2002年4月改正前の日本測地系）を用い、遺跡調査範囲の西側にあるX軸38110、Y軸-45050を基点に10mを基準としたグリッドを設定した。各グリッドの名称はX軸、Y軸ともに座標値の下3桁をとってグリッド名とした。このグリッド名は、南東隅をX軸、Y軸の順で表記している。先程あげた基準座標38110、-45050は110-050となる。調査区の名称は、西側から順に本遺跡を分断する道路により調査区を分けローマ数字の1からVII区を設定した。さらに各区において調査が分割された場合にはアラビア数字の1・2などを付した。

本遺跡の表土除去には、重機（バックホウ）を使用

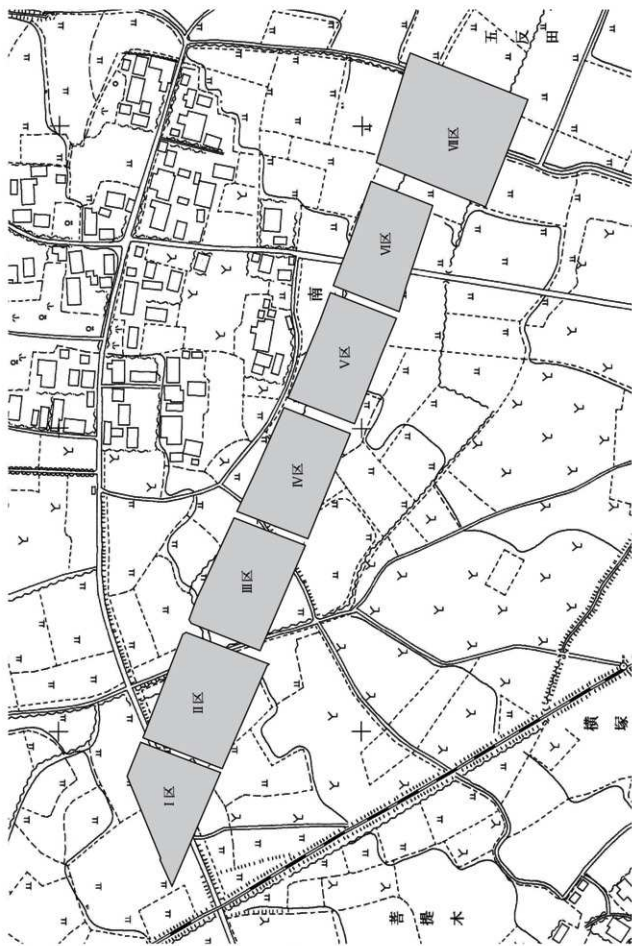
し、遺構の確認作業及び覆土除去作業は、発掘作業員の手で行った。中近世から縄文時代の文化層が重複していたが、土層の堆積が薄い調査区では層位的な調査が行われず、同じ平面上での調査を行った。特に本遺跡は各調査区により発掘年度・担当者が異なることから、層位的な統一がとれていない。

遺構の名称は、各調査区・担当者において独自に行っているため統一がとれていない。そのため、遺構名称については各区ごとの調査概要で説明する。出土遺物については、遺構から出土したものは、そのまま遺構番号を付し取り上げた。

写真撮影は、中型と小型カメラを併用し、白黒フィルム、カラースライドフィルムを使用した。また、適宜、航空写真、ラジオコントロールのヘリコプターによる撮影を業者に委託して行った。



第2図 西長岡宿遺跡グリッド配置図



第3図 西長岡宿道跡調査区範囲全体図

### 第3節 西長岡宿遺跡調査経過

西長岡宿遺跡の発掘調査は、平成13年度から平成15年度にかけて行われた。遺跡は広範囲のため、調査区をⅠ区からⅧ区に分けて調査を行った。その中でも、工事行程との関係から発掘調査は、各調査区の中を部分的に先行して行った区もある。そのために同一調査区であっても調査年度・調査担当が異なった。また、遺跡全体を通して各区の調査は、モザイク状の調査となり、複雑なものとなっている。以下、各区の調査時期・担当者名を記して調査経過を掲載する。

#### 平成13年度の調査

平成13年度は、当初1班2名体制での調査であったが、年度後半に増員になり2班体制で調査を行った。調査期間は、平成13年4月～平成14年3月31日である。

調査担当は、石塚久則・金子伸也（平成13年4月～平成14年3月）、大塚俊和（平成13年9月～12月）・小林徹（平成13年10月～12月）、久保学・石田真（平成14年1月～3月）。

4月初旬、石塚・金子により調査を開始する。Ⅰ・Ⅱ区の調査準備で、表土掘削とグリッド基準杭設定などを行う。5月～6月は、隣接する島谷戸遺跡調査のため、本遺跡の調査を一時中断する。7月に、本遺跡の調査を再開する。8月末までⅠ・Ⅱ区の表土掘削と遺構数量把握のためにトレンチによる調査を行う。9月にⅠ区の本格的な調査を開始する。大塚が担当に加わる。

10月新たに担当の小林が加わり、大塚と西長岡宿2班として調査を始める。Ⅰ区のHr-FA面の遺構検出作業を行う。11月から石塚・金子の1班と大塚・小林の2班でそれぞれ、Ⅰ区-1とⅠ区-2に分割し調査を行う。Ⅰ区-1は、遺構数量把握のためのトレンチ調査。Ⅰ区-2は、Hr-FA面の溝調査と、Ⅱ区表土掘削を行う。12月は、Ⅰ区-1溝調査、Ⅰ区-2南側低地部の調査。7日にⅠ区-1のHr-FA下面調査が終わり全景写真撮影。Ⅱ区溝掘り下げ等を行う。1月は、大塚・小林組と、久保・石田組に交替する。Ⅰ区の縄文時代包含層と北側低地部分にある溝主体の調査と併行して、Ⅲ区の遺構確認トレンチ調査を継続して行う。2月は、Ⅰ区北側低地部調査を終了し、埋め戻し。Ⅱ区南側低地Ⅳ層調査。Ⅲ区トレン

チ調査を進める。3月は、Ⅰ区-2の5号・13号遺構調査を行い、Ⅰ区の調査を終了する。Ⅱ区6号遺構の石敷き検出と各区の遺構を中心に調査を行う。また、高所作業車による調査区全景写真撮影をする。9日には、現地説明会開催。Ⅲ区は、写真撮影、As-B下層調査を進める。

以上、本年度は、Ⅰ区の調査終了、Ⅱ区、Ⅲ区を一部調査し、次年度に継続する。

#### 平成14年度の調査

平成14年度の調査は、当初2班体制で行い、年度途中に班数を増やして調査が行われた。調査期間は、平成14年4月1日～平成15年3月31日である。調査担当は、1班Ⅱ区・Ⅳ区担当は、石塚久則・黒澤照弘（平成14年4月～平成15年3月）、2班Ⅲ区担当は、金子伸也・小林徹（平成14年4月～平成15年3月）、3班Ⅴ区担当は、坂井隆・伊平敬・齊田智彦（平成15年2月～3月）、4班Ⅶ区担当は、橋崎修一郎・本間昇（平成15年2月～3月）である。

Ⅱ区・Ⅳ区担当、石塚久則・黒澤班の調査経過は、次の通りである。

4月は、Ⅱ区-1縄文時代包含層、遺構確認調査を主体に行う。5月は、西長岡塚塚の試掘により一時中断する。6月は、Ⅱ区-1の溝調査と、遺構確認のためのトレンチによる調査を主体に行う。7月は、溝、縄文時代包含層を主体に調査。8月も前月に続き、縄文時代包含層を主体に調査する。9月は、縄文時代包含層と旧河道を調査する。河道からは、流木の出土が多い。

10月は、Ⅱ区縄文面下層の調査と、Ⅳ区の遺構確認トレンチ調査を行う。Ⅳ区からは、縄文時代の遺物が多く出土することから、遺物出土状況実測を行う。11月は、Ⅳ区遺構確認のために、全面を南北方向に5m間隔でトレンチ掘削を行う。12月は、先月に続きⅣ区調査区全面にトレンチによる掘削。Ⅳ区As-B軽石下の水田遺構検出。1月～3月は、Ⅳ区縄文面・旧河道の調査を行った。

Ⅲ区担当、金子・小林班の調査経過は、次の通りである。

4月は、前年度調査の継続でAs-B軽石下遺構確認のため、トレンチによる調査を行う。5月はHr-FA軽石層下にある溝の調査と並行して、東北部の縄文時代包含層を精査する。6月～8月は、Hr-FA軽石層下の溝を継続し、東側縄文時代包含層を主体に調査する。9月は、旧



河道(古墳時代)、北部ローム台地トレンチ調査、縄文面を主体に調査を行った。

10月は、古墳時代河道を主体に調査を行う。11月～1月中旬は、Ⅲ区-2を重機による排水溝掘削、掘り下げ。As-B軽石下面黒ネバ層掘り下げ、Hr-FA面調査。1月下旬から2月は、Ⅲ区-2のHr-FA混土除去。3面(ローム面)の調査。3月は、縄文面調査。最終面全景写真撮影をしⅢ区の調査を終了する。

V区担当、坂井・伊平・齊田班の調査期間は平成15年2月～3月で、調査経過は次の通りである。

2月にV区調査を開始する。グリッド設定、基準杭設置後、As-B軽石層下調査。土坑・溝が確認され調査する。3月前月に続き、As-B軽石層下の土坑・溝調査。さらにその下面の古墳時代を調査するが、検出された遺構は少なかった。古墳時代下の遺構面を来年度に残し、3月末に調査を終了する。

Ⅵ区担当、橋崎・本間の調査期間は平成15年2月～3月で、調査経過は次の通りである。

工事行程の関係でⅦ区の一部を先行して調査する。2月にⅦ区調査開始、As-B軽石層下遺構確認。As-B軽石層下の溝検出。3月はAs-B軽石層下確認作業。As-B軽石層下の溝検出、調査。旧河道検出。2つのトレンチ、北側の集石検出調査。3月末に調査を終了した。

以上本年度の調査は、Ⅱ区、Ⅲ区調査終了、Ⅳ区縄文面調査継続、V区、Ⅵ区古墳時代面まで調査終了。Ⅶ区の一部調査終了し、来年度に継続することとなった。

平成15年度の調査

本年度は、西長岡宿跡調査の最終年度でⅣ～Ⅶ区を調査した。調査体制は、2班体制で行った。調査期間は、平成15年4月1日～平成16年1月31日である。調査担当は、坂井隆、谷藤保彦、小林徹、矢村哲、大澤務、黒澤照弘、山田精一である。

4月は、Ⅳ～Ⅶ区遺構調査、遺構検出作業を行った。

5月は、Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ区掘削、排土。Ⅵ区住居跡・土坑、Ⅶ区土坑調査。6月は、Ⅳ区配石遺構、Ⅴ～Ⅶ区遺物包含層、溝、桶埋設遺構調査。7月は、V区河道、集石、Ⅵ区遺物包含層、溝、Ⅶ区遺構確認。27日には、現地説明会を開催する。8月は、Ⅳ区河道、Ⅶ区遺構、Ⅶ区縄文時代包含層、河道の調査。9月は、Ⅳ区・Ⅵ区遺構確認、グリッド設定、Ⅶ区河道跡掘削、縄文時代包含層、遺構確認を行う。

10月は、Ⅳ区縄文時代包含層、Ⅴ・Ⅵ区遺物包含層調査。Ⅶ区河道跡調査を主体に行う。11月は、Ⅳ区遺物包含層調査。V区遺物包含層の調査。12月は、Ⅳ区遺構、盛り土遺構調査、V区河道跡調査。1月は、Ⅳ区縄文遺構調査を行い、西長岡宿跡の調査を終了した。

平成16年度に、Ⅲ区の市道と県道の取り付け部を工事するため、拡張して調査した。

平成16年度の調査

6月1日～6月31日 北関東自動車道建設に伴い、工事区を横断する水路の付け替え工事のため、Ⅲ区北側を新たに調査した。縄文時代住居が検出された。谷藤保彦が担当した。

西長岡宿跡調査行程表

	Ⅰ区-1	Ⅰ区-2	Ⅱ区-1	Ⅱ区-2	Ⅲ区-1	Ⅲ区-2	Ⅳ区-1	Ⅳ区-2	V区-1	V区-2	Ⅵ区	Ⅶ区-1	Ⅶ区-2
13年度			■■■■		■■■■								
14年度			■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■		■■■■	
15年度							■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■	■■■■

■■■■ 調査継続

■■■■ 調査終了

## 第4節 遺跡の位置と周辺の遺跡

関東平野の北端にある、長く緩やかな裾野を持つ赤城山南麓は、大間々扇状地が広がっている。大間々扇状地は、新旧2面あり西側の古い面をⅠ面（棚原面）、東側の新しい面をⅡ面（敷塚面）としている。本遺跡は、この大間々扇状地のⅡ面上にある遺跡である。

大間々扇状地Ⅰ面とⅡ面の遺跡立地には相違が見られる。Ⅰ面（棚原面）では、扇端の標高90m付近に湧水点が多く見られる。この付近には、「男井戸」、「あまが池」などの湧水があり、その周辺に縄文時代の遺跡が多く分布している。一方、Ⅱ面（敷塚面）では、扇状地扇端が標高60m付近とⅠ面に比べ低い位置にある。そのため、縄文時代の遺跡も標高の低い位置に多く分布している。この付近には、「矢太神沼」があり縄文後期の遺跡がある。

本遺跡(35)が立地する大間々扇状地の場所は、標高70m付近の扇端部湧水点よりやや上流にある。北側に八王子丘陵があり、南東方向には、「しんなし川」が流れている場所にある。そのため、本来ならば湧水の少ない場所にあたるのであるが、八王子丘陵からの沢つたいに流れる水と、「しんなし川」による水を利用することで、遺跡が作られていると考える。現在の地形においても、この地域は他よりも低くなっており、水田地帯として利用されている。本地域周辺の縄文時代遺跡は、この「しんなし川」と八王子丘陵の湧水地帯に点在している。以下、これらの点を考慮に入れながら、縄文時代の各時期の遺跡を紹介する。

草創期の資料は、本遺跡周辺の低地部では発見されていないが、本遺跡から南東に下った金山丘陵の東側にある小段丘上に営まれた下宿遺跡がこの地域でもっとも古い縄文時代の遺跡である。この遺跡からは、縄文時代草創期の瓜形文が出土している。金山丘陵は、大間々扇状地の南東にある丘陵で、東側に渡良瀬川が流れている。この段丘上に草創期の下宿遺跡が立地している。

早期の遺跡では、八王子丘陵の北西麓の丘陵と「しんなし川」との間に、岩崎遺跡(27)や滝之入前遺跡(4)がある。これらの遺跡からは、茅山式の土器が出土している。発掘面積が少なく、遺構は確認されておらず、当該期の遺物出土量は、少ない。これより下流にある本遺

跡においても、押型文・沈線文系土器や条痕文系土器が出土し、隣接する菅塩遺跡群(65)からも条痕文系土器が出土していることから、早期後半期には、集落などがあったことが予想される。

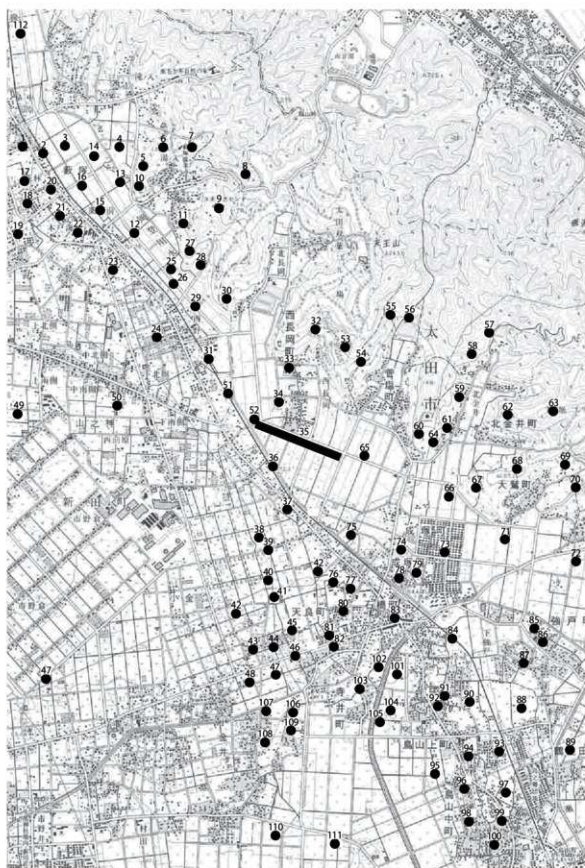
前期は、関東地方海岸部で気候温暖化による海面上昇現象一縄文海進一が起ったとされる時期である。内陸部では、これらの影響について具体的に説明できるものはない。本遺跡周辺では、早期と同じく八王子丘陵の支丘と「しんなし川」の間に小規模な遺跡が発見されている。

当該期の遺跡は、黒浜式土器が出土した遺跡として、岩崎遺跡(27)、滝之入前遺跡(4)などがある。これら前期の遺跡は、八王子丘陵の支丘上に立地している。成塚石橋遺跡(78)は、大間々扇状地の東南端に立地し、蛇川流域にあり、住居・陥とし穴などが検出されている。前期後半諸畿a式期の住居が、西野原遺跡(51)で検出されている。本遺跡でも、黒浜式の土器片が出土していることから、八王子丘陵南麓部に前期の集落が営まれていたと考えられる。

中期では、一般的に集落規模が拡大し、大規模な遺跡が見られるようになるが、本地域では、大規模発掘があまりなかったこともあるが、地形的制約のためか、拠点集落と呼べるものが未検出である。前期同様に、八王子丘陵の西側に、「しんなし川」との間にある滝之入前遺跡(4)で、竪穴住居1棟と陥し穴・土坑が検出されている。また同様に「しんなし川」流域では、西野原遺跡(51)から、中期の加曾利E式後半段階の住居8軒を中心とした集落が検出されている。中原下遺跡(1)では、縄文中期末～後期前半の敷石住居が検出されている。

中期の比較的規模の大きな遺跡としては、成塚住宅団地遺跡(73)がある。遺跡は、金山丘陵・八王子丘陵の西側に沿って流下していた旧渡良瀬川の流路の大きな屈曲部分に当たり、遺跡の北側丘陵より分布するA群と旧河川沿いにまばらに分布するB群に分けられる。中期の加曾利E式期の住居14軒が検出されている成塚住宅団地遺跡(73)は、約10万㎡の調査であったが、調査面積に比較して縄文時代の遺構検出数が少ないのは、地形的制約により、拠点になるような大規模集落が当地域では発達しなかったと考えられる。

後期・晩期では、中期の遺跡より遺跡検出例が多くなり、規模も大きなものが見られる。石之塔遺跡(112)は、



第4図 西長岡宿遺跡周辺道路分布図

第1章 発掘調査に至る経過と遺跡の概要

半径100mにも及ぶ後・晩期の集落遺跡である。遺跡からは、石圍が跡、配石遺構、埋設土器が検出されている。出土遺物は、堀之内式・加曾利B式・安行Ⅲa式期の土器や土偶・岩板・耳飾り等の第二の遺物が多数出土している。動物遺存体には、イノシシ、ニホンシカ等が出土しており、この地域の主体となる遺跡である。総じて後期・

晩期の遺跡は、八王子丘陵の裾部にある低地帯に多く見られる。菅塩遺跡群(65)では、晩期の土器が主体的に出土している。中期後半以降、八王子丘陵と「しんなし川」の間にある低湿地帯の縁辺部、大間々扇状地との接合部に遺跡が多く見られ、水との係わりが深い地点に遺跡が多く立地している。

西長岡宿遺跡周辺遺跡一覧表

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中近世
1	中原下遺跡		○		○	○	
2	六地蔵遺跡		○		○	○	
3	新井前遺跡			○	○		
4	堀之内前遺跡		○	○		○	
5	高坂遺跡		○	○		○	
6	堀之内古墳群				○		
7	堀之内前遺跡		○				
8	雷電山古墳						○
9	影山古墳群				○		
10	西山古墳				○		
11	堀之内東遺跡						○
12	八石遺跡			○	○		
13	三島神社境内遺跡						
14	三島前遺跡			○	○		
15	薬師前遺跡			○	○	○	
16	元塚敷遺跡			○	○	○	
17	森林遺跡						○
18	台之原廃寺				○		
19	十輪寺遺跡				○		
20	長上手遺跡						○
21	木戸海道遺跡				○	○	
22	木戸海道1遺跡						
23	三島遺跡						○
24	西野西遺跡				○		
25	街道橋遺跡						
26	西野東上遺跡			○	○		
27	岩崎遺跡						
28	谷遺跡						
29	西野東中遺跡			○	○		
30	西長岡天神山古墳				○		
31	西野東下遺跡			○	○		
32	電宮山遺跡				○		
33	長岡城跡						○
34	西長岡宿古墳群				○		
35	西長岡宿遺跡		○	○	○	○	○
36	西長岡堀塚古墳群						
37	愛大塚遺跡		○				
38	二ツ山古墳1号墳				○		
39	二ツ山古墳2号墳				○		
40	天良松塚古墳						
41	新生若古墳						
42	飯塚遺跡			○	○	○	
43	飯塚古墳				○		
44	天良七堂遺跡						
45	上根遺跡				○		
46	寺井境古墳				○		
47	東山道駅路下新田丸一ト					○	
48	笠松遺跡					○	
49	山之神野田遺跡						○
50	山之神南側遺跡						○
51	西野原遺跡			○	○		
52	島谷戸遺跡						○
53	西長岡東山古墳群				○		
54	菅塩西山古墳群						
55	菅塩尻人家跡				○		
56	菅塩尻人家跡				○		

遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中近世
57	西高坪古墳群					○	
58	北金井西山古墳群					○	
59	北金井川西古墳群					○	
60	菅塩山崎古墳群					○	
61	駒形神社堀輪遺跡					○	
62	北金井御山古墳群					○	
63	北金井東浦古墳群					○	
64	菅塩田谷遺跡		○				
65	菅塩遺跡群					○	○
66	成塚遺跡群					○	○
67	成塚向山古墳群		○	○	○	○	○
68	大鷲六古墳群					○	
69	大鷲大平古墳群					○	
70	大鷲向山古墳群					○	
71	大鷲遺跡群					○	○
72	上強戸遺跡群					○	○
73	成塚住生田地遺跡群		○	○			
74	葉平塚古墳群			○		○	
75	成塚街道北古墳群					○	
76	寺井廃寺北遺跡					○	
77	寺井廃寺東遺跡					○	
78	成塚石橋遺跡					○	
79	成塚古墳群					○	
80	寺井廃寺跡					○	
81	新田遺跡						
82	寺井古墳群					○	
83	石橋地蔵久保遺跡					○	
84	寺裏遺跡					○	
85	強戸の寄屋						○
86	強戸宮西遺跡		○				
87	堀中遺跡						
88	鶴生田・下強戸古墳群						
89	中妻遺跡					○	
90	鳥山寺中遺跡					○	
91	上遺跡					○	
92	龜山古墳					○	
93	中道遺跡					○	
94	上皇間戸遺跡					○	
95	大光寺跡						○
96	鳥山宿屋敷遺跡			○			
97	踏石遺跡						
98	鳥ヶ谷戸遺跡						
99	鳥宗神社古墳					○	
100	鳥山環濠遺跡群						
101	久保遺跡						○
102	新戸宮遺跡						○
103	久保畑遺跡					○	
104	鶴山古墳						
105	八幡遺跡					○	
106	推定東山道駅路新田地区						
107	松尾神社古墳						
108	七堂遺跡						
109	寺井本郷遺跡					○	
110	堀塚深町遺跡						
111	堀塚古墳群						
112	石之塔遺跡		○	○			

## 第5節 遺跡地の環境と基本層序

### 1. 地勢的環境

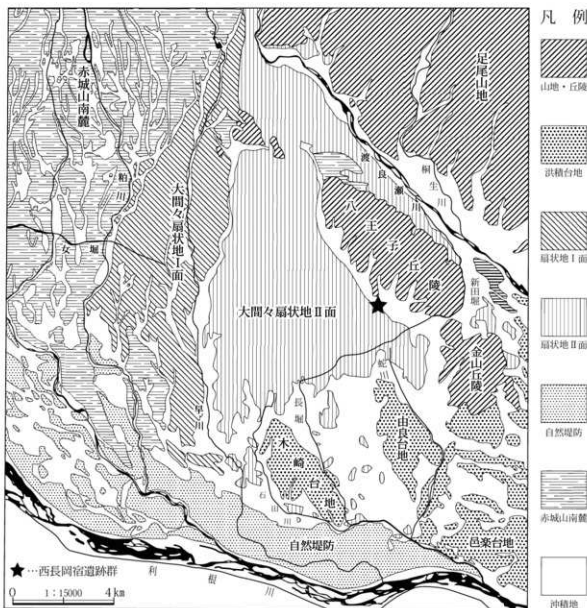
西長岡宿遺跡が位置する太田北部の平野部は、関東平野の北西部、群馬県桐生市から太田市にかけての、渡良瀬川右岸に沿って連なる八王子丘陵から金山丘陵に、南から西接する位置にある。

この一帯は、渡良瀬川が更新世に形成した「大間々扇状地（Ⅱ面）」に相当するが、西長岡宿遺跡が位置する

標高70m付近のエリアはちょうどその扇状地先端部に相当する。

この扇状地先端部一帯は、大間々扇状地の自由地下水が地表面に排出され、扇状地内の伏流水が湧水として地表面に現れるエリアであり、所謂「扇端湧水帯」を形成している。

本地域の基幹河川の一つである蛇川は、その元々の源流がこの扇端湧水帯であると言われており、本地域の地勢の大きな特徴の一つと言える。西長岡宿遺跡は、これらの扇端湧水帯を利用して営まれた遺跡である。



第5図 西長岡宿遺跡周辺の地形分類図

## 2 調査区の基本層序と土層概要

本遺跡周辺は、昭和40年代から50年代にかけて圃場整備が実施され、現在は水田地帯となっている。そのため、現状は、旧地形と大きく異なる。発掘調査の結果から、礫層の高まりが残る微高地と、旧河道によって形成された低地に分けられることが判明した。以下、各調査区ごとに基本層序の土層図を示し、土層概要を紹介する。

### I区の基本層序（6図）

本区の標高は、現地表で標高74.5mを測る。グリッドラインに沿うようにトレンチを掘り、基本土層の確認を行った。その結果、表土から50～60cmは、現耕作土が覆っており、西から東へ緩やかに傾斜している。耕作土下部の層は、耕作の影響や湧水のために粘質土が堆積している。その下層では、As-B軽石を含む土層の堆積を確認した。鉄分を含んだ層にAs-B軽石が混入する形で堆積していることから、本区ではこの時期、湧水などによる影響を多く受けていたと推測される。本区で確認された古代の遺構は、この層を掘り込んで作られているものと、その下位層から作られたものがある。谷地部では現地表から1.5m下の標高73m付近ではHr-FA軽石を含む土層が検出されており、古墳時代中期における地表面が推定された。その下層には、砂礫層が本区全体に広がる。砂礫層は、調査区の南西部、北壁や中央部の3地点で深くになっていることが確認された。その結果、北西部と中央部に埋没した谷・河川の存在が予想される。これらの結果、古墳時代Hr-FA軽石降下以前は、北西から南東に緩やかに傾斜した谷が放射状に入っており、当時の地形が波打っていたことが推測される。縄文時代の遺構は、この砂礫層にローム層が堆積している8層部分に見られる。

### II区の基本層序（6図）

本区は、調査当時水田であった。現地表は、I区からの続きで僅かに下がり、74mを測る。本区ではI区の土層確認調査の結果から、地表から50～60cmは現耕作土が覆っていた。本区では、グリッドラインに沿うように、土層確認のためのトレンチ調査を行った。その結果、古代の遺構確認面は、I区よりかなり下がり標高73m前後である。現表土には、耕作によりAs-B軽石が攪乱され混じり込んでいた。調査区北側と南側では、現表土

下の地形的な状況が異なっている。調査区北西側では、湧水のためにローム中に鉄分の凝集した層が見られる。その下層に、灰色シルトや砂礫層が堆積していることから、ロームが堆積した台地上の高まりであったと推定された。それに対して、調査区のほぼ中央部では、黒色粘質土やラミナ層、シルト層などがあり、堆積状況が安定しないことから、小河川の流水によるものと考えられる。調査区南側では、Hr-FA軽石を含む土層の堆積を確認している。これらのことから、古墳時代中頃は、北側に比べ安定した地形であった。

Hr-FA軽石層の下層には、砂礫層が堆積しており、古墳時代中頃以前においては、本調査区全体が砂礫層にあり、安定していない地形であった。そのため、縄文時代の遺構については、II区基本土層の5層にあたる、砂礫層上に黄褐色土が堆積し、微高地の形成される地形から検出されている。

### III区の基本層序（6図）

調査当時の現況は、水田であった。現地表は、II区からの続きで西から東方向へ傾斜しており、標高73mを測る。本区では、土層確認のためのトレンチを調査区壁面に沿って設定し土層確認を行った。土層確認の結果、遺構確認面は、II区よりさらに下がっており、72.5m前後である。現耕作土下層に調査区全体にAs-B軽石混じり層が、北東部を除いて一定量堆積していることから、古代以降比較的安定した場所であったと推定された。

縄文時代の遺構確認面である9層は、As-B軽石混じり層の下層にあり、調査区の中で状況が異なっていることが分かった。調査区南東側では、As-C軽石層の堆積が確認されている。ロームの二次堆積などが見られ、2層のシルト層にマンガンの凝集層は、南側で厚く堆積する傾向にあることから、古代以前の地形は、北から南へ傾斜し、南側に水が流れていた状況を示している。南東側が低くなり、As-C軽石混じり層が堆積することになったと考えられる。調査区の北東部には、縄文土器の包含層である9層が確認されているが、南側では、9層が見られなくなる。これらのことから、縄文時代では、調査区の北東部は、台地上の高まりに縄文時代以降の文化層があり、南側に傾斜して谷に至る地形が復元できる。また、調査区北東部では、古墳時代以降の旧地表が削平されたため、縄文土器の包含層が、現地表から比較的浅い土層

で確認されたのである。

#### IV区の基本層序（7図）

調査当時の現況は、水田であった。現地表は、北から南へ傾斜しており、73～72.5mを測る。本区では、土層と遺構確認のためのトレンチを調査区の中程にグリッドラインに沿って設定し土層確認を行った。

土層確認の結果、遺構確認面は、Ⅲ区よりさらに下がっており、72m前後である。調査区内の土層堆積状況は、場所により異なった。北西寄りでは、現耕作土下の層に8層とした縄文土器包含層が認められた。これは、Ⅲ区の東寄りから続くもので、本区ではさらに南に広がっているのが確認された。また、8層の縄文土器包含層下で7層のローム層堆積もみられた。調査区の南東部では、As-B軽石やHr-FA軽石が堆積していることが確認されている。古墳時代遺構面の標高は72m前後で北東部の縄文土器包含層は、これに近い高さで確認されている。このことは、調査区の北西部では、古代・古墳時代の文化層が削平されていることを示しており、南東部に傾斜して低くなることを示している。ローム層は、南東部に向かって深い位置に堆積し、谷地部を形成するようになる。また、谷地部の一部には、ローム層に相当する土層がシルト化しているところがあり、谷地部に小河川が流れ込んでいたことが推測される。

調査区の北西部では、古代から古墳時代の文化層面が削平され、縄文土器包含層が現耕作土直下にあった。

#### V区の基本層序（7図）

調査当時の現況は、水田であった。現地表は、北から南へ傾斜しており、72.5～72mを測る。本区では、土層と遺構確認のためのトレンチを西壁面に設定し、土層確認を行った。

土層確認の結果、北西寄りに一部2層のAs-B軽石混じり層が堆積していることが確認出来た。これは、IV区の北西寄りに台地上の高まりがあり、本区へ向かって緩やかな傾斜を持つことから、低くなったところにAs-B軽石混じりの層が堆積したと推定される。また、それより下部にある5層の縄文土器包含層が確認されている。西側で、IV区と境を接していることから、IV区から縄文土器包含層である5層が続いている。V区土層では、東側方向に縄文土器包含層面が傾斜しており、さらに深くなるところで縄文土器包含層が切れる。

調査区南西部では、部分的にHr-FA軽石混じり層が耕作土下に見られる。Hr-FA軽石混じり層が検出される標高に、高低差があることから、当時の地形は、平坦ではなくうねりがあったと推測される。Hr-FA軽石混じり層より下からは、粘質土とシルト質層、マンガンの凝集層などがあり、湧水があった状況を示している。

#### VI区の基本層序（7図）

現地表は、北から南へ傾斜しており、72.5～72mを測る。土層と遺構確認のためのトレンチを、南北のグリッドラインに沿って設定した。

現耕作土下からは、Hr-FA軽石混じり層が確認され、古代以降のAs-B軽石混じり層が、確認されていないことから、現耕作地造成に伴い削平されたと思われる。また、調査区の北側では、As-C軽石混じり層の上面まで削平されていた。縄文土器包含層は、2層で認められた。これは、IV区から連続している縄文土器包含層である。縄文土器包含層は、東側に傾斜している。このため調査区の中央北よりの微高地に、縄文時代の文化層があったことが推定される。

#### VII区の基本層序（7図）

現地表は、北から南へ傾斜しており標高72m程度である。本区では、土層調査確認のためのトレンチを西壁面に沿って設定した。

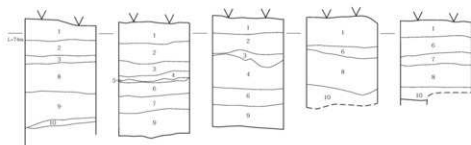
調査区の東西で、現耕作土の下層からAs-B軽石混じりの層が検出されている。この土層の下部層は、南東部でロームの二次堆積層・粘質土層などが堆積している。また、VI区と接する西側では、砂と粘質土の互層から流木が検出されており、VI区からの小河川が繋がっていることが推定される。

As-B軽石混じり層下からは、遺構が確認された。As-C軽石層は、調査区の南東端で確認されている。土層観察では、谷地状の傾斜地にのるような形で薄く堆積しているのみで、平坦な堆積状況ではなかった。縄文土器包含層は、3層とした黒褐色粘質土中にあるが、明確には分離できなかった。河川などの流水により、砂礫層上の縄文土器包含層（3層）やAs-C軽石層の堆積が薄かった可能性がある。このためか、本区での縄文時代～古墳時代にかけての遺構・遺物の検出量は、少ないものとなっている。

第1章 発掘調査に至る経過と遺跡の概要

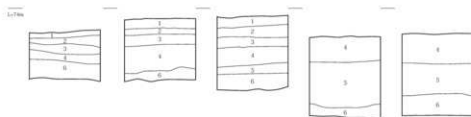


基本土層位置図



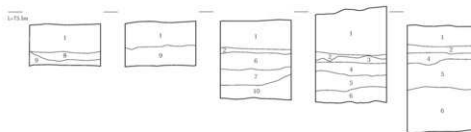
I区基本土層

- I区基本土層  
北壁ラインセクション
- 1層 表土層
  - 2層 灰色粘質土 Aa-8軽石混じり
  - 3層 灰色粘質土 Bc-Fa軽石多量
  - 4層 灰色粘質土 (植物質混入)
  - 5層 Bc-Fa純層
  - 6層 褐色粘質土 シルト質
  - 7層 砂質土層 軽石多く含む
  - 8層 黄灰色ローム質土
  - 9層 砂礫層
  - 10層 淡黄色砂質ローム層



II区基本土層

- II区基本土層  
グリッドラインセクション3
- 1層 灰白色 Aa-8軽石含む、塊状作土、表土
  - 2層 灰色-黄褐色粘質土層 Aa-8軽石含む
  - 3層 褐色粘質土 Bc-Fa土層
  - 4層 褐色粘質土 Bc-Fa下層
  - 5層 明黄褐色土 鉄分含む粘質土
  - 6層 砂礫層



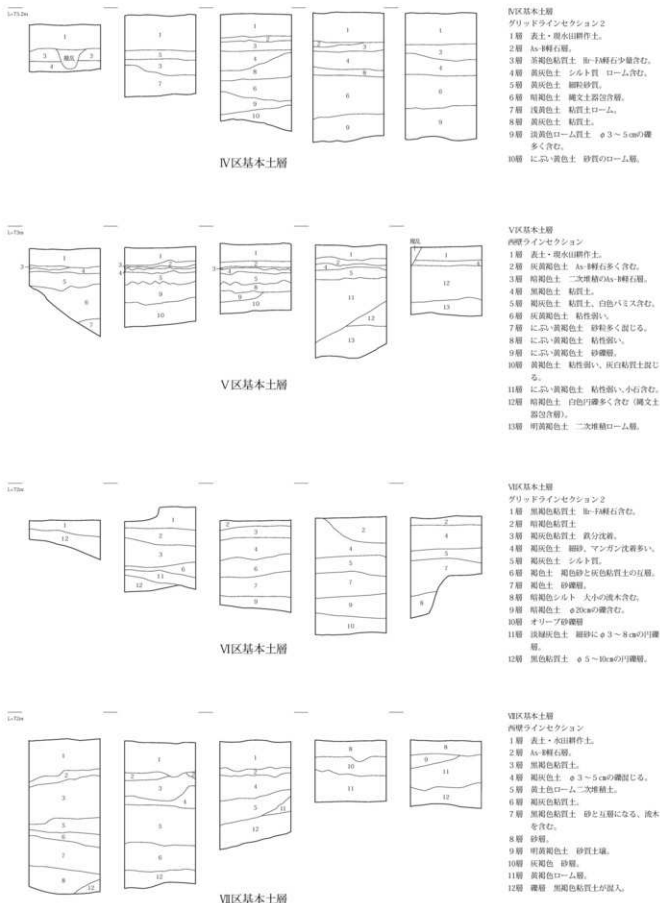
III区基本土層

- III区基本土層  
東壁ラインセクション
- 1層 表土・周水田耕作土
  - 2層 明黄褐色土 Aa-8軽石、マンガン、鉄分含む
  - 3層 黒ネバ
  - 4層 黒灰色ネバ こげ茶色粒子混入
  - 5層 灰色ネバ Aa-8軽石、炭化物混入
  - 6層 黒灰色ネバ 全体に砂が混じる
  - 7層 黄褐色粘土
  - 8層 粘質土 Aa-8軽石混入
  - 9層 粘質土 塊文土層多く含む層
  - 10層 黄褐色土 中々粘質、砂を多く含む

第6図 西長岡宿遺跡基本土層図(1)



## 第5節 遺跡地の環境と基本層序



第7図 西長岡宿遺跡基本土層図(2)

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

西長岡宿遺跡の発掘調査区は、遺跡を縦断する農道・市道を調査区の境として、西側から東へⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区・Ⅴ区・Ⅵ区とつづき、菅塚遺跡との境をⅦ区とした。現状の地形では、Ⅰ区からⅦ区にかけてほぼ平坦で緩やかに傾斜する水田地帯である。

本遺跡で検出された主な遺構・遺物は、次の通りである。弥生時代では、遺構は検出されなかったが、壺などの土器片が出土した。古墳時代では、竪穴住居2軒、土坑41基、溝39条、井戸2基、耕作遺構が検出された。古代では、溝58条、土坑26基、井戸4基、畑耕作遺構が検出された。中・近世では、溝24条、土坑29基である。その他に、小河川が遺跡を縦断するように検出されており、ここから弥生時代～古墳時代の土器や中近世の陶磁器・板碑・五輪塔などの石遺物、馬骨等が出土している。

これらの検出された遺構の傾向から、弥生時代以降の本遺跡は、前章5節にある遺跡の基本層序にも記したとおり、「小河川が遺跡を縦断するようにあり、その周辺に耕作地が広がり、灌漑や区割り区画のための水路を主体とする遺跡である。」という内容であった。これらの調査内容については、「西長岡宿遺跡（1）—弥生時代以降編—」（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010）に報告した。

本報告書は、縄文時代の遺構・遺物についての報告である。縄文時代の遺構確認面は、現状とは異なり本遺跡の北側にある八王子丘陵から放射状に広がる開折谷が、遺跡に入り込んでおり、それを東西方向に調査した。そのため、谷地部と微高地部の地形が、各調査区により異なっており、各調査区によって、縄文時代遺構・遺物のあり方にも違いが見られた。縄文時代の遺構が検出されたのは、主にⅠ区とⅢ・Ⅳ区である。Ⅰ区は、ローム層を主体とする微高地が、調査区の中程に残っていたためか、早期後半を中心とした遺構・遺物が検出されている。調査区の南東では、谷地部へ向けて傾斜しており、これ

に入り込む溝も検出されている。これらの低地では、縄文時代後期の包含層が検出され土器・石器などが出土した。

Ⅰ区の東側にあるⅡ区では、調査区の南側がⅠ区から続く谷が入り込み、縄文時代後期の遺物包含層となっており、土器など出土している。Ⅱ区の北側は、谷から上がった微高地が広がり、敷石住居1軒や配石遺構が5基検出されている。Ⅲ区調査区は、西側で開折谷と小河川による低地部にあたり、縄文時代後期の遺物包含層が主体であった。調査区の東側Ⅳ区寄りには、微高地部が広がり、住居1軒、配石遺構・配石墓等13基検出されている。Ⅳ区調査区は、小河川から微高地へと移行する地形が広がっている。河川による自然堤防状の高まりに、遺構・遺物が数多く検出されている。Ⅳ区で検出された遺構は、縄文時代後期中葉の住居6軒、土坑や配石遺構・配石墓等の礎を使用した遺構78基が、検出されている。これらの遺構からは、土器・石器の他石棒などの特殊な遺物も検出されている。

Ⅴ区～Ⅶ区は、再び開折谷の影響により低地部となっている。調査区から明瞭な遺構は、検出されなかった。谷地部に、縄文時代後期を中心とする遺物包含層が堆積する状況であった。谷地部の土器包含層からは、比較的大型の土器片が出土していることから、遺物廃棄場としての可能性も考えられる。

以下、各調査区ごとに節をもうけて、検出された遺構と遺物について報告する。

なお、本報告書での遺構番号は、調査時に付けられたものである。調査時には、時代や遺構の種類を判別・分類することなく、検出された遺構について番号を順番に付した。そのため、遺構番号と実際の遺構の性格等については、何ら整合性のないものとなっている。遺物の注記や図面・写真番号についても調査時のものが付けられており、本遺跡の整理報告において、これらを修正することが不可能なため、調査時に付した遺構名称により報告することとする。

## 第2節 I区の調査

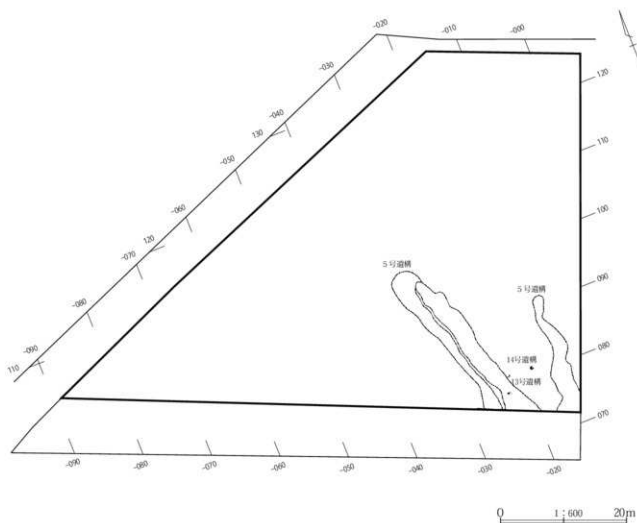
### 1 I区検出された遺構

I区は、現地表の標高が74.5m程で、北西から南東に緩やかに傾斜している。平成13年度に調査を行った。調査当初、用地の関係で北側部分を先行して行い、年度後半に南側部分の調査を行った。縄文時代の遺構確認面は、現地表から1m下の73.5mにある。

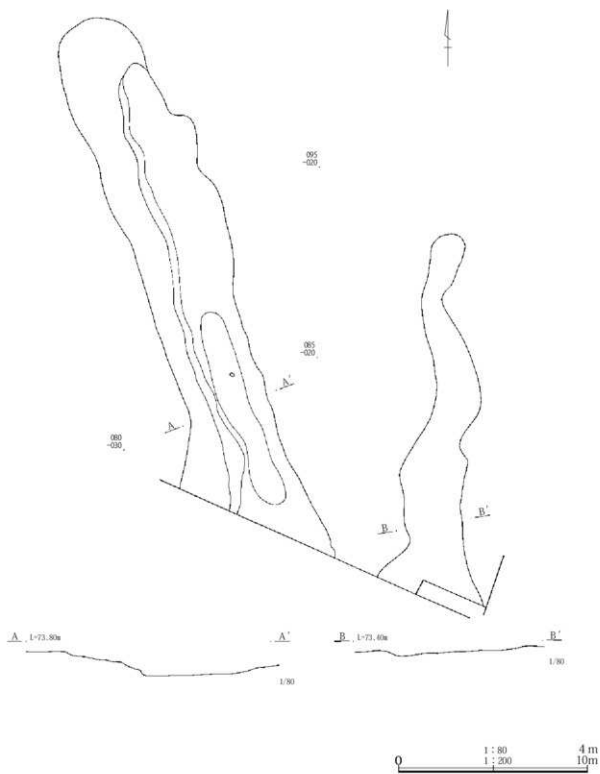
本区の縄文時代遺構・遺物は、Hr-FA軽石層下にある基本層序の8層とした砂礫層上にローム層が堆積してい

る部分から検出された。この砂礫層が調査区の南西部、北壁や中央部の3地点で深く堆積していることから、北西部と中央部に埋没した谷・河川が存在が予想された。調査の結果古墳時代Hr-FA軽石降下以前は、北西から南東に緩やかに傾斜した谷が放射状に入っており、当時の地形は、平坦ではなかった。

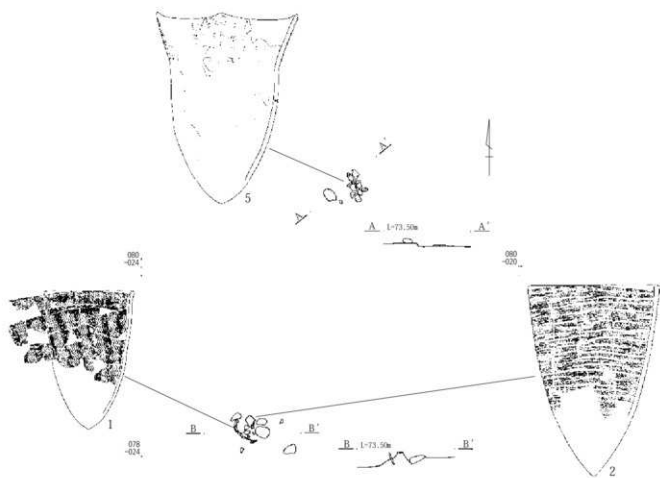
本区では、微高地上に高くなっている所から、早期中葉の跡と思われるもの1基と、土器が埋設された状態のもの1基が検出された。調査区を南北方向に、縄文土器を包含する溝状の落ち込みがあり、ここからは、堀之内式・加曽利B式土器などが出土している。



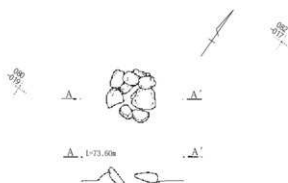
第8図 I区全体図



第9図 1区5号遺構



13号遺構



14号遺構

0 1:40 1m

第10図 1区13号・14号遺構

第2章 検出された遺構と遺物

5号遺構（第9・11図，PL.2）

**位置** 070-010グリッド。調査区北側の台地から南側に、谷津状に広がっている。**出土遺物** 堀之内2式土器の大形破片が出土している。覆土中からは、後期の堀之内2式土器の小片を主体として出土しているが、中期の加曾利EⅢ式土器も数点出土している。他に土製品1、石鏝4、打製石斧2、削器4点が出土している。**所見** 覆土中に縄文土器が含まれることから、発掘段階では遺構としたが、地形や土層、他遺跡状況から、浸食による溝状の自然地形に、縄文土器などを含む土が堆積したものと考える。

13号遺構（第10・12図，PL.2）

**位置** 078-020グリッド。**出土遺物** 縄文時代早期沈線文系・押型文系土器のほぼ完形になる個体が4個体、石鏝2点出土している。**所見** 本遺構は、縄文早期中葉の埋設土器と周辺に分布する遺物群の総称である。埋設土器は、深鉢の口縁部～底部が縦に三分割された状態で埋設されていた。埋設土器の掘り方は、調査時には確認しておらず、土層の堆積状況も不明である。遺構確認

面からは、口縁部が三日月状に見え、東半部には礫が置かれていた。深鉢が直立した状態であり、その周辺に礫や大形の土器片が置かれていたなどの出土状況から、人為的に埋設された遺構と考えられる。

この理髪から北に2m程離れた位置で、礫と土器の大形破片が出土している。その他に、この周辺からは、早期中葉の土器片が多数出土している。

14号遺構（第10図，PL.1）

**位置** 080-019グリッド。調査区の南側には、谷地地形の窪地が広がる。その谷地地形の傾斜変換点から検出された。**形状・規模** 20cm程の扁平な自然石を、0.5×0.45mの方形に配している。礫は、南北方向に広口面を3個並べ、東西方向に広口面を1個置いている。**出土遺物** 遺構に使用された礫以外検出されていない。**所見** 調査では、遺構の堆積状況などの記録を取っていないため、礫の配置および形状や遺構検出面が縄文後期であることから、後期の石垣と推測される。礫の周辺からは、遺物などは検出されていない。

I区 5号遺構出土土器観察表

No.	図・PL.	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	11・34	深鉢	口縁部～胴部	細砂 白色粒・黒色粒多い	にぶい橙	普通	口唇部の内外面に、太さ2mm程の沈線による凹みを持つ。頸部には、太さ2mmの単沈線を3本廻らし、口縁部と胴部文様を区画する。頸部を区画する沈線に繋がり、半円状の弧線と「8」の字状の突起を持つ。胴部は、頸部と同じ工具による沈線で弧線や断文文を描いている。地文の縄文は、厚塗が多くはつきりしないが、施文された痕跡が見られる。	堀之内2
2	11・34	深鉢	頸部～胴部	粗砂 細礫多	赤褐	良好	頸部に太さ5mmの沈線が廻り、胴部に同じ工具による弧線・曲線文が施文される。沈線による文様間に刺突列が縦位に施文される。外面に壁が付着している。	堀之内2
3	11・34	深鉢	頸部	粗砂 細礫多	褐灰	良好	頸部に「8」の字状の突起。太さ1mmの沈線による弧線文。L.Rの縄文施文。	堀之内2
4	11・34	深鉢	胴部	粗砂 φ1～2mmの小石	明赤褐	良好	太さ1mmの沈線による鋸歯状に文様を区画する。区画の沈線間内には、L.Rの縄文が施文される。	堀之内2
5	11・34	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1mmの白色粒多い	赤褐	不良	太さ3mmの沈線3条が縦位に施文される。地文の縄文は、R.Lを縦位施文している。内面に埋付着。	加曾利EⅢ
6	11・34	不明	不明	細砂	灰赤	良好	φ8mmの粘土紐を湾曲させる。上端部は、欠損しているが、片方の端部は、平らな面に押しつけて平たくしている。	土製品

I区 13号遺構出土土器観察表

No.	図・PL.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
1	12・34	深鉢	口縁部～胴部	細砂	明赤褐	普通	口径19.1cm。砲弾状の器形を呈し、口縁が気持ち外反する。口唇部は角頭状。口縁下に山形型紋を1帯横位に施紋し、幅狭な無紋帯を空けて、縦位型紋を施す。原体幅は3.2cmを測る。	横沢式
2	12・34	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細礫多	にぶい橙	普通	口径27.8cm。現存器高28.2cmで、砲弾状の器形を呈す。口唇部は外削ぎ。凹線を横位多段に施す。内面は丁寧に調整されて平滑である。	沈線紋系

No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
3	12・34	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細砂多	橙	普通	推定口径18.0cm。胴部が膨らまず、直線的に底部へ移行する器形を呈す。口縁部は内面状。横帯構成で、横位沈線間に4帯の紋様帯を挟む。口縁下と紋様帯下にはやや幅広い横位集合沈線帯を施す。1帯目は縦位集合沈線によりさらに紋様帯を分割し、菱形の帯状斜格子目紋や剣突を合わせた縦歯状の帯状斜格子目紋を施す。2帯目も1帯目同様、菱形の帯状斜格子目紋を施すが、縦位区画の存否は不明である。一部、剣突を留めている。3帯目は斜格子目紋を充填施紋し、4帯目はランダムな斜位の沈線帯を施す。	三戸2式
4	13・34	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細砂 繊維微	明赤褐	普通	推定口径26.4cm。胴部下平がやや膨らみ、口縁に向かって緩やかに外反する器形を呈す。緩やかな波状口縁で、波頂部が若干肥厚する。波底部の口縁は外削ぎ。外面は全面に横位の条痕を施す。2条1単位の平行沈線を浅く多段に施すことによって、条痕状にしているようだ。弧状を描く部分も見られる。内面は丁寧に調整されて平滑である。器形、胎土、調整が類似することから、第13図5に伴うものと同定される。	沈線紋系
5	13・35	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 繊維	明赤褐	普通	推定口径29.6cm。現存部高35.3cm。胴部が膨らみ、頸部でややすぼまって口縁が開く器形を呈す。緩い波状口縁で、口縁は丸みを帯びた尖頭状。図上では4単位波状口縁として復元したが、モチーフの流れを見る限り、5単位ないし6単位の可能性も否定できない。紋様は2条1単位の沈線を基調とし、頸部でめぐることで口縁部紋様帯区画、紋様帯内は平行沈線と短沈線を交互に重ねる。口縁形状に合わせるように波状に施すようだ。地紋として頸部付近と一部口縁部紋様帯内のみ縦位の条痕を施すが、胴部下平には施されない。内面は丁寧に調整されて平滑である。	沈線紋系

## 2 Ⅰ区検出された遺物

Ⅰ区から出土した土器は、遺構から出土したものには、13号遺構から、早期中葉の押型文と沈線文が、埋設土器として検出された。その他に、5号遺構とした溝状の落ち込みからは、後期の堀之内式土器が出土している。その他、調査区の基本土層8層（6図）図の包含層からは、早期の、燃糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器が130点程まとまって出土している。前期の土器は確認さ

れておらず、後期の称名寺式、堀之内式、加曾利B式の出土が見られた。Ⅰ区の土器出土傾向を見ると、調査区北西部の微高地になる部分から、早期の土器が出土している。南西部の谷地・低地地形の包含層からは、後期の堀之内式・加曾利B式土器が出土する傾向にある。石器は、Ⅰ区の包含層から61点出土している。石斧3点、石鏃20点、石皿1点、削器8点、石核10点、加工痕のある剥片10点、その他が出土した。

Ⅰ区 遺構外出土土器観察表

No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
6	13・35	深鉢	口縁部～底部	粗砂 白色粒多 繊維	にぶい黄褐	普通	推定口径14.5cm。推定器高13.4cmで小形の深鉢。無紋。部分的だが口縁部横位、胴部縦位のナデ。底部は丸底状。つくりが粗く、器面の凹凸が目立つ。	燃糸紋系
7	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細砂	赤褐	良好	口縁部が肥厚し、外反する。頸部に横走るR L縄紋を施紋。口唇部、口縁直下にもR L縄紋を施紋。肥厚部下に折面F痕を残す。	并草1式
8	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	丸頭状口唇で、緩く外反する。横走るR L縄紋を施す。口唇部にも内・外に分けてR L縄紋を施紋。	并草1式
9	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細砂	明赤褐	良好	口唇部が肥厚し、緩く外反する。口縁下に幅状無紋帯を残し、横走るR L縄紋を施紋。口唇部にもR L縄紋を施紋し、中央に帯状圧痕を1条施す。	并草1式
10	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 石英	赤褐	良好	口唇部が肥厚し、緩く外反する。頸部に横走るR L縄紋を施紋。口唇部にも内・外に分けてR L縄紋を施紋。	并草1式
11	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	口唇部が肥厚し、外屈する。縦走るR L縄紋を施紋。口唇部、口縁直下にも施紋。屈曲部に折面F痕を残す。口縁内面に横位のナデ。口唇部肥厚。縦走るR L縄紋を施すが、横位のナデでかき消されている。口唇部、口縁直下にもR L縄紋を施紋。口縁内面に横位のナデ。No.11と同一個体の可能性が高い。	并草2式
12	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	明赤褐	良好	丸頭状口唇で、緩く外反。縦走るR L縄紋を施す。	并草2式
13	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい黄褐	良好	丸頭状口唇で、緩く外反。縦走るR L縄紋を施す。	夏島式
14	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 石英	にぶい黄褐	普通	丸頭状口唇部。縦走るR L縄紋を施す。	夏島式

第2章 検出された遺構と遺物

No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
15	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 石英	にぶい黄 橙	普通	丸頭状の口唇部。縦走する襷紋を施しているようだが、襷紋が浅く判然としない。口縁内外面に横位のナデ。	襷系紋系
16	14・35	深鉢	口縁部破片				No.15と同一個体。	襷系紋系
17	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	赤褐色	良好	縦走するR1襷紋を施紋する。	襷系紋系
18	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	明赤褐色	良好	縦走するR1襷紋を施紋する。	襷系紋系
19	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	にぶい黄 橙	良好	縦走するR1襷紋を施紋する。	襷系紋系
20	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂	橙	良好	縦走するR1襷紋を施紋する。	襷系紋系
21	14・35	深鉢	胴部破片				No.20と同一個体。	襷系紋系
22	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂	橙	良好	縦走するR1襷紋を施紋する。	襷系紋系
23	14・35	深鉢	胴部破片				No.22と同一個体。	襷系紋系
24	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂 白色粒 石英	橙	良好	底部付近の部位。縦走するR1襷紋を施す。	襷系紋系
25	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	にぶい赤 褐	良好	丸頭状の口唇部。細かな襷系紋Rを縦位施紋する。口縁直下に絡条体系縹を斜位に施紋。	襷系紋系
26	14・35	深鉢	口縁部破片				No.25と同一個体。襷系紋Rを施したのち、絡条体系縹を施す。	襷系紋系
27	14・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫	橙	良好	丸頭状の口唇部。口縁下に無紋帯を残し、細かな襷系紋Rを斜位気味に施紋する。口縁下に凹線を施す。	襷系紋系
28	14・35	深鉢	口縁部破片				No.27と同一個体。	襷系紋系
29	14・35	深鉢	胴部破片				No.27と同一個体。	襷系紋系
30	14・35	深鉢	胴部破片				No.27と同一個体。	襷系紋系
31	14・35	深鉢	胴部破片				No.27と同一個体。	襷系紋系
32	14・35	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	明赤褐色	良好	細かな襷系紋Rを縦位施紋する。	襷系紋系
33	14・35	深鉢	胴部破片				No.32と同一個体。	襷系紋系
34	14・35	深鉢	胴部破片				No.32と同一個体。	襷系紋系
35	14・35	深鉢	胴部破片				No.32と同一個体。	襷系紋系
36	15・35	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 白色粒 石英	にぶい黄 橙	普通	襷系紋Rを縦位施紋する。	襷系紋系
37	15・35	深鉢	胴部破片	粗砂	にぶい黄 橙	良好	細かな襷系紋Rを縦位施紋するが、横位のナデで部分的に途切れる。	襷系紋系
38	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 石英	にぶい黄 橙	良好	丸頭状の口唇部。襷系紋をまばらに縦位施紋しているようだが、襷紋が浅く判然としない。	稲荷台式
39	15・35	深鉢	胴部破片	粗砂多 石英	にぶい黄 橙	普通	襷系紋を縦位施紋するが、襷紋が浅く判然としない。絡条体系縹か、	稲荷台式
40	15・35	深鉢	底部破片	粗砂 石英	にぶい黄 橙	普通	襷系紋Rを縦位施紋する。	襷系紋系
41	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	明赤褐色	普通	丸頭状口唇で内閉ぎ。やや余間開の空いた襷系紋Rを斜位気味に施紋する。	稲荷台式
42	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 石英	橙	良好	丸頭状の口唇部。絡条体系縹を縦位施紋する。	襷系紋系
43	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	にぶい黄 橙	良好	丸頭状の口唇部。絡条体系縹を縦位施紋する。口唇部外縁に横位の絡条体系縹を施紋。	襷系紋系
44	15・35	深鉢	胴部破片				No.43と同一個体。	
45	15・35	深鉢	胴部破片	粗砂 結晶片岩	明赤褐色	良好	絡条体系縹を縦位施紋する。	稲荷台式
46	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	にぶい黄 橙	良好	丸頭状口唇で、気持ち肥厚。無紋。口唇部研磨。	稲荷台式
47	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂	橙	良好	口唇部肥厚。無紋。口唇部研磨。	稲荷台式
48	15・35	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫	橙	良好	丸頭状口唇で外反する。無紋。内面口縁下横位のナデ。	襷系紋系
49	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂	普通	普通	丸頭状の口唇部。無紋。	襷系紋系
50	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 結晶片岩	明赤褐色	良好	外面縦位の縹紋。	稲荷台式
51	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 結晶片岩	にぶい黄 橙	普通	外面「く」の字状に外屈。無紋。	東山式
52	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 結晶片岩	にぶい黄 橙	普通	口縁部が「く」の字状に外屈。外面屈曲部下、横位のナデ。	東山式
53	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂	橙	良好	口縁下に1条の沈線をめぐる。沈線は横位のナデ。	東山式
54	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂	普通	普通	口縁下から山形押型紋を縦位帯状施紋する。口唇部にも施紋。	横沢式
55	15・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫	にぶい橙	普通	口縁下から山形押型紋を縦位帯状施紋する。口唇部にも施紋。	横沢式
56	15・36	深鉢	口縁部破片				No.55と同一個体。	横沢式
57	15・36	深鉢	胴部破片				No.55と同一個体。	横沢式
58	15・36	深鉢	胴部破片				No.55と同一個体。	横沢式
59	15・36	深鉢	胴部破片				No.55と同一個体。	横沢式
60	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂	赤褐色	普通	山形押型紋を縦位帯状施紋する。	横沢式
61	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂 結晶片岩	赤褐色	良好	山形押型紋を縦位帯状施紋する。	横沢式
62	15・36	深鉢	胴部破片				No.61と同一個体。	横沢式
63	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂多 石英	橙	普通	底部に近い部位。横位沈線を施し、底部付近は無紋となる。	三戸式



## 第2節 1区の調査

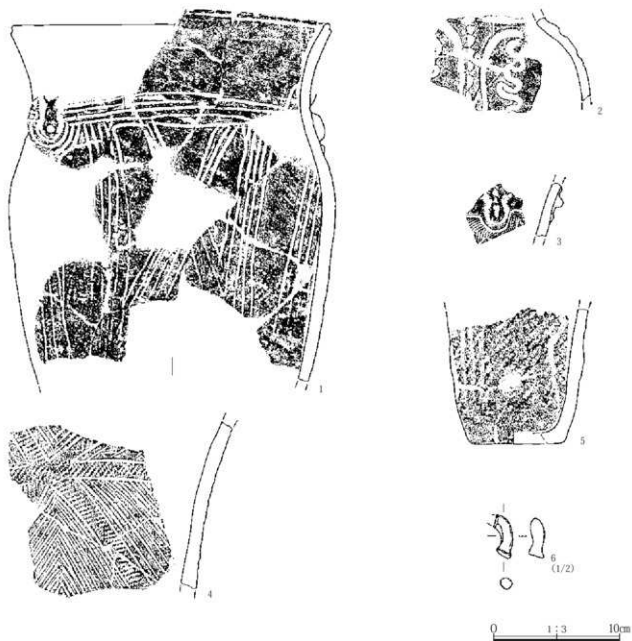
No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
64	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂多	赤褐色	良好	横位多段に沈線を施す。刺突列を境に上下で沈線の太さが異なる。	田戸下層
65	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂	橙	良好	連結しない横位の沈線を多段に施す。	田戸下層
66	15・36	深鉢	胴部破片	粗砂	橙	良好	沈線を横位多段に施す。	田戸下層
67 ～ 74	16・36	深鉢	口縁部・ 胴部破片	粗砂 細礫 繊維	橙 にぶ い黄橙	普通	みな同一個体と思われる。67,68が口縁部、69が頸部、70,71が肩部で、72～74が胴部に相当すると考えられる。頸部と考えられる69が緩く外屈し、口縁部が緩く内湾、胴部が膨らむことから、緩いキリハ状の器形を呈すと思われる。波状口縁を呈し、口縁部紋様帯はV字状押し紋を横位、波状に施し、以下、幅狭な無紋帯とする。屈曲部下に胴部紋様帯を配置し、上位は3条のV字状押し紋、下位は複数条の沈線を横位、波状に施して区画とし、区画内に横位波状の集合沈線を施す。	沈線紋系
75	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 繊維	橙	普通	口縁下に平行沈線を3条めぐらせ、連珠状に平行沈線をめぐらす。	沈線紋系
76	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂	明赤褐色	良好	緩く内湾する。口縁下に2条の沈線をめぐらせて区画、区画内にV字状の集合沈線を施す。稜面状になるのか。	田戸上層
77	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	橙	良好	緩く内湾する。横位沈線、角押状刺突を施す。口唇部に創みを付す。	沈線紋系
78	16・36	深鉢	胴部破片	細砂	橙	良好	稜面状紋を伏込んだ平行沈線を2段めぐらせる。上位は無紋部か。	田戸上層
79	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	普通	横位、斜行する集合沈線を施す。	沈線紋系
80	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	普通	No.79と同一個体。横位帯状に集合沈線をめぐらす。	沈線紋系
81	16・36	深鉢	胴部破片	細砂 細礫 繊維	明赤褐色	良好	地紋に縦位の細い条痕を施し、先端のささくれた平行沈線により波状紋を挿込んだ横位沈線を施す。欠損して判然としないが、横位沈線下に刺突のような紋様を施す。	沈線紋系
82	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	良好	地紋に縦位の条痕を施し、平行沈線をめぐらす。	沈線紋系
83	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 繊維	明赤褐色	普通	口縁下に横位のナゲ。以下、斜位の条痕を施す。	沈線紋系
84	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 繊維	赤褐色	普通	外面に斜位の条痕を施す。	沈線紋系
85	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	No.84と同一個体	沈線紋系
86	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	橙	普通	外面縦位の条痕を施す。	沈線紋系
87	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい赤 褐色	良好	角部状口唇でやや内削ぎ。無紋。	沈線紋系
88	16・36	深鉢	口縁部破片	粗砂	にぶい黄 橙	普通	無紋。	沈線紋系
89	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 白色粒	橙	良好	無紋。	沈線紋系
90	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫多	にぶい赤 褐色	普通	無紋。外面一部ミガキ。	沈線紋系
91	16・36	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 繊維	橙	普通	外面斜位の擦痕。内面横位の擦痕。	沈線紋系
92	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	良好	無紋。	沈線紋系
93	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	良好	外面横位の擦痕。	沈線紋系
94	17・37	深鉢	底部破片	粗砂 白色粒	橙	普通	丸底。残存部は無紋。	沈線紋系
95	17・37	深鉢	底部破片	粗砂	橙	良好	平底。残存部は無紋。	沈線紋系
96	17・37	深鉢	底部破片	粗砂	橙	良好	平底。残存部は無紋。	沈線紋系
97	17・37	深鉢	底部破片	粗砂	赤褐色	良好	平底。残存部は無紋。外面ミガキ。	沈線紋系
98	17・37	深鉢	底部破片	粗砂 白色粒	にぶい黄 橙	普通	鈍角な尖底。残存部は無紋。	沈線紋系
99	17・37	深鉢	底部破片	粗砂	橙	良好	丸底。	沈線紋系
100	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	普通	緩く外屈する。斜位の充填沈線を施す。内面条痕。	野鳥式 条痕紋系
101	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	普通	内外面に条痕を施す。	条痕紋系
102	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	赤褐色	普通	内外面に条痕を施す。	条痕紋系
103	17・37	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 繊維	黒褐色	普通	内外面に条痕を施す。	条痕紋系
104	17・37	深鉢	胴部破片				No.103と同一個体。	条痕紋系
105	17・37	深鉢	胴部破片				No.103と同一個体。	条痕紋系
106	17・37	深鉢	胴部破片				No.103と同一個体。	条痕紋系
107	17・37	深鉢	胴部破片				No.103と同一個体。	条痕紋系
108	17・37	深鉢	胴部破片				No.103と同一個体。	条痕紋系
109	18・37	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 繊維	明赤褐色	普通	外面に擦痕を施す。	条痕紋系
110	18・37	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 繊維	橙	普通	外面に横位の条痕を施す。	条痕紋系
111	18・37	深鉢	胴部破片				No.110と同一個体。	条痕紋系
112	18・37	深鉢	胴部破片				No.110と同一個体。	条痕紋系
113	18・37	深鉢	胴部破片	細砂 繊維	橙	普通	陶製原体R1を横位複数段押し挿し、多截竹管状工具による「C」字状刺突をめぐらせる。	早期後半

## 第2章 検出された遺構と遺物

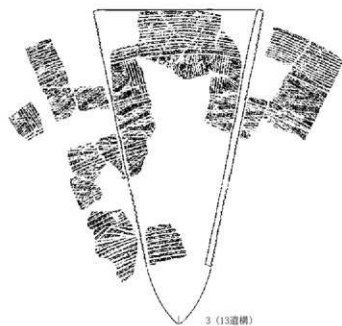
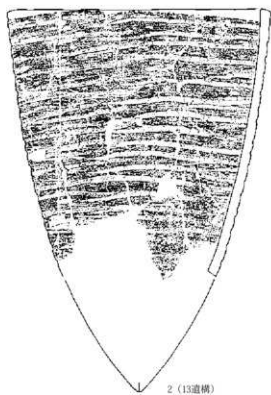
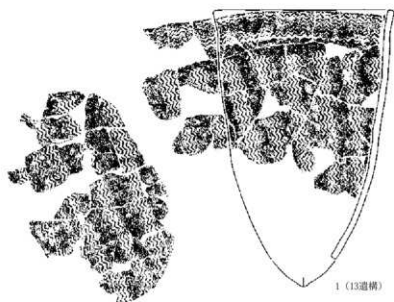
No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
114	18・37	深鉢	胴部破片				No.113と同一個体。	早期後半
115	19・37	深鉢	口縁部破片	φ1mmの小石 白色粒	淡黄	普通	口縁肥厚し、内面に沈線が廻る。肥厚部にφ7mmの刺突と沈線。胴部に垂下する沈線と竹管による刺突列。	甕之内1
116	19・37	深鉢	胴部破片	細かい黒色粒	淡黄	普通	太さ3mmの沈線による縦位の区画。区画内に、幅4mmの刺突。	甕之内
117	19・37	深鉢	口縁部破片	細かい砂粒 白色	暗灰色・ 淡黄	不良	口縁にφ8mmの凹形刺突が廻る。胴部は、縦位の沈線がまばらに施文される。	甕之内
118	19・37	深鉢	口縁部破片	細かい砂粒 白色・黒色粒	橙	普通	ゆるい波状口縁。頂部に二単位のφ6mmの刺突。これにつながって沈線が口縁を廻る。内面にも沈線が廻る。	甕之内
119	19・37	深鉢	口縁部破片	粗い砂粒 白色粒	明黄橙	普通	口縁部にφ10mmの刺突。胴部には、横位のナデ直。	甕之内
120	19・37	深鉢	口縁部破片	φ1mmの小石	オリーブ 黄	普通	口縁内面に沈線が廻る。沈線を縦直状に施文。縄文原体R L横位。	甕之内2
121	19・37	深鉢	口縁部破片	砂粒 白色粒	にぶい黄 橙	普通	口縁内面に沈線が廻る。外面は、「8」の字状貼付文。頸部以下には、沈線が横位に廻り文様帯を作る。沈線は、縄文施文後に施文している。縄文原体L R横	甕之内2
122	19・37	深鉢	胴部破片	φ1mm以下の白 色粒多い	にぶい赤 橙	不良	太さ2mmの沈線による幾何学文様。縄文充填。縄文原体L r縦・横。	加曾利B
123	19・37	深鉢	胴部破片	φ1mmの小石	にぶい黄 橙	普通	太さ2mmの沈線によるレンズ状区画。区画内に縄文充填。縄文原体R L。	加曾利E
124	19・37	深鉢	胴部破片	φ1mmの小石	にぶい地	普通	細い沈線による条痕。	赤生
125	19・37	深鉢	胴部破片	φ1mm以下の白 色粒	明赤褐	普通	太さ2mmの沈線による横位帯状の区画と菱形文。帯状の区画に縄文が施文される。縄文原体L横。	甕之内2
126	19・37	深鉢	胴部破片	φ1mm以下の白 色粒	にぶい地	普通	太さ4mmの沈線による縦位の区画。縄文原体L横。	加曾利E
127	19・38	深鉢	胴部破片	細かい白色粒	赤灰	良好	太さ2mmの沈線により三角文。地文に細いR L施文。	甕之内2
128	19・38	甕	口縁部破片	細砂	赤褐	良好	細い無節L rの縄文を横位に施文。口縁内面に刷毛目。	赤生
129	19・38	鉢	口縁部破片	細砂	明赤褐	普通	口縁に沿って幅5mmの平行沈線が二段に施文される。	赤生
130	19・38	深鉢	胴部破片	黒色粒	明赤褐	普通	縄文原体L R横位施文。	漆焼
131	19・38	深鉢	口縁部破片	黒色粒 砂粒	暗灰	不良	縄文原体L R横位施文。	漆焼
132	19・38	甕	胴部片	細砂	にぶい地	普通	幅3mmの平行線横位施文。地文に条痕施文。	赤生

### I区 石器観察表

No.	図・Pl.	器種	形態	出土位置	石材	長さ	幅	重量	備考
1	20・38	加工痕ある剥片		5遺構	ホルンフェルス	12.0	6.2	199.0	表面を粗く剥離、尖頭状に器体を整える。
2	20・38	打製石斧	短冊型	110-030	砂岩	12.0	5.1	127.0	未製品。偏平礫材。
3	20・38	片刃石斧		5遺構	黒色頁岩	9.8	6.5	284.0	柱状礫を分割。無面整形。裏面・無面は礫面。
4	20・38	打製石斧	分銅型a	5遺構	ホルンフェルス	9.2	4.9	70.0	完形？
5	20・38	削器	幅広	5遺構	黒色頁岩	4.3	4.2	22.3	端部に浅い割離。左辺に小割離痕。
6	20・38	削器	幅広	110-030	珪質頁岩	7.8	4.8	49.4	器体下手を斜位破損。刃部磨耗。コノドント入り
7	20・38	削器	縦長	5遺構	黒色安山岩	8.2	4.3	50.3	左右側縁を連続割離。刃部を作出。
8	20・38	削器	縦長	5遺構	ぎよくずい	4.0	2.3	7.0	
9	20・38	石鏝	不明	080-030	チャート	3.7	2.5	4.7	未製品。基を作り出す意図なし。
10	20・38	石鏝	凹基無	070-010	黒色安山岩	3.1	1.9	1.7	完成状態。先端、右辺の返し部を欠損。
11	20・38	石鏝	凹基無	5遺構	珪質頁岩	1.3	1.2	0.2	完成状態。完形。
12	20・38	石鏝	凹基無	表採	チャート	1.4	1.1	0.4	完成状態。完形。
13	20・38	削器	幅広	5遺構	黒色頁岩	3.7	5.3	30.3	打面側・表裏面を加工。刃部作出。
14	20・38	石鏝	凹基無	表採	黒曜石	2.3	1.6	0.9	未製品。右辺欠損。
15	20・38	石鏝	凹基無	13遺構	チャート	2.3	1.3	0.4	完成状態。左辺の返し部を欠損。
16	20・38	石鏝	凹基無	5遺構	チャート	1.6	1.4	0.3	完成状態。完形。
17	20・38	石鏝	凹基無	13遺構	珪質頁岩	1.1	1.3	0.2	左辺先端をリダクション。完成状態。
18	20・38	石鏝	凹基無	13遺構	チャート	1.4	1.4	0.6	完成状態？先端の破損。
19	20・38	石鏝	凹基無	5遺構	チャート	1.3	1.1	0.3	完成状態。完形。
20	20・38	石鏝	不明	5遺構	チャート	2.1	1.2	0.6	完成状態。下手を欠損。
21	20・38	石鏝	凹基有	100-020	チャート	2.5	1.6	1.4	完成状態。先端・基を欠損。
22	20・38	石鏝	凸基有	表採	黒曜石	2.5	1.4	1.2	完成状態。基の破損部から小割離を施す。
23	20・38	石鏝	凸基有	070-010	チャート	2.0	1.0	0.7	基部欠損。未製品。
24	20・38	石皿	無縁	表採	粗粒輝石安山	29.0	17.2	4500	板状の河床礫を用いる。平坦な表面側に磨耗面。

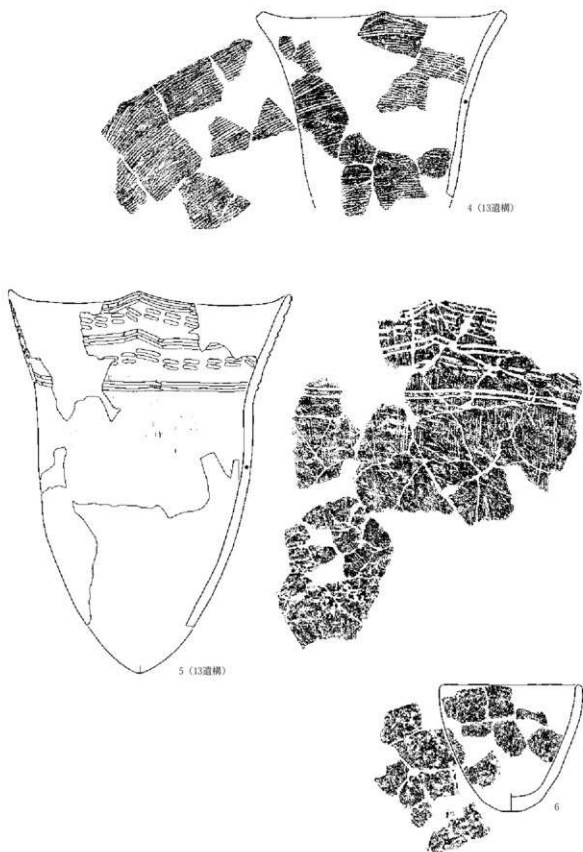


第11図 1区5号遺構出土土器



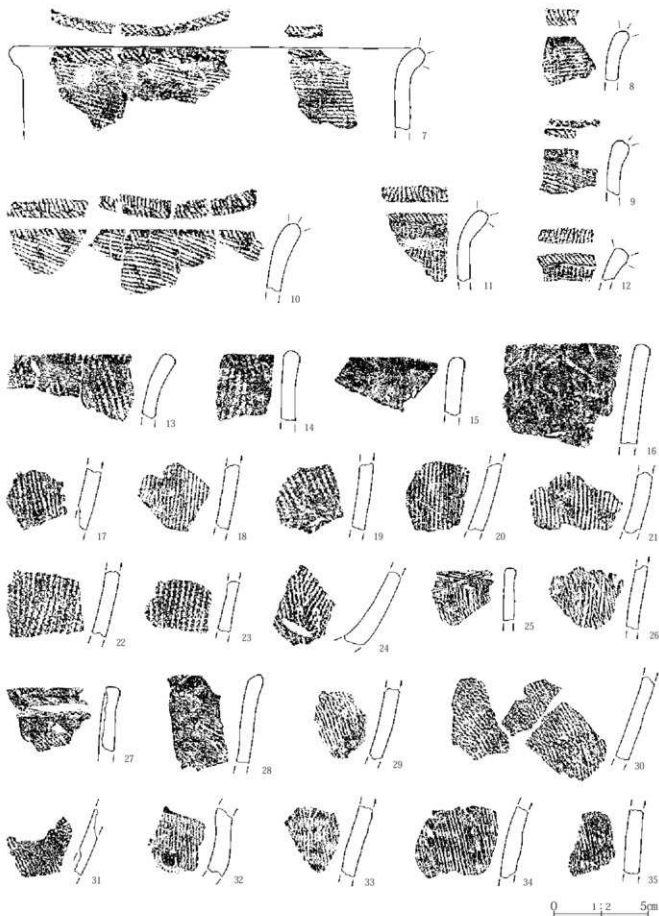
0 1:4 10cm

第12図 1区出土土器(1)

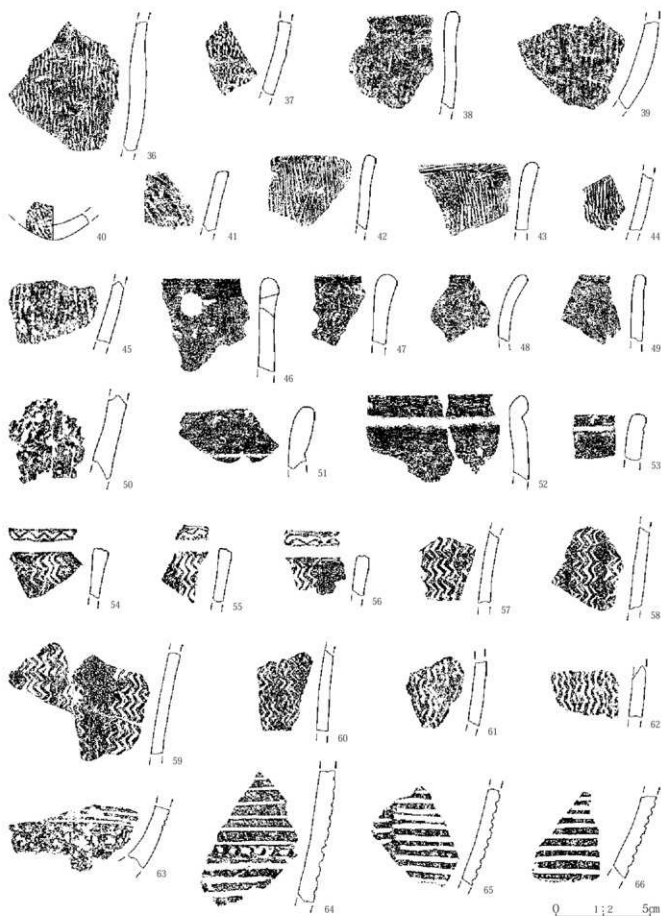


第13図 1区出土土器(2)

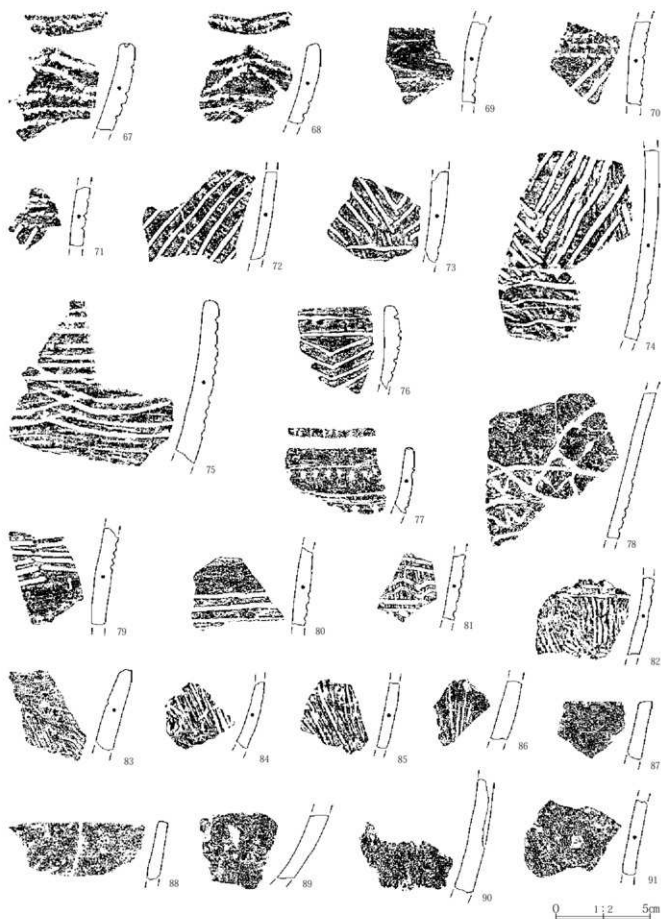
0 1:4 10cm



第14図 Ⅰ区出土土器(3)

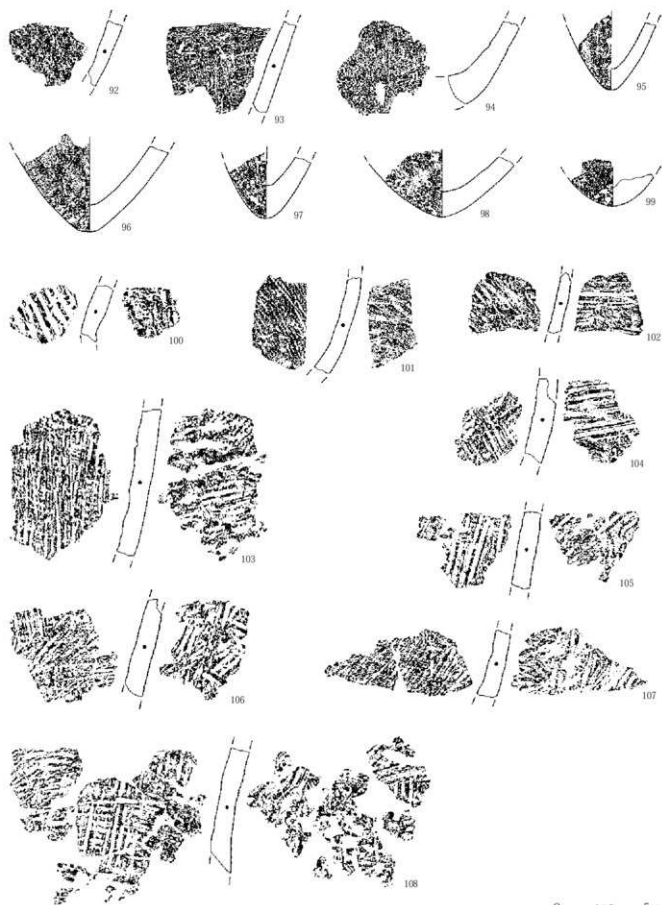


第15図 1区出土土器(4)

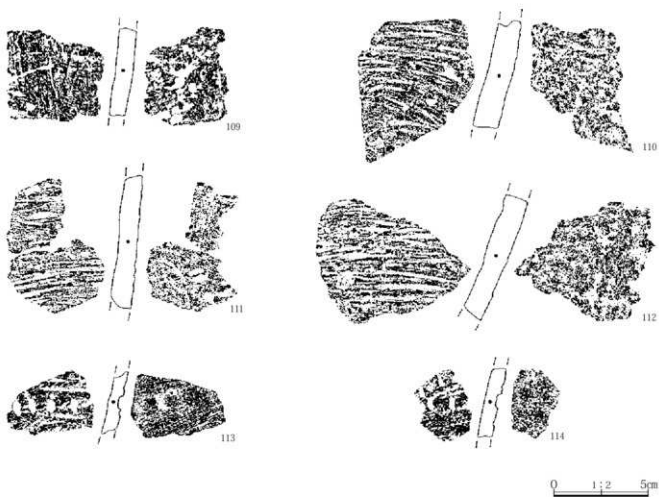


第16図 Ⅰ区出土土器(5)

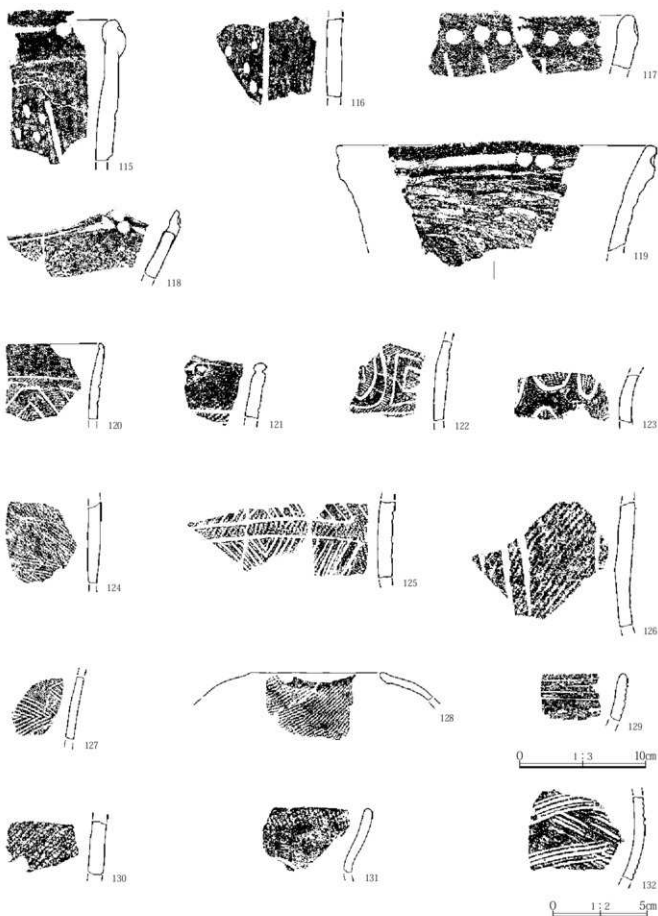




第17図 1区出土土器(6)



第18図 I区出土土器(7)



第19図 1区出土土器(8)

第2章 検出された遺構と遺物



第20図 Ⅰ区出土石器

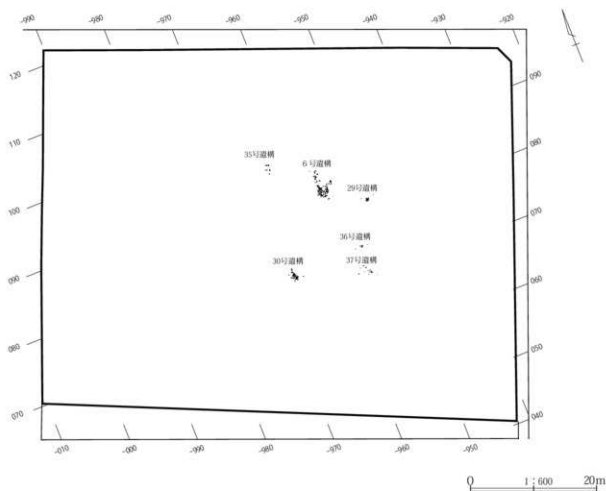
### 第3節 II区の調査

#### 1 II区検出された遺構

II区は、現地表標高が74m程で、I区側の北西から南東に緩やかに傾斜している。平成13年度・14年度に調査を行った。用地の関係から南北に二分割し平成13年度・14年度に北側部分、14年度に南側部分の調査を行った。II区の調査区は、As-B軽石が表土からの耕作により攪乱されている状況であった。そのため、掘り込みの浅い遺構は削平されており、検出された遺構は少ない。遺構確認面の標高は、73～73.5mである。

本調査区の縄文時代の地形的状況は、調査区北東側では、ローム中に鉄分の凝集した層が見られる。凝集層は、湧水によるものと考えられるが、縄文土器の分布がえられることから、縄文時代には、ロームが堆積した台地上の高まりであったと推定される。この高まりからは、遺構がまとまって検出されているが、近代の耕作や古墳時代・近世の小河川によって、大部分が削平されている。

縄文時代の検出遺構は、後期前葉の柄鏡形敷石住居1軒、配石遺構5基である。調査区の中程から北東に広がる微高地部から検出された。出土した遺物量は、多くなく、柄鏡形住居から後期の土器と腕輪、遺物包含層から縄文時代後期の称名寺式、堀之内式・加曾利B式期の土器が出土している。石器は、55点出土している。



第21図 II区全体図

## 6号遺構 (第22・23図, PL. 4)

**位置** 084-954グリッド。調査区のほぼ中央に位置する。**方位** N-0°。**形状・規模** 長軸4.0m、短軸2.0m。掘り込みは、確認されなかった。ほぼ南北方向に、30~40cm程の扁平な河原石を短径方向に連接させて二列に並べ長方形に区画しているが、北東部の礫が抜けている。石列の東側には、ビット列が併行する。北端には、円形の皿状になる土坑と、口縁を下側にした埋裏が検出された。**出土遺物** 出土遺物は、遺構の北端に埋裏3、堀之内2式土器の破片が配石周辺に散在し、接合すると1に示す土器に復元することが出来た。その他には、堀之内2式土器小片が出土しているが図示出来るものはない。石器では、石鏃1、石棒破片2 (第29図18・19)、石皿破片1点、加工痕のある剥片2点が出土している。**所見** 配石の状況から、堀之内2式の柄鏡形敷石住居と考えられ、検出された石敷きは、張り出し部の一部と推定される。また、埋設土器については、被熱による剥落・摩耗が見られることからが体土器の可能性が高い。

## 29号遺構 (第24図, PL. 4)

**位置** 081-950グリッド。調査区中央、6号遺構の東側に位置する。**形状・規模** 長軸0.65m、短軸0.56m。河原石を四角形に配して、中央部に縦長40cmの円礫を下半部を埋め込んで立てている。周辺の掘り込み等は、検出できなかった。遺物も検出されなかった。**所見** 遺構確認面の状況から、縄文時代後期の立石を伴う小穴石遺構になるとと思われる。

## 30号遺構 (第24図, PL. 4)

**位置** 073-965グリッド。調査区中程西側にある。**方位** N-12°-W。**形状・規模** 長軸2.02m、短軸1.0m。深さ60cmの溝状の落ち込みの底面に礫群が広がる。礫の配置に規則性は見られない。15~25cmの河原石が、南北方向に2m、幅1mに並んでいる。配石は、地山をほぼ垂直に掘り込んだ中に置かれている。**出土遺物** 出土遺物は、縄文後期の小片で図示できるものはなかった。**所見** 出土遺物から縄文後期加曾利B式期のものと考えられるが、性格などは不明である。

## 35号遺構 (第24図, PL. 4)

**位置** 091-963グリッド。**方位** N-40°-E。**形状・規模** 長軸1.07m、短軸0.7m。φ25~30cm程の河原石

を3個組み合わせて配置しこれを頂点として、その南西側0.5m離れたところにφ35cm程の丸味を帯びた河原石、南側0.5mの所に25cm程の細長い河原石を置いている。これに伴う掘り込みは、検出されなかった。**出土遺物** 検出されなかった。**所見** 大形の河原石を使用した人為的な配石と思われるが、遺物の出土が無く性格などは、不明である。

## 36号遺構 (第24図, PL. 4)

**位置** 074-954グリッド。**方位** N-53°-W。**形状・規模** 長軸0.46m、短軸0.60m。長さ30cm、幅20cm程の細長い河原石と18cm程の角礫が並んで置いてある。周辺からは、加曾利B式土器の細片が出土している。礫に伴う掘り込みは、検出されなかった。**出土遺物** 加曾利B式土器の小片が少量出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 大形の河原石による人為的な配石であるが、性格などは不明である。

## 37号遺構 (第24図, PL. 4)

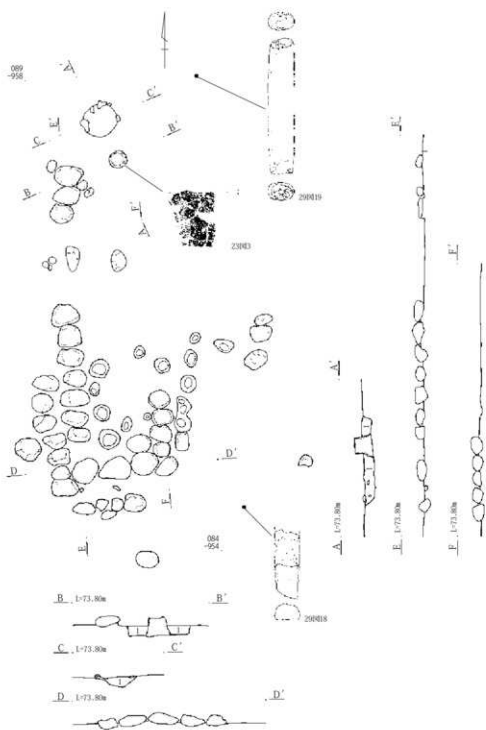
**位置** 070-954グリッド。**形状・規模** 2.2×2.0mの範囲に、φ40cmと25cm程の河原石を並べて置いてある。その周辺に長さ10cm程の小礫が、散在する。礫周辺からの掘り込みは、検出されなかった。**出土遺物** 土器等の遺物も周辺からは、検出されなかった。**所見** 大形の河原石による人為的な配石であるが、性格などは不明である。

## 2 II区検出された遺物

II区検出の遺構から出土した遺物は少なく、6号遺構から堀之内式土器・土製腕輪が検出されている。II区では、他に配石遺構が検出されているが、これらの遺構から出土した遺物について調査時の記載が無いことから、遺物は出土していなかったと思われる。

包含層からは、図示した前期中葉の土器が数片出土している他は、後期の称名寺式・堀之内式・加曾利B式土器が主体となって出土している。遺構外出土であるが、27図18の堀之内2式深鉢や19の堀之内2式の浅鉢は、本遺跡の基準となる資料と考える。

石器は55点出土している。内訳は、石鏃6点、打製石斧6点、石錐、石皿6点、剥片9点、多孔石2点、石棒2点等である。そのうち19点を図示した。

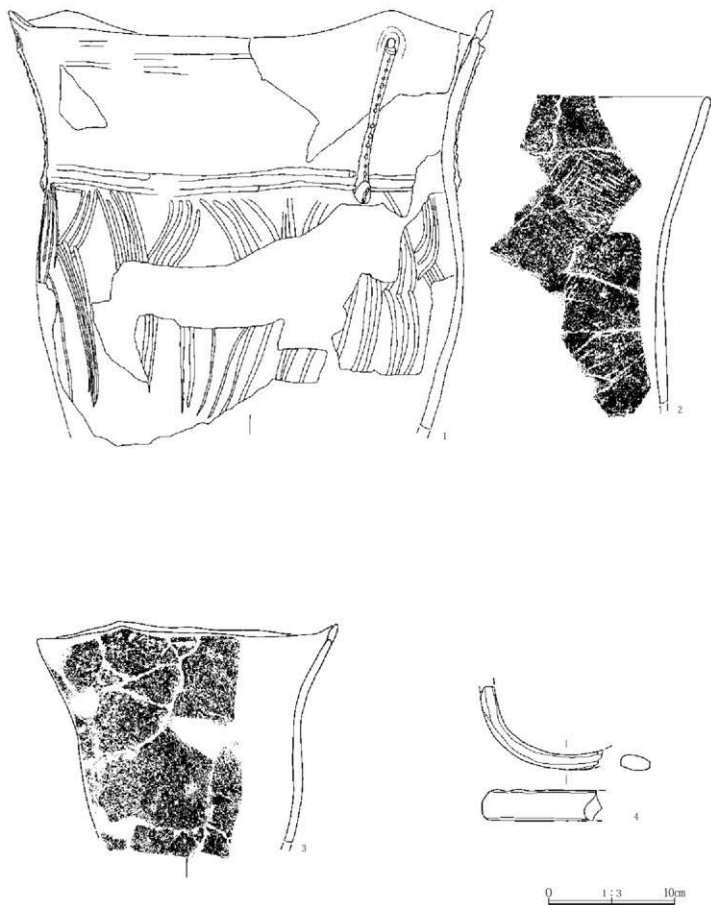


6号遺構

1 黄褐色土 粘質、焼土少量含む。

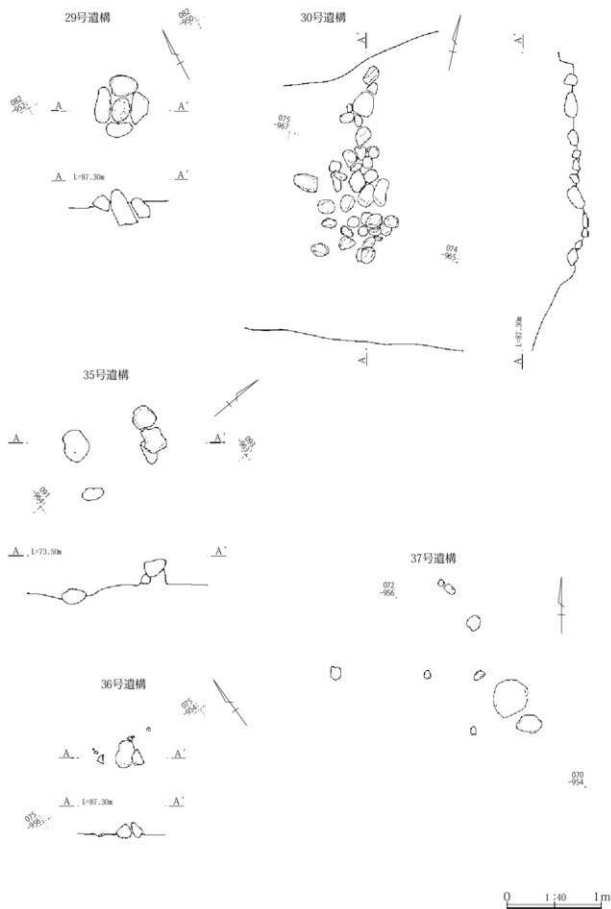
0 1/40 1m

第22図 II区6号遺構



第23図 II区6号遺構出土土器





第24図 II区29号・30号・35号・36号・37号遺構

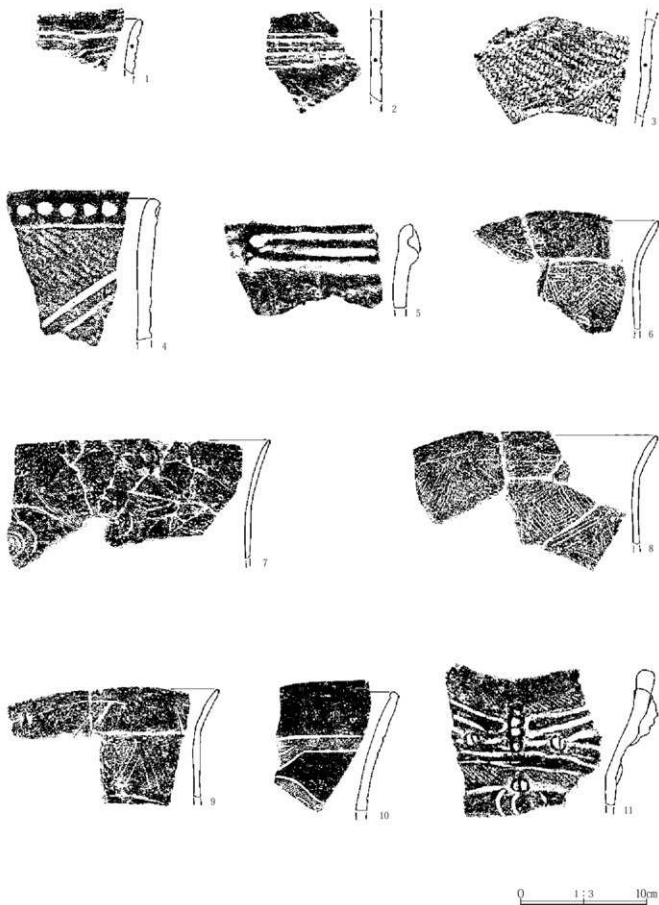
第2章 検出された遺構と遺物

II区 6号遺構出土土器観察表

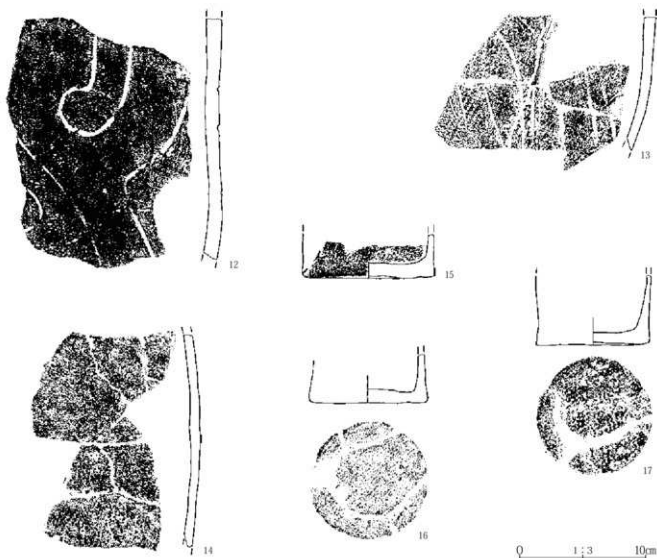
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	23・38	深鉢	口縁部～胴部	φ1mmの白色粒多い	灰褐色	普通	4単位の波状口縁。口縁内面に沈線が廻る。外面、摩滅が多く文様不明。	堀之内2
2	23・38	深鉢	口縁部破片	砂粒多い φ1mmの小石	灰褐色	不良	太さ2mmの沈線による格子目文様。	堀之内2
3	23・39	深鉢	口縁部～胴部	細砂	灰赤	普通	沈線により口縁部文様帯を区画する太さ3mmの沈線による文様施文。	堀之内2
4	23・39	土製 衝輪	破片	砂粒	暗灰	良好	磨き整形。	後期

II区 遺構外縄文土器観察表

No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	25・39	深鉢	口縁部破片	繊維 φ1～2mmの小石	黄灰	不良	幅5mmの平行沈線による菱形文。縄文原体R L横位。	有尾
2	25・39	深鉢	口縁部破片	繊維 φ1～2mmの小石	黄灰	不良	幅5mmの平行沈線による菱形文。縄文原体R L横位。	有尾
3	25・39	深鉢	胴部破片	繊維 φ1～2mmの小石	黄灰	不良	幅5mmの平行沈線による菱形文。縄文原体R L横位。	有尾
4	25・39	深鉢	口縁部破片	細砂	淡黄	普通	口縁に沿ってφ11mmの円形刺突。胴部には、太さ5mmの沈線による文様施文。縄文原体R L横位。	堀之内
5	25・39	深鉢	口縁部破片	細砂 φ1mmの小石	淡黄	普通	口縁に沿って隆線と沈線が横位に施文される。	堀之内
6	25・39	深鉢	口縁部～胴部	砂粒 φ1mmの小石	暗褐色	不良	太さ1mmの細い沈線により口縁部に菱形文を重ねる。	堀之内2
7	25・39	深鉢	口縁部破片	細砂 黒色粒	明赤灰	普通	全体に摩滅。浅い沈線による渦巻文様。口唇部内面に細く浅い沈線が廻る。	縄文後期
8	25・39	深鉢	口縁部～胴部	砂粒 φ1mmの小石	暗褐色	不良	太さ1mmの細い沈線により口縁部に菱形文を重ねる。	堀之内2
9	25・39	深鉢	口縁部～胴部	砂粒 φ1mmの小石	暗褐色	不良	太さ1mmの細い沈線により口縁部に菱形文を重ねる。	堀之内2
10	25・39	深鉢	口縁部破片	細砂	灰褐色	普通	太さ3mmの沈線による文様区画。区画内に縄文充填。口唇部内側に沈線が廻る。縄文原体r横。	堀之内
11	25・39	深鉢	口縁部破片	細砂	暗赤褐色	普通	隆線と沈線による文様区画。文様の交点には瘤が貼付される。縄文原体R L横位。	安行
12	26・40	深鉢	胴部破片	砂粒 φ1～2mmの白色粒	にぶい赤褐色	普通	太さ3mmの沈線による「J」の字文。	称名寺
13	26・39	深鉢	胴部破片	粗砂 細かい白色粒	にぶい赤褐色	不良	太さ3mmの浅い沈線による弧線文。	縄文後期
14	26・39	深鉢	胴部破片	粗砂 細かい白色粒	にぶい赤褐色	不良	太さ3mmの浅い沈線による弧線文。	縄文後期
15	26・40	深鉢	底部破片	砂粒 φ1mmの小石	暗褐色	不良	R Lの縄文が施文されるが、摩滅が多く不鮮明。	堀之内2
16	26・40	深鉢	底部破片	砂粒	浅黄褐色	良好	ナデ整形。	後期
17	26・40	深鉢	底部破片	粗砂 細かい白色粒	にぶい黄褐色	良好	ナデ整形。底面副代直。	後期
18	27・40	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1mmの小石	浅黄褐色	普通	口縁部内面に沈線が廻る。口唇部直下には「8」の字状の粘土貼付。口縁部には太さ3mmの沈線による文様区画内に同心円や弧線文が施文される。	堀之内2
19	27・40	深鉢	口縁部～胴部	細砂 φ1mmの白色・黒色粒	浅黄褐色	普通	口縁部4単位の突起。口縁部直下に太さ5mm程の沈線による長楕円区画。区画内にφ4mmの円形刺突が充填される。	堀之内



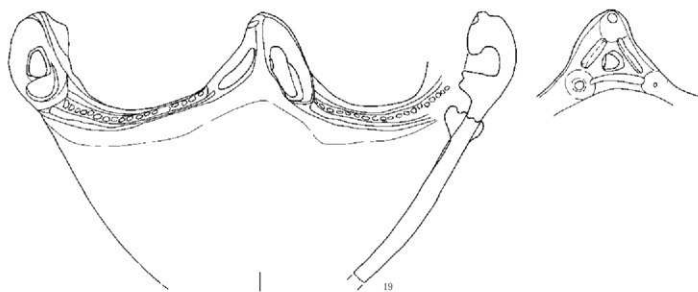
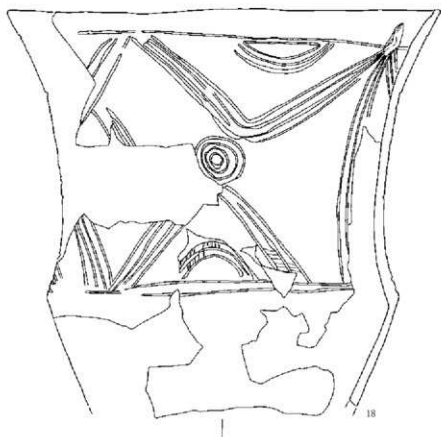
第25図 II区道橋外出土土器(1)



第26図 II区遺構外出土土器(2)

## II区 石器観察表

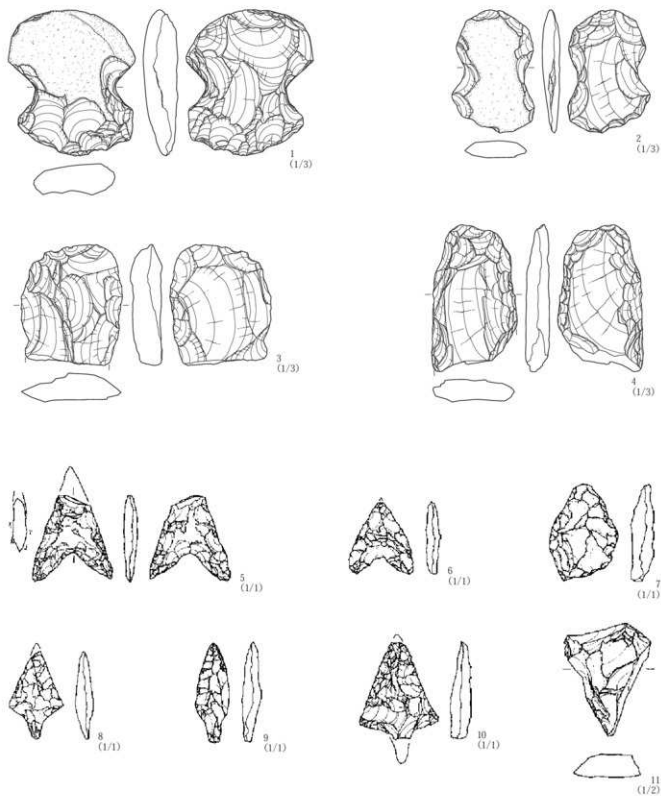
No.	図・Pl.	器種	形態	出土位置	石材	長さ	幅	重量	備考
1	28・41	打製石斧	分銅型 a	4遺構	黒色頁岩	11.6	10.0	352.4	完成状態。完形。対部リダクションが激しい。
2	28・41	打製石斧	分銅型 a	100-950	ホルンフェルス	9.8	6.6	103.4	完成状態。完形。
3	28・41	打製石斧	不明	表探	ホルンフェルス	9.6	8.0	235.8	加工が左右均等ではなく、削器の可能性が大?石斧とするなら未製品。
4	28・41	打製石斧	短冊型	110-940	緑色片岩	11.6	6.8	210.4	両側縁を並行するように加工。未製品。
5	28・41	石鏃	凹基無	6遺構	黒曜石	2.3	2.4	1.2	完成状態。先端欠損。局部磨製石鏃。
6	28・41	石鏃	凹基無	表探	チャート	1.8	1.7	1.0	完成状態。完形。
7	28・41	石鏃	凸基有	表探	チャート	2.5	1.8	2.7	茎を欠損。未製品。
8	28・41	石鏃	凹基無	表探	珪質頁岩	2.3	1.4	1.0	完成状態。完形。
9	28・41	石鏃	凸基有	085-925	チャート	2.7	1.8	1.0	完成状態。完形。
10	28・41	石鏃	凸基有	100-970	チャート	2.6	2.1	2.2	完成状態。先端・茎を破損。
11	28・41	削器	削器	表探	黒色安山岩	6.0	4.6	34.5	右側縁裏面を粗く加工。
12	29・41	磨石	棒状磨	表探	粗粒輝石安山岩	15.1	6.3	801.2	両側縁に打痕・磨耗痕が集中。縁を形成。
13	29・41	磨石	棒状磨	表探	粗粒輝石安山岩	14.8	7.2	674.7	両側縁に打痕・磨耗痕が集中。縁を形成。
14	29・41	磨石	扁平磨	表探	粗粒輝石安山岩	12.6	8.9	692.0	側縁磨打が顕著。
15	29・41	石皿	有縁	080-950	粗粒輝石安山岩	23.4	26.8	6900.0	上半部欠損。側縁に縁を持つ。
16	29・41	多孔石	1遺構	粗粒輝石安山岩	23.8	20.4	2903.2	中央付近は石皿状に浅く窪む。	
17	29・41	石皿	無縁	1遺構	粗粒輝石安山岩	19.3	13.9	2067.9	ごく浅く中央付近が窪む。裏面に孔を穿つ。
18	29・41	石棒	不明	6遺構	頁岩	7.4	2.6	38.3	長軸並行の縦状痕、側縁に斜向する線状痕が顕著。
19	29・41	石棒	無頭	6遺構	緑色片岩	21.6	4.1	508.2	先端部は面取り整形。側縁打痕が顕著。



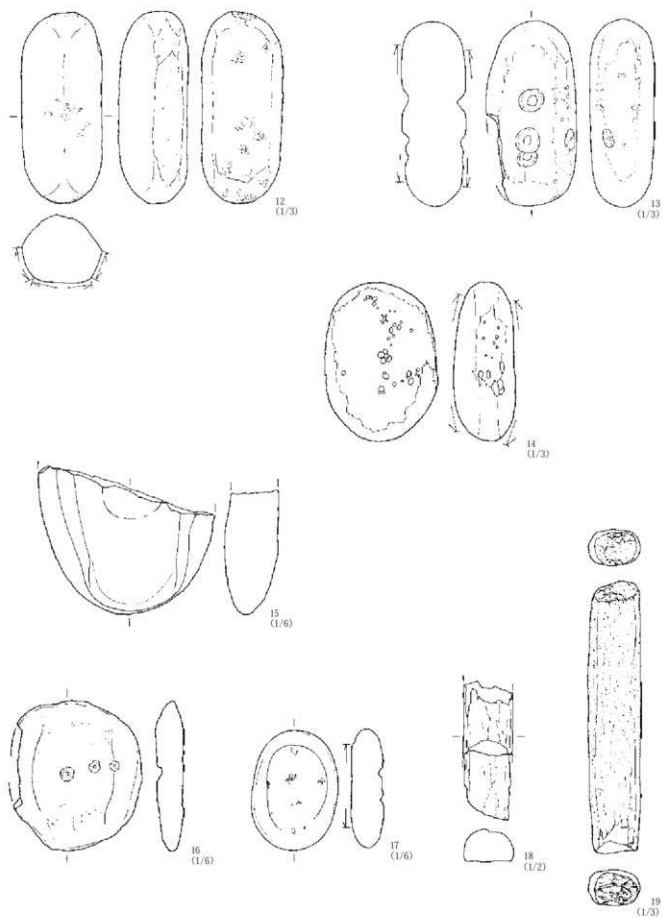
0 1:3 10cm

第27図 II区道橋外出土土器(3)

第2章 検出された遺構と遺物



第28図 II区出土石器(1)



第29図 II区出土石器(2)

## 第4節 Ⅲ区の調査

### 1 Ⅲ区検出された遺構

Ⅲ区は、現地表標高が73m程で、調査区の北西から南東に緩やかに傾斜している。本地区もⅡ区同様に平成13年度・14年度に調査を行った。用地の関係から南北に二分割し平成13年度・14年度に北側部分、14年度に南側部分の調査を行った。Ⅲ区の縄文時代遺構確認面は、標高72.5m～73mである。遺構検出面は、砂礫層の上に基本土層9層の暗褐色の粘質土層（6図）が乗っている微高地にある。

縄文時代の遺構確認面は、As-B層石混じり層の下層にあり、調査区の中で状況が異なっていることが分かった。調査区北東や北西側では、ロームの二次堆積などが見られる。南側では、シルト層にマンガンの凝集層が厚く堆積する傾向にあることから、古代以前の地形は、北から南へ傾斜し、南側に水が流れていた状況を示している。特に南東隅が低くなっている。調査区の北側には、縄文土器の包含層である9層が確認されているが、南側では、9層が見られなくなる。これらのことから、縄文時代では、調査区の北側は、台地上の高まりに縄文時代の遺構が作られ、南側は、傾斜する谷に至る地形が復元できる。また遺構は、調査区西側の一帯と東側の一帯に分かれることから、調査区の中央に南北の谷地が入っていることが予想される。配石遺構は、この谷を挟んで北東部と北西部に相対するように作られている。検出された主な遺構は、住居1軒、配石遺構10基、溝1条、その他である。

調査区北東部では、古墳時代以降の旧地表が削平されたため、縄文土器の包含層が現地表から比較的浅い上層で確認されている。これらの包含層や遺構から検出された遺物は、前期中葉の黒浜・諸磯式土器、後期前半の堀之内式土器、加曾利B式土器、土製耳栓、土鏃等である。石器は、86点ほど出土しており、打製石斧、石鏃、石皿、多孔石などが出土している。

以下、各遺構についての概要を記する。

#### 1号遺構（第31・35図，PL.9）

位置 070-905グリッド。調査区北西部にあり、2号遺

構、3号遺構と接する。形状・規模 1.8×1.8mの範囲にφ25cmの丸味を帯びた河原石を8点置き、その南側にφ10cm程の小礫や土器片が80点程集中して置かれている。掘り込みは、検出されなかった。調査では平面図のみで、セクション、エレベーションの図は作図されていないため、地山の傾斜は不明である。礫の出土標高の記載によると、72.65～72.91mあり、30cmの高低差の中に礫が置かれている。出土遺物 縄文時代後期の加曾利B式土器の小片が多く出土したが、図示出来るものはなかった。他に前期諸磯b式土器の小破片が混入していた。所見 本遺構は、大きな河原石を置きその周辺に小礫や土器を置くなど、人為的に礫を集めた小配石遺構と考えられるが、性格等は不明である。本遺構の周辺の出土遺物や検出された層位から、加曾利B式期と考えられる。

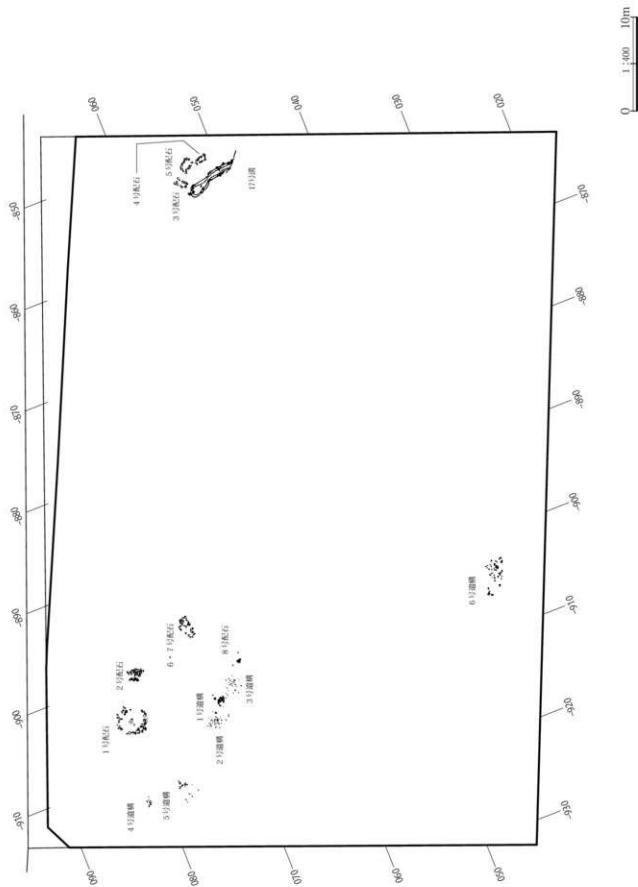
#### 2号遺構（第31図，PL.9）

位置 071-907グリッド。1号遺構、3号遺構と接している。形状・規模 2.5×2mの範囲にφ10cm程の小礫や、土器片70点程が集中して置かれている。掘り込みは、検出されなかった。礫の出土標高の記載によると、72.68～72.88mあり、20cmの高低差の中に礫が置かれている。出土遺物 縄文時代後期の加曾利B式土器の小片が多く出土したが、図示出来るものはなかった。所見 本遺構は、人為的に礫や土器を集めた小配石遺構と考えられるが、掘り込み等も見られず、性格は不明である。出土遺物や検出された層位などの状況から、加曾利B式期と考えられる。

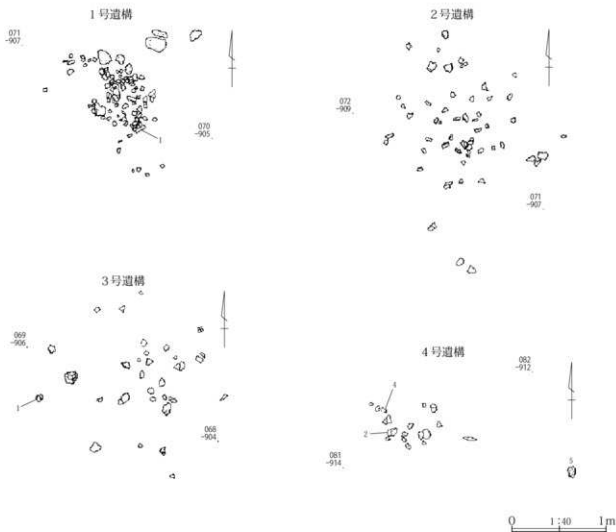
#### 3号遺構（第31・35図，PL.9）

位置 068-904グリッド。2号遺構、3号遺構と接している。形状・規模 2×2mの範囲で10cm程の小礫や、土器片40点程が集中して置かれている。掘り込みは、検出されなかった。調査では平面図のみで、セクション、エレベーションの図は作図されていない。礫の出土標高の記載によると、72.60～72.80mあり、20cmの高低差の中に礫が置かれている。出土遺物 縄文時代後期の加曾利B式土器の小片が多く出土したが、図示出来るものはなかった。所見 本遺構は、礫や土器の小片が集中して出土しており、周辺からは、遺物の出土が見られないことから、人為的に礫や遺物を置いていると考えられるが性格は不明である。出土遺物や検出面から





第308図 Ⅲ区全体図



第31図 Ⅲ区1号・2号・3号・4号遺構

加曾利B式期のものと考えられる。本遺構の検出された場所は、北側から1・2・3遺構と並んで検出されており、遺物の検出面が北から南へと、低くなっていることから、縄文時代の遺構構築面が南側へ傾斜していると推測される。

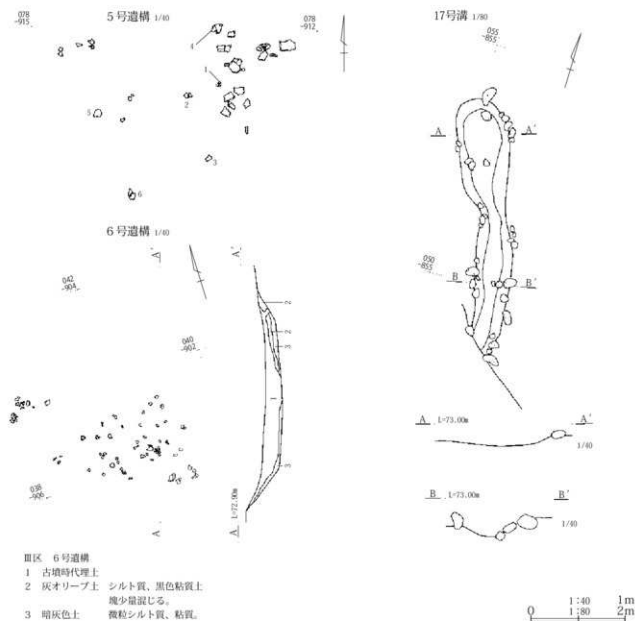
**4号遺構** (第31・35図, PL.9)

**位置** 081-912グリッド。調査区の北西側にあり、5号遺構と接している。**形状・規模** 1×1mの範囲に、φ10cm以下の小礫が広がり、約30点の礫や土器が共に出土している。掘り込みは、検出されなかった。セクション、エレベーションの図は作図されていない。礫の出土標高の記載によると、72.65～72.70mあり、15cmの高低差の中に礫や遺物が置かれている。**出土遺物** 加曾利B式土器小片が多く出土し、前期中葉の黒浜式土器も少量混じる。**所見** 本遺構は、礫や土器の小片が集中し

ていることから、人為的に遺物が置かれたと考えられるが性格は不明である。出土遺物や周辺の5号遺構出土遺物等から、前期中葉の黒浜式期と考えられる。

**5号遺構** (第32・35・36図, PL.10)

**位置** 077-912グリッド。調査区の北西にあり、4号遺構の南側に位置する。**形状・規模** 調査区の谷地部にかかることから、検出されている。2×2mの範囲に約30点程の小礫と前期中葉の黒浜式土器が、集中して置かれている。**出土遺物** 縄文時代前期中葉の黒浜式土器が多く出土している。他に加曾利B式土器が出土しているが、図示出来るものはなかった。**所見** 本遺構は、礫や土器の小片が集中していることから、人為的に遺物が置かれたと考えられるが性格は不明である。出土遺物や周辺の4号遺構出土遺物等から、前期中葉の黒浜式期と考えられる。



## 6号遺構 (第32図, PL.10)

**位置** 038-902グリッド。調査区の中程西よりの南側に位置する。**形状・規模** 3.5×2.5mの窪地範囲にφ5～10cmの礫と土器小片が集中して出土している。覆土上層には、古墳時代の埋土が堆積し、下層にシルト質の土が堆積している。**出土遺物** 縄文時代後期の加曾利B式土器の小片が多く出土したが、図示出来るものはなかった。**所見** 遺構検出面が他遺構より低い位置にあり、古墳時代の土が覆土中に見られることから、小河川の一部に遺物が集中して出土したものと考えられる。図示出来ない小破片や小礫がこの部分に集中して出土していることから、加曾利B式期の遺物廃棄場と考えられ

る。

## 17号溝 (第32図, PL.一)

**位置** 053-855グリッド。調査区の北東部、3・4・5号配石の西側にある。**形状・規模** 長さ2.8m、幅0.5m程で、北から南へ傾斜している。溝の断面形は、北側は浅い皿状になり、南側で深くなっている。φ5～10cm程の小礫が、溝を囲うように置かれている。**出土遺物** 縄文時代後期の加曾利B式土器の小片が出土したが、図示出来るものはなかった。**所見** 遺構確認面や出土遺物から、縄文時代後期の溝状遺構と考えられる。本遺構は、本区の地形が南東に傾斜し、南側に河川があったことから、これに繋がるとも考えられる。

## 第2章 検出された遺構と遺物

### 1号配石 (第33図, PL. 7)

**位置** 078-904グリッド。調査区の北西部にあり、2号配石の西側にある。**形状・規模** 3.2×3.2mの範囲で、10～30cmの河原石60点程を楕円形に配置している。礫の配置は、丸味を持ったものが多いが、広口面を縦列に置く傾向にある。中央部には、60×40cm、深さ20cm程の土坑が検出されている。遺構の中央部東西方向は、調査時のトレンチによって壊されているため、中央部土坑の詳細は確認出来なかった。**出土遺物** 本遺構からは、縄文時代前期の諸磯B式土器の小片が出土しているが、混入と思われる。その他に、後期の土器小片が少量出土しているが、図示できるものはなかった。**所見** 礫の配置から配石遺構と推定した。柱穴や特殊な出土遺物もなく、性格不明の遺構である。

### 2号配石 (第33図, PL. 7)

**位置** 077-892グリッド。調査区北西部1号配石の東に位置する。**方位** N-11°-E。**形状・規模** 長軸1.80m、短軸1.61mの範囲に、10～20cm程の主体となる河原石約50点を配置している。配石の南側では、10×30cm程のやや扁平な礫が主体を占める。北側では、中央部に方形の空間部があり、4点の礫を長軸を上下方向に立てて置いている。礫の下や周囲には本遺構に伴うピットや掘り方等は検出されなかった。**出土遺物** 本遺構に伴う確実な物は、検出されず周辺から、縄文時代後期の加曾利B式土器小片が出土している。**所見** 北側に立石状の配置があり、南側に敷石を伴う配石遺構と推定される。遺構確認面や周辺からの遺物出土状況から、縄文時代後期加曾利B式期と考えられる。

### 3号配石 (第34図, PL. 8)

**位置** 054-853グリッド。調査区の北東部4・5号配石と隣接している。**方位** N-50°-E。**形状・規模** 長軸1.5m、短軸0.8m。10～20cmの河原石約13点を平置きにして、長方形に配置している。礫は、広口面を縦や横に置き統一性がない。配石の内側には、敷石は認められず、掘り込みなどの施設も確認されていない。**出土遺物** 遺構内からは、遺物は検出されなかった。**所見** 遺構の検出面や周辺の状況から、縄文時代後期加曾利B式期の配石遺構であり、形状を考慮すれば配石墓になる可能性もある。

### 4号配石 (第34図, PL. 8)

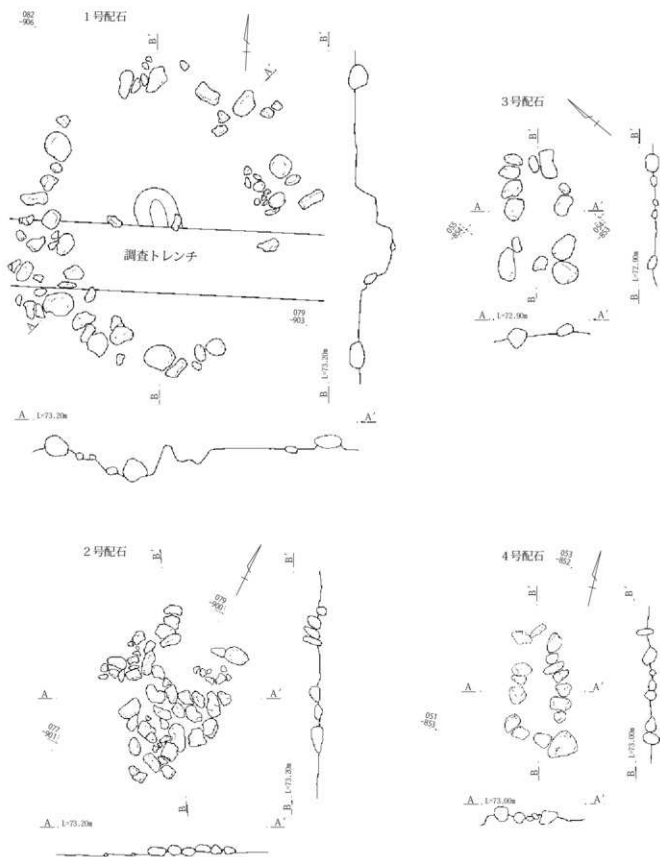
**位置** 051-851グリッド。調査区の北東部3・5号配石と隣接している。**方位** N-12°-W。**形状・規模** 長軸1.5m、短軸0.6m。10～20cmの河原石16点を平置きで、長方形に配置している。側面の礫は、礫の広口面を横向きにして配している。配石の内面床には小礫が認められるが、人為的なものか、地山に含まれる小礫なのかは判断できない。北側に長径20×幅10×高さ22cmの細長い礫を立石状に配している。配石内や周辺からは掘り方などの施設は検出されなかった。**出土遺物** 遺構内からは、遺物は検出されなかった。**所見** 遺構の検出面や周辺の状況から、縄文時代後期加曾利B式期の立石状の配石を伴う配石遺構であり、形状を考慮すれば配石墓になる可能性もある。

### 5号配石 (第34図, PL. 8)

**位置** 053-851グリッド。調査区の北東部3・5号配石と隣接している。**方位** N-42°-W。**形状・規模** 長軸1.6m、短軸1.0m。10～30cmの河原石約18点を平置きで、長方形に配置している。東側面の礫は、礫の広口面を横向きにして配し、西側の礫は、広口面を縦向きに配している。総じて西側の礫は、大きくなっている。配石の内面床には小礫が認められるが、人為的なものか、地山に含まれる小礫なのかは、判断できない。配石内や周辺からは掘り方などの施設は検出されなかった。**出土遺物** 遺構内からは、遺物は検出されなかった。**所見** 遺構の検出面や周辺の状況から、縄文時代後期加曾利B式期の配石遺構であり、形状を考慮すれば配石墓になる可能性もある。

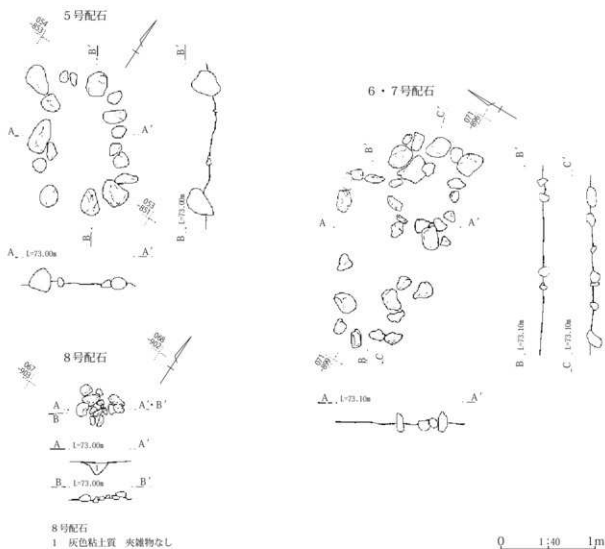
### 6・7号配石 (第34図, PL. 8)

**位置** 071-896グリッド。調査区の北西部2・8号配石の間にある。2基の重複遺構である。**方位** 6号配石 N-60°-E、7号配石 N-74°-E。**形状・規模** 10～20cmの河原石を平置きで、長方形に配置している。規模は、6号が長軸1.9m、短軸0.7m。7号が長軸1.6m、短軸0.9mを測る。6号が7号の西側を壊して作られている。6・7号の側面の礫は、礫の広口面を縦向きにして配している。配石の内面床には小礫が認められるが、人為的なものか、地山に含まれる礫なのかは判断できない。**出土遺物** 遺構内からは、遺物は検出されなかった。**所見** 遺構の検出面や周辺の状況から、縄文時代後期加曾利B式期の配石遺構であり、形状を考慮す



第33図 Ⅲ区1号・2号・3号・4号配石

## 第2章 検出された遺構と遺物



第34図 Ⅲ区5号・6号・7号・8号配石

れば配石墓になる可能性もある。

### 8号配石 (第34図, PL. 8)

**位置** 067-902グリッド。調査区の北西部3号遺構の東にある。**形状・規模** 0.5mの範囲に、10~20cmの河原石約15個を密集させて配している。中央部の配石下からは、断面三角になる小ピットが認められた。**出土遺物** 遺構内からは、遺物は検出されなかった。**所見** 遺構検出面などの状況から、縄文時代後期加曾利B式期の配石遺構と考えられる。性格などは、不明である。

### Ⅲ-2区1号住居 (第37図, PL.10)

**位置** 070-830グリッド。調査区の北東部にある。**形状・規模** 炉部分のみの確認で、住居全体調査区外にも広がり、検出困難であったため形状・規模は不明である。土層断面では、住居の落ち込みが確認され長さ3.6m、深

さ32cmを測る。**方位** 炉の主軸は、N-40°-W。**重複** 不明。**埋没土** 暗褐色土を主体とし、覆土中に縄文土器小片を含む。酸化鉄を多く含むことから、埋没後に地下水位が上昇した影響を受けていると思われる。**柱穴** 検出されなかった。**炉** やや扁平で細長い礫による石囲炉。炉の規模は長軸0.45m、短軸0.3m。炉内底面には、土器片が散らかっていた。**床面** 黒褐色土中に床面が有るため、地山の土と区別が困難であった。地下水の影響のためか、硬化面も確認できず、はっきりとした床面は検出されなかった。**出土遺物** 遺物は、炉周辺から多く出土している。土器は、堀之内2式を主体としている。**所見** 遺物は、炉周辺から出土しており、これらの土器が堀之内2式であることから、当該期の住居と考えられる。

## 2 Ⅲ区検出された遺物

Ⅲ区基本土層9層の遺物包含層から出土している土器は、前期中葉の黒浜式土器、前期後葉の諸磯式土器、後期の甕之内式土器、加曾利B式土器がある。調査区北西部では、黒浜式土器が遺構などに伴ってまとまって出土している。諸磯式土器は、包含層から数点検出され他、遺構などからは出土していない。加曾利B式土器は、配

石遺構から図示出来ないような小片が検出され他は、包含層からの出土が多い。その他、土製耳飾り、土錘等の土製品が出土した。石器は、86点出土しているが、遺構出土のものではなく、その大半が包含層や弥生時代以降の溝等から出土したものである。打製石斧15点、石錐6点、剥片石器類24点等、剥片石器が比較的多く出土しているのに対して、礫石器は、石皿2点、磨石4点と出土量は少ない。

Ⅲ区 1号住居出土土器観察表

no.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	37・42	深鉢	口縁部破片	粗砂 φ1mmの小石	浅黄	普通	口縁部内面に2条の沈線が廻る。外面は、平行沈線による対文。1～3回一個体。	加曾利B
2	37・42	深鉢	口縁部破片	粗砂 φ1mmの小石	浅黄	普通	口縁部内面に2条の沈線が廻る。外面は、平行沈線。1～3回一個体。	加曾利B
3	37・42	深鉢	底部	粗砂 φ1mmの小石	浅黄	普通	ナデ整形。1～3回一個体。	加曾利B

Ⅲ区 1号遺構出土土器観察表

no.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	35・41	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒多い	黄	普通	集合沈線により多段に胴部を横位区画する。縄文原体R.L横位。	諸磯b新

Ⅲ区 3号遺構出土土器観察表

no.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	35・41	深鉢	口縁部	粗砂 繊維	にぶい、黄	普通	波状口縁。全体に摩滅しており縄文原体不明。	前期中葉

Ⅲ区 4号遺構出土土器観察表

no.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	35・41	深鉢	胴部破片	砂粒 φ1～2mmの小石 繊維	にぶい、黄	不良	全体に摩滅多く縄文原体不明。	前期中葉
2	35・41	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 繊維	にぶい、黄	普通	口縁部に2条の平行沈線八形文が廻る。口縁部文様は、平行沈線を横位に施文。縦位に平行沈線で区画し、これに円形刺突を加える。	黒浜
3	35・41	深鉢	胴部破片	粗砂 白色粒 繊維	にぶい、黄	不良	平行沈線を横位に施文。縦位に平行沈線で区画し、これに円形刺突を加える。	前期中葉
4	35・41	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	にぶい、黄	不良	全体に摩滅多く、縄文原体不明。	前期中葉
5	35・41	深鉢	底部	砂粒 φ1～2mmの小石 繊維	にぶい、黄	普通	全体に摩滅多い。	前期中葉
6	35・41	深鉢	胴部～底部	粗砂 黒色粒 繊維	灰褐色	普通	無文。	前期中葉

Ⅲ区 5号遺構出土土器観察表

no.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	35・42	深鉢	口縁部	粗砂 繊維	褐色	普通	波状口縁部縁に2段の竹管による刺突列が施文される。胴部は縄文施文であるが摩滅が多く原体不明。	前期前葉
2	36・42	深鉢	口縁部	粗砂 繊維	灰褐色	普通	波状口縁部縁の口縁部文様部に竹管による刺突列が多段に施文される。胴部は縄文施文であるが摩滅が多く原体不明。	前期中葉
3	36・42	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒 繊維	にぶい、黄	普通	波状口縁。全体に摩滅しており縄文原体不明。	前期中葉
4	36・42	深鉢	胴部	粗砂 繊維	にぶい、黄	普通	胴部にL.L.RとL.Rになる直前段合燃りの原体による縄文施文。	前期前葉
5	36・42	深鉢	底部	粗砂 白色粒 多い	橙	普通	無文。全体に摩滅。	後期
6	36・42	深鉢	底部	粗砂 黒色粒 白色粒	灰褐色	普通	無文。全体に摩滅。	後期

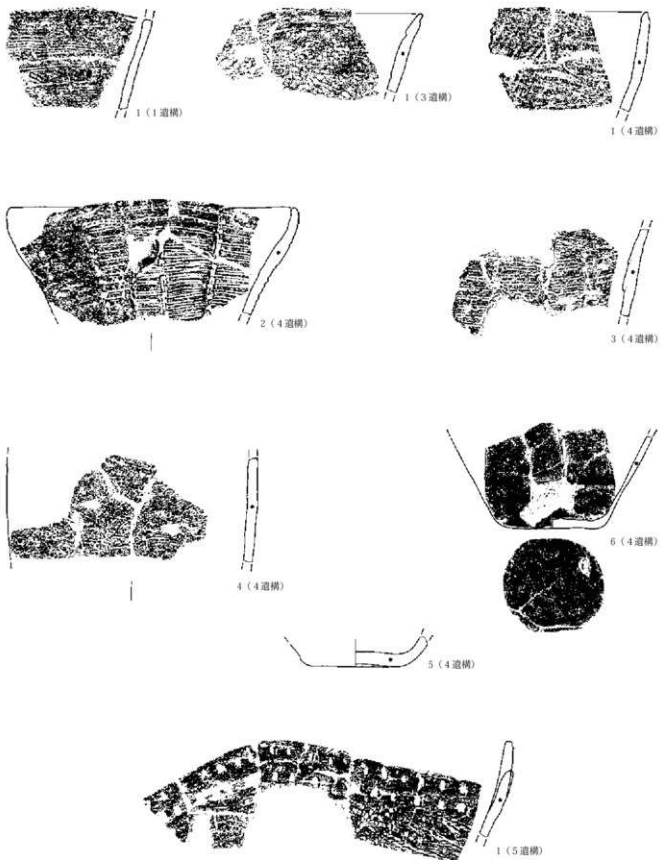
第2章 検出された遺構と遺物

Ⅲ区 遺構外縄文土器観察表

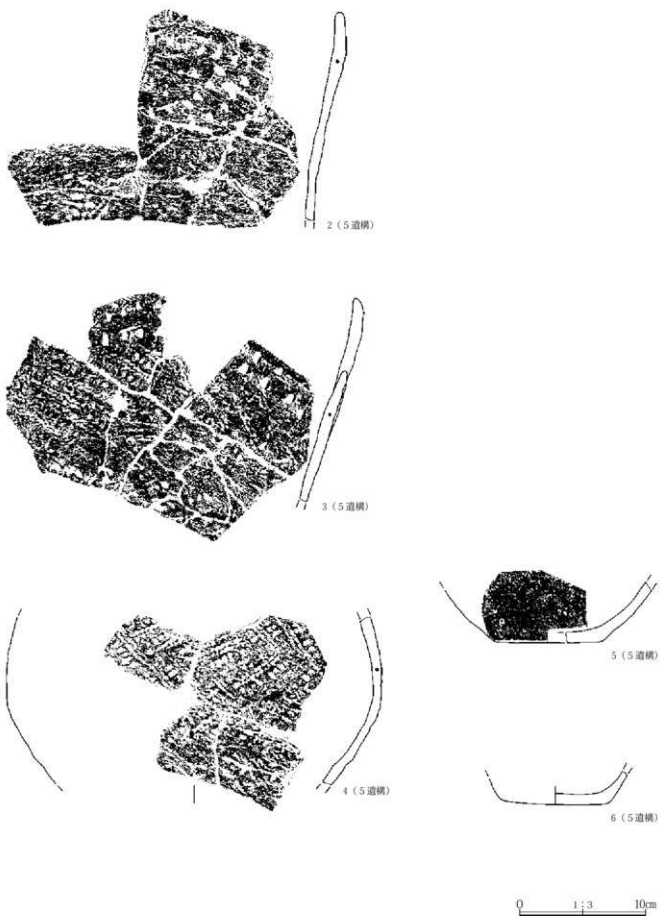
No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	38・42	深鉢	口縁部破片	粗砂 黒色粒	灰褐色	普通	口縁部に刺突列。直前段合摺りのL R。	有尾
2	38・42	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 多い	赤灰	不良	口縁部残先状に屈曲する。波状口縁頂部は3単位の変起を持ち、側縁に粘土層を貼付。幅3mmの平行沈線による渦巻状の曲線を施文。	諸議b
3	38・42	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	灰褐色	普通	幅3mmの平行沈線U形文による木葉文。	諸議a
4	38・42	深鉢	胴部破片	粗砂 φ1~ 2mmの白色・ 黒色粒	灰白	普通	頸部貼付部粘土層による「8」の字状の貼り付け。平行沈線による縦位、弧線施文。全体に厚減多い。	堀之内1
5	38・42	深鉢	ほぼ完形	粗砂 細かい 白色・黒色粒	橙	普通	口縁部に刻文が施され縦面状になる。縄文原体L R横位。	加曾利B 2
6	38・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい、黄 橙	普通	口縁部内面に太さ2mmの沈線が廻る。外面に太さ1mmの浅い沈線が縦位に施文される。	堀之内2
7	38・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 黒色粒	にぶい、橙	普通	口縁部内面に沈線が廻る。外面に凹凸を持つ隆線が廻り、それ以下を沈線による横帯文。	堀之内2
8	38・43	深鉢	胴部破片	粗砂 白色・ 黒色粒	浅黄橙	普通	全体に厚減多く文様不鮮明。沈線による横帯文に区切り縦線文。磨り消し縄文。	加曾利B 1
9	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい、橙	普通	口縁部内面直下に沈線が廻る。外面厚減多く文様不明。	加曾利B
10	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 多い	灰赤	不良	口縁部に突起。沈線による「ノ」の字文。φ5mmの孔を持つ。口縁部横帯文。全体に厚減多く文様不明。	加曾利B 2
11	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい、黄 橙	普通	外面沈線による横帯文、区切り文。内面に沈線が4条廻る。	加曾利B 1
12	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂	淡橙	普通	口縁部肥厚し縦位に刻み。口縁部は、斜位の沈線施文。	加曾利B 2
13	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 φ1mm の小石	黒褐色	普通	波状口縁。沈線による横帯区画。区画内に斜線が充填される。	加曾利B 2
14	39・43	鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	明赤褐色	不良	沈線による弧線を描く。磨り消し縄文。	加曾利B 2
15	39・43	鉢	胴部破片	粗砂 白色粒	明赤褐色	普通	沈線による横帯文。磨り消し縄文。縄文原体L R横。	加曾利B 1
16	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 黄色・ 黒色粒	橙	普通	幅12~14mmの粘土層を口縁部と頸部に貼り付け廻らす。粘土層には、指頭による押圧施文。	加曾利B
17	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂	灰褐色	良好	口縁部に幅20mmの指頭圧痕を持つ突帯。胴部は斜め方向のミガキ整形。	加曾利B
18	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい、橙	普通	幅12~14mmの粘土層を口縁部と頸部に貼り付け廻らす。粘土層には、指頭による押圧施文。	加曾利B
19	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 黄色粒	にぶい、黄 橙	普通	口縁部に凹凸を持つ隆線を貼付。	加曾利B
20	39・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 多い	灰褐色	普通	波状口縁頂部の突起。波頂部には沈線による対弧文。	加曾利B 2
21	39・43	深鉢	口縁部-胴部	粗砂 細かい 色粒が多い	黒褐色	不良	口縁部に「8」の字状の粘土層による突起。太さ3mmの沈線で口縁部文様を区画する。区画内は磨り消し縄文。頸部以下は縄文原体L R横位。	加曾利B
22	40・43	浅鉢	口縁部破片	細砂	灰褐色	良好	口縁部に太い沈線で楕円区画を持つ。区画縁の上部に縄文施文。胴部は横位のミガキ整形。縄文原体L R横位。	加曾利B
23	40・43	鉢	口縁部破片	粗砂 黒色粒	灰白	不良	口縁部に対弧文と横帯の線は曲線になりレンズ状の横帯文になる。	加曾利B 2
24	40・43	浅鉢	ほぼ完形	細砂 細かい 黒色粒	赤灰	普通	口縁部がゆるく波状になる。太さ3mmの沈線による入組状の文様。磨り消し縄文。縄文原体L R横位。	加曾利B 2
25	40・43	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒 多い	灰褐色	普通	口縁部沈線による弧線で楕円区画。頸部に平行沈線を横位に廻らし、沈線間に刺突を加える。	加曾利B 2
26	40・43	深鉢	底部	粗砂 白色粒 多い	褐色	普通	無文。	加曾利B
27	40・43	深鉢	胴部-底部	砂粒 φ1mm の小石 白色 粒	灰褐色	普通	内外面に煤付着。胴部上半にわずかに縄文施文が見られる。縄文原体L R横位。	後期
28	40・43	深鉢	底部破片	細砂 白色粒	にぶい、橙	普通	厚減多い。底面副代痕。	加曾利B
29	40・43	深鉢	底部破片	粗砂 白色粒 多い	暗褐色	普通	表面剥落多く文様不明。底部に副代痕。	後期
30	41・44	土製 円盤	完形	細砂 黒色粒	淡橙	普通	外縁打ち欠き成形後磨る。	後期
31	41・44	耳栓	完形	細砂 白色粒	にぶい、赤 橙	普通	外側のφ1.8cm、1.6cm、括れた部分のφ1.3cm、高さ1.3cm。手摺ね状に作られており、外面の成形は不明。	後期
32	41・44	耳栓	完形	細砂 黒色 白色粒	橙	良好	外側のφ4.6cm、括れた部分のφ4.5cm、中心部に4mmの穿孔を持つ。	後期
33	41・44	鉢	完形	細砂	黄橙	良好	側縁と、中央に十字形に紐を通す凹みが見られる。	後期



第4節 Ⅲ区の調査

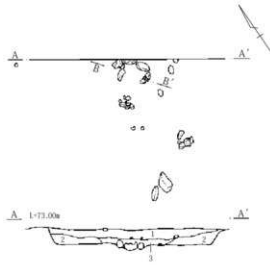


第35図 Ⅲ区1号・2号・3号・4号・5号道横出土土器



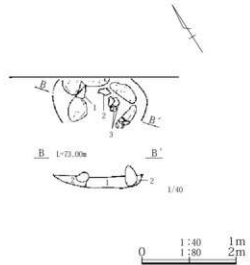
第36図 Ⅲ区5号遺構出土土器

第4節 Ⅲ区の調査



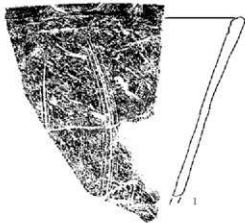
Ⅲ区 1号住居

- 1 暗褐色土 やや粘質、酸化鉄、 $\phi$ 5~10mの礫含む。  
縄文土器片、白色軽石多い。
- 2 褐色土 酸化鉄多い。
- 3 黒褐色土 やや粘質、炭化物多い。

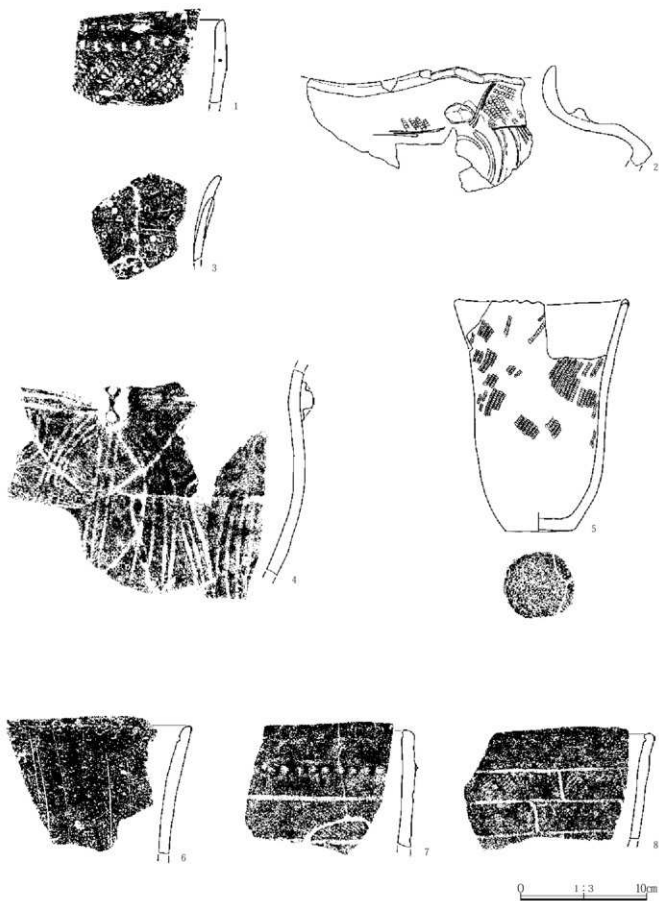


Ⅲ

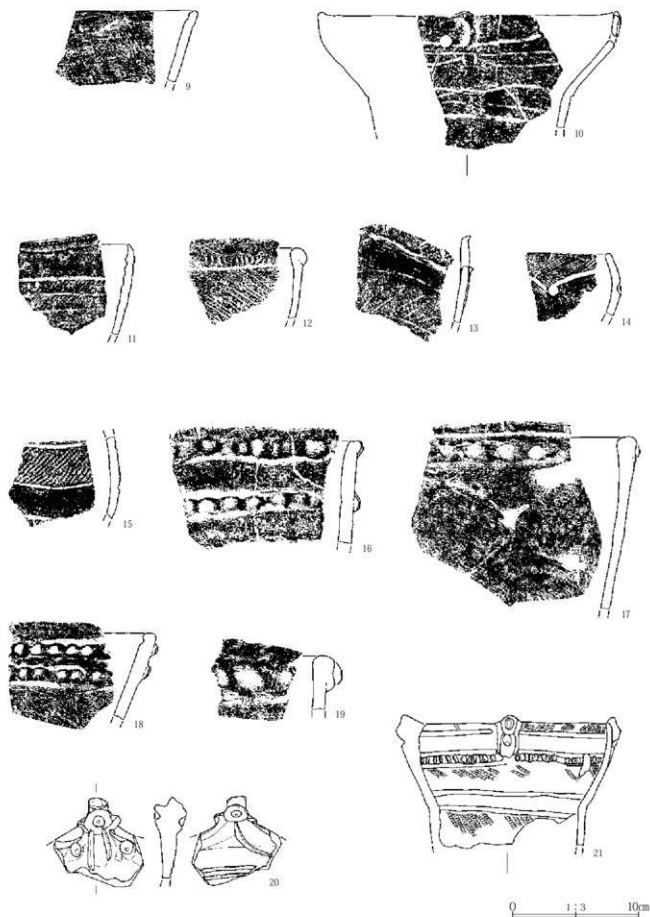
- 1 黒褐色土 やや粘質、小礫含む。炭化物多い。
- 2 黒褐色土 やや粘質、小礫、炭化物含む。



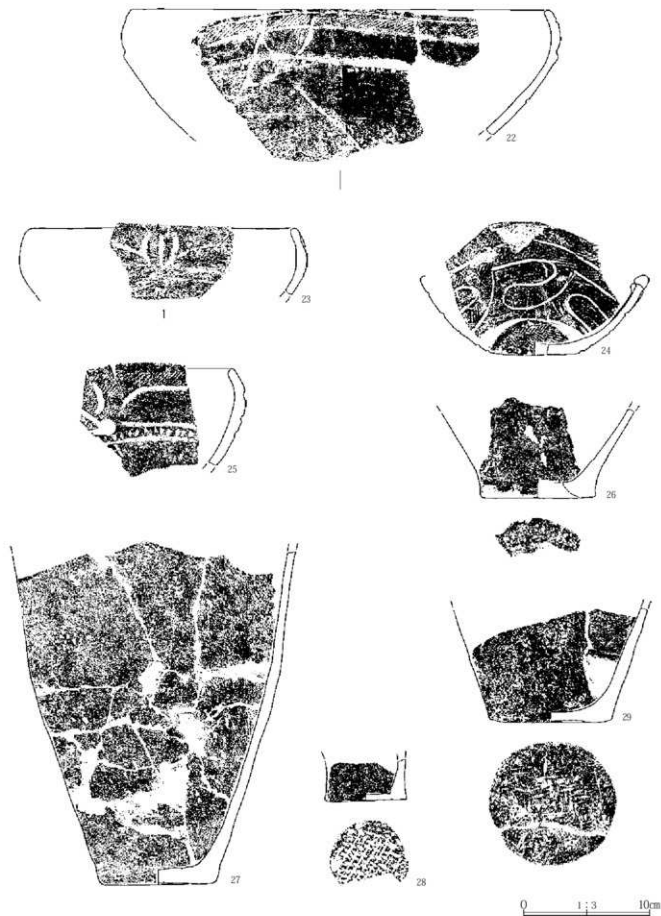
第37図 Ⅲ区1号住居・出土土器



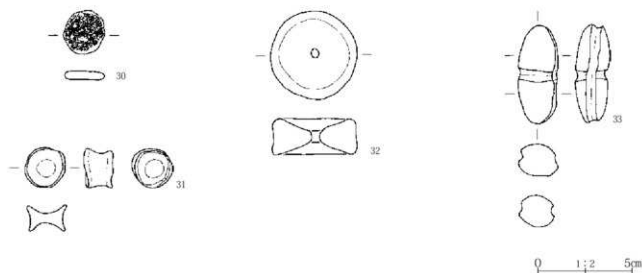
第38図 III区遺構外出土土器(1)



第39図 Ⅲ区遺構外出土土器(2)



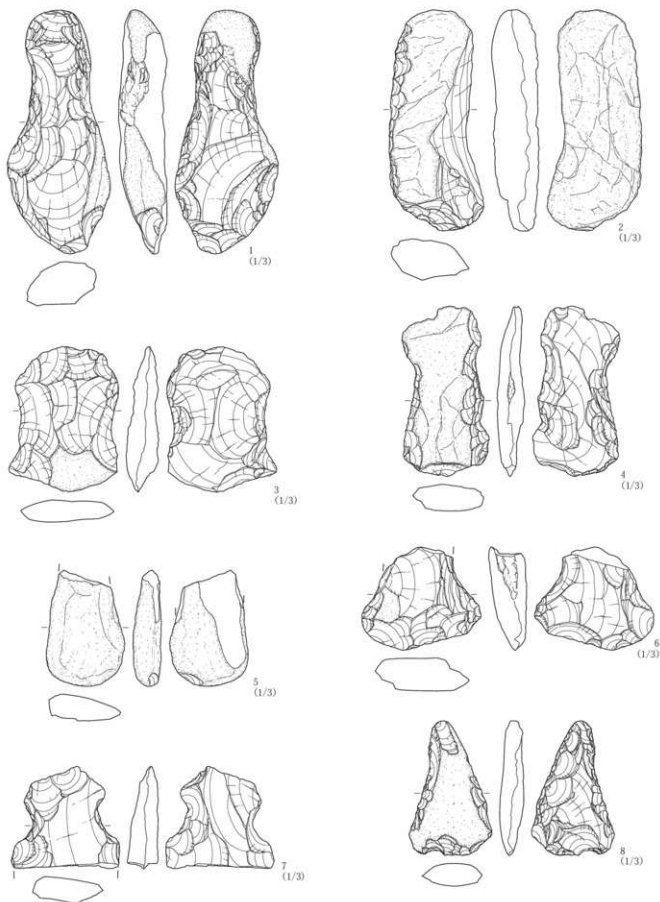
第40図 III区遺構外出土土器(3)



第41図 Ⅲ区遺構外出土遺物

Ⅲ区 石器観察表

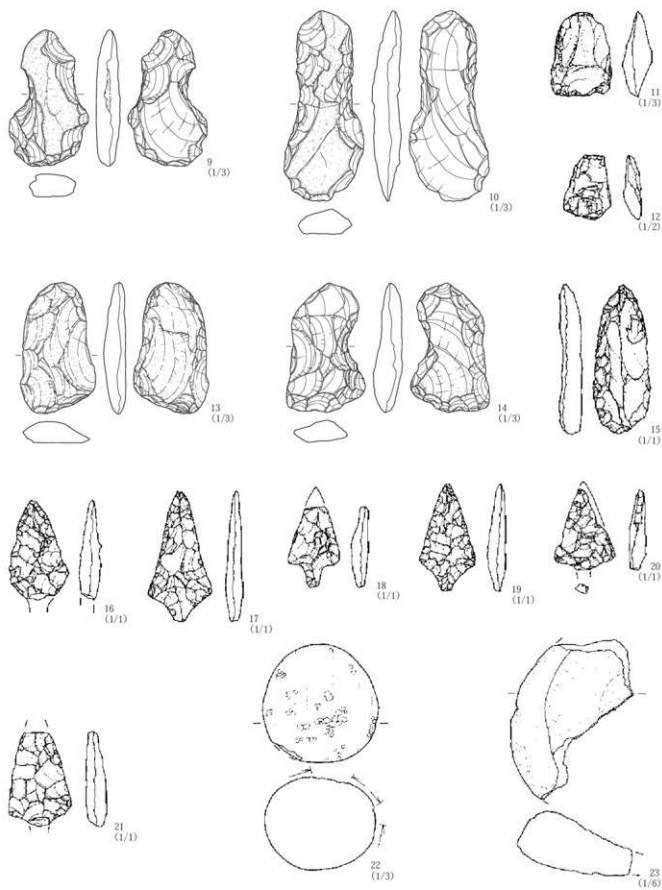
No.	図・Pl.	器種	形態	出土位置	石材	長さ	幅	重量	備考
1	42・44	打製石斧	分銅型c	030-875	ホルンフェルス	19.3	8.2	593.0	完成状態。完形。対部再生。装着部の打痕顕著。
2	42・44	打製石斧	不明	055-850	ホルンフェルス	17.5	7.5	633.0	厚い大形剥片の端部を粗く加工。
3	42・44	打製石斧	分銅型a	050-850溝	ホルンフェルス	11.5	8.7	261.0	両側縁を浅く抉る。未製品。
4	42・44	打製石斧	分銅型b	080-835溝	ホルンフェルス	13.5	6.9	207.0	挟り部を除く各辺の加工量は少ない。未製品。
5	42・44	打製石斧	分銅型a	025-870	ホルンフェルス	9.3	6.2	159.0	未製品? 風化して詳細不明。
6	42・44	打製石斧	分銅型b	47号溝	ホルンフェルス	8.2	9.4	224.0	下半を欠損。投擲痕は明らか。
7	42・44	打製石斧	分銅型c	060-860	ホルンフェルス	8.1	8.5	155.0	完成状態? 下半部を欠く。両側縁を浅く抉る。
8	42・44	打製石斧	扇型	025-860	黑色頁岩	10.7	6.6	123.0	側縁加工は距向的。エッジは器体中央にある。
9	43・44	打製石斧	分銅型a	050-875	ホルンフェルス	10.8	6.3	139.0	完成状態。完形。対部リダクション。
10	43・44	打製石斧	分銅型c	表採	ホルンフェルス	15.1	6.3	217.0	完成状態。完形。対部は未加工縁辺。
11	43・44	片打石斧	16溝	16溝	ホルンフェルス	6.7	4.8	65.2	直線状の対部を作出。側縁加工は距向的。
12	43・44	楔形石斧		050-85	チャート	3.4	2.6	6.9	背面側の上下両端に対向する剝離面が形成。
13	43・44	打製石斧	短冊型	050-855	ホルンフェルス	10.4	6.0	128.0	完成状態。完形。風化が激しく、磨耗痕等是不明。
14	43・44	打製石斧	分銅型a	045-850	ホルンフェルス	10.2	6.3	148.0	完成状態。完形。対部再生。左辺の加工は低溝。
15	43・44	削器	縦長	035-885	チャート	4.0	1.5	3.9	側縁加工を施し、打面側に尖頭部を作出。
16	43・44	石鏃	凸基有	47号溝	チャート	2.3	1.6	1.9	完成状態。基本欠損。
17	43・44	石鏃	凸基有	025-880	チャート	3.5	1.7	2.0	完成状態。完形。
18	43・44	石鏃	凸基有	46号溝	ホルンフェルス	2.1	1.3	1.2	完成状態。先端破損。
19	43・44	石鏃	凸基有	025-880	チャート	2.8	1.5	1.6	完成状態。完形。
20	43・44	石鏃	凸基有	47号溝	チャート	2.2	1.6	1.2	完成状態。先端は棒状剝離縁に斜位破損。製作時の破損?
21	43・44	石鏃	凸基有	49号溝	黑色頁岩	2.5	1.6	2.1	完成状態。裏面先端は衝撃剝離縁様。
22	43・44	磨石	円盤	050-85	粗粒輝石安山岩	9.4	9.2	927.0	磨耗が著しく、良く使い込んでいる。
23	43・44	石皿	有縁	Ⅲ区b	粗粒輝石安山岩	25.8	19.6	3650.0	使用面には打痕が残る。裏面に孔を穿つ。



第42図 III区出土石器(1)



第4節 Ⅲ区の調査



第43図 Ⅲ区出土石器(2)

## 第5節 IV区の調査

### 1 IV区検出された遺構

IV区は、現地表標高が73m程で、調査区の北西から南東に緩やかに傾斜している。本地区は、平成14年度・15年度に調査を行った。用地の関係から南北に二分割し平成14年度は、南側部分と縄文時代面を残して終了した。15年度に北側部分と縄文時代面の調査を行った。調査区の大半が縄文の文化層面まで削平されており、北東寄りにAs-B軽石層の堆積が僅かに見られるが、表土からの耕作により攪乱されている状況であった。

縄文時代の遺構は、調査区の大半が遺構確認面まで、近現代の耕作などにより削平されていたため、これらの堆積土を除去した面から確認された。縄文時代の遺構が形成された層は、基本土層8層（7図）とした、黒色系統の上に礫層が混じる層で、本調査区の北側に多く確認されている。調査区全体が、南側に傾斜しており、調査区の中程から南では、礫層が急激に下降する。そのため、縄文時代の遺構は、この傾斜変換点より北側から検出されている。縄文時代に遺構が形成された層は、地山に混じる礫と人為的に置かれた礫との弁別が難しいものとなっている。また、縄文時代後期中葉以降、住居などの掘り込みが浅くなっていくため、残存状態が悪く、遺構の確認・認定が難しいものが大半であった。そういった中で、礫の配置状況が、定型的で人為的と判断できるものを中心に遺構と認定した。その結果検出された遺構は、縄文時代の住居・土坑・墓・配石遺構・溝等である。

検出された遺構は、縄文時代の住居6軒、墓塚・土坑6基、配石遺構9箇所、その他3基等である。

検出された遺物は、土器が、深鉢や注口土器、浅鉢、縄文時代後期の瓶之内式、加曾利B2式が主体となっている。その他、土偶、耳飾りなどの土製品が出土している。石器は、石皿、多孔石、凹石、砥石、石鎌、打製石斧、石錐等や石棒が出土している。

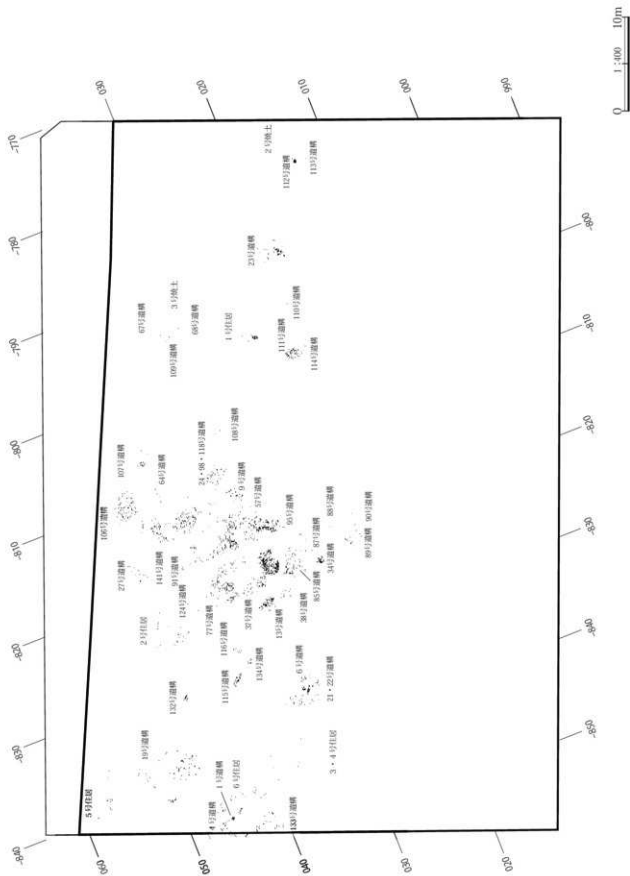
#### 1号住居（第45・70・71図，PL.12・45・46）

**位置** 022-797グリッド。調査区の東側にある。**形状・規模** 黒色土層中に遺構があり、住居全体の検出確認が

困難であった。そのため、炉部分のみ確認でき、住居全体の形状や規模については不明である。**面積** 計測不能。**方位** 炉の主軸はN-48°-E。**重複** 不明。**埋没土** 調査時の記録無し。**柱穴** 不明。**炉** やや扁平で細長い礫による石囲炉。炉の規模は長軸0.8m、短軸0.6m。炉内底面には、70図1の深鉢土器が敷き詰められていた。炉内には、炭化物を含む土が堆積していた。**周溝** 確認出来なかった。**床面** 暗褐色土中に床面があり、硬化面などはっきりとした床面は検出されなかった。**出土遺物** 遺物は、炉周辺から多く出土している。土器は、加曾利B2式土器を主体としている。炉内に敷かれていた土器（70図1）以外は、小破片が多く炉周辺から出土している。これらの中から文様の分かるものを図示した。石器は、石皿の破片、打製石斧、楔形石器、剥片など10点出土している。そのうち3点を図示した。その他、土偶の顔部分（71図17）、礫などが出土している。**所見** 住居の全体形状は、把握できなかったものであるが、炉と遺物の状況から住居と考えられる。遺物は、炉を中心とした所から出土しており、これらの土器が加曾利B2式であることから、当該期の住居と考えられる。

#### 2号住居（第45・73~75図，PL.12・46・47）

**位置** 041-821グリッド。調査区の北西部にあり、配石遺構群の西側に位置する。**形状・規模** 住居の掘り込みは確認出来ず、炉とその周辺の散石の状況から住居と判断した。そのため形状・規模や不明である。**面積** 計測不能。**方位** 炉の主軸はN-44°-W。**重複** 不明。**埋没土** 調査時の記録無し。**柱穴** 不明。**炉** 扁平で細長い角礫や石棒・石皿破片による石囲炉。炉の規模は、長軸1.2m、短軸0.8mを測る。炉石は火熱を受けて割れているものもある。炉覆土は、暗褐色土を主体に黄褐色ブロックが混じる。覆土中に土器小片が混入している。**周溝** 確認出来なかった。**床面** 床面は、暗褐色土中にあり硬化面などはっきりとした痕跡が検出できなかった。炉周辺に、小礫が見られることから敷石住居の可能性も考えられる。**出土遺物** 炉周辺を中心として加曾利B2式の土器小片が出土している。文様を持つ土器片は少なく、図示したものが大半である。石器は、炉石として使用されていた石棒・石皿。その他炉周辺からは、打製石斧、石鎌、砥石、多孔石など10点出土している。



第44図 IV区全体図

**所見** 土器は、炉を中心として出土しており、これらの土器が加曾利B2式であることから、後期中葉の住居と考えられる。炉周辺には、敷石が見られ、直線的に並ぶ礎もあることから、方形の敷石住居の可能性も考えられる。炉を作る石材に、石棒(75図8)や石皿(75図10)を転用しているが、石棒に接するように扁平な円形の礎を置いており、これらを含めて考えると、炉に対して、特別な意味を持って作られていると考えられる。

### 3・4号住居(第46・76・77図, PL.12・13・48)

**位置** 032-841グリッド。調査区の西側、6号住居の南にある。**形状・規模** 住居の掘り込みは確認出来ず、炉とその周辺の敷石の状況から住居と判断した。遺構の東西が、調査トレンチによって壊されている。そのため形状・規模は不明である。調査時に3・4号住居と命名しているが、図面・写真からは、住居の重複が確認出来ず、確認されている炉も1基であることから、1軒の住居と思われる。**面積** 計測不能。**方位** 炉の主軸はN-28°-E。**重複** 不明。**埋没土** 暗褐色・黒褐色の小礫が混じる粘性を持つ土が、主体となって堆積している。自然埋没と考えられる。**柱穴** 不明。**炉** 丸味を帯びた細長い河原石等8個を使用した石囲炉。炉石の一つに多孔石を使用している。多孔石の対面には、やや細長い礎が置かれており、石棒を意識していると思われる。炉の規模は、一辺約0.6mを測る方形を呈する。炉の覆土も住居と同様に、暗褐色・黒褐色の粘性を持つ土が堆積している。**周溝** 確認出来なかった。**床面** 床面は、暗褐色土中にあり、硬化面などはっきりした痕跡が検出できなかった。炉から1.2m程離れた所に敷石状のものが見られた。敷石住居の可能性も考えられる。**出土遺物** 遺物は、炉周辺から小片が多く出土している。土器は、加曾利B2式を主体としているが、多くは小片で、文様などが分かるものは少なく図示したものが大半である。石器は、石鎌、石錐、打製石斧、多孔石(77図12)、石皿(77図13)などが出土。14点中13点図示した。**所見** 出土遺物から加曾利B2式期の住居と考えられる。炉を中心にして、壁際に敷石を持つ住居である。

### 5号住居(第47・78図, PL.13・48)

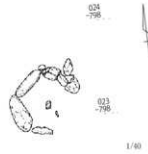
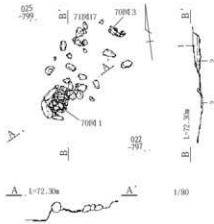
**位置** 054-834グリッド。調査区の北西隅、19号遺構の北側にある。**形状・規模** 住居の掘り込みは確認出来ず、炉とその周辺の状況から住居と判断した。北側は、

調査区域外で、南側は、調査時のトレンチにより壊されている。そのため、形状・規模は不明である。**面積** 計測不能。**方位** 炉の主軸はN-52°-E。**重複** 19号遺構と南側で接しており、調査トレンチによって壊されているため、確定できないが、重複している可能性がある。**埋没土** 褐色土・暗褐色土の小礫を含む粘性を持つ土が、主体となって堆積している。自然埋没と考えられる。**柱穴** 検出されなかった。**炉** 丸味を帯びた長さ30~40cmの扁平で細長い礎を4個と20cmの礎2個使用した石囲炉。炉石の一部は、火熱を受けて表面が剥離したものもある。炉の規模は、一辺約0.8mを測り、西側が飛び出す五角形を呈する。炉の覆土も住居と同様に、焼土を含む暗褐色・黒褐色の粘性を持つ土が堆積していた。**周溝** 確認出来なかった。**床面** 床面は、暗褐色土中にあり、硬化面などはっきりした痕跡が、検出できなかった。炉から西へ2m程離れた所に立石状のものが見られた。住居内施設として炉と関連するものなのか、調査時には検証できなかった。**出土遺物** 遺物の出土量は少なく、加曾利B2式土器の小片が僅かに見られた。図示したものがその大半である。石器は、多孔石(78図5)が炉の近くから検出されている。**所見** 出土遺物から加曾利B2式期の住居と考えられる。立石との関連については、不明である。

### 6号住居(第47・78図, PL.13・48)

**位置** 040-842グリッド。調査区西側、19号遺構と3・4号住居の間にある。**形状・規模** 住居の掘り込みは、確認出来なかった。敷石があることから、長方形の敷石住居と判断した。南北5.4m、東西4.3mを測る。遺構の中央南北方向に調査トレンチ、東西に暗渠が入り住居全体を十字形に壊している。**面積** 現況推定で23.2㎡。**方位** N-0°。**重複** 不明。**埋没土** 褐色土・暗褐色土の粘性を持つ土が主体となって堆積している。自然埋没と考えられる。**柱穴** 検出されなかった。**炉** 検出されなかった。**周溝** 検出されなかった。**床面** 住居の壁際に敷石が認められる。敷石の内側は、暗褐色の粘質土を主体とする土で硬化面は確認出来なかった。**出土遺物** 遺物の出土量は少ない。土器は、加曾利B2式土器の小片が僅かに見られた。石器は、石鎌や磨製石斧、剥片、石皿が出土している。**所見** 出土遺物の状況と敷石の状況から、加曾利B2式期の住居遺構と思わ

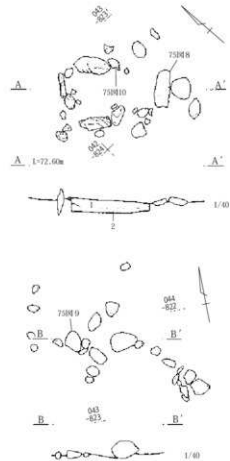
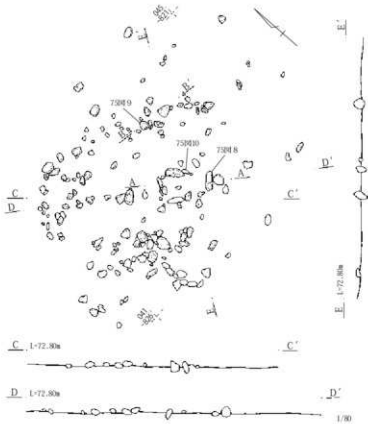
1号住居



IV区1号住居

- 1 暗褐色土 粘質、炭化物含む。
- 2 黒褐色土 炭化物多く含む。

2号住居

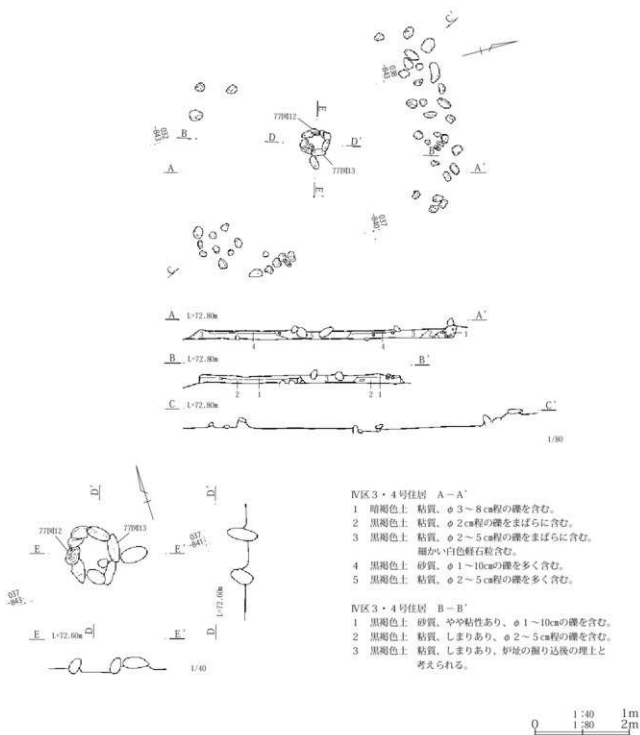


IV区2号住居

- 1 明褐色土 粘性強い、炭化物含む。
- 2 暗褐色土 粘性強い、焼土粒、炭化物多い。

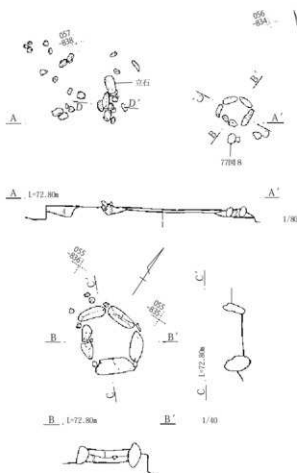


第45図 IV区1号・2号住居



第46図 IV区3号・4号住居

5号住居

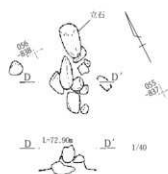


IV区5号住居

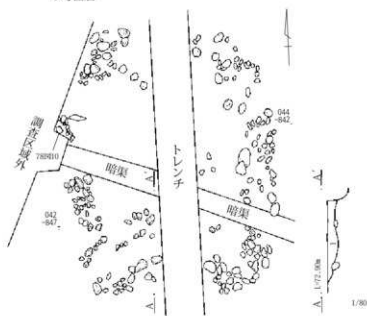
- 1 褐色土 粘質、白色鉱物多く含む。
- 2 暗褐色土 粘質、焼土散在、白色鉱物少量含む。
- 3 黒褐色土 粘質、φ10~20cmの礫を含む。風倒木根。
- 4 黒褐色土 粘質、焼土散在。

IV区5号住居 切

- 1 暗褐色土 やや砂質、白色粒多く含む、焼土散在。
- 2 黒褐色土 粘性あり、よくしまる、砂粒少量含む。

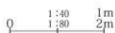


6号住居



IV区6号住居

- 1 黒色土 黄褐色ブロック少量含む。  
φ3~5cmの礫多く含む。



第47図 IV区5号・6号住居

れる。

#### その他の配石遺構

本区の調査では、遺物が出土した時点で機械的に番号を割り当て「遺構」とした。そのため、本来遺構でないものにも遺構番号が付され、遺構の種類や性格を表しているものではない。また、調査時点で遺構の種類や性格については、判断されていなかった。以下に説明する遺構は、整理時点において図面・写真などから遺構の種類・性格などを判断して、遺構の種類別に分けて説明するものである。

#### 43号遺構 (第48・84図, PL.16・52)

**位置** 034-814グリッド。調査区のほぼ中央、44・100・120号遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 長軸3.1m、短軸2.2m。10~20cm程の礫の短径面を接続させ、楕円形に置いている。遺構の南西側では、礫が二列になる。北側では、礫を密集させている。遺構内部は、敷石は認められなかった。配石周辺や内部に掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 図示した土器は、覆土中から出土した加曾利B2式鉢口縁破片である。その他、土器の小片が数点出土している。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 45号遺構 (第48・112図, PL.16・65・66)

**位置** 036-817グリッド。調査区のほぼ中央、配石遺構群が密集している所にある。44・131号遺構などと接している。**方位** N-8°-W。**形状・規模** 長軸1.1m、短軸1.1m。10~30cm程の礫を方形に置いている。敷石は、不規則に置かれている。敷石内部や周辺からは、掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 土器の小片が数点出土しているが、図示出来るものはない。本遺構の配石に転用された台石、多孔石が出土している。**所見** 遺構の検出状況や周辺の配石の状況から、加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 44号遺構 (第48・84図, PL.16・52)

**位置** 035-816グリッド。調査区のほぼ中央、配石遺構群が密集している所にあり、43・45遺構などと接している。**方位** N-32°-W。**形状・規模** 長軸2m、短軸1.3m。10~20cm程の礫を長方形に置いているが、部分的に抜き取られている。礫は、短径面を接続させるように置いている。遺構内部は、敷石は認められなかつ

た。配石周辺や内部に掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器の鉢小片が、数点出土している。文様が確認出来る1点を図示した。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 85号遺構 (第48図, PL.18)

**位置** 027-823グリッド。調査区中央南側、63・87号遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 長軸1.5m以上、短軸1.2m。遺構の西側を調査トレンチによって壊されている。φ10~20cm程の礫を長径面を接続させるように置いている。方形に置いているが、部分的に抜き取られている。内部に敷石は認められなかった。掘り方なども検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B式土器の小片が出土しているが図示出来るものはない。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 86号遺構 (第49図)

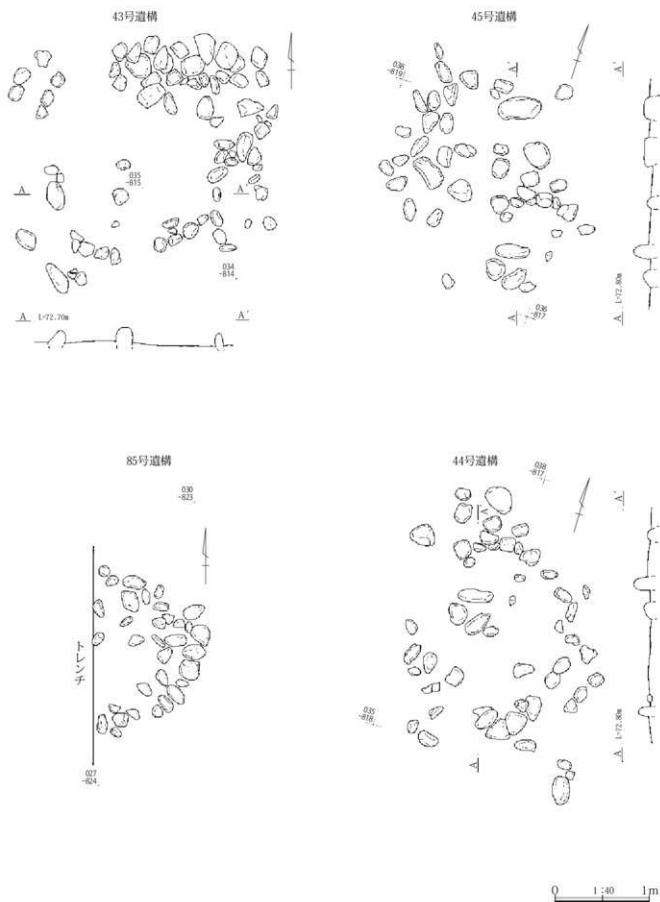
**位置** 025-820グリッド。調査区中央南側、配石遺構群の南西端にある。87号遺構と重複している。**方位** N-85°-W。**形状・規模** 長軸1.8m、短軸1.5m。ほぼ円形である。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長方形に置いている。部分的に抜き取られている。内部に敷石は認められなかった。掘り方なども検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器小破片出土しているが図示出来るものはない。**所見** 87号遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土出土の遺物と配石の形状から加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 87号遺構 (第49図)

**位置** 025-820グリッド。調査区中央南側、配石遺構群の南西端にある。86号遺構と重複している。**方位** N-85°-W。**形状・規模** 長軸2m、短軸1.8m。ほぼ円形である。10~20cm程の礫を円形に置いているが、部分的に抜き取られている。内部に敷石は認められなかった。掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 86号遺構と重複しているが、新旧関係は不明である。覆土出土の遺物と配石の形状から加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

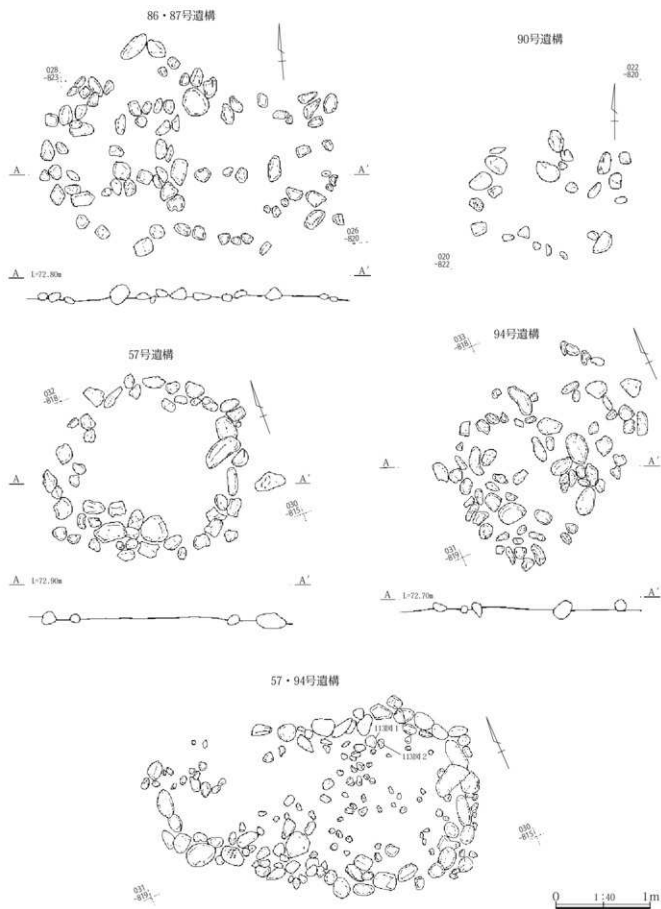
#### 90号遺構 (49図, PL.19)





第48図 IV区43号・44号・45号・85号遺構

第2章 検出された遺構と遺物



第49図 IV区57号・86号・87号・90号・94号遺構

**位置** 020-820グリッド。調査区中程南端にある。89号遺構と接している。**方位** N-85°-W。**形状・規模** 長軸1.7m、短軸1.1m。長方形を呈する。10~20cm程の礫を長方形に置いているが、部分的に抜き取られている。内部に敷石は認められなかった。掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 57号遺構 (第49・113図, PL.17・66)

**位置** 030-815グリッド。調査区のほぼ中央南側、58・61号遺構に接し、94号遺構と重複している。**方位** N-37°-W。**形状・規模** 長軸1.9m、短軸1.9m。隅丸方形を呈する。10~20cmの礫の短径面を接続させて、正方形に置いている。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部に敷石は認められなかった。掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。石器の出土は多く、裏面多孔石の石皿1点、多孔石2点が出土している。配石に転用されたものもある。**所見** 94号遺構と重複しているが、新旧関係は、把握できなかった。覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石墓の可能性はある。

#### 94号遺構 (第49図)

**位置** 030-815グリッド。調査区配石遺構群のほぼ中央57号遺構と重複している。**方位** N-42°-W。**形状・規模** 長軸2.1m、短軸1.6m。長方形を呈する。10~20cm程の礫を長方形に置いている。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、中間を仕切るように石列がある。内部に敷石は認められなかった。掘り方などは、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 57号遺構と重複しているが、新旧関係は、把握できなかった。覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石墓の可能性はある。

#### 9号遺構 (第50・80図, PL.14・50)

**位置** 030-813グリッド。調査区中程配石遺構群の東南にある。**方位** N-50°-E。**形状・規模** 長軸2.0m、短軸0.6m。長方形を呈する。10~20cm程の細長い礫の短径面を接続させ、長方形に置いている。配石の

一部で二重になる。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部に敷石や掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器深鉢片が出土している。その他、図示出来ない小片が数点出土した。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 77号遺構 (第50図, PL.18)

**位置** 037-822グリッド。調査区中程、配石遺構群の北西にある。**方位** N-60°-E。**形状・規模** 長軸1.6m、短軸0.9m。長方形を呈する。10~20cm程の丸味を持った礫を、長方形に置いている。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部に敷石は認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 38号遺構 (第50図, PL.16)

**位置** 033-815グリッド。配石遺構群の中程にあり、123・130号遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 径1.9m。10~20cm程の細長い礫の短径面を接続させ、円形に置いている。南側部分で、石列が二重になり厚くなる。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部のやや西側寄りに細長い礫が置かれている。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石遺構と考えられる。

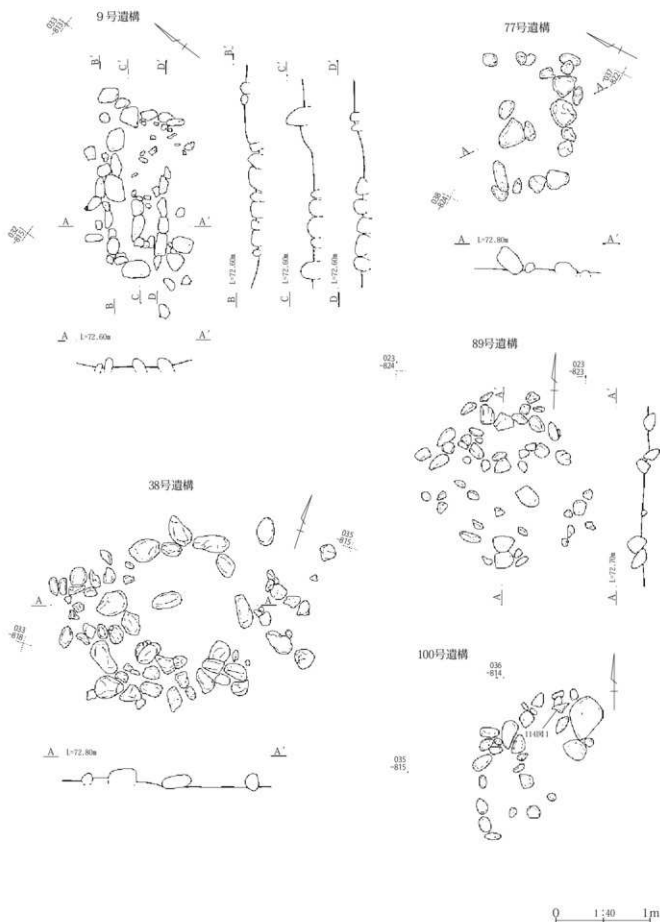
#### 89号遺構 (第50図, PL.19)

**位置** 020-822グリッド。配石遺構群の西南にあり、90号遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 径1.9m。10~20cm程の礫を、ほぼ円形に置いている。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曽利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 覆土出土の遺物と配石の形状から、加曽利B2式期の配石遺構と考えられる。

#### 100号遺構 (第50・114図, PL.19・66)

**位置** 034-812グリッド。配石遺構群の東寄り、121号遺

第2章 検出された遺構と遺物



第50図 IV区9号・38号・77号・89号・100号遺構

構に接している。方位 N-0°。形状・規模 長軸1.2m、短軸0.7mに、10~20cmの礫の短径面を連接させ、長方形に二つ並べた形にしている。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られるが、人為的なものではない。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。石皿の欠損品(114図1)が、配石に混じて出土した。所見 長方形の区画が重複した状況と考えられるが、セクションなどを測っていなかったため詳細は不明である。覆土出土の遺物と配石の形状から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

#### 61号遺構(第51図, PL.17)

位置 028-817グリッド。配石遺構群中程南側、95・136号遺構に接している。方位 N-57°-E。形状・規模 長軸1.9m、短軸1.5mに、東側縁に40cm程の方形の大きな礫は、長径面を遺構の内側に向けて置き、周囲を20cm程の細長い礫を埋め込むようにして、長方形を作る。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる。掘り込みなどの施設は検出されなかった。出土遺物 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片が数点出土している。小片のため図示出来るものはない。所見 覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期の長方形の区画が重複した配石遺構と考えられる。

#### 59号遺構(第51図)

位置 035-818グリッド。配石遺構群中程北側、45・131号遺構に接している。方位 N-22°-E。形状・規模 長軸2.2m、短軸2.0m。10~20cm程の細長い礫の短径面を連接させ、ほぼ正方形に囲う。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られるが、人為的なものではない。遺構の中央部を調査トレンチにより壊されている。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。所見 礫により長方形に囲った配石遺構と考えられるが、性格などは不明である。覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

#### 95号遺構(第51・86図, PL.19・53)

位置 026-818グリッド。配石遺構群の中程南寄り、61号遺構に接している。方位 N-38°-E。形状・規模 長軸1.4m、短軸0.9m。10~20cm程の細長い礫によ

り長方形に囲う。北西隅には、40cmの大きな礫が置かれる。遺構の南西部を調査トレンチにより壊されているため、南側部分については、不明である。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、掘り方などの施設は、認められなかった。出土遺物 覆土中から、加曾利B 2式土器破片が出土している。図示した土器は、文様・型式の分かるもので、これ以外に粗製土器の小片などが出土している。所見 長方形区画になる配石遺構と考えられる。覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

#### 118号遺構(第52・85図, PL.21・53)

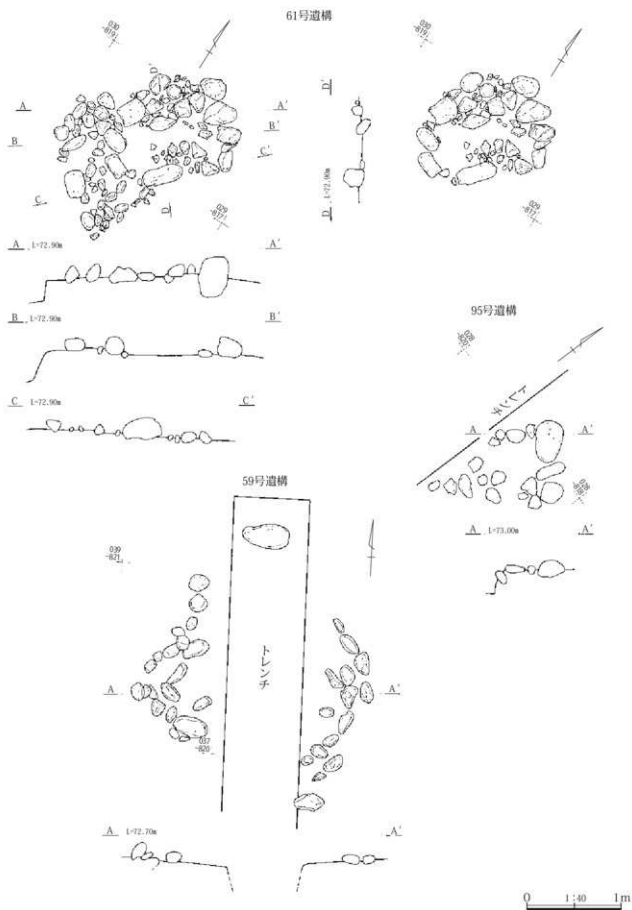
位置 031-810グリッド。配石遺構群中央東寄りに24号遺構と接している。方位 N-8°-W。形状・規模 長軸2.5m、短軸1.2m。10~20cm程の細長い礫により短径面を連接させ、長方形に囲う。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 北側の覆土中から、加曾利B 2式土器の小形鉢と多孔石が出土している。他に配石に混じて、ソロバン玉形になる土器の破片などが出土している。所見 形状から、配石墓の可能性が高い。本遺構の周辺には、同様の形状の配石遺構が複数検出されることから、配石墓群を作っている可能性が考えられる。覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期のものである。

#### 120号遺構(第52図, PL.21・22)

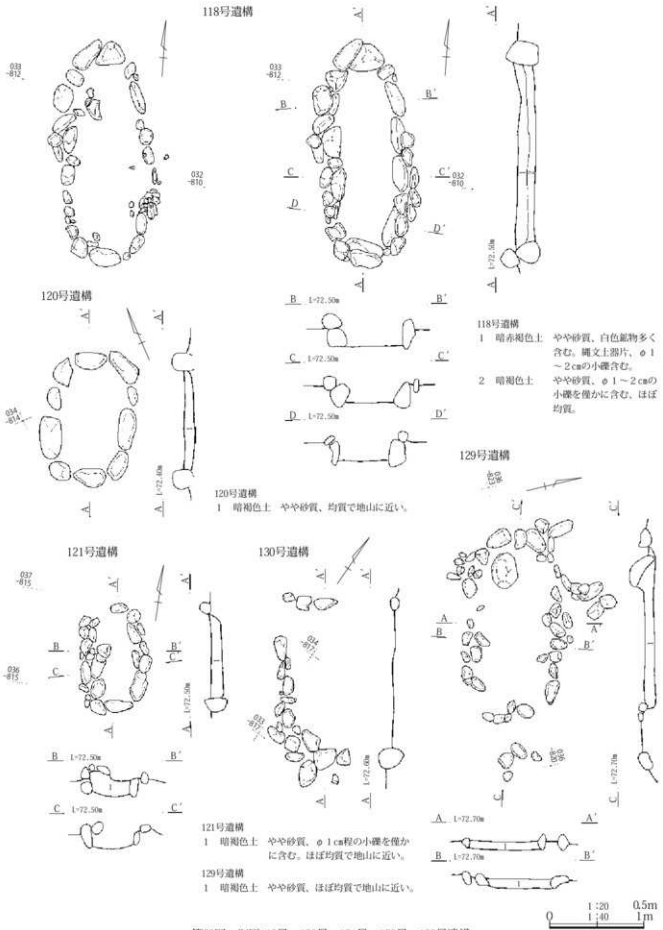
位置 033-813グリッド。方位 N-28°-E。形状・規模 長軸0.7m、短軸0.4mと小振りである。20cm程の細長い礫の短径面を連接させ、長径面を遺構の内側に向け、長方形に囲う。遺構内には、敷石は、認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 覆土中から加曾利B 2式土器小片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 118号遺構に比べ小形であるが、形状から配石墓の可能性が高い。検出遺構面から、加曾利B 2式期と思われる。

#### 121号遺構(第52図, PL.22)

位置 036-813グリッド。配石遺構群中央東寄り、100号遺構の北側にある。方位 N-5°-W。形状・規模 長軸1.15m、短軸0.75m。20~30cm程の細長い礫の短径面を連接させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。長辺の一部には、礫が二重になる部分もあ



第51図 IV区59号・61号・95号遺構



第52図 IV区118号・120号・121号・129号・130号遺構

## 第2章 検出された遺構と遺物

る。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、敷石などは認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。 **出土遺物** 覆土中から加曾利B 2式土器小片が出土しているが、図示出来るものはない。

**所見** 118号遺構などに比べ小形であるが、形状から配石墓と考えられる。遺構検出面の状況や覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

### 130号遺構 (第52図, PL.24)

**位置** 033-816グリッド。配石遺構群のほぼ中央にあり、38号遺構と重複する。 **方位** N-35°-W。 **形状・規模** 長軸1.8m、短軸(0.7)m。20~30cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部には、敷石が認められなかった。東側の石組は、抜き取られており未検出である。掘り方などの施設は、検出されなかった。 **出土遺物** 覆土中から加曾利B 2式土器小片が出土しているが、図示出来るものはない。 **所見** 東側の石列が未検出であるが、残存状況などから、長方形になる配石墓と考えられる。遺構検出面の状況や覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

### 129号遺構 (第52図, PL.23・24)

**位置** 035-820グリッド。配石遺構群北西寄りにあり、48・81・125号遺構に接している。 **方位** N-75°-W。 **形状・規模** 長軸2.1m、短軸1.1m。20~30cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。北西隅に125号遺構が重複しているが、新旧関係は確認出来なかった。遺構内の西南隅に40×25cmの大きな礫が置かれていた。床面には、地山の小礫があるのみで敷石は認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。 **出土遺物** 覆土中から加曾利B 2式土器小片が出土しているが、図示出来るものはない。 **所見** 検出された状況や形状から、長方形の配石墓と考えられる。覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

### 122号遺構 (第53・85図, PL.22・53)

**位置** 030-816グリッド。配石遺構群の中央部93・94号遺構の間にある。 **方位** N-90°-E。 **形状・規模** 長軸2.25m、短軸1.5m。10~30cm程の細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方

形に囲う。南東側では、10cm程の小礫が多く認められるが、北西部にあるような側石は見られない。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、敷石は認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。

**出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器のソコパン玉形になる土器口縁部が出土している。その他に小片数点出土しているが、図示出来るものはない。 **所見** 本遺構の周辺には、57、58、84、94号遺構などが密集している。そのため、本遺構の一部がこれらの遺構によって改変されていると考えられ、残存状況から長方形の配石墓の可能性が高いと考えられる。遺構覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

### 125号遺構 (第53図, PL.23)

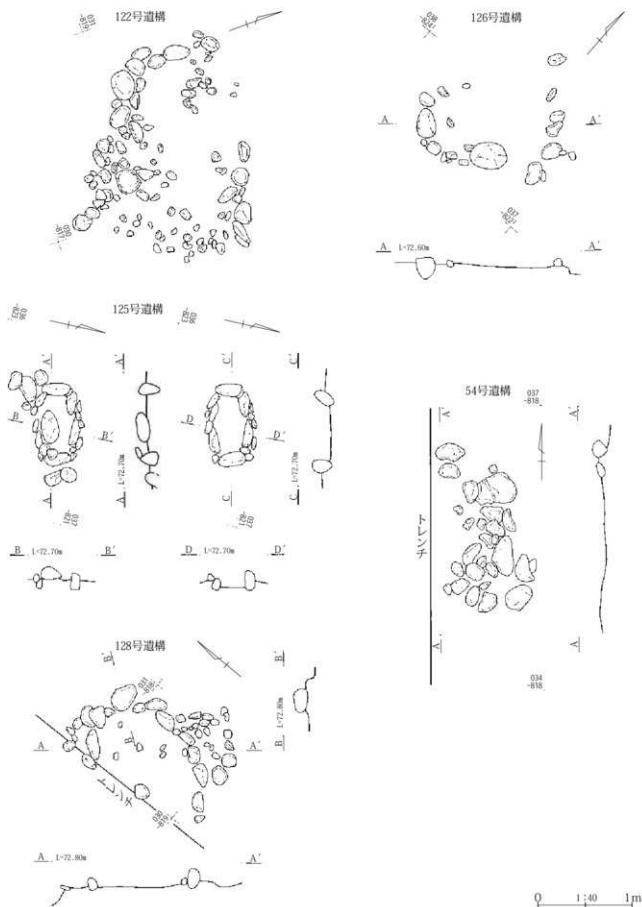
**位置** 036-821グリッド。配石遺構群の北西隅にあり、129号遺構と接している。 **方位** N-83°-E。 **形状・規模** 長軸0.85m、短軸0.5cm。20~30cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。本遺構の南東に129号遺構が接しているが、新旧関係は確認できなかった。遺構内北東部には、30×20cmの大きな礫を置いている。内面には、敷石は、認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。 **出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片が出土しているが、図示出来るものはない。 **所見** 検出された状況や形状から、長方形の配石墓と考えられる。覆土出土の遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

### 126遺構 (第53図, PL.23)

**位置** 037-822グリッド。配石遺構群の北西隅にあり、77・78号遺構と接している。 **方位** N-48°-E。 **形状・規模** 長軸1.5m、短軸0.8m。20~40cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。北側列の配石が欠けている。遺構内には、地山の礫が見られたほか、敷石は認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。 **出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片が出土しているが、図示出来るものはない。 **所見** 南側面に、長さ40cm程の大形礫が立石状に置いてある。北側面は、礫が抜けている部分があるが、全体に長方形を呈しており、配石墓の可能性が高いと考えられる。遺構確認面から、加曾利B 2式期と思われる。

### 54号遺構 (第53・112図, PL.66)





第53図 IV区54号・122号・125号・126号・128号遺構

## 第2章 検出された遺構と遺物

**位置** 035-818グリッド。**方位** 計測不可。**形状・規模** 本遺構の西側を調査トレンチにより壊されており、全体形は確認出来なかった。20~40cmの礫を複数列置き、方形に配していると思われる。遺構内の掘り込みも確認出来なかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。石器では、削器1点が出土している。**所見** 破壊されている部分が多く、全体形を把握できなかったが、礫が方形に置かれていることから加曾利B2式期の配石遺構と考えられる。

### 128号遺構 (第53・114図, PL.23・67)

**位置** 029-817グリッド。配石遺構群中程南寄りにあり、61・94・136号遺構に接している。**方位** N-49°-E。**形状・規模** 長軸(一)、短軸1.15m。東に61号遺構が接している。西側は、調査トレンチにより壊されている。20~30cmの礫の細長い礫の短径面を連接させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。遺構内は、地山にある小礫が部分的に見られる他、内部には敷石が認められなかった。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から加曾利B2式土器小破片が出土しているが、図示出来るものはない。配石に混じり多孔石が出土した。**所見** 配石の形状から、長方形の配石墓と考えられる。遺構検出状況から、加曾利B2式期と思われる。

### 124号遺構 (第54図, PL.23)

**位置** 038-822グリッド。配石遺構群の北東隅にある。**方位** N-48°-E。**形状・規模** 長軸1.95m、短軸0.84m。20~40cmの細長い礫を主軸方向に沿って置き、長方形に囲っている。東西の側辺の礫が、一部抜けている。遺構内には、敷石は認められなかった。掘り込みも浅く、礫の下面とほぼ同じ面である。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器の小破片数点が出土している。図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から、配石墓と考えられる。出土遺物はほとんど検出されていないが、遺構確認面や周辺から出土している土器から加曾利B2式期と思われる。

### 127号遺構 (第54図, PL.23)

**位置** 034-818グリッド。配石遺構群のほぼ中央にあり、92号遺構に接している。**方位** N-60°-W。形

**状・規模** 長軸2.25m、短軸1.1m。10~30cmの細長い礫の短径面を連接させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。遺構の北側3分の1は、調査トレンチより壊されている。地山にある小礫が部分的に見られる他、内部には敷石などは、認められなかった。掘り込みも浅く、礫の下面とほぼ同じ面である。南側辺中央部に30cmの大形の礫を置いている。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から、配石墓と考えられる。出土遺物はほとんど検出されていないが、遺構確認面や周辺から出土している土器から、加曾利B2式期と思われる。

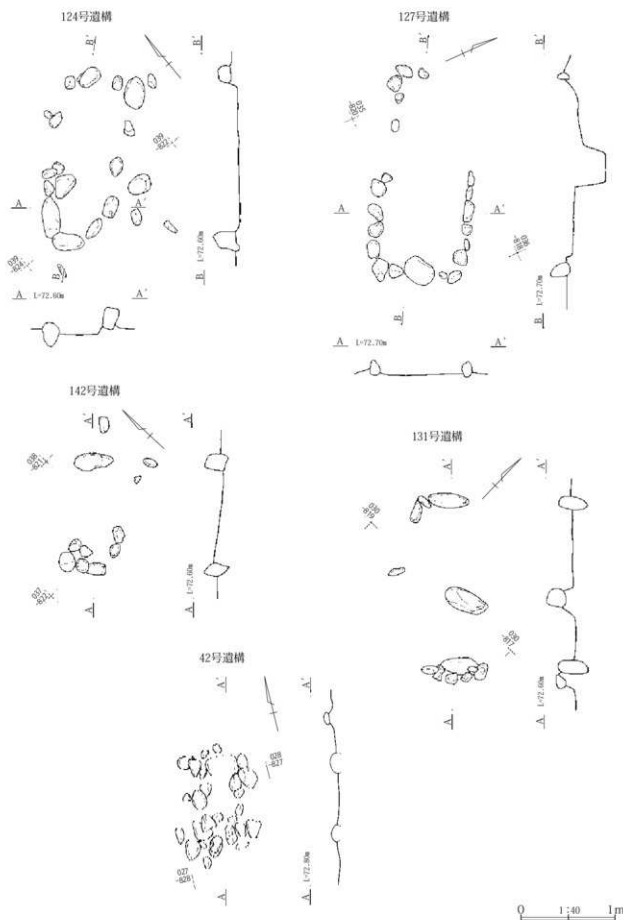
### 131号遺構 (第54・87図, PL.24・53)

**位置** 037-817グリッド。配石遺構群中央部北端にあり、45・91号遺構に接している。**方位** N-43°-W。**形状・規模** 長軸2.0m、短軸0.7m。南北の短辺に40cmの細長い礫を置いている。長辺は、礫が検出されていないが、北側の短辺で礫が鍵の手状に置かれていることから、長方形を意識していると考えられる。掘り込みは見られず両端の礫の中程が埋まっている状態であった。中央部にも同様の礫が、遺構底面より若干上のレベルで置かれた状態で検出された。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式の深鉢土器片が数点出土した。図示したもの以外は、無文の小破片が少量である。**所見** 残存状況が悪いのであるが、南北に側石が見られることから、配石墓と考えられる。遺構出土遺物やなどから、加曾利B2式期と思われる。

### 142号遺構 (第54図, PL.25)

**位置** 037-820グリッド。配石遺構群中央西北寄りにある。**方位** N-47°-E。**形状・規模** 長軸1.28m、短軸0.55m。10~20cm程の礫を置いて長方形に囲っている。長辺部分は礫が抜けている部分が多い。遺構内にも礫は見られず敷石はなかったと思われる。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B2式土器小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から、配石墓の可能性が考えられる。土器の小破片や遺構の検出状況から、加曾利B2式期と思われる。

### 42号遺構 (第54・84図, PL.52)



第54図 IV区42号・124号・127号・131号・142号遺構

## 第2章 検出された遺構と遺物

**位置** 027-827グリッド。配石遺構群の南西隅にある。  
**方位** N-10°-E。**形状・規模** 長軸1.2m、短軸0.65m。北側に40cm程の大形礫の長径を遺構内面向きに置き側石とし、10~20cmの細長い礫の短径を接して置き、長方形に囲っている。遺構内には、10cm程の礫が敷き詰められている。掘り込みなどは、検出されなかった。**出土遺物** 本遺構からは、配石の外側に、器形が復元できる加曾利B 2式土器の浅鉢が出土している。配石内からは、遺物の出土は確認できなかった。**所見** 配石の形状などから、小形の配石墓と考えられる。出土遺物から加曾利B 2式期と思われる。

### 6号遺構 (第55・80・110図, PL.49・50・65)

**位置** 031-834グリッド。調査区の南西部にあり、21号遺構と接している。**方位** N-29°-E。**形状・規模** 長軸1.88m、短軸0.67m。10~20cmの細長い礫が、長方形に置かれている。南端には、40cmを超える大形の礫がある。遺構内には、10cm程の礫が敷き詰められている。配石周辺からは、掘り込みなどの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 本遺構からは、器形が復元できる深鉢の大形破片(80図3)が出土している。時期は、加曾利B 1~2式期である。石器は、石皿破片、凹石などが出土している。**所見** 遺構内からは、加曾利B 2式の深鉢大形破片や石皿破片などが出土している。南端に大形の礫を置き、その周辺に敷石状の遺構を持つことから、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

### 24・98号遺構 (第55・82・83・111図, PL.15・65)

**位置** 031-810グリッド。配石遺構群の南東隅にあり118号遺構と接している。**方位** 一。**形状・規模** 長軸2.7m、短軸2.5m。20~30cmの礫をほぼ円形に敷き詰められている。調査時に、立石状になる部分を98号遺構、配石部分を24号遺構と分けられているが、同一の遺構と考えられる。中央部に、長さ60cmの礫が、斜めに倒れた状態で検出されたが、立石になると思われる。配石の下面については、掘り込み等不明である。**出土遺物** 加曾利B 2式土器のソロバン玉形深鉢(82図1・83図2)、石皿3点(111図1・2・3)が出土している。**所見** ほぼ円形の配石に大形の立石が伴う遺構で、出土遺物から加曾利B 2式期と思われる。

### 37号遺構 (第55・84・112図, PL.16・52・65)

**位置** 032-825グリッド。配石遺構群西側にあり、138号

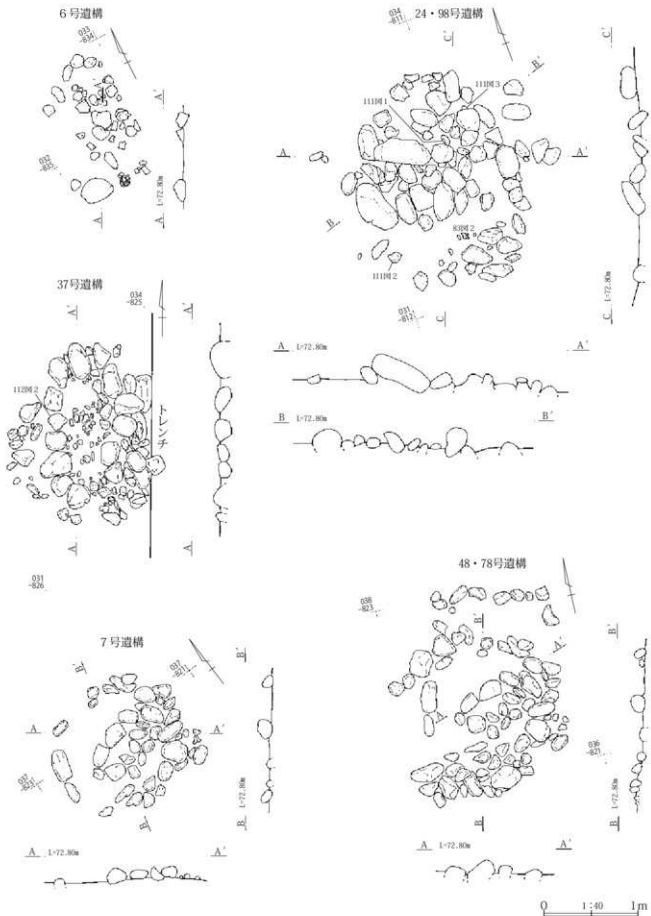
遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 長軸2.37m、短軸1.47m。20~30cmの大形の河原石の長径を接続させ、短径を遺構内向きに配して、長方形を作っている。大形の礫を埋めるように小振りの礫が敷かれている。遺構の東側を調査トレンチによって壊されているため、東側の広がり確認出来なかった。本遺構の内側には、小礫が敷かれている。掘り込み等の施設は、検出されなかった。**出土遺物** 図示したものは、覆土中から、出土した加曾利B 2式土器の粗製土器小片である。その他に土器の小片が数点出土しているが、図示出来るものはない。石器は、配石に使われた多孔石と石斧各1点(112図1・2)が出土している。**所見** 礫を長方形に配置し、その中をさらに小礫を敷き詰めている。副葬品などは確認出来なかったが、遺構の形状や検出状況から、加曾利B 2式期の配石墓の可能性が高い。

### 48号・78号遺構 (第55図, PL.17・18)

**位置** 035-820グリッド。配石遺構群の北西寄りにあり、81号遺構に接している。**方位** N-55°-W。**形状・規模** 長軸2.0m、短軸1.2m。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。遺構の南側では、礫を敷き詰めている。78号遺構と48号遺構は同一の遺構である。調査時に48号遺構は配石の上面を、78号遺構は配石の下面についてそれぞれ遺構番号を付している。配石の下面には、掘り込み等の施設は確認出来なかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 礫を長方形に配置し、その中をさらに小礫が敷き詰められており、土器の小片や遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

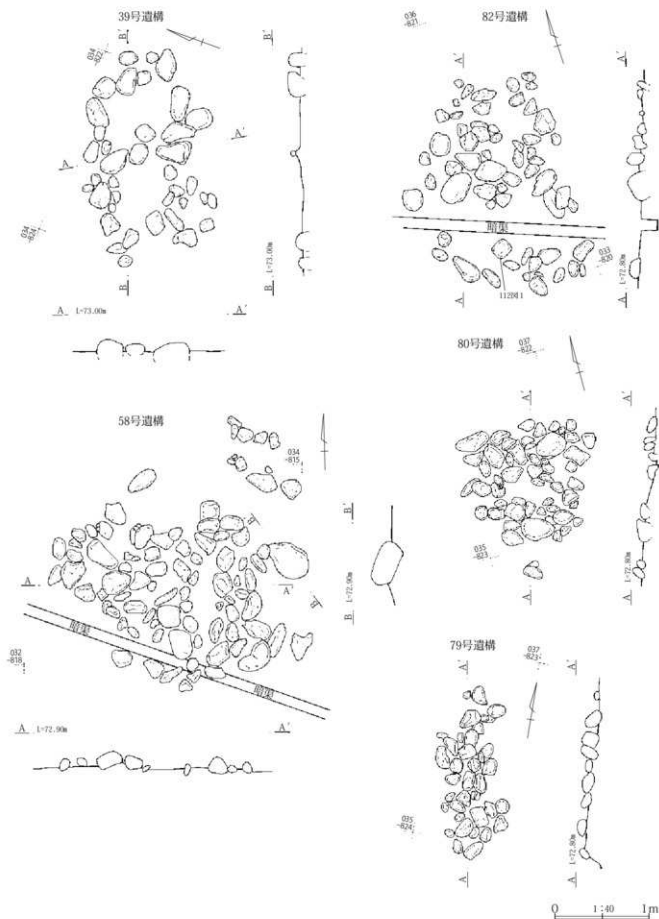
### 39号遺構 (第56図, PL.16)

**位置** 032-822グリッド。配石遺構群の中央西寄りにあり、83号遺構に接している。**方位** N-69°-E。**形状・規模** 長軸1.8m、短軸1.1m。20~30cm程の礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。遺構内に中間部に横方向に礫を並べることで、「8」の字状になる。遺構内には、掘り込み等は、検出されなかった。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器の小片が少量出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から、配石墓の可能性が高



第55図 IV区6号・24号・37号・48号・78号・98号道構

第2章 検出された遺構と遺物



第56図 IV区39号・58号・79号・80号・82号遺構

い。出土した遺物から加曾利B 2式期と思われる。

#### 82号遺構 (第56図, PL.18・66)

**位置** 033-820グリッド。配石遺構群中程西寄りにあり、81号遺構と接している。**方位** N-18°-E。**形状・規模** 長軸2.1m、短軸1.5m。北側で81号遺構と接している。10~30cmの礫を乱雑に、方形に敷いている。遺構は、中央部を東西に近世の暗渠によって壊されている。遺構内は、小礫が敷かれている。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片数点出土しているが、図示出来るものはない。配石に使用された多孔石が、1点出土している。**所見** 配石の形状から、配石墓の可能性も想定される。出土した遺物から加曾利B 2式期と思われる。

#### 58号遺構 (第56図, PL.17)

**位置** 032-815グリッド。配石遺構群のほぼ中央にあり、57号遺構と接している。**方位** N-28°-W。**形状・規模** 長軸2.55m、短軸1.4m。10~20cmの細長い礫を長方形に敷いている。礫は、長径を南北に向けて置くものが多い。掘り込みは見られず、遺構内には礫が敷かれている。遺構の南端を近代の暗渠によって壊されている。**出土遺物** 覆土中から、加曾利B 2式土器小破片出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石により、長方形に囲っている部分が見られることから、配石遺構と考えられる。遺構の確認面などから、加曾利B 2式期と思われる。

#### 79号遺構 (第56図, PL.18)

**位置** 035-823グリッド。配石遺構群の北西部にあり83号遺構と接している。**方位** N-12°-W。**形状・規模** 長軸1.85m、短軸0.75m。10~20cmの細長い礫の長径を南北に向け、長方形に敷いている。掘り方などの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から、配石遺構と考えられる。検出状況から加曾利B 2式期と思われる。

#### 80号遺構 (第56図, PL.18)

**位置** 035-820グリッド。配石遺構群の中央西よりにあり、82号遺構と接している。**方位** N-0°。**形状・規模** 長軸1.7m、短軸1.5m。10~20cmの礫が方形に敷かれている。掘り込み等は、検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土

しているが、図示出来るものはない。**所見** 配石の形状から配石遺構と考えられる。検出状況から加曾利B 2式期と思われる。

#### 40号遺構 (第57・112図, PL.16・65)

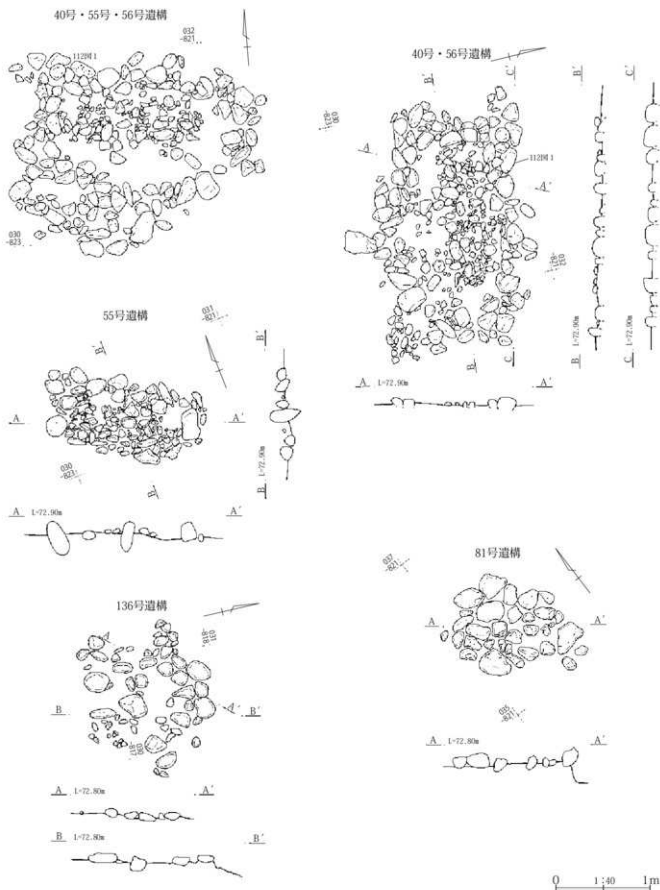
**位置** 030-820グリッド。配石遺構群の中央南西寄りにあり55・56号遺構と重複している。**方位** N-70°-W。**形状・規模** 長軸2.72m、短軸1.55m。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲う。掘り込みは見られず、遺構内には、礫が敷かれている。40号・55号・56号遺構は重複しているが、新旧関係は確認出来なかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は、配石の中から多孔石が1点(112図1)出土している。**所見** 配石が長方形に囲っている形状から、配石墓の可能性が高い。遺構確認面や、周辺の状況から加曾利B 2式期と思われる。

#### 55号遺構 (第57図, PL.17)

**位置** 030-821グリッド。配石遺構群中程西側にあり、40・56号遺構と重複している。**方位** N-70°-W。**形状・規模** 長軸1.68m、短軸0.88m。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。掘り込みは見られず、遺構内には、礫が敷かれている。40号・56号遺構の南側に接しているが、新旧関係は確認出来なかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物と配石の形状から、加曾利B 2式期の配石墓の可能性が高い。

#### 56号遺構 (第57図, PL.16)

**位置** 030-821グリッド。配石遺構群の中央南西寄りにあり40・55号遺構と重複している。**方位** N-85°-W。**形状・規模** 長軸1.88m、短軸1.03m。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。掘り込みは見られず、遺構内には、礫が敷かれている。40号・55号遺構は重複しているが、新旧関係は確認出来なかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物と配石の形状から、加曾利B 2式期の配石墓の可能性が高



第57図 IV区40号・55号・56号・81号・136号遺構



い。

**81号遺構** (第57・85・112図, PL.18・53・66)

**位置** 035-821グリッド。配石遺構群中央北西より、48号遺構と接している。**方位** N-85°-W。**形状・規模** 長軸1.4m、短軸1.0m。10~20cmの礫が方形に置かれている。掘り込みなどは、検出されなかった。東側を調査トレンチによって壊されている。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器が出土しているが、図示した他は、小片である。石器は、削器1点(112図1)が出土した。**所見** 配石が密集して敷き詰められた状況や形状から、配石遺構と考えられる。出土した遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

**136号遺構** (第57図, PL.25)

**位置** 030-817グリッド。配石遺構群中央南寄りであり、61号遺構と接している。**方位** N-77°-W。**形状・規模** 長軸1.65m、短軸1.35m。20~30cmの扁平な礫を方形に置いている。配石の中央部に空間が見られるが、掘り込みなどは検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物と配石の形状から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

**92号遺構** (第58図)

**位置** 034-816グリッド。配石遺構群のほぼ中央にあり127号遺構に接している。**方位** N-90°。**形状・規模** 長軸2.6m、短軸0.9m。10~20cmの細長い礫を長方形に置いている。礫の配列に規則性は見られない。礫の下面には掘り込みは見られなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物と配石の形状から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

**138号遺構** (第58, PL.25)

**位置** 034-825グリッド。配石遺構群中程西側にあり、37号遺構に接している。**方位** N-50°-W。**形状・規模** 長軸1.7m、短軸1.1m。10~20cmの扁平な礫を長方形に置いている。礫の配列に規則性は見られない。礫の下面には掘り込みは見られなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物と配

石の形状から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

**111号遺構** (第58図, PL.20)

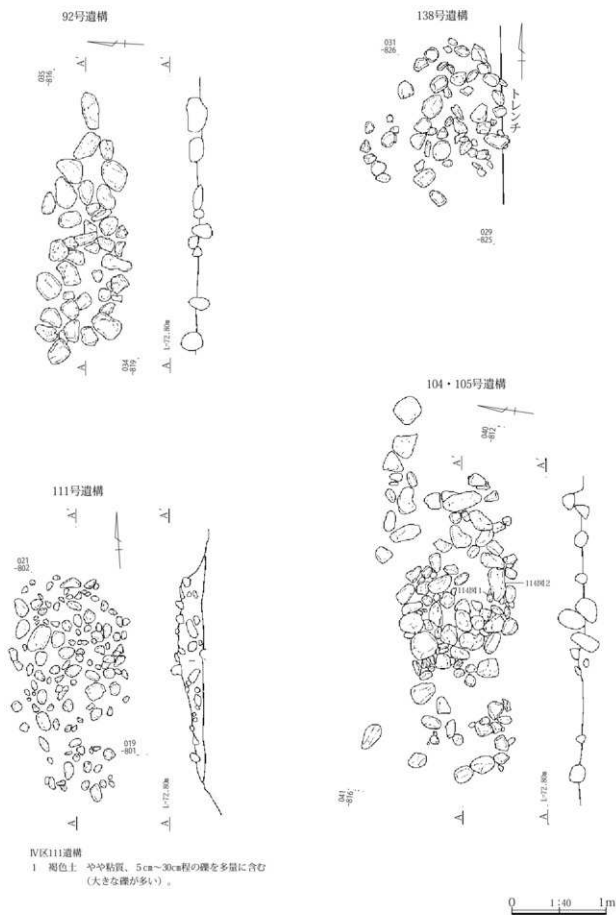
**位置** 019-801グリッド。調査区中程南端にある。**方位** N-8°-W。**形状・規模** 長軸2.45m、短軸1.35m。10~30cmの礫が盛り土状の地山に入り込んでいる。礫は、角の取れた河原石である。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 出土した遺物から加曾利B 2式期と考えられる。礫については、規則性を持って並べてあるというよりは、地山の中に礫が入り込んだ状態である。河原の自然地形による高まりに、礫が入り込んだものと考えられる。

**104号・105号遺構** (第58・114図, PL.66)

**位置** 039-812グリッド。配石遺構群の北東隅にあり、140・141号遺構に接している。**方位** N-80°-E。**形状・規模** 長軸4.0m、短軸1.45m。10~30cmの細長い礫の長径を主軸方向に並べて、長方形に囲っている。104号と105号が重複しているが、中央の礫が混み合っている部分での重複で、新旧関係はつかめなかった。それぞれの区画の中央部には、礫が認められず空白部となっている。これらの所からは、掘り込みなどは検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は、多孔石や凹石が出土した。**所見** 礫の配置に規則性が認められることから、配石遺構と考えられる。出土した遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

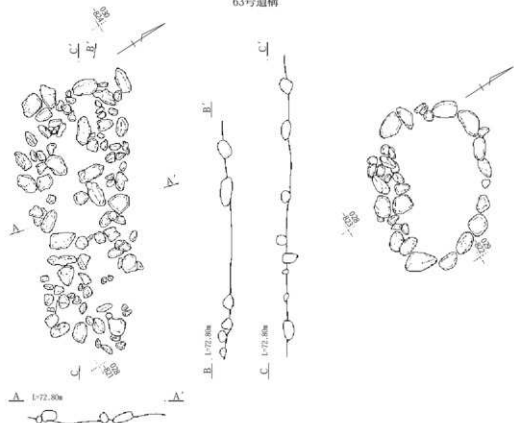
**63号遺構** (第59・84図, PL.17・52)

**位置** 028-821グリッド。配石遺構群の南西寄りにあり、85号遺構と接している。**方位** N-50°-W。**形状・規模** 本遺構は、上面と下面の2段に分かれる。上面は、長軸2.8m、短軸1.15m。10~20cm程の細長い礫によって、長方形に囲っている。遺構内には、礫が敷かれている。これらの下面からも、礫を長方形に囲っている遺構が検出された。規模は、長軸1.8m、短軸1.3mである。いずれも礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。**出土遺物** 礫の周辺から、堀之内2式の小片、加曾利B 2式土器の深鉢小破片や、底部片が出土している。**所見** 配石の配置に規則性が認められ、その形状から、配石墓の可能性

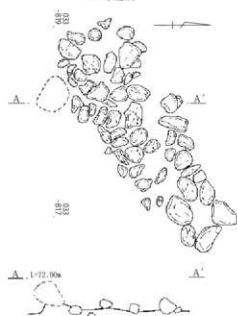


第58図 IV区92号・104号・105号・111号・138号遺構

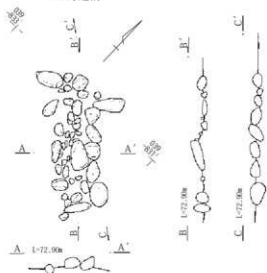
63号遺構



93号遺構



115号遺構



0 1:40 1m

第59図 IV区63号・93号・115号遺構

## 第2章 検出された遺構と遺物

性が高い。出土した遺物などから、加曾利B2式期のものである。

### 93号遺構 (第59・113図, PL.66)

**位置** 033-817グリッド。配石遺構群のほぼ中央122号遺構と接している。**方位** N-57°-E。**形状・規模** 長軸2.82m、短軸1.05m。20~30cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。遺構内には、礫が敷かれている。掘り込みなどは確認出来なかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は、石皿の破片が配石に混じって出土している。**所見** 出土した遺物から加曾利B2式期と考えられる。礫の配置に規則性が認められることから配石墓の可能性が高い。

### 115号遺構 (第59・114図, PL.21・67)

**位置** 038-831グリッド。調査区中程西寄りにある。**方位** N-42°-W。**形状・規模** 長軸1.48m、短軸0.55m。20~30cmの細長い礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。遺構内にも、扁平な礫の長径を長軸方向に敷きつめている。敷石の下面には、掘り込みなどの遺構は、確認出来なかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。配石に混じって多孔石が出土した。**所見** 出土した遺物から加曾利B2式期と考えられる。礫の形状から配石墓の可能性が高い。

### 1号遺構 (第60・110図, PL.13・65)

**位置** 044-844グリッド。調査区西端、6号住居内にある。**形状・規模** 長軸0.5m、短軸0.45m。10~20cmの礫の短径面を接続させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、方形に囲う。遺構内底には、40×30cmの大形礫が置かれていた。**出土遺物** 石製品が1点出土している。**所見** 遺構遺物の形状から、配石の形状から、小配石遺構と考えられる。遺構確認面の状況から、加曾利B2式期と思われる。6号住居との関係は、不明である。

### 4号遺構 (第60・79図, PL.13・49)

**位置** 045-844グリッド。調査区西端、6号住居に接している。**形状・規模** 長軸1.4m、短軸0.8mの範囲に、30cm程の礫と土器が集中して出土している。掘り込みな

どは、検出できなかった。**出土遺物** 加曾利B2式の深鉢、浅鉢土器片が、礫の間にまとまって出土している。**所見** 出土遺物から加曾利B2式期と考えられるが、形状は不定形であり、性格不明の配石遺構である。

### 5号遺構 (第60・79・110図, PL.14・42・65)

**位置** 043-844グリッド。調査区西端、6号住居内にある。**形状・規模** 長軸0.45m、短軸0.42m。20~30cm程の礫により方形に囲う。遺構内からは、掘り込みは検出されなかった。**出土遺物** 礫に囲まれた中から、加曾利B2式土器の小片が出土している。石器は、加工痕のある剥片、石核である。**所見** 6号住居のほぼ中央にあることから、住居に伴う炉と考えられる。

### 34号遺構 (第60・106図, PL.15・62)

**位置** 025-823グリッド。配石遺構群の南西隅にあり、87号遺構と接している。**形状・規模** 長軸1.02m、0.92mの範囲に10~15cm程の礫を配している。配石の中央部からは、埋設土器(106図174)が検出されている。**出土遺物** 配石遺構の中央部から加曾利B2式の粗製土器が検出されている。**所見** 遺物の検出状況から、埋葬とそれに伴う、配石遺構と思われる。

### 83号遺構 (第60・112図, PL.66)

**位置** 033-823グリッド。配石遺構群の西側にある。**形状・規模** 1.10×1.0mの範囲に5~10cmの礫を置いている。掘り込みなどの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B2式土器の小破片が数点出土しているが、図示出来るものはない。石器は、多孔石が1点出土している。**所見** 遺構の検出状況から加曾利B2式期の配石遺構と思われる。

### 88号遺構 (第60図, PL.18)

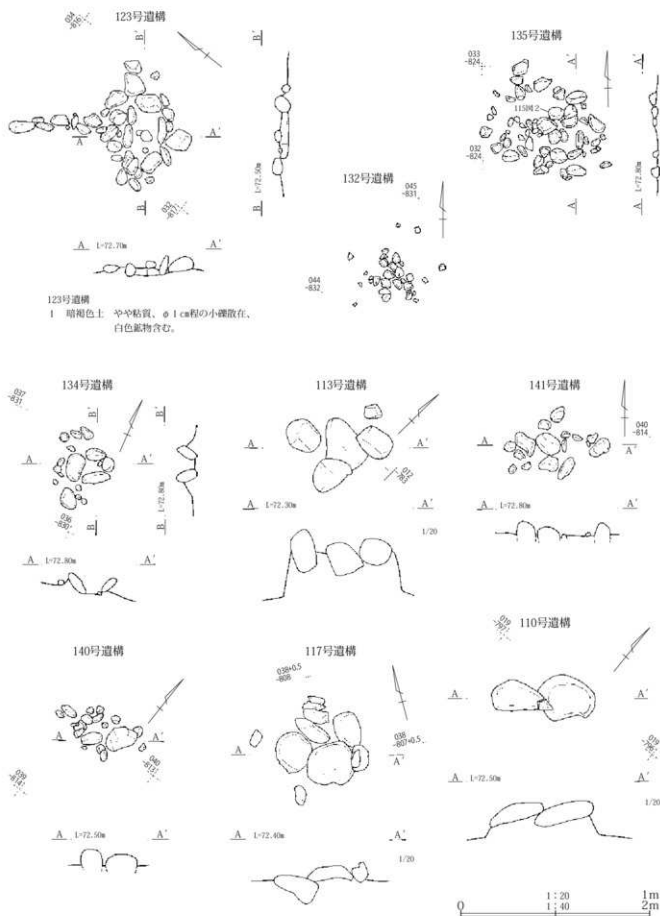
**位置** 023-820グリッド。配石遺構群の南西隅にある。**形状・規模** 0.8m四方に礫を配している。掘り込みなどの施設は、検出されなかった。**出土遺物** 礫の周辺から、加曾利B2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。**所見** 遺構の検出状況から、加曾利B2式期の配石遺構と思われる。

### 91号遺構 (第60図, PL.19)

**位置** 038-818グリッド。配石遺構群中程北側にあり、131号遺構と接している。**形状・規模** 長軸1.0m、短軸0.8m。20~30cmの礫を長方形に配している。西側を調査トレンチによって壊されているため、全体の形は不



第2章 検出された遺構と遺物



第61図 IV区110号・113号・117号・123号・132号・134号・135号・140号・141号遺構

明である。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から加曾利B 2式期の配石遺構と思われる。

#### 112号遺構 (第60図, PL.20)

位置 013-783グリッド。調査区東端にあり、113号遺構と接している。形状・規模 長軸0.45m、短軸0.3mの範囲に、5~20cmの礫を方形に置いている。掘り込みなどは検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から加曾利B 2式期の配石遺構と思われる。

#### 116号遺構 (第60図, PL.21)

位置 037-828グリッド。調査区中程西寄りにある。形状・規模 長軸1.15m、短軸0.55mの範囲で、10~20cmの細長い礫を長方形に置いている。遺構の西側を調査トレンチによって壊されているため、全体形は不明である。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と思われる。

#### 123号遺構 (第61図, PL.22・23)

位置 032-816グリッド。配石遺構群中程にあり、38・122・130号遺構と接している。方位 N-74°-W。形状・規模 長軸0.95m、短軸0.55m。10~30cmの礫の短径面を連接させ、長径面を遺構の内側に向けて置き、長方形に囲っている。長方形区画の中心部に円形の礫が置かれている。掘り方などの施設は、検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 配石の状況から、規則的に礫を配していることから、配石遺構と考えられる。遺構確認面や周辺の状況から加曾利B 2式期と思われる。

#### 135号遺構 (第61・87・115図, PL.25・53・67)

位置 032-822グリッド。配石遺構群の中程西寄りにあり、39・56号遺構と接している。形状・規模 1.4×1.5mの範囲に、15~20cmの礫を置いている。礫の周辺には、掘り込みなどは検出されていない。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器深鉢、浅鉢の小破片、無文の小片が出土している。石器は、打製石斧(115図

1)と多孔石(115図2)が各1点出土した。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と思われる。

#### 132号遺構 (第61・113図, PL.24・66)

位置 044-831グリッド。調査区の北西部にある。形状・規模 0.6×0.5mの範囲に、15~20cmの礫を置いている。礫の周辺には、掘り込みなどは検出されていない。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は、削器(113図1)が1点出土した。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と思われる。

#### 134号遺構 (第61図, PL.24)

位置 036-830グリッド。調査区の西寄りにある。方位 N-57°-E。形状・規模 15~30cmの礫を方形に囲う。礫は、地山に斜めに立てるように置かれて、その周辺に小礫が集まる。周辺からは、ビットなどの遺構は検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の石囲いの可能性が高い。

#### 113号遺構 (第61図, PL.20)

位置 012-782グリッド。調査区の東端にある。形状・規模 20~30cmの礫を地山に置いている。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 検出状況から、加曾利B 2式期の小配石遺構と思われる。

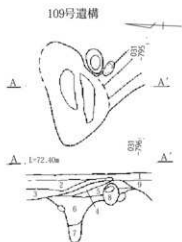
#### 141号遺構 (第61図, PL.25)

位置 039-814グリッド。配石遺構群中程北側にあり、103~105号遺構と接している。形状・規模 1×0.8mの範囲に10~30cmの礫を地山に立てるように置き、その間に小礫が置かれる。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

#### 140号遺構 (第61図, PL.25)

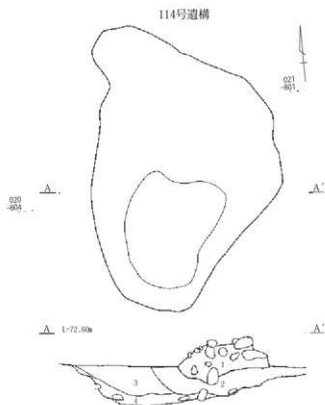
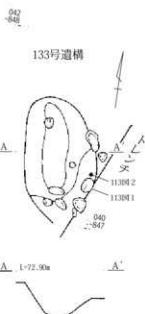
位置 039-813グリッド。配石遺構群の北東隅にあり、104・105号配石と接している。形状・規模 0.9×0.5mの範囲に5~35cmの礫を地山の中に立てるように置き、その間に小礫が置かれる。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図

第2章 検出された遺構と遺物



109号遺構

- 1 暗褐色土 やや粘質、古墳時代の地山。
- 2 黒褐色土 焼土粒含む。
- 3 黒褐色土 焼土粒少量含む。
- 4 暗褐色土 粘質、焼土、炭化物散在、白色鉱物多い。
- 5 黒褐色土 粘質、焼土、炭化物散在、白色鉱物多い。
- 6 黒褐色土 粘質、焼土、炭化物散在。
- 7 暗褐色土 粘質、小さい円礫含む。
- 8 黒褐色土 粘質、炭化物含む、木根の痕。



114号遺構

- 1 褐色土 やや粘質、5cm~30cm程の礫を多量に含む(大きな礫が多い)。
- 2 暗褐色土 粘質、酸化度が見られる。5cm程の礫も散在。
- 3 黒褐色土 粘質、白色鉱物を多く含む。5cm程の礫も散在、焼土粒。
- 4 暗褐色土 やや粘質、層下部に大きな礫が散在。

0 1:40 1m

第62図 IV区109号・114号・133号・139号遺構



示出来るものはない。所見 遺構の検出状況から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

#### 117号遺構 (第61図, PL.21)

位置 038-807グリッド。配石遺構群の北東端にある。  
形状・規模 0.5×0.5mの範囲に、10～20cmの礫を置いている。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。

所見 周辺の地山には、礫が無いことから、配石遺構と考えられるが、性格は不明である。

#### 110号遺構 (第61図, PL.20)

位置 018-796グリッド。調査区の東南にある。形状・規模 30cm程の大形の礫を、周辺の地山より高い位置に置いている。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 周辺の地山より一段高い位置に大形の礫が置かれていることから、人為的なものと考えられるが、性格は不明である。

#### 109号遺構 (第62・85図, PL.20・53)

位置 031-795グリッド。調査区東寄りの北側にある67遺構と重複。方位 N-75°-E。形状・規模 長軸1.1m、短軸0.65m、深さ0.38m程の長楕円形。断面は、三角錐状になる。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の深鉢底部片が出土している。その他、文様が見えない土器の小片が、数点出土している。所見 覆土中に焼土、炭化物などを含むことから、灰跡とも考えられる。出土遺物や遺構確認面の状況から、加曾利B 2式期の土坑である。

#### 139号遺構 (第62図, PL.25)

位置 032-827グリッド。配石遺構群の西側にある。形状・規模 径1.2m程の円形の土坑。地山は、礫層である。これを掘り込んで、断面円錐形の土坑を作っている。出土遺物 不明。所見 遺構確認面の状況から、加曾利B 2式期になると思われる。礫層中を浅い円錐形に掘り込んでいるが、出土遺物が無く、性格不明の土坑である。

#### 133号遺構 (第62・113図, PL.24・66)

位置 039-847グリッド。調査区の西端、6号住居の西側にある。方位 N-10°-W。形状・規模 長軸1.3m、短軸0.78mの楕円形を呈する。断面は、円錐形になる。南側の一部を調査トレンチによって壊されている。

る。出土遺物 土坑覆土から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は石皿(113図1)・多孔石(113図2)・磨石(113図3)・凹石(113図4)が出土した。所見 遺構確認面の状況から、加曾利B 2式期になると思われる。出土遺物などはっきりしないことから、性格不明の土坑である。

#### 114号遺構 (第62図, PL.20)

位置 018-801グリッド。調査区の東南にある。形状・規模 長軸3.0m、短軸2.05mの不整形。断面は、緩やかに傾斜する。地山の礫層を掘り込んで作られており、覆土中に礫が多く入り込む。出土遺物 土坑覆土から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構確認面の状況から、加曾利B 2式期になると思われる。礫層中を不整形に掘り込んでおり、出土遺物などはっきりしないことから、性格不明の土坑である。

#### 67号遺構 (第63・112図, PL.18・66)

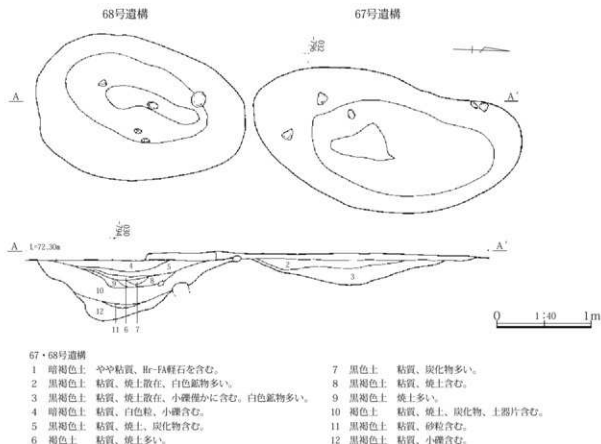
位置 030-794グリッド。調査区の北東寄りにあり、109号遺構と重複、68号遺構と接している。方位 N-7°-E。形状・規模 長軸2.85m、短軸1.34m、深さ0.45mの長楕円形。断面は三角状になる。覆土中に周辺の河原石が入り込む。出土遺物 覆土から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。他に石核1点出土。所見 覆土中に炭化物等を含むことから、貯蔵穴などの用途が考えられる。

#### 68号遺構 (第63・85図, PL.18・52)

位置 030-794グリッド。調査区の北東寄りにあり、67号遺構と接している。方位 N-5°-E。形状・規模 長軸1.9m、短軸1.5m、深さ0.4mの楕円形。覆土には、周辺の河原石が入り込む。67遺構と接して作られている。出土遺物 覆土から、加曾利B 2式土器の大形の粗製深鉢、深鉢の突起部が出土している。他小片が数点出土している。所見 覆土中に炭化物等を含むことや粗製深鉢等の出土遺物から、貯蔵穴などの用途が考えられる。

#### 21号・22号遺構 (第64・80・81図, PL.14・50)

位置 031-833グリッド。調査区南西よりにあり、6号遺構と接している。方位 N-50°-W。形状・規模 4×3mの範囲に、10～30cmの礫を地山の上に置いている。礫の置き方に、規則性が見られない。床面中央の礫



67・68号遺構

- |        |                         |         |                  |
|--------|-------------------------|---------|------------------|
| 1 暗褐色土 | やや粘質、Hr-FA軽石を含む。        | 7 黒色土   | 粘質、炭化物多い。        |
| 2 黒褐色土 | 粘質、焼土散在、白色鉱物多い。         | 8 黒褐色土  | 粘質、焼土含む。         |
| 3 黒褐色土 | 粘質、焼土散在、小礫堆かを含む、白色鉱物多い。 | 9 黒褐色土  | 焼土多い。            |
| 4 暗褐色土 | 粘質、白色粒、小礫含む。            | 10 褐色土  | 粘質、焼土、炭化物、土器片含む。 |
| 5 黒褐色土 | 粘質、焼土、炭化物含む。            | 11 黒褐色土 | 粘質、砂粒含む。         |
| 6 褐色土  | 粘質、焼土多い。                | 12 黒褐色土 | 粘質、小礫含む。         |

第63図 IV区67・68号遺構

の間に、鉢の大形破片が置かれている。出土遺物 配石の床面には、加曾利B 2式土器の器形復元できる鉢形土器(81図9)が出土している。その他に、口縁部の文様の分かる土器が9点、網代痕のある底部2点が出土している。所見 礫は、不規則に置かれており、礫の密集した部分と空白部分の有る配石遺構と考える。遺構の中央部出土の深鉢大形破片から、加曾利B 2期期と思われる。

64号遺構 (第64図, PL.17)

位置 035-814グリッド。配石遺構群の北東部にあり、140号遺構に接している。形状・規模 4×3.5mの範囲に、10~20cmの礫を置いている。礫は、半円状に置かれている部分もあるが、全体的に不規則な配置である。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構確認面や出土土器から加曾利B 2式期の配石遺構と思われるが、遺構の断面図等詳細なデータが無いため、性格不明である。

23号遺構 (第65・81・82図, PL.15・51)

位置 017-790グリッド。調査区の北東部に位置する。方位 N-66°-W。形状・規模 5×4mの範囲に、30cm程の大形の礫を地山上に、四隅に置いている。その内側に10cm程の礫や土器片が置かれる。遺構の東側は、調査トレンチによって壊されている。周辺からピットなどの施設は、検出されなかった。出土遺物 加曾利B 2式土器の器形復元の出来る大形破片が出土している。その他、口縁部文様の分かる土器など6点図示した。

所見 大形の扁平礫を四方に配し、その中に小礫や土器片を敷き込んでいることから、配石遺構と考えられる。

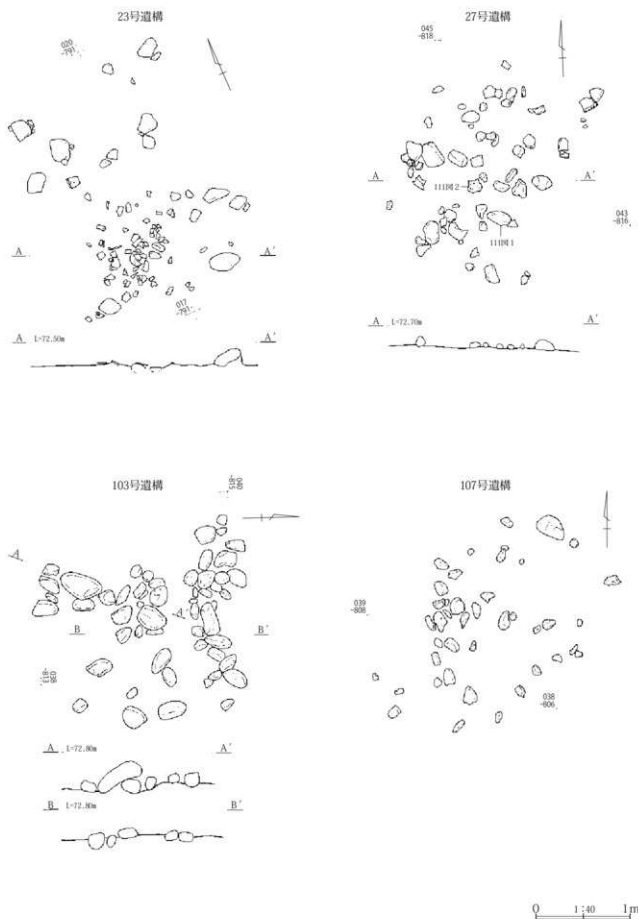
27号遺構 (第65・83・84・111図, PL.51・52・65)

位置 042-816グリッド。配石遺構群の中程北端にある。形状・規模 2.5×2.5mの範囲に、10~20cmの礫を地山上に置いている。礫の配置には規則性が見られず、周辺からピット等の掘り込みは、検出されていない。出土遺物 礫の間から、加曾利B 2式土器の深鉢破片などが出土している。図示した土器以外に、文様のはっきりしない土器や、粗製土器の小片が出土している。石器は、打製石斧(111図2)、多孔石(111図1)



第64図 IV 区21号・22号・64号遺構

第2章 検出された遺構と遺物



第65図 IV区23号・27号・103号・107号遺構

が各1点出土した。所見 礫の配置に規則性がないことから、性格不明の配石遺構である。出土遺物から、加曾利B 2式期と思われる。

#### 103号遺構 (第65図)

位置 038-812グリッド。配石遺構群の北東隅102号遺構に接している。形状・規模 2.5×2.2mの範囲に、20～40cmの礫を地山上に置いている。遺構の南側に、立石となる50cm程の大形の礫が置かれている。礫の配置には、規則性が見られず、形状も不明である。周辺からビット等の掘り込みは、検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 出土遺物から、加曾利B 2式期の立石を伴う配石遺構と考えられる。

#### 107号遺構 (第65・114図, PL.67)

位置 037-805グリッド。調査区中央の北端にあり、7号遺構と接している。形状・規模 2.5×2.5mの範囲に、5～10cmの礫を地山上に置いている。礫の配置に規則性が見られず、形状も不明である。周辺からビット等の掘り込みは、検出されなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。打製石斧1点(114図1)が出土した。所見 出土遺物から、加曾利B 2式期の遺構と考えられるが、礫の配置に規則性がないことから性格不明の配石遺構である。

#### 101号・102号遺構 (第66・115図, PL.67)

位置 035-813グリッド。配石遺構群の北東121号遺構と接している。形状・規模 4.3×2.5mの範囲に10～30cm程の礫を地山上に置いている。礫の配置には、規則性が見られず地山に敷き詰めたように置かれている。遺構の北側では、円形に礫が抜けている部分があるが、掘り込みは見られなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。石器は、石皿2点(115図1・2)、剥片1点(115図3)、削器2点(115図4・5)が出土している。所見 遺構確認面と出土遺物から、加曾利B 2式期の遺構と思われる。礫の配置状況から、配石遺構と考えられる。

#### 108号遺構 (第66図, PL.20)

位置 029-806グリッド。調査区中央北寄りにある。

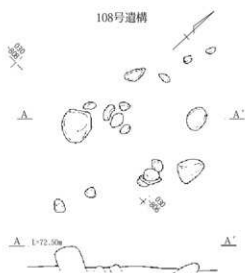
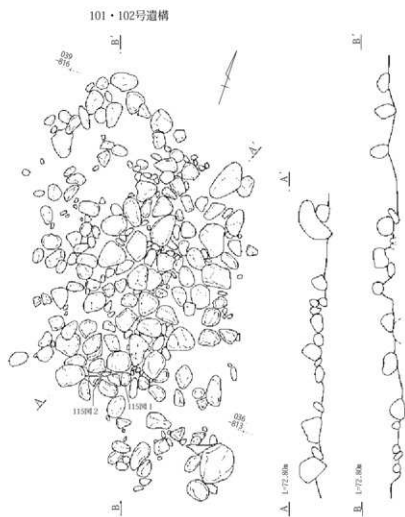
形状・規模 2×1.5mの範囲に礫が置かれている。遺構の西南端にある立石は、40cm程あり地山を掘り込んで立ててある。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の小破片が出土しているが、図示出来るものはない。所見 遺構確認面と出土遺物から、加曾利B 2式期の立石を伴う配石遺構と考えられる。

#### 106号遺構 (第67・86・114図, PL.19・53・67)

位置 040-810グリッド。配石遺構群の北端にある。形状・規模 5×3mの範囲に、30～50cmの礫を核にして地山上に置き、その間を10～20cmの礫が埋めるように置かれている。配石の全体形は、長方形になる。敷石の西側で、円形に礫が敷かれていない部分があるが、掘り込み等の施設は、見られなかった。出土遺物 礫の周辺から、加曾利B 2式土器の深鉢、浅鉢破片や粗製の無文土器など、数点出土している。石器は、配石の中から下半部の欠損した石棒1点と打製石斧1点が出土している。所見 遺構確認面と出土遺物から、加曾利B 2式期の配石遺構と考えられる。

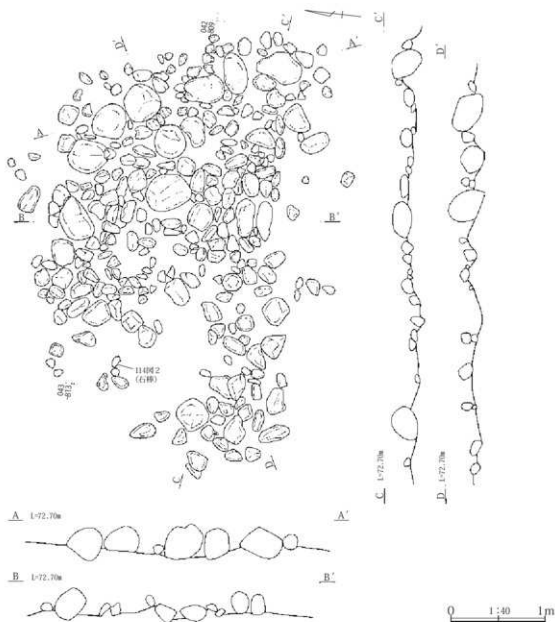
19号遺構 (第68・87・88・110・111図, PL.26・53・54・65)

位置 045-835グリッド。調査区の北西隅にある。方位 N-23°W。形状・規模 長軸5.6m、短軸4.0mの長方形を呈する。周辺の礫の一部は、抜けており検出できなかったが、10～30cmの細長い礫の長径を接続させ、主軸に沿って長方形に並べている。遺構内の敷石は、断片的であるが南側で認められた。調査トレンチによって、遺構の南側と東側が壊されているため、全体形が確認出来なかった。また断面図には、遺構の南西壁寄り土坑状の落ち込みがあるが、平面図には、記載されていないため形状は不明である。出土遺物 遺構内からは、堀之内2式期のほぼ完形になる小形深鉢(88図6)や加曾利B 2式土器の深鉢(87図3・4)、浅鉢(87図1・2)などが出土している。図示した土器以外、粗製の土器が数点出土している。石器は、石皿2点、打製石斧2点、石皿1点、多孔石1点出土した。所見 石組列が方形になり、敷石が一部に認められる一方で、炉や柱穴など検出されていないことから、環状形配石遺構とも捉えにくい配石遺構である。時期は、遺構確認面や出土遺物から判断すると、堀之内式土器も出土しているが、加曾利B 2式期と考えられる。



0 1:40 1m

第66図 IV区101号・102号・108号遺構



第67図 IV区106号遺構

**焼土痕**

縄文遺構確認面である、暗褐色粘質土上面に焼土層が広がる遺構が、3基確認された。配石などの施設はなく、焼き火跡もしくは、地床炉と考えられる。

**2号焼土** (第69図, PL.26)

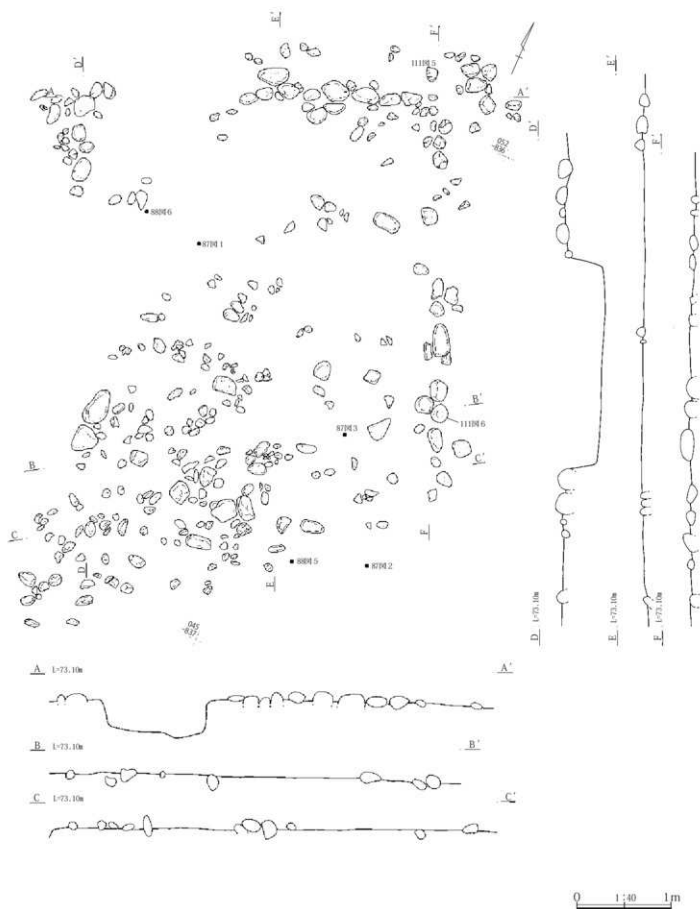
**位置** 013-780グリッド。調査区中央東端にある。**規模・概要** 1.5×1.2mの範囲に焼土・炭化物を確認。縄文土器を包含する層の中から検出された。周辺からは、掘り込みは見られ無かったが、加曾利B式土器などが出土していることから、当該期のものと思われる。

**3号焼土** (第69図, PL.26)

**位置** 030-793グリッド。調査区北東67・68号遺構の東にある。**規模・概要** 1×1mの範囲に焼土・炭化物が広がる。縄文土器を包含する層の中から検出された。周辺からは、掘り込みは見られ無かったが、検出面などから加曾利B式期と思われる。

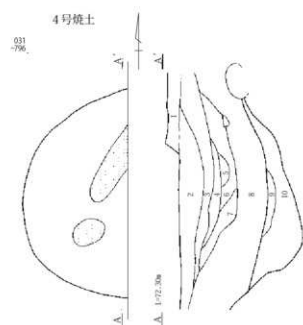
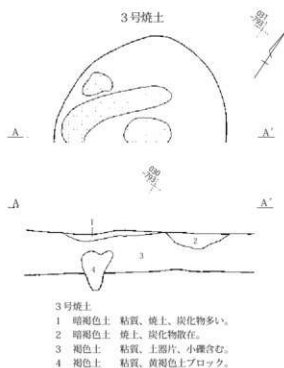
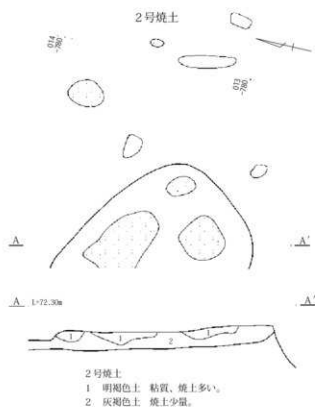
**4号焼土** (第69図, PL.26)

**位置** 026-795グリッド。調査区北東68号遺構に重複。**規模・概要** 1×1mの範囲に焼土・炭化物が広がる。縄文土器を包含する層の中から検出された。周辺からは、掘り込みは見られ無かった。遺構検出面などから加曾利B式期と思われる。



第68図 IVK19号遺構





- 4号焼土
- 1 暗褐色土 やや粘質、H-Fa軽石を含む。
  - 2 黒褐色土 粘質、焼土散在、固くしまる。白色鉱物多い。
  - 3 黒褐色土 粘質、焼土散在、小さい円礫わずかに含む。固くしまる。白色鉱物多い。
  - 4 暗褐色土 粘質、白色粒、小礫含む。
  - 5 黒褐色土 粘質、焼土、炭化物含む。
  - 6 褐色土 粘質、焼土多い。
  - 7 黒色土 粘質、炭化物多い。
  - 8 黒褐色土 粘質、焼土含む。
  - 9 黒褐色土 焼土多い。
  - 10 褐色土 粘質、焼土、炭化物、土器片含む。

0 1:20 1m

第69図 IV区2号・3号・4号焼土

## 2 IV区検出された遺物

IV区の遺構から出土している遺物は、後期堀之内2式、加曾利B2式の土器を中心としている。住居からの出土遺物は、床面に置かれた状態で出土すると言うよりは、覆土中に廃棄された状態で、土器や土偶などの破片が出土している。石器類も小形の石鏃や打製石斧などが出土している。石皿や多孔石などの大形石器は欠損しているものが覆土中から出土している状況である。

墓塚から出土する土器についても同様に副葬されたものは少なく、埋設時に混入した土器片が多い。比較的完形に近い土器は、埋設土器遺構や炉跡などから出土して

いる。石器では、打製石斧や石鏃等とともに多孔石や円礫などが墓塚に抱き石として入れられたものもある。

遺物包含層から出土している土器は、前期の諸磯b式土器や中期の加曾利E4式土器、後期初頭の称名寺式土器が僅かに見られる他、堀之内2式土器と加曾利B2式土器を中心として出土している。

石器は、調査区全体で本区からの出土量が最も多く、598点出土している。剥片石器では、打製石斧67点、石鏃54点、削器24点、剥片類76点等があり、礫石器では、石皿46点、多孔石54点、凹石19点、磨石35点、敲石6点、礫石18点の出土があった。

IV区 1号住居出土土器観察表

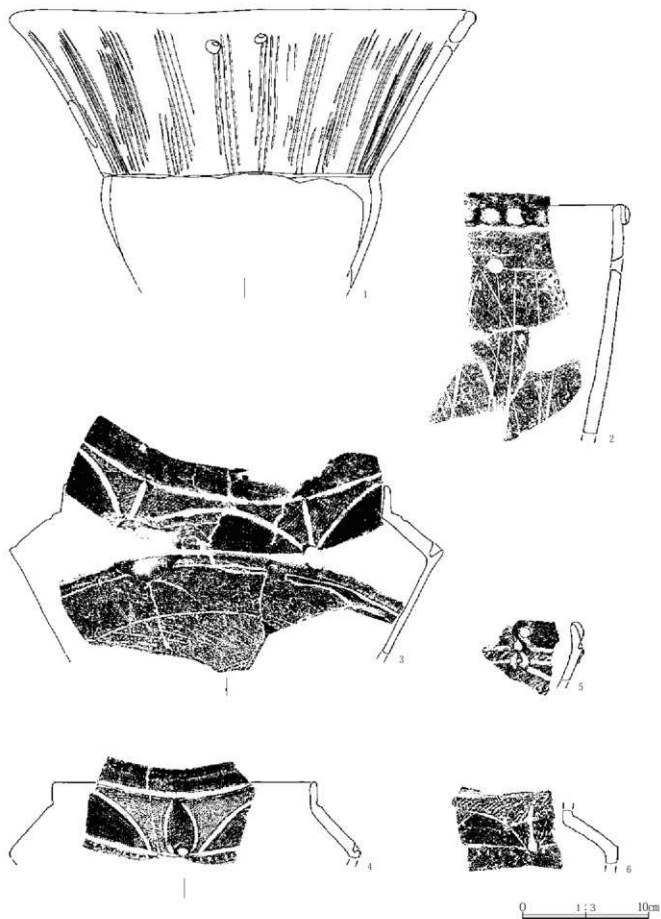
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	70・45	深鉢	口縁部～胴部	細砂 φ1mmの 小石・白色粒	褐灰	良好	口縁部内面に太さ4mmの沈線が廻る。外面幅6mmの平行沈線が間隔を開けて縦位に施文される。	加曾利B2
2	70・45	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1mmの 小石	灰褐色	良好	口縁部に指頭痕のある突帯が廻る。	加曾利B2
3	70・45	深鉢	口縁部～胴部	細砂 白色・黒 色粒	灰白	普通	口縁部垂直になる。胴部に弧線文。胴部は沈線による横位区画線と斜線。縄文原形L1。	加曾利B2
4	70・45	深鉢	胴部	細砂 小石	暗褐色	良好	口縁部直立する。肩部弧線文。磨り消し縄文。縄文原形L1。	加曾利B2
5	70・45	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白 色粒	黒褐色	普通	口縁部に「8」の字状の貼付文。隆線に刻みを持つ横位区画線。	加曾利B1
6	70・45	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白 色粒	にぶい褐色	普通	胴部に弧線文。磨り消し縄文。縄文原形L1。	加曾利B2
7	71・45	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～3 mmの小石多い	暗赤灰	不良	縄文原形L1。	加曾利B
8	71・45	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多 い	にぶい赤 褐色	不良	太さ2mmの沈線による文様帯区画。区画内矢羽状に施文。	加曾利B2
9	71・45	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白 色粒	にぶい褐色	普通	沈線による弧線文。	加曾利B
10	71・45	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～3 mmの小石	灰褐色	普通	口縁部に指頭痕のある突帯が廻る。	加曾利B2
11	71・45	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2 mmの小石多い	にぶい黄 褐色	普通	外面跪整形。	加曾利B2
12	71・45	浅鉢	胴部	細砂 小石	褐色	良好	太さ1mmの沈線を胴部に間隔を開けて縦位に施文。	加曾利B2
13	71・45	深鉢	底部	細砂 細かい黒 色粒	明褐色	普通	底面副代痕。	加曾利B2
14	71・45	深鉢	底部	細砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	普通	底面副代痕。	後期
15	71・45	深鉢	底部	粗砂 φ1mmの 白色粒多い	灰褐色	普通	無文。	加曾利B
16	71・45	深鉢	胴部	細砂	褐色	良好	幅3mmの平行沈線による縦位施文。	後期
17	71・45	土偶	前面	細砂	にぶい褐色	良好		加曾利B

IV区 1号住居出土石器観察表

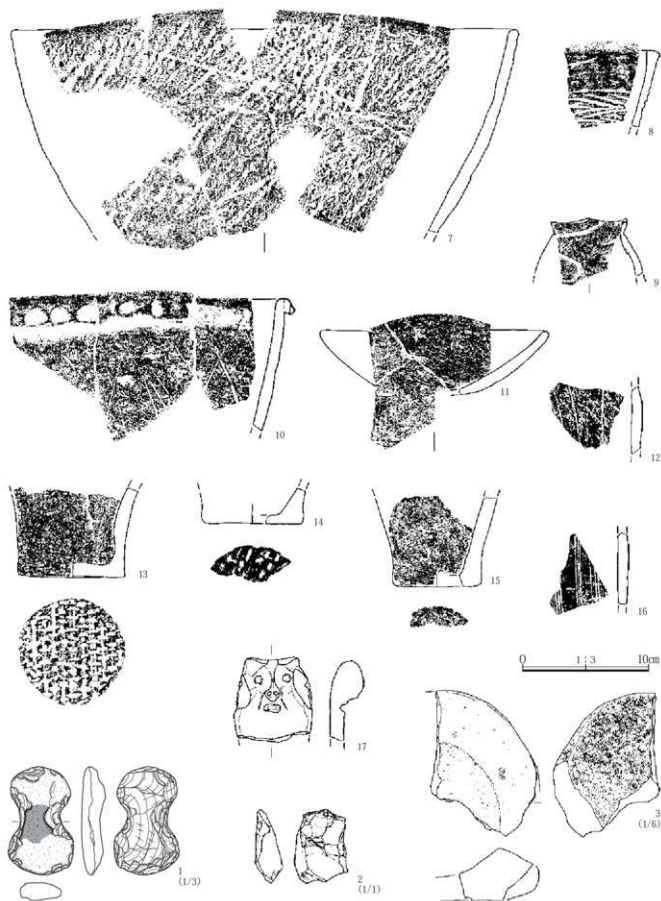
No.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
1	71・46	打製石斧	分銅型a	ホルンフェルス	8.6	5.2	94.2	刃部磨耗・穂部痕が顕著。
2	71・46	楔形石器		チャート	4.0	2.8	15.5	表裏面に対向する割離面。
3	71・46	石皿	有縁	粗粒輝石安山	23.0	16	3653.4	

IV区 2号住居出土土器観察表

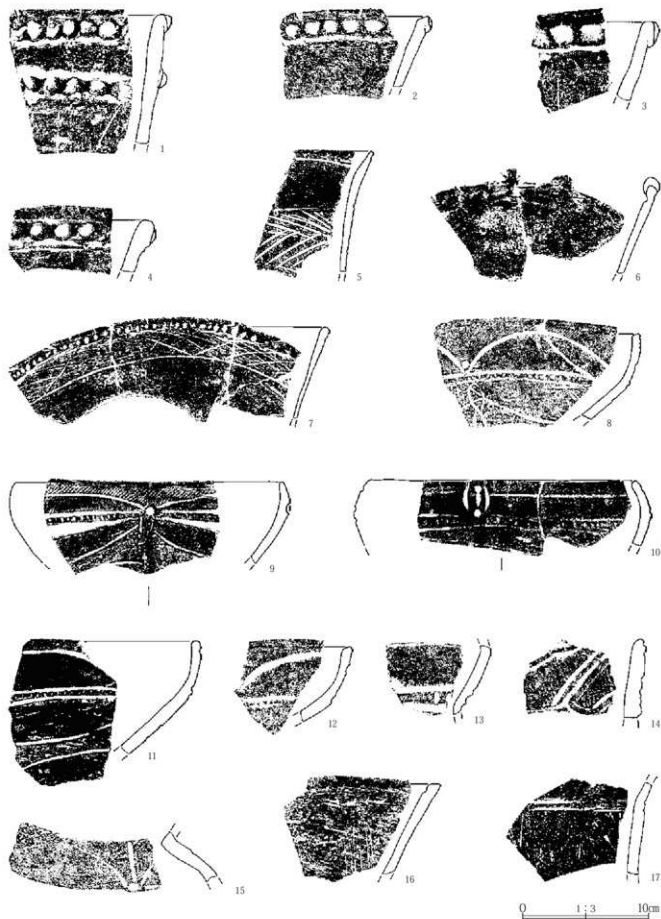
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁端部と頸部に指頭による凹凸を持つ隆線が廻る。胴部には、沈線施文。粗製土器	後期
2	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口唇部に指頭による凹凸を持つ隆線が廻る。	後期
3	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部に指頭による凹凸を持つ隆線が廻る。粗製土器。	堀之内2
4	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部に指頭による凹凸を持つ隆線が廻る。粗製土器。	堀之内2
5	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい黄褐色	普通	沈線による横位区画内に斜線施文。	加曾利B 2
6	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色	褐灰	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。口唇部に小突起。	後期
7	72・46	浅鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	明赤褐色	普通	口唇部に刻み。太さ1mmの沈線による横位区画。区画内格子目文。	加曾利B 2
8	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい赤褐色	不良	口縁部に沈線による横位区画。区画内を弧線施文。磨り消し縄文。胴部は弧線によるレンズ状の文様。磨り消し縄文。	加曾利B 2
9	72・46	浅鉢	口縁部～胴部	細砂 細かい白色粒	にぶい黄褐色	良好	口縁上部に縄文帯。頸部に沈線と刻みによる横位区画線。レンズ状の弧線文。縄文原体LR。	加曾利B 2
10	72・46	深鉢	口縁部	細砂 細かい黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口唇部に縄文帯。沈線による横位区画。対弧文。縄文原体LR。	加曾利B 2
11	72・46	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	褐灰	普通	口縁上部に縄文帯。沈線によるレンズ状の弧線文。縄文原体LR。	加曾利B 2
12	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石	にぶい赤褐色	不良	口縁部に沈線による横位区画。区画内を弧線施文。磨り消し縄文。胴部は弧線によるレンズ状の文様。磨り消し縄文。	加曾利B 2
13	72・46	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	褐灰	不良	沈線をクランク状に施文した横帯文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
14	72・46	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	明赤褐色	普通	幅6mmの平行沈線による文様施文。	加曾利B
15	72・46	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい黄褐色	普通	ソロバン玉形土器。胴部に太さ3mmの沈線によるレンズ状弧線文。磨り消し縄文。	加曾利B 2
16	72・46	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面沈線部位に間隔を開けて施文。	加曾利B 2
17	72・46	深鉢	胴部	細砂 細かい黒色粒	浅黄褐色	普通	沈線による横位区画。	加曾利B
18	73・46	深鉢	胴部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい黄褐色	不良	沈線部位に間隔を開けて施文。胴部に括れを持つ。	加曾利B
19	73・46	深鉢	胴部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい黄褐色	不良	沈線部位に間隔を開けて施文。	加曾利B 2
20	73・47	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	にぶい赤褐色	普通	幅5mmの平行沈線を縦位に施文。	加曾利B
21	73・47	浅鉢	口縁部～底部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口唇部に小突起を持つ小波状口縁になる。	加曾利B 2
22	73・47	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	黄褐色	普通	沈線による弧線文。	加曾利B
23	73・47	浅鉢	口縁部～底部	粗砂 白色粒	にぶい黄褐色	普通	無文底部。	加曾利B 2
24	73・47	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	極暗赤褐色	不良	小波状口縁。	加曾利B
25	73・47	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	黒褐色	不良	口縁部に「8」の字状の貼付文。沈線による弧線文。補修孔。全体に厚減多く文様不鮮明。	加曾利B
26	73・47	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部に「8」の字状の貼付文。沈線と突起による横位区画。	堀之内2
27	73・47	注口	注口部	粗砂 白色粒	にぶい黄褐色	普通	ミガキ整形。	加曾利B 2
28	73・47	深鉢	底部	粗砂 白色	灰褐色	普通	底部穿孔。	後期
29	74・47	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄褐色	普通	底面副代瓦。	後期
30	74・47	深鉢	胴部～底部	粗砂 細かい白色粒	にぶい黄褐色	普通	底面副代瓦。	後期
31	74・47	深鉢	胴部～底部	粗砂 白色粒多い	にぶい黄褐色	普通	底面剥落しているが副代瓦を残す。	後期
32	74・47	深鉢	底部	粗砂 白色	にぶい黄褐色	普通	底面副代瓦。	後期
33	74・47	深鉢	胴部～底部	粗砂 白色粒	褐色	普通	無文。	後期



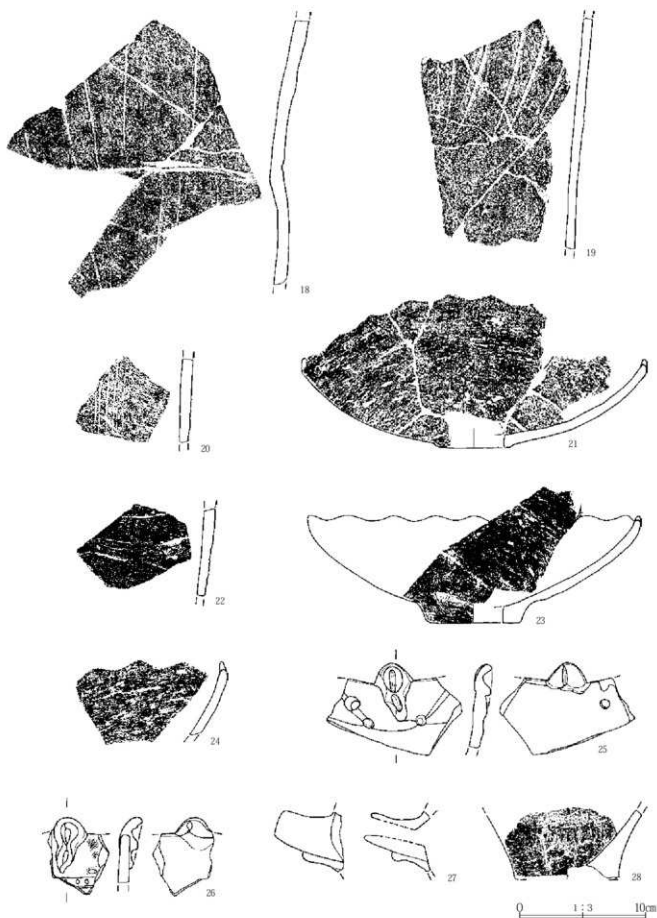
第70図 IV区1号住居出土遺物(1)



第71図 IV区1号住居出土遺物(2)

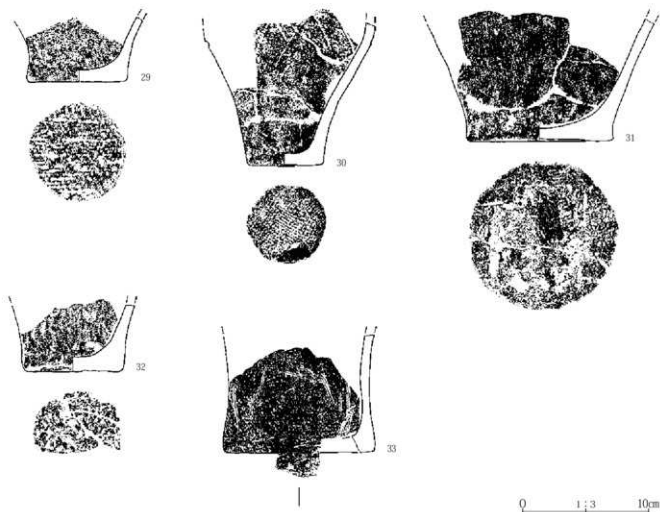


第72図 IV区2号住居出土遺物(1)



第73図 IV区2号住居出土遺物(2)

第2章 検出された遺構と遺物

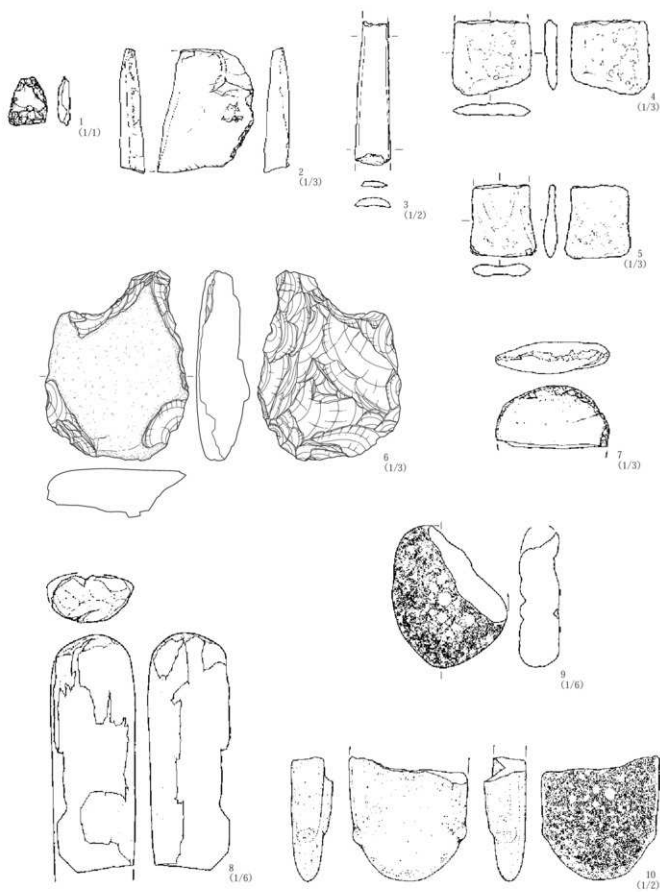


第74図 IV区2号住居出土遺物(3)

IV区 2号住居出土石器観察表

no.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
1	75・47	石鏃	平基無	黒曜石	1.3	1.1	0.3	左辺の割離が右側の返し部に抜ける。未製品。
2	75・47	削器		黒色頁岩	7.6	9.2	138.4	幅広削片の端部を粗く加工する。
3	75・47	石剣?		緑色片岩	7.6	1.9	10.0	表面は平削で、石棒より石剣に近い。内側縁は研磨により稜を形成。
4	75・47	砥石		牛伏砂岩	5.9	6.2	58.6	表裏面・中央付近は凹凸が残る。側縁側の使用顯著。
5	75・47	砥石		砂岩	5.7	5.2	35.0	表裏面に浅い凹み。側縁側が顯著に磨耗。被熱。
6	75・47	打製石斧	分銅型a	ホルンフェルス	15.0	13.2	732.4	下半を斜位欠損。加工は粗く、未製品?裏面礫面。
7	75・47	砥石		ホルンフェルス	4.9	8.9	142.0	両辺加工して形状を整える。エッジを磨打。
8	75・47	石棒	無頭	緑色片岩	37.4	13.0	4716.8	被熱破損。
9	75・47	多孔石	偏平礫	粗粒輝石安山岩	23.0	18.4	3200.5	表裏面に多数の孔を穿つ。
10	75・47	石皿	定型	粗粒輝石安山岩	20.0	19.0	2657.7	両側縁に突起。裏面に孔を穿つ。





第75図 IV区2号住居出土遺物(4)

第2章 検出された遺構と遺物

IV区 3号・4号住居出土土器観察表

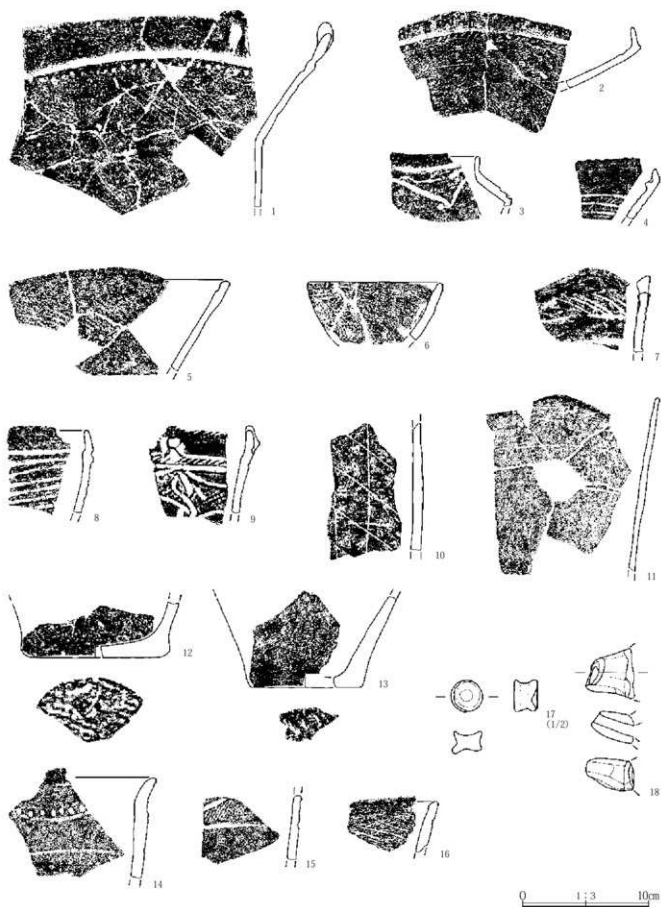
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 φ1~2mmの小石	黄橙	不良	口縁部内面に2条の沈線が廻る。口唇部に小突起。外面は厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B
2	76・48	浅鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石・白色粒	暗褐	普通	口縁部小波状になる。	加曾利B 2
3	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい赤褐	不良	ソロバン形土器。斜部に沈線による弧線文。	加曾利B 2
4	76・48	浅鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石・白色粒	赤褐	普通	口縁部小波状になる。内面に沈線が数条廻り、剣突が施文される。外面沈線による横線文。	加曾利B 2
5	76・48	浅鉢	口縁部	粗砂 細かい灰色粒	灰黄褐	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面に沈線による斜線文。	加曾利B 2
6	76・48	浅鉢	口縁部	細砂 黒色粒	灰白	不良	口縁部下に沈線が廻る。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
7	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	灰黄褐	普通	波状口縁。太さ1mmの沈線による文様帯区画。区画内斜線文。	加曾利B
8	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	暗赤褐	普通	太さ2mmの沈線横位施文。	加曾利B
9	76・48	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの黒色粒	暗赤褐	良好	太さ3mmの沈線による「S」字形や弧線文様。	加曾利B 2
10	76・48	深鉢	胴部	粗砂 φ1mmの小石・黒色粒	にぶい黄褐	普通	太さ1mm未満の細い沈線横位施文。	加曾利B
11	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	にぶい赤褐	不良	波状口縁。沈線による文様施文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B
12	76・48	深鉢	底部	細砂	にぶい橙	普通	底面削代直。	加曾利B
13	76・48	深鉢	底部	粗砂 黒色粒	淡黄	普通	底面削代直。	加曾利B
14	76・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	灰褐	普通	口縁部沈線と剣突列による文様帯区画。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
15	76・48	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	灰褐	普通	沈線による弧線文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B
16	76・48	深鉢	口縁部	粗砂	にぶい赤褐	不良	口縁部内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面太さ1mmの沈線による斜線文。	加曾利B
17	76・48	耳飾	完形	粗砂	にぶい赤褐	普通	外径1.9cm、厚み1.26cm、括れ部1.39cm。	後期
18	76・48	注口	注口部	粗砂 黒色粒	淡黄	普通	無文。全体に厚減が多い。	加曾利B

IV区 3号・4号住居出土土器観察表

No.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
1	77・48	石鐮	凹基無	チャート	2.1	1.7	1.2	加工は丁車で、完成状態。先端・右辺の返し部を欠損。
2	77・48	石鐮	凹基無	チャート	1.8	1.3	0.6	形態的には石鐮を指向するものだが、周辺加工は厚く、石鐮の製作に適用される押圧磨盤とは異なる。
3	77・48	石鐮	凹基無	黒曜石	1.7	1.3	0.4	加工は丁車で、完成状態。右辺・返し部を欠損。
4	77・48	石鐮	凹基無	チャート	2.2	1.6	1.0	加工は丁車で、薄身。先端部欠損。完成状態。
5	77・48	石鐮	凸基有	チャート	2.5	1.2	1.1	加工は丁車で、完成状態。
6	77・48	石鐮	凸基有	チャート	2.3	1.4	0.9	返し部の特徴的で、突出気味。完成状態？
7	77・48	多孔石	楕円盤	粗粒輝石安山岩	27.2	21.4	1000.0	表裏面ともローレット状の凹部。打直。
8	77・48	石鐮	チャート	チャート	5.0	1.6	2.8	先端の削離面は新鮮で、未使用。
9	77・48	打製石斧	分割型a	ホルンフェルス	12.8	9.7	444.4	刃部再生。磨化して擦痕等は不明。裏面礫面。
10	77・48	打製石斧	分割型a	黒色頁岩	11.4	8.6	333.1	欠損後、再加工の痕跡。打製石斧としては未製品。
11	77・48	打製石斧	分割型a	ホルンフェルス	13.9	10.4	609.0	磨化が激しく、完成状態か未製品か判断できない。
12	77・48	多孔石	楕円盤	粗粒輝石安山岩	21.4	20	3587.6	表裏面に多数の孔を穿つ。
13	77・48	石鐮	無縁	粗粒輝石安山岩	26.6	20.4	4267.5	

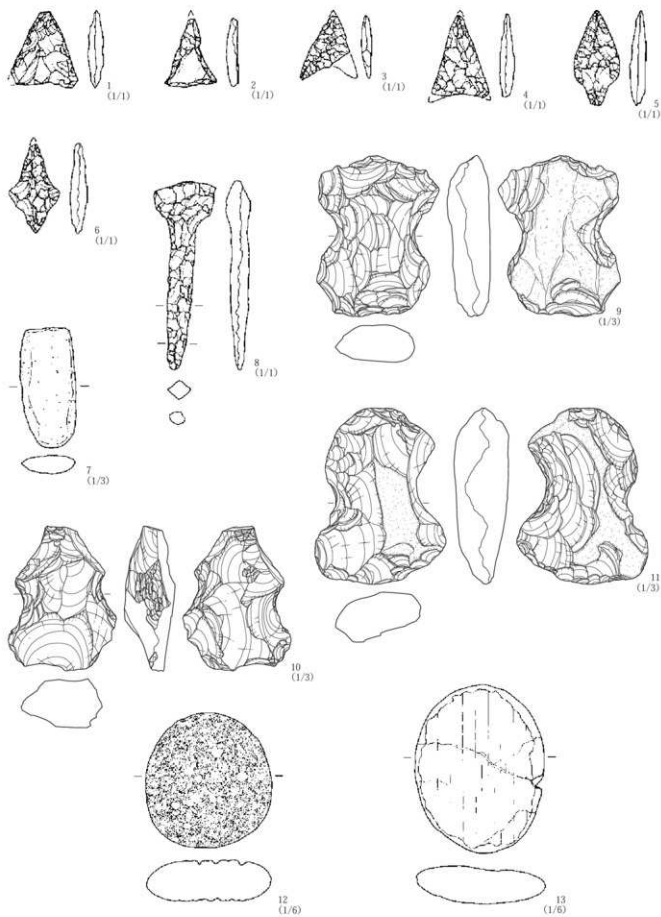
IV区 5号・6号住居出土土器観察表

遺構	No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
5号住居	1	78・48	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	褐	普通	口縁部内面に凹文をつ持降線筋付。胴部太さ3mmの沈線を開間けて施文。	加曾利B
5号住居	2	78・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい赤褐	普通	「8」の字状の粘土貼り付け。沈線による横帯文。	加曾利B 2
5号住居	3	78・48	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	暗赤褐	不良	縄文原体LR横位施文。	加曾利B
5号住居	4	78・48	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	明赤褐	不良	太さ1mmの沈線による斜線文。	加曾利B
5号住居	5	78・48	深鉢	底部	細砂	橙	不良	無文。	後期
5号住居	6	78・48	深鉢	底部	粗砂 白色粒	にぶい赤褐	不良	底面削代直。	加曾利B
6号住居	7	78・48	浅鉢	口縁部	細砂 白色粒	にぶい黄褐	普通	太さ3mmの沈線による弧線文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加曾利B
6号住居	8	78・48	深鉢	胴部	細砂 φ1~2mmの小石・白色粒	にぶい黄褐	普通	太さ1mmの沈線による斜線文。	加曾利B

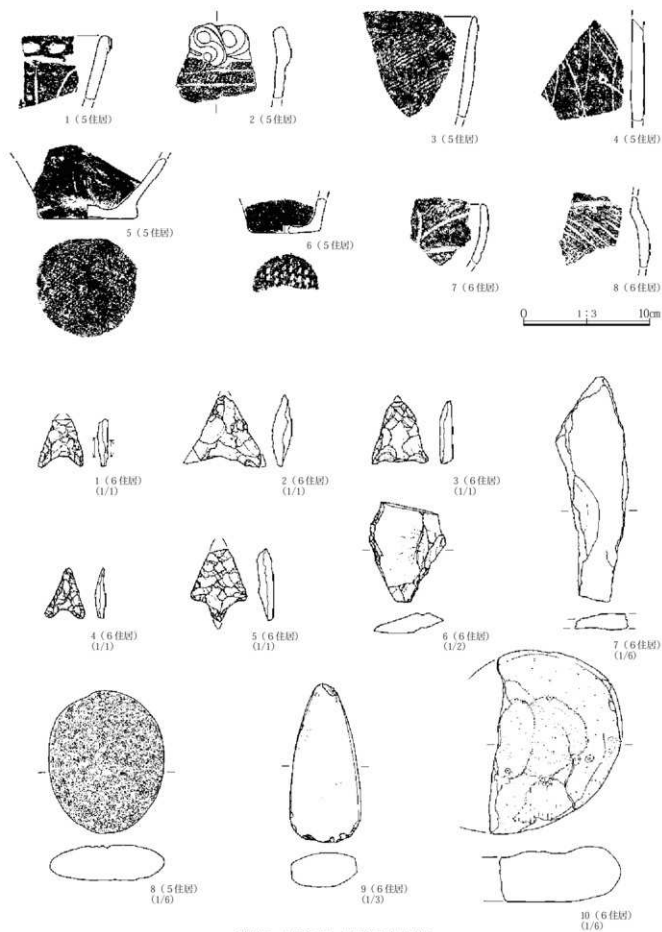


第76図 IV区3号・4号住居出土物(1)

第2章 検出された遺構と遺物



第77図 IV区3号・4号住居出土遺物(2)



第78図 IV区5号・6号住居出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

IV区 5・6号住居出土石器観察表

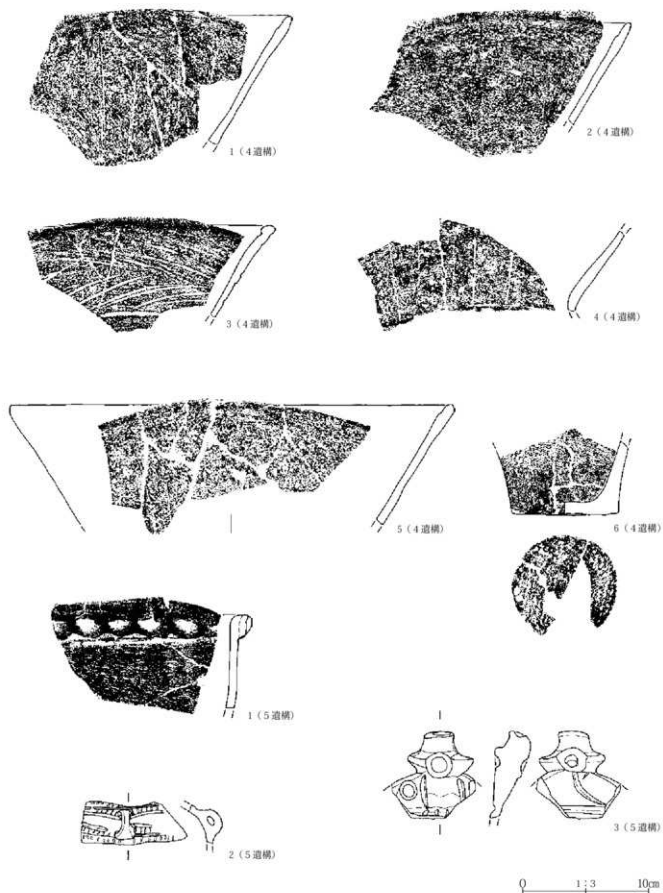
遺構	No.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
6号住居	1	78・48	石鏝	凹基無	黒曜石	1.3	1.2	0.3	表裏面とも器体中央を研磨する。局部磨製石鏝。
6号住居	2	78・48	石鏝	凹基無	黒曜石	1.9	1.8	1.1	加工は、粗く、器体は厚い。未製品。
6号住居	3	78・48	石鏝	凸基有	珪質頁岩	1.7	1.5	0.8	先端に衝撃割面を有する割面がある。
6号住居	4	78・48	石鏝	凹基無	チャート	1.4	1.1	0.2	先端は下側で、薄身。完成状態。
6号住居	5	78・48	石鏝	凸基有	チャート	1.9	1.5	1.0	破損後、破損面を微細研磨。薄身。完成状態。
6号住居	6	78・48	磨器		チャート	5.3	4.1	23.0	表面前左辺に連続したやや厚い割面を加え、刃部を作出するほか、右側裏面を粗く加工。
6号住居	7	78・48	石皿	有縁	緑色片岩	36.3	11.6	1535.9	
5号住居	8	78・48	多孔石	扁平鏝	粗粒輝石安山岩	22.4	18.2	2873.5	
6号住居	9	78・48	磨製石斧	定角	珪質頁岩	12.5	5.6	273.2	先端に磨耗面を伴う刃口を有。
6号住居	10	78・48	石皿	有縁 a	粗粒輝石安山岩	29.0	20.6	7550.0	中央の凹部に接して、浅い凹部が存在。凹部は凹磨アブの磨石が対応。

IV区 遺構出土石器観察表

遺構	No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
4遺構	1	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	灰黄褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面に平行沈線がまばらに施文されるが摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
4遺構	2	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	灰黄褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面に平行沈線がまばらに施文されるが摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
4遺構	3	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい褐色	不良	口縁部内面に太さ2mmの沈線が1条廻る。外面太さ2mmの沈線による斜線で矢羽状に施文。	加賀利B 2
4遺構	4	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	灰黄褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面に平行沈線がまばらに施文されるが摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
4遺構	5	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	灰黄褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面に平行沈線がまばらに施文されるが摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
4遺構	6	79・49	深鉢	底部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい褐色	普通	底面に施文。	加賀利B
5遺構	1	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	淡黄褐色	普通	口縁部に凹凸を持つ隆線が廻る。	加賀利B
5遺構	2	79・49	注口	把手部	細砂	褐色	不良	楕円状把手。楕円方向に沈線を併行させ爪形文を施文。	加賀利B
5遺構	3	79・49	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部突起。	加賀利B 2
6遺構	1	80・49	深鉢	口縁部～胴部	粗砂	褐色	不良	口縁部内面に横位の沈線が廻る。外面或は口縁部側縁にφ4mmの孔。横帯文クラク状になる。	加賀利B 1
6遺構	2	80・49	浅鉢	口縁部	細砂 黒色粒	灰白	普通	内面に太さ3mmの沈線4条が廻る。外面隆線が廻る。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 1
6遺構	3	80・50	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒多い	にぶい褐色	普通	無文粗製土器。	加賀利B
6遺構	4	80・50	深鉢	口縁部～胴部	粗砂	褐色	不良	口縁部内面に横位の沈線が廻る。外面或は口縁部側縁にφ4mmの孔。横帯文クラク状になる。	加賀利B 2
9遺構	1	80・50	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒多い	褐色	普通	幅1mmの細い沈線による文様帯横位区画。区画内をレンズ状の孤線文を置く。文様帯内は磨り消し縄文。縄文原形1.R。	加賀利B 2
21遺構	1	80・50	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	淡黄褐色	不良	沈線による孤線文。文様帯内磨り消し縄文。摩滅多く文様不鮮明。	加賀利B 2
21遺構	2	80・50	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石	暗褐色	普通	口縁部に小突起。口縁部沈線による横位区画線と孤線文。	加賀利B 2
21遺構	3	80・50	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部に突起。口縁部は沈線による孤線文。	加賀利B 2
21遺構	4	80・50	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部に凹凸を持つ隆線が廻る。口縁部文様帯には、沈線による孤線文施文。全体に摩滅多い。	加賀利内 2
21遺構	5	80・50	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	黒褐色	普通	口縁部内面に刺突と沈線が廻る。外面横位の沈線施文。	加賀利B 2
21遺構	6	80・50	深鉢	胴部	粗砂 細かい白色粒	淡黄褐色	普通	横位の隆線に刻み。沈線による孤線文。文様帯内磨り消し縄文。	加賀利B 2
21遺構	7	80・50	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石	暗褐色	普通	口縁部に小突起。口縁部横位の沈線施文。	加賀利B 2
21遺構	8	80・50	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石	暗褐色	良	口縁部沈線による横位区画線と孤線文。	加賀利B 2
21遺構	9	81・50	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 白色粒多い	明褐色	普通	口縁部に刻みのある隆線1条廻る。沈線クラク状に横位施文。	加賀利B 2
21遺構	10	81・50	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	灰褐色	普通	口縁部の突起部。	加賀利B 2
21遺構	11	81・50	深鉢	底部	細砂	灰褐色	普通	底面刺突部。	後期
21遺構	12	81・50	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	淡黄褐色	普通	底面刺突部。	加賀利B
23遺構	1	81・51	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2mmの小石	赤褐色	普通	全体に摩滅多く文様不鮮明。口縁部に3連の小突起。内面に沈線が廻る。	加賀利B 2
23遺構	2	81・51	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部内面に沈線が廻る。外面は、沈線による横位区画と斜線文。口縁部に刻み。	加賀利B 2
23遺構	3	82・51	深鉢	胴部	粗砂 φ1mmの小石・黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部内面に沈線が廻る。外面は沈線による横位区画と矢羽状施文。	加賀利B 2
23遺構	4	82・51	深鉢	胴部	砂粒 φ1mmの小石・白色粒	灰褐色	普通	沈線による横位区画内に斜線文。	加賀利B 2

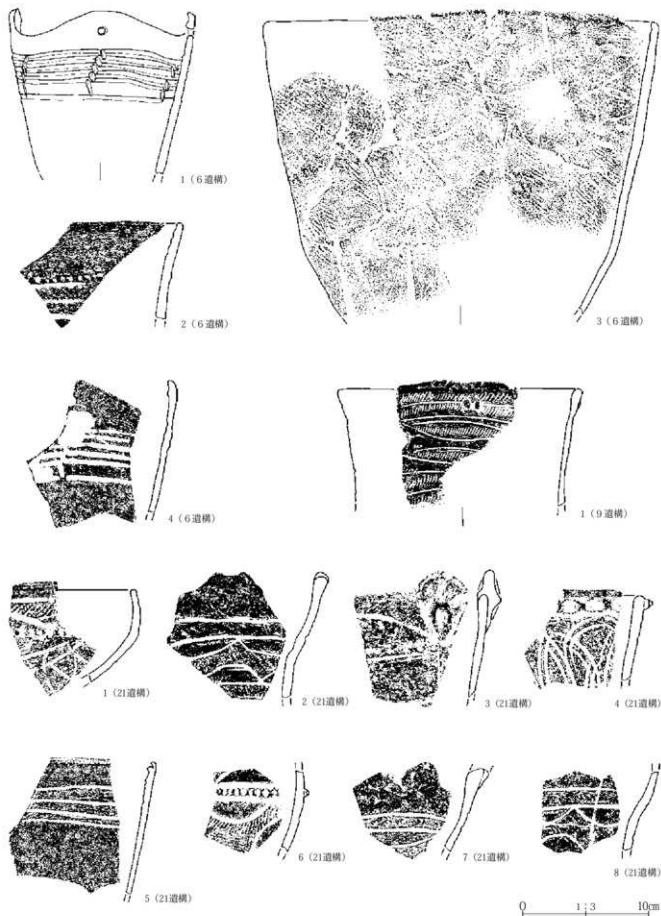
## 第5節 IV区の調査

遺構	No.	図・PL	発掘	部位	土質	色調	焼成	文様の特徴等	備考
23遺構	5	82・51	深鉢	口縁部	細砂 黒色粒	淡黄	普通	幅3mm平行沈線が縦位に施文される。粗製土器。	加賀利B
23遺構	6	82・51	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	にぶい黄褐色	普通	小波状1線になる。口縁部内面に沈線が廻る。外面は、沈線による横帯文に区切り縦線文。厚減が多く縄文原体不明。	加賀利B2
23遺構	7	82・51	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	褐色	良好	幅2mmの浅い沈線が縦位に施文される。	加賀利B
24遺構	1	82・51	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	斜部に沈線による弧線文と寄り消し縄文。胴部斜線文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
24遺構	2	83・51	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	斜部に沈線による弧線文と寄り消し縄文。胴部斜線文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
24遺構	3	83・51	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤褐色	普通	全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
27遺構	1	83・51	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 白色・黒色粒	灰褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面厚減が多く文様不明。	加賀利B
27遺構	2	83・51	浅鉢	口縁部	細砂 白色・黒色粒	褐色	普通	口唇部に小突起を付け顕面状にする。口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面は沈線による斜線文。頸部には沈線による横位区画。	加賀利B2
27遺構	3	83・51	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	淡黄	普通	口縁部部に凹凸を持つ隆線貼付。胴部には細く浅い沈線を間隔を置いて縦位に施文。	加賀利B
27遺構	4	83・51	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	淡黄	不良	胴部に沈線による斜格状目文。	加賀利B
27遺構	5	83・52	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石 白色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部端部と頸部に凹凸を持つ隆線貼付。口縁部には沈線による斜線文。	加賀利B2
27遺構	6	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい褐色	普通	突起外面、外面に沈線施文。	加賀利B2
27遺構	7	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい褐色	普通	口縁部外面に沈線による横位区画内線。小波状1線になる。	加賀利B2
27遺構	8	84・52	深鉢	胴部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	明黄褐色	普通	胴部に沈線による横位区画縦線。縄文原体LR。	加賀利B
27遺構	9	84・52	深鉢	底部	粗砂 白色粒多い	褐色	普通	底面副代痕。	加賀利B
27遺構	10	84・52	深鉢	底部	粗砂 φ1mmの小石	褐色	良	底面副代痕。	加賀利B
37遺構	1	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい褐色	普通	口縁部部に凹凸を持つ隆線貼付。胴部には細く浅い沈線を間隔を置いて縦位に施文される。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B
42遺構	1	84・52	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2mmの小石	にぶい赤褐色	普通	沈線による横帯文。	加賀利B2
43遺構	1	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	にぶい褐色	普通	口縁部端部と頸部に凹凸を持つ隆線貼付。胴部には細く浅い沈線を間隔を置いて縦位に施文される。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B
44遺構	1	84・52	深鉢	胴部	粗砂 細かい白色粒	にぶい褐色	普通	沈線による横帯文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B
63遺構	1	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	褐色	普通	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面縦位方向にまばらに沈線文。	加賀利B2
63遺構	2	84・52	深鉢	底部	粗砂 白色粒多い	明赤褐色	普通	底面副代痕	加賀利B
65遺構	1	84・52	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	にぶい褐色	普通	口縁部・頸部に凹凸を持つ隆線を貼付。	加賀利B
65遺構	2	84・52	浅鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石・白色粒	赤褐色	普通	口縁部に斜突。沈線による斜線文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
68遺構	1	85・52	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	暗褐色	普通	口縁に凹凸を持つ隆線貼付。胴部は幅3mmの平行沈線を間隔を置いて縦位に施文。	加賀利B2
68遺構	2	85・52	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	暗褐色	不良	皮状1線突起。波長部にφ6mmの孔を持つ。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
81遺構	1	85・53	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい褐色	普通	口唇部厚ませ凹凸施文。	加賀利B
95遺構	1	86・53	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	灰白	普通	口縁に「8」の字状の小突起を貼付する。口縁部に沈線による方形の文様区画。厚減多く文様不鮮明。	加賀利B2
95遺構	2	86・53	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	にぶい黄褐色	普通	口縁部部に凹凸を持つ隆線貼付。頸部柄部に沈線と斜線による横位の文様帯区画縦線文。口縁部、胴部に沈線による斜線文。	加賀利B2
95遺構	3	86・53	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	褐色	普通	口縁部に太さ4mmの沈線が廻り口縁部文様帯を区画する。口縁部は縄文施文。沈線の下に斜突。胴部は沈線による斜線文。	加賀利B2
95遺構	4	86・53	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	黒褐色	普通	太さ3mmの沈線による口縁部縦位区画。胴部は沈線による斜線文。	加賀利B2
95遺構	5	86・53	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1～2mmの小石	褐色	普通	底面副代痕。胴部は厚減が多く文様不明。	後期
106遺構	1	86・53	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰黄褐色	普通	口唇部に小突起。内面に2条の沈線が廻る。斜線文で脊状に施文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B2
106遺構	2	86・53	浅鉢	胴部	粗砂 黒色粒多い	灰黄褐色	普通	沈線による横位区画内に矢羽状施文。	加賀利B2
106遺構	3	86・53	浅鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	灰黄褐色	普通	沈線による横帯文。	加賀利B2
106遺構	4	86・53	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石	淡黄褐色	普通	口縁「く」の字状に立ち上がる。φ5mmの粘土貼付文。全体に厚減しており文様不明。	加賀利B2
106遺構	5	86・53	深鉢	胴部～底部	粗砂 白色粒	にぶい褐色	不良	無文。	加賀利B2
109遺構	1	85・53	深鉢	胴部～底部	粗砂 白色粒	にぶい褐色	不良	底面副代痕。	後期

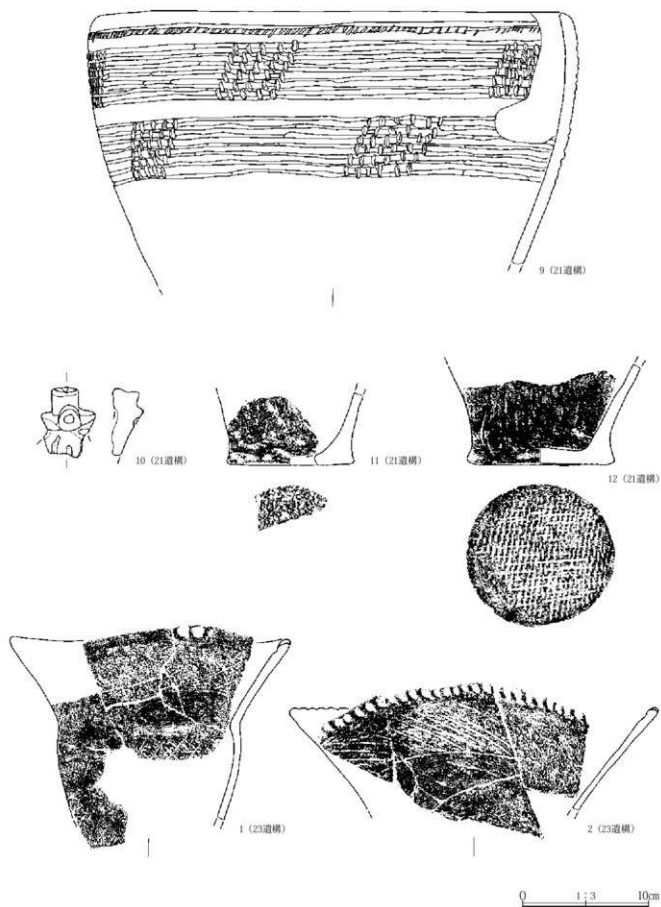


第79図 IV区4号・5号道構出土土器





第80図 IV区6号・9号・21号遺構出土土器



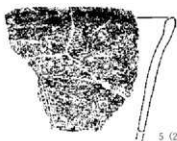
第81図 IV区21号・23号遺構出土土器



3 (23道横)



4 (23道横)



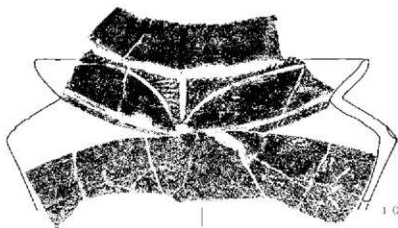
5 (23道横)



7 (23道横)



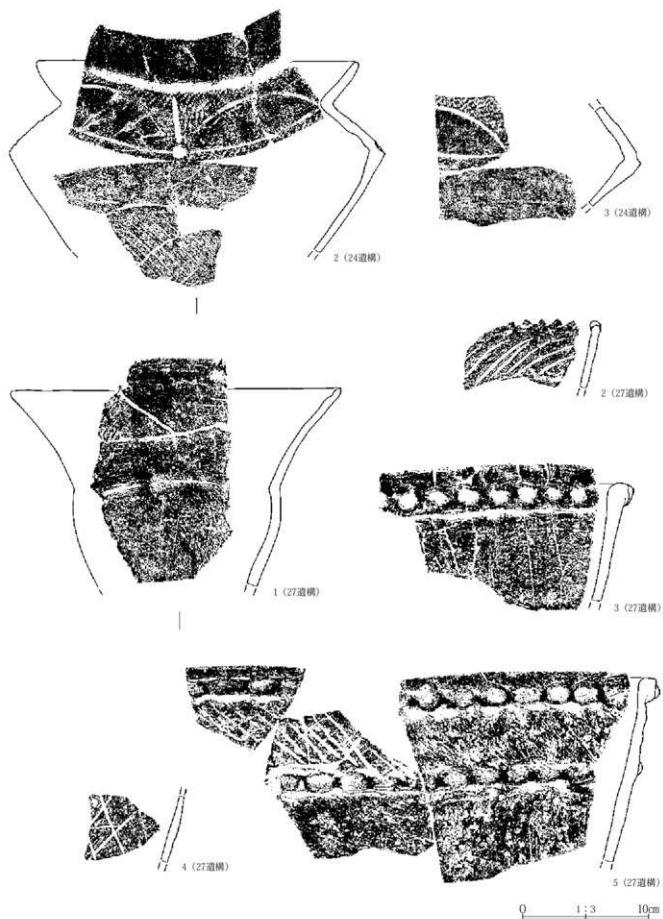
6 (23道横)



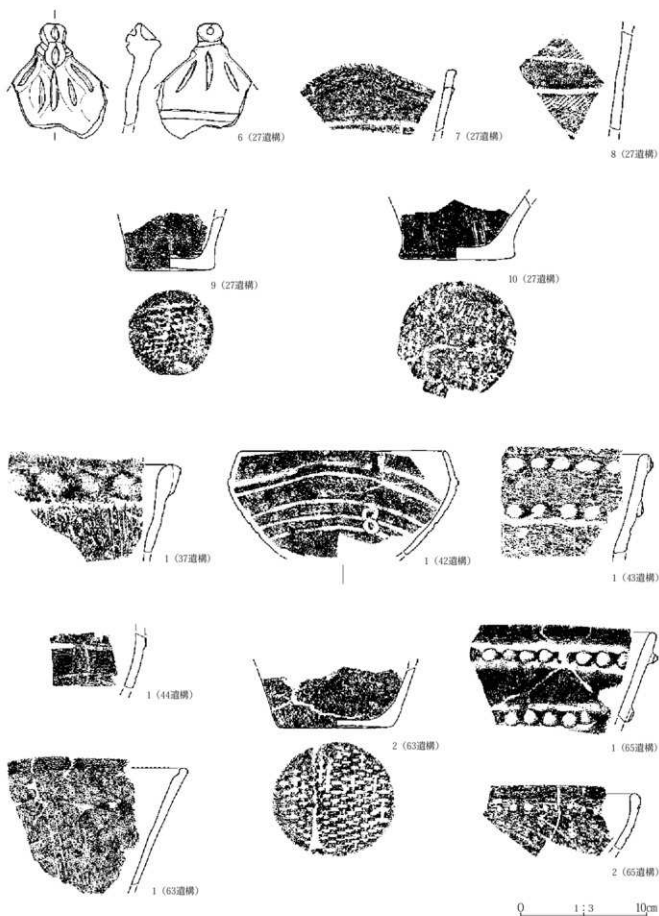
1 (24道横)

0 1:3 10cm

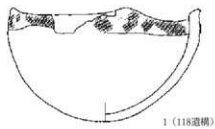
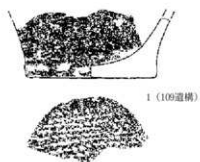
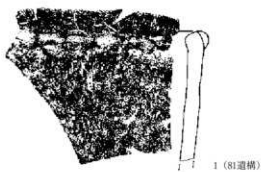
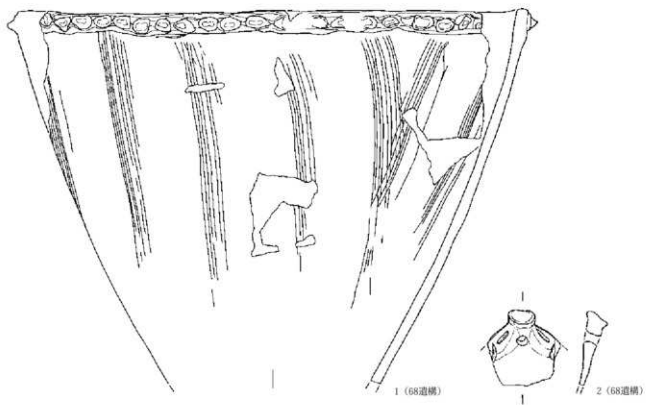
第82図 IV区23号・24号道横出土土器



第83図 IV区24号・27号遺構出土土器

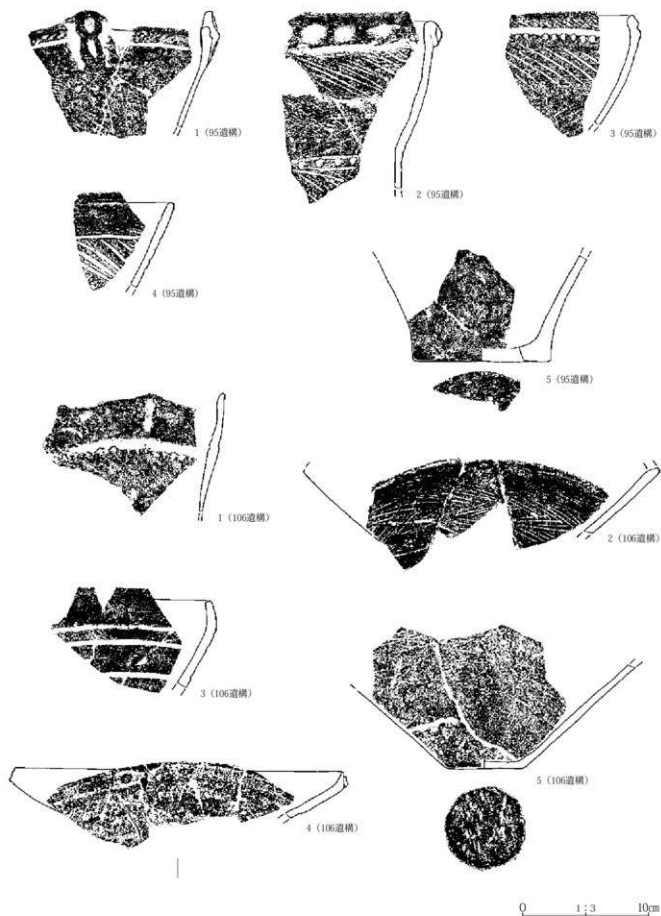


第84図 IV区27号・37号・42号・43号・44号・63号・65号道横出土土器

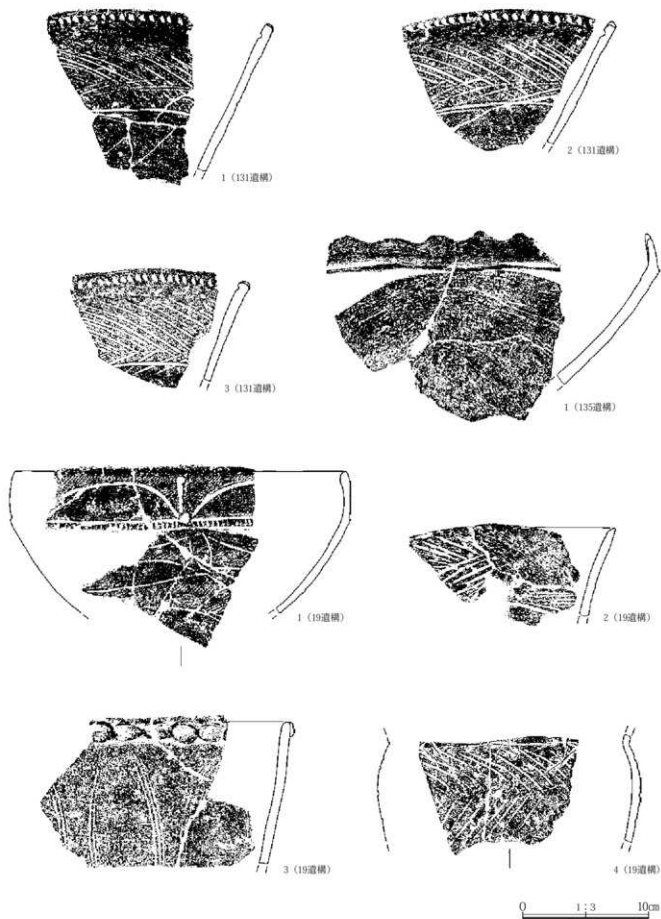


0 1:3 10cm

第85図 IV区68号・81号・109号・118号・122号遺構出土土器

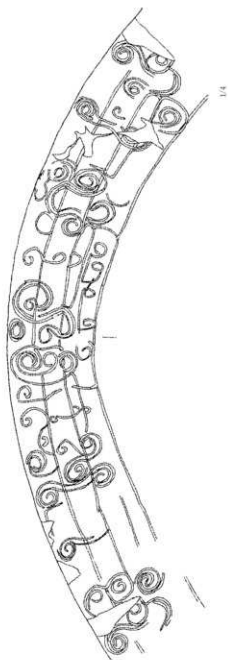
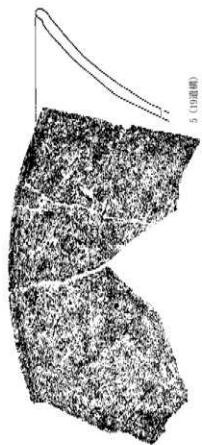
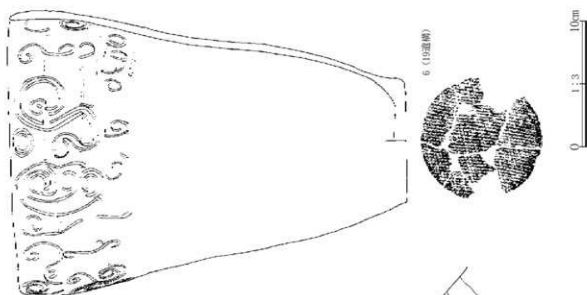


第86図 IV区95号・106号遺構出土土器



第87図 IV区19号・131号遺構出土土器





## 第2章 検出された遺構と遺物

遺構	No.	図・PL	部種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
118遺構	1	85・53	浅鉢	口縁部～底部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい	粗	口縁に太さ1mmの沈線が廻り、口縁部文様帯を区画する。LRの縄文施文。	加曾利B 2
122遺構	1	85・53	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	黒	普通	ソノパン玉形土器。頸部屈曲部に沈線による横位区画。肩部は弧線文に磨り消し縄文。	加曾利B 2
131遺構	1	87・53	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	にぶい	粗	口唇部を削む。内面に太さ3～4mmの太い沈線が1条廻る。外面に沈線による横位区画。区画内斜線文施文。	加曾利B 2
131遺構	2	87・53	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	にぶい	粗	口唇部を削む。内面に太さ3～4mmの太い沈線が1条廻る。外面に沈線による横位区画。区画内斜線文施文。	加曾利B 2
131遺構	3	87・53	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	にぶい	粗	口唇部を削む。内面に太さ3～4mmの太い沈線が1条廻る。外面に沈線による横位区画。区画内斜線文施文。	加曾利B 2
135遺構	1	87・53	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 細かい白色粒	暗赤褐	普通	波状口縁になる。	加曾利B 2
19遺構	1	87・53	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい	赤褐	口縁部に沈線による横位区画。区画内を弧線文施文。胴部は弧線によるレンズ状の文様。磨り消し縄文。縄文施文LR。	加曾利B 2
19遺構	2	87・53	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	にぶい	粗	口縁部内面に1条の沈線が廻る。外面は沈線による斜線文を矢羽状に施文。全体に摩滅多く文様不鮮明。	加曾利B 2
19遺構	3	87・54	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい	普通	口縁部内面に凹凸を持つ隣接層付。胴部は幅2～3mmの平行沈線を付弧状に施文。	加曾利B
19遺構	4	87・54	深鉢	胴部	細砂 黒色粒	灰黄褐	普通	胴部に沈線による横位区画。胴部は沈線による斜線文を矢羽状に施文。	加曾利B
19遺構	5	88・54	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	灰黄褐	普通	口縁部内面に沈線が1条廻る。外面は沈線による横位帯文。全体に摩滅が多く文様はつきりしない。	堀之内
19遺構	6	88・54	深鉢	完形	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	黒	普通	口縁部内面に太さ2mmの沈線1条廻る。外面沈線横位施文と籤手文。	堀之内

### 盛り土遺構（第89・90図，PL.27・54）

本遺構としたものは、調査区のほぼ中央に幅2.5～5mで東西方向に伸びる、他より若干高くなっている礫混じり層を盛り土遺構として調査した。調査時のデータは、断面図が無く、エレベーション図のみである。エレベーション図や盛り土遺構の断面写真で判断すると、土の堆積に変化はなく、地山層に礫が混じった状況に見える。盛り土遺構付近の地形は、盛り土部分の礫が多く見える面から、南側できつい傾斜で下っていき河川へと続く。一方北側は、緩やかな傾斜である。本区の遺構

は、この盛り土遺構の北側にひろがる傾斜の緩やかな面から多く検出されている。これらのことから、結論として、本調査区にある盛り土遺構は、調査区の南側に東西方向に流れる河川による自然堤防状の高まりと推測される。IV区の盛り土遺構と呼ばれる礫混じりの層は、VI区（PL.30）でも確認されている。

本遺構からは、礫に混じり加曾利B 2式の深鉢、打製石斧、凹石、石棒破片が出土している。出土した土器の大半は小片で、摩滅しているものも多い。

### IV区 盛り土遺構出土土器

遺構	No.	図・PL	部種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
盛り土遺構	1	91・54	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	黒褐	不良	口縁部突起。口縁部内面に沈線が廻る。外面にφ10mmの円形刺突列。沈線による横位区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
盛り土遺構	2	91・54	深鉢	胴部	粗砂 細かい白色粒	にぶい	普通	沈線による横位区画内を沈線の斜線で矢羽状に施文。	加曾利B 2
盛り土遺構	3	91・54	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	黒褐	不良	口縁部突起。口縁部内面に沈線が廻る。外面にφ10mmの円形刺突列。沈線による横位区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
盛り土遺構	4	91・54	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	明褐色	普通	口縁部沈線によるレンズ状の弧線文。胴部沈線による斜線で矢羽状に施文。	加曾利B 2

### IV区 盛り土遺構出土土器

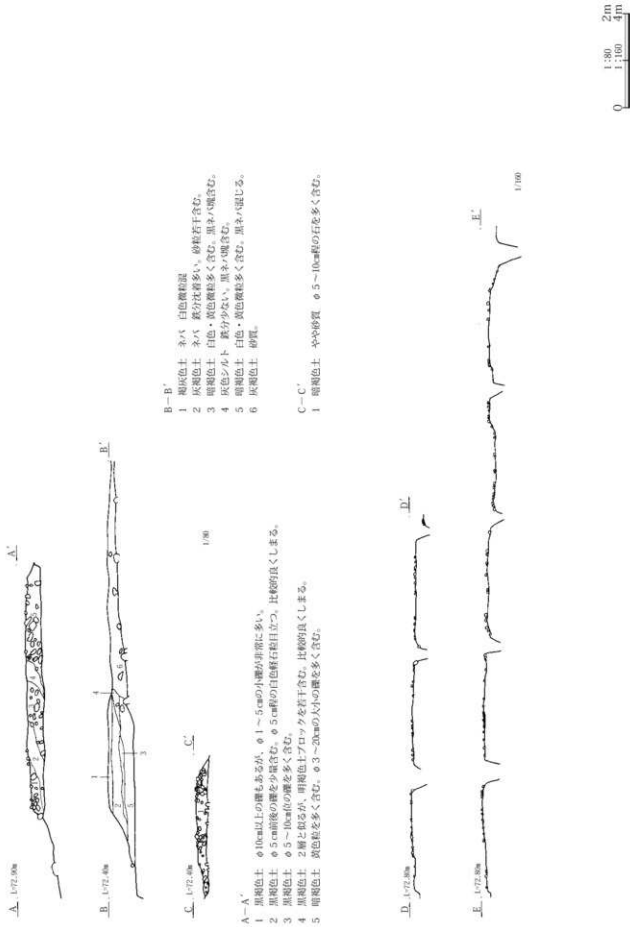
No.	図・PL	部種	形類	石材	長	幅	重	備考
1	91・54	打製石斧	分銅型	ホルンフェルス	12.2	10.8	454.5	刃部は大きく変形、再生の可能性あり。
2	91・54	凹石	扁平型	粗粒輝石安山岩	10.7	6.9	517.5	側面・小口とも磨打され、平坦化。石融型。
3	91・54	石棒	不明	緑色片岩	9.9	2.1	120.1	上下両端を欠く。胴部を丁寧に研磨。小形。

第5節 IV区の調査



第588図 IV区盛土

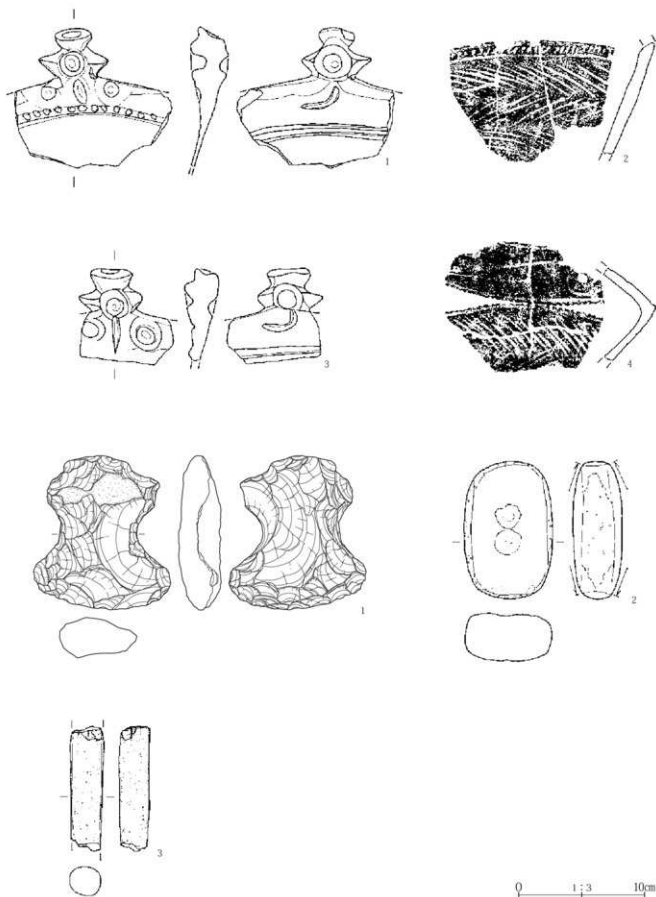
A



- B-B'
- 1 黒褐色土 ネバ 白色微細砂
  - 2 灰褐色土 ネバ 炭分沈着多い、砂粒若干含む。
  - 3 暗褐色土 白色、黄色微粒多く含む、黒ネバも含む。
  - 4 灰色シルト 炭分少ない、黒ネバも含む。
  - 5 暗褐色土 白色、黄色微粒多く含む、黒ネバも混じる。
  - 6 灰褐色土 砂質。
- C-C'
- 1 暗褐色土 やや砂質 φ5~10cm程の石を多く含む。

- A-A'
- 1 黒褐色土 φ10cm以上の礫もあるが、φ1~5cmの小礫が非常に多い。
  - 2 黒褐色土 φ5cm前後の礫を少量含む。φ5cm程の白色軽石類も立つ、比較的良くしまる。
  - 3 黒褐色土 φ5~10cmの礫を多く含む。
  - 4 黒褐色土 2層と同等が、明褐色土ブロックを若干含む。比較的良くしまる。
  - 5 暗褐色土 黄色粒を多く含む。φ3~20cmの大小の礫を多く含む。

第90図 IV区盛土断面図



第91図 IV区盛土出土遺物

第2章 検出された遺構と遺物

IV区 遺構外出土土器

No.	出土位置	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	025-790	92・54	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤褐色	普通	靴先状になる波状口縁、幅3mmの平行沈線による弧線文。	清盛b
2	025-780	92・54	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい橙	普通	太さ2mmの沈線による口縁部文様部区画、胴部縦帯に沈線による区画。	堀之内2
3	旧河道	92・54	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	明褐色	普通	口縁部沈線による横帯区画、全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利E
4	015-790	92・54	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	不良	口縁部に沈線による横帯区画内に判別、胴部沈線による「J」の字文。	称名寺
5	015-790	92・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	太さ2mmの沈線による文様部区画、地文に縄文が見られるが、全体を磨り消しており、原形は確認出来なかった。	称名寺
6	015-780	92・55	香炉	把手	細砂 細かい黒色粒	淡黄	良好	把手部に紐を通す孔を持つ。外面覆付着。	堀之内
7	14遺構	92・55	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	不良	太さ4mmの沈線による横帯文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B
8	69遺構	92・55	深鉢	胴部	粗砂 φ1~2mmの小石	浅黄	普通	太さ2mmの沈線による文様文。磨り消し縄文。	称名寺
9	36遺構	93・55	深鉢	口縁部~胴部	細砂 φ1mmの小石	明褐色	不良	外面に縄文文。縄文主体L.R.	加曾利B
10	095-795	93・55	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	浅黄	普通	沈線による「J」の字文。	称名寺
11	69遺構	93・55	深鉢	胴部	粗砂 φ1~2mmの小石	浅黄	普通	太さ3mmの沈線による縦帯に施文。磨り消し縄文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	称名寺
12	6溝	93・55	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	にぶい黄	普通	太さ2mmの沈線による文様部区画、区画内縦線文。	後期
13	旧河道	93・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰褐色	普通	波状口縁突起。口縁沈線と判別による文様部区画。区画内横帯文。区切り縦線文。「J」状の弧線。	加曾利B2
14	030-780	93・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰褐色	普通	波状口縁突起。	加曾利B2
15	025-785	93・55	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石	にぶい赤褐色	不良	波状口縁部に突起がつく。口縁部内面に沿って太さ1mmの沈線が廻る。外面は縄文。摩滅多く文様不明。	加曾利B
16	025-780	93・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤褐色	不良	口縁突起。切込みのある隆線による口縁部文様部横帯区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B2
17	020-795	93・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰褐色	普通	口縁小突起。口縁部文様部を爪形文施文の隆線で区画。区画内を弧線文と磨り消し縄文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。縄文主体L.R.	加曾利B2
18	035-840	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい橙	普通	波状口縁突起。内面に太さ3mmの沈線2条廻る。外面隆線による口縁部区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B2
19	050-840	94・55	浅鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	橙	普通	口縁に3個の凹みを持つ突起。切込みを持つ隆線により口縁部文様部が区画される。	加曾利B
20	表探	94・55	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	にぶい褐色	普通	波状口縁突起。突起内面に2単位のφ12mmの凹み。外面沈線による対弧文、横帯区画。	加曾利B2
21	025-785	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	暗赤褐色	普通	波状口縁突起。沈線による対弧文。	加曾利B2
22	045-840	94・55	深鉢	口縁部	細砂 黒色粒	橙	良好	波状口縁突起。	加曾利B2
23	040-800	94・55	深鉢	口縁部	細砂	橙	良好	波状口縁突起。沈線による対弧文。	加曾利B2
24	025-780	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	浅黄褐色	普通	波状口縁突起。突起下に対弧文。	加曾利B2
25	040-845	94・55	深鉢	口縁部	細かい黒色粒	にぶい橙	普通	波状口縁突起。	加曾利B2
26	040-830	94・55	深鉢	口縁部	細砂	黄褐色	普通	波状口縁突起。波頂部から「C」状の対弧文。内面波頂部下にφ8mmの円形突起が2個縦列に施文される。	加曾利B2
27	025-830	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	灰褐色	普通	波状口縁突起。沈線「C」状に施文。	加曾利B2
28	32遺構	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	淡黄	普通	楕形の把手。沈線による横帯区画と「S」字文様。	加曾利B2
29	025-785	94・55	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	暗赤褐色	普通	口唇部に突起。沈線横帯施文。補修孔。	加曾利B2
30	040-840	94・56	浅鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	明褐色	普通	口唇部内面にφ5mmの判別突起。	加曾利B2
31	045-840	95・56	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	灰褐色	普通	波状口縁突起。口縁部横帯区画。胴部沈線を縦帯に施文。	加曾利B2
32	035-795	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	灰褐色	不良	横帯の突起。内面に隆線が廻る。	加曾利B
33	050-835	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	暗赤褐色	不良	波状口縁突起。突起内外面にφ8mmの円形凹み。内面に太さ3mmの沈線が廻る。外面沈線による文様施文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B2
34	045-830	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石	にぶい黄褐色	普通	波状口縁突起。波頂部内外面に「C」状の対弧文。	加曾利B2
35	025-825	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	橙	不良	口縁突起。口縁部沈線による横帯区画。	加曾利B2
36	055-845	95・56	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	暗褐色	良好	口縁部に双円状の突起。口縁部に切込みのある隆線による横帯文施文。	加曾利B2
37	025-820	95・56	香炉	把手	粗砂 白色粒	浅黄	普通	中央部に紐を通す穴がある。	中期~後期
38	50遺構	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	普通	普通	口唇部にめがね状の突起。口縁部沈線による文様施文。	加曾利B2
39	015-780	015-780	深鉢	口縁部	細砂 黒色粒	浅黄褐色	普通	波状口縁突起。口縁部沈線による横帯区画。区画内弧線文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B2
40	020-800	020-800	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	灰褐色	良好	波状口縁突起。口縁部沈線による弧線文。磨り消し縄文。	加曾利B2
41	020-785	030-785	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	褐色	普通	波状口縁突起。波頂部から「C」状の対弧文。内面に浅い沈線が廻る。	加曾利B2

## 第5節 IV区の調査

No.	出土位置	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
42	030-790	95・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい赤褐色	不良	波状口縁突起。沈線による波頂部からの弧線文。内面に沈線2条が廻る。	加賀利B 2
43	011-河通	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤褐色	普通	口縁端部に凹凸を持つ隆線が廻る。	加賀利B
44	015-790	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	明褐色	不良	大きき2mmの沈線の上の横帯区画。区画内は斜線文。	後期
45	035-810	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	灰褐色	普通	口縁部文様帯の上下に凹凸を持つ隆線貼付。区画内は斜線文により斜格子状に施文。	加賀利B
46	035-815	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石・白色粒	暗褐色	普通	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。	加賀利B
47	045-825	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部文様帯上下に凹凸を持つ隆線を貼付。区画内は、大きき1mm未満の細い沈線で斜格子目文を施文。	加賀利B 2
48	045-830	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい黄褐色	普通	口縁部に凹凸を持つ隆線を2条貼付。胴部は沈線による弧線文。	加賀利B
49	13遺構	96・56	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	褐色	普通	口縁部に太い粘土層による突帯が貼付。突帯には指頭圧痕による凹凸文。粗製上部。	加賀利B
50	030-815	96・56	浅鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	褐色	良好	口縁上部の凹凸のある隆線貼付。胴部はφ1mm以下の細い沈線を間隔を開けて縦位に施文。	後期
51	025-830	96・56	深鉢	口縁部	細砂	にぶい褐色	普通	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。	加賀利B
52	040-830	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	にぶい褐色	良好	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。胴部は幅7mmの平行沈線を間隔を開けて縦位に施文。	加賀利B
53	040-830	96・56	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	明赤褐色	普通	口縁部上下に凹凸を持つ隆線を貼付し、口縁部文様帯を区画する。区画内に大きき1mmの沈線による斜線文。	加賀利B
54	030-800	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	明褐色	普通	口唇部に粘土層状に貼り付け。沈線による横位文様区画。	加賀利B 2
55	050-830	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	明黄褐色	普通	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。	加賀利B
56	020-830	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石	にぶい黄褐色	不良	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B
57	025-795	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	褐色	不良	口縁部上下に凹凸を持つ隆線貼付で区画する。胴部は大きき2mmの沈線縦位施文。	加賀利B
58	040-830	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石	にぶい褐色	不良	口縁部に凹凸を持つ隆線により文様帯区画する。区画内沈線による斜線文。	加賀利B 2
59	040-840	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	褐色	普通	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。大きき2mmの沈線を縦位施文。	加賀利B 2
60	040-840	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	明褐色	普通	口縁上部に凹凸を持つ隆線貼付。胴部は矢羽状に沈線施文。	加賀利B 2
61	015-785	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	浅黄褐色	不良	口縁端部に凹凸を持つ隆線貼付。	加賀利B
62	040-830	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	明赤褐色	普通	口縁部上下に凹凸を持つ隆線を貼付し、口縁部文様帯を区画する。区画内に大きき1mmの沈線による斜線文。	加賀利B
63	050-835	97・57	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	褐色	不良	口縁端部に凹凸を持つ隆線貼付。	加賀利B
64	040-830	98・57	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 白色粒	にぶい褐色	良好	口縁部に凹凸を持つ隆線を2条貼付。幅8mmの平行沈線で縦位の弧線を描く。	加賀利B 2
65	035-830	98・57	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部内面に大きき3mmの沈線が1条廻る。大きき1～2mmの沈線を間隔を開けて縦位に施文。	加賀利B
66	035-815	98・57	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	にぶい褐色	良好	口縁部内面に大きき4mmの沈線が1条廻る。外面大きき2～3mmの沈線が間隔を開けて縦位に施文される。	加賀利B
67	36遺構	98・57	深鉢	口縁部～胴部	細砂 φ1mmの小石	明褐色	不良	外面に縄文施文。縄文原形L.R.	加賀利B
68	905-790	98・58	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	灰白色	普通	大きき1mm以下の細い沈線が、間隔を開けて縦位に施文される。	加賀利B
69	025-795	98・58	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	黒褐色	不良	沈線による横帯文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
70	030-815	99・58	深鉢	胴部	細砂 白色粒	褐色	普通	幅3mmの平行沈線を2～3単位まとめたもので、弧線を描く。	後期
71	030-815	99・58	深鉢	胴部	細砂 白色粒	褐色	普通	幅3mmの平行沈線を2～3単位まとめたもので、弧線を描く。	後期
72	20遺構	99・58	深鉢	口縁部	粗砂	灰褐色	普通	口縁部内面に大きき4mmの沈線1条廻る。	加賀利B
73	045-810	99・58	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい褐色	普通	口縁部内面に大きき3mmの沈線が1条廻る。外面幅3mmの平行沈線を間隔を開けて斜位に施文。	加賀利B 2
74	045-830	99・58	深鉢	口縁部	粗砂	暗赤褐色	普通	口縁部内面に大きき3mmの沈線が1条廻る。外面は、大きき1mm未満の細い沈線が間隔を開けて縦位に施文される。	加賀利B 2
75	040-840	99・58	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	明赤褐色	普通	大きき2mmの沈線を縦位施文。	加賀利B
76	20遺構	99・58	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 黒色粒	浅黄褐色	普通	口縁部内面に大きき4mmの沈線1条廻る。	加賀利B
77	015-785	99・58	深鉢	胴部	粗砂 織物	明黄褐色	良好	表裏に糸痕施文。	早期後半
78	040-845	99・58	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	褐色	普通	口縁部沈線による横位区画。胴部沈線による斜線文。	加賀利B 2
79	36遺構	100・58	深鉢	口縁部～胴部	細砂 φ1mmの小石	褐色	普通	外面に縄文施文。縄文原形L.R.口縁部内面に大きき3mmの沈線1条が廻る。	加賀利B

## 第2章 検出された遺構と遺物

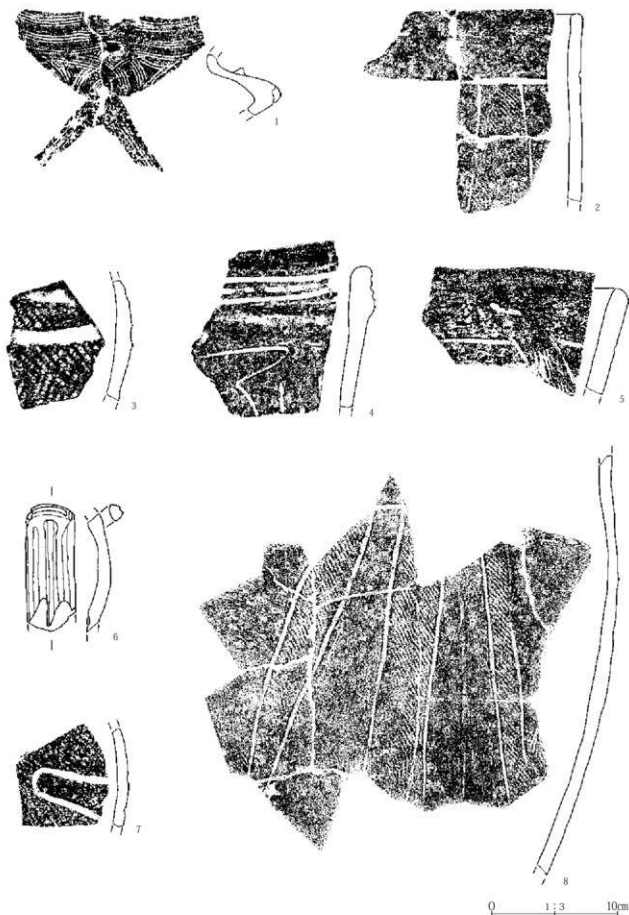
No.	出土位置	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
80	035-835	100・58	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	黒黒	普通	口縁部内面に太さ4mmの沈線が1条廻る。外面幅4mmの平行沈線が頭部を開けて縦位に施される。	加賀利B
81	33遺構	100・58	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1~2mmの小石	浅黄橙	不良	口縁部内面に1条の沈線が廻る。	加賀利B
82	025-800	100・58	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい黒	普通	内面に太さ2mmの沈線が1条廻る。外面無文施文。	加賀利B
83	025-795	100・59	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	橙	不良	太さ3mmの沈線による縦線。全体に厚減が多く文様不鮮明。	胴之内
84	035-820	100・59	浅鉢	胴部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい橙	普通	太さ1~2mmの沈線を間隔を開けて縦位に施文。	加賀利B
85	日河道	100・58	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	黒黒	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
86	045-830	100・58	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄橙	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面は太さ2mmの沈線による横帯区画。区画内を矢羽状に施文。	加賀利B 2
87	045-835	100・59	浅鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	暗赤褐色	不良	小波状口縁。外面横位の沈線が廻る。	加賀利B 2
88	035-820	101・59	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	にぶい橙	普通	外面遺物の工具による整形。	加賀利B
89	035-820	101・59	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	灰褐	普通	外面遺物の工具による整形。	加賀利B
90	025-795	101・59	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	にぶい黒	普通	無文。	後期
91	035-845	101・59	深鉢	口縁部~胴部	細砂	暗黒	普通	外面無文。内面に隆線と沈線が廻る。	加賀利B 2
92	035-845	101・60	深鉢	口縁部	細砂	暗黒	普通	ゆるい波状口縁。波頂部に小突起。口縁にφ3mmの孔が焼成後開けられる。口縁部内面に隆線と沈線が廻る。外面沈線無文。	加賀利B 2
93	040-835	101・60	浅鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	褐灰	不良	口縁部内面に太さ4mmの沈線が廻る。外面沈線による斜格子目文。	加賀利B 2
94	045-835	101・60	浅鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	橙	普通	浅い沈線による斜格子目文。	加賀利B 2
95	035-840	101・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい橙	不良	口縁部内面に沈線1条廻る。外面太さ1mm未満の細い沈線による口縁部文様区画。胴部沈線による斜格子目文。	後期
96	095-795	101・60	深鉢	口縁部	粗砂	黒黒	普通	太さ1mmの沈線による横位区画。区画内沈線による矢羽状に施文。頭部に無文帯を持つ。	加賀利B 2
97	095-795	101・60	深鉢	口縁部	粗砂	黒黒	普通	太さ1mmの沈線による横位区画。区画内沈線による矢羽状に施文。頭部に無文帯を持つ。	加賀利B 2
98	040-840	101・60	浅鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	にぶい赤黒	不良	口唇部に3mmの小突起。内面に太さ3mmの沈線が廻る。外面太さ1mm未満の浅い沈線による格子目文。	加賀利B 2
99	040-830	101・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤黒	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線1条廻る。外面は沈線が矢羽状に施文。	加賀利B 2
100	015-785	102・60	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	にぶい赤黒	普通	太さ2mmの沈線による文様帯区画。区画内沈線矢羽状文様。	加賀利B
101	015-780	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	浅黄橙	不良	太さ2mmの沈線による斜格子目文。	後期
102	040-830	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	灰黄褐	不良	内面に太さ3mmの沈線が廻る。外面沈線による斜線文。	加賀利B 2
103	040-830	102・60	浅鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	灰褐	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線が廻る。沈線による文様帯区画。区画内斜線文。	加賀利B 2
104	日河道	102・60	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい赤黒	普通	頸部に沈線による横位区画。胴部は沈線による斜線文。	加賀利B
105	030-790	102・60	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	にぶい赤黒	普通	太さ2mmの沈線による横位区画。区画内斜格子目文。全体に厚減が多く文様不鮮明。	加賀利B
106	015-785	102・60	浅鉢	胴部	粗砂 細かい黒色粒	明黄褐	普通	太さ2mmの沈線による横位区画。区画内斜線文。	加賀利B 2
107	030-790	102・60	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	灰褐	普通	幅4mmの平行沈線と細い単沈線による斜格子目文。	後期
108	045-810	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	褐	普通	口縁部内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面には沈線による横位区画。区画内斜線文。	加賀利B 2
109	050-830	102・60	浅鉢	口縁部	細砂	褐灰	良好	口縁上部に鬚文帯。沈線による口縁部文様区画。胴部縦位の沈線。縄文原体1R。	加賀利B
110	015-775	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい赤黒	不良	口縁部内面に幅5mmの平行沈線を2段重ねて廻る。外面幅5mmの平行沈線を横位に施文。	加賀利B 2
111	020-785	102・60	浅鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	橙	普通	口縁部沈線による横位区画。口縁端部に縄文施文。	加賀利B 2
112	035-835	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	灰褐	良好	太さ4mmの沈線による横帯区画	加賀利B
113	015-790	102・60	浅鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒多い	黄黒	普通	口縁部沈線による横位区画。縄文原体1R。	加賀利B
114	035-825	102・60	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	浅黄橙	不良	太さ3~4mmの沈線横位施文。	後期
115	020-795	102・60	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	灰褐	普通	口唇部に唇み。頭部沈線と爪形文による横位区画。胴部太さ3mmの横位沈線。	加賀利B
116	020-790	103・60	浅鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	褐灰	普通	口縁部に太さ3mmの沈線が1条廻り。口縁部文様帯を区画する。	加賀利B 2
117	040-845	103・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰白	不良	口唇部に突起。口縁部文様帯沈線と隆線による横位区画。胴部沈線による斜線文。	加賀利B 2
118	045-845	103・60	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒多い	灰オリーブ	普通	口唇部に細かい唇み列。無文。	加賀利B 2



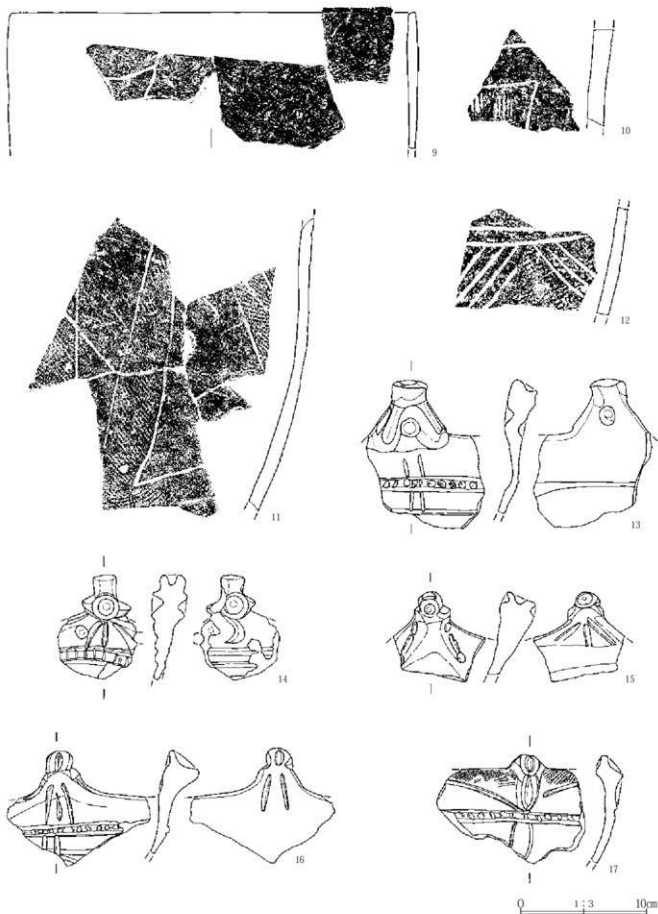
No.	出土位置	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
119	015-790	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	灰赤	普通	口縁部内面に太さ4mmの沈線が1条廻る。外面太さ2mmの沈線による横帯文。区切り縦線は、弧線状になる。	加曾利B 2
120	035-815	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色・黒色粒	灰黒	良好	口唇部に竹管による刻み。内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面は沈線による口縁部文様帯横帯区画。区画内斜線文を矢羽状に施文。	加曾利B
121	010-780	103・61	浅鉢	口縁部～胴部	粗砂 黒色粒	にぶい黒	不良	太さ4mmの沈線による横帯文。口縁部区画縦線沈線に刺突文。磨り消し縄文。	加曾利B 2
122	040-830	103・61	深鉢	口縁部	細砂	黒黒	良好	沈線による横帯文。磨り消し縄文。	加曾利B 2
123	32道横	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい黒	普通	内面に5条の沈線が廻る。外面には沈線による横帯区画。補穿孔。	加曾利B 2
124	040-840	103・61	浅鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	灰黒	普通	刻みを持つ隆線で口縁部文様区画。	加曾利B 2
125	旧河道	103・61	深鉢	口縁部	粗砂	赤黒	不良	沈線による横帯文、磨り消し縄文。縦長の粘土が口縁から断絶的に貼付される。	加曾利B
126	025-800	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石多い。	にぶい黒	普通	沈線による横帯区画内。胴部屈面部には横位の刻み。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
127	045-840	103・61	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	灰黒	不良	刻みのある隆線による横帯区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
128	035-825	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	黒黒	普通	刻みのある隆線で口縁部文様区画を作る。隆線間を「8」の字状の粘土貼り付け。	履之内2
129	20道横	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	黄灰	不良	口縁部外面に太さ2mmの沈線が廻る横帯区画の文様帯を作る。沈線間に刺突を持つ。	加曾利B
130	030-815	103・61	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒多い	暗赤黒	良好	口縁外面に太さ4mmの沈線が廻り、縄文施文。	加曾利B 2
131	035-785	103・61	注口	口縁部	粗砂 白色粒	浅黄	不良	口縁部に隆線に竹管刺突列が廻る。	加曾利B
132	030-785	103・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	浅黄橙	普通	沈線による横帯文。頸部に刺突列。	加曾利B 2
133	13道横	104・61	胴部	粗砂 白色粒多い	濁灰	普通	沈線による横帯区画内に斜線文施文。	加曾利B	
134	030-790	104・61	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	黒黒	不良	沈線。刻みのある隆線に付による横帯区画。	加曾利B
135	045-835	104・61	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	橙	不良	口縁部に沈線による横帯区画。区画内矢羽状文施文。胴部沈線による斜線文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B
136	035-825	104・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黒	普通	沈線による口縁部文様区画。沈線間に刺突列。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	後期
137	025-785	104・61	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	不良	沈線による横帯区画。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
138	030-800	104・61	浅鉢	口縁部	細砂	にぶい赤黒	普通	口縁部内面に沈線と刺突列が廻る。外面は5条の横位の沈線をクラク状に施文。縦い波状隆線。	加曾利B 2
139	035-835	104・61	深鉢	口縁部	粗砂	にぶい黄橙	普通	沈線部に「8」の字状の突起。太さ2mmの浅い沈線による文様施文。磨り消し縄文と刺突列。	加曾利B 2
140	035-840	104・61	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	灰黄	不良	口縁部に「8」の字状の突起。口縁沈線による横帯区画。区画内沈線弧線文。	加曾利B 2
141	035-840	104・61	深鉢	口縁部	細砂 黒色粒	灰白	不良	口縁部に「8」の字状の突起。	加曾利B
142	025-785	104・61	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	暗赤黒	不良	口唇部に小突起を持つ。内面に太さ3mmの沈線が1条廻る。外面沈線による斜線文。摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
143	32道横	104・61	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	暗赤黒	不良	口唇部小突起による波状口縁。内面に1条の沈線が廻る。	加曾利B 2
144	020-795	104・61	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	にぶい黒	普通	口縁部に沈線と斜位の刻みが廻る。胴部横帯文をS字状の沈線で区切る。	加曾利B
145	旧河道	104・61	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	暗赤黒	普通	沈線による横帯文。	加曾利B 2
146	035-835	104・61	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	橙	普通	太さ3mmの沈線による横帯区画。	加曾利B
147	025-790	104・61	深鉢	胴部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	灰黒	不良	平行沈線と刺突列により文様帯を横帯区画。区画内沈線による筋面文。縦位の沈線と刺突列。	加曾利B
148	045-830	104・61	浅鉢	胴部	粗砂 白色粒	暗赤黒	普通	沈線による横帯区画。刻みのある隆線横帯施文。内面煤付着。	加曾利B 2
149	050-835	104・61	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	暗赤灰	普通	集合沈線による横帯文。	加曾利B 2
150	035-795	104・61	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	にぶい黒	不良	横帯文。縦位区切り線「( )」状の弧文。磨り消し縄文。	加曾利B 2
151	025-830	104・61	浅鉢	口縁部	粗砂 白色粒	にぶい橙	普通	口縁部に小突起とφ4mmの孔。内面に横位の沈線施文。	加曾利B 2
152	旧河道	104・61	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	灰黒	普通	沈線による文様施文。	加曾利B
153	025-785	104・61	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの小石	浅黄橙	不良	沈線による横帯区画。沈線間に爪形文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加曾利B 2
154	015-790	105・62	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの小石・白色粒	にぶい橙	不良	口縁横位沈線による区画。区画内に弧線文・磨り消し縄文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。縄文原体1r。	加曾利B 2
155	025-780	105・62	鉢	頸部	粗砂 白色粒	にぶい黄橙	普通	沈線によるレンズ状の弧線文。文様帯内磨り消し縄文。	加曾利B 2
156	040-830	105・62	浅鉢	口縁部	細砂 白色粒	橙	良好	沈線による弧線でレンズ状に施文。口縁部には刺突列。磨り消し縄文。	加曾利B 2
157	020-795	105・62	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒多い	にぶい黒	良好	ソロパン玉形土器。胴部に沈線による横帯区画。区画内弧線文。磨り消し縄文。縄文原体1r。	加曾利B 2
158	025-785	105・62	深鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	良好	ソロパン形土器。胴部に太さ3～4mmの沈線による弧線文。	加曾利B 2

第2章 検出された遺構と遺物

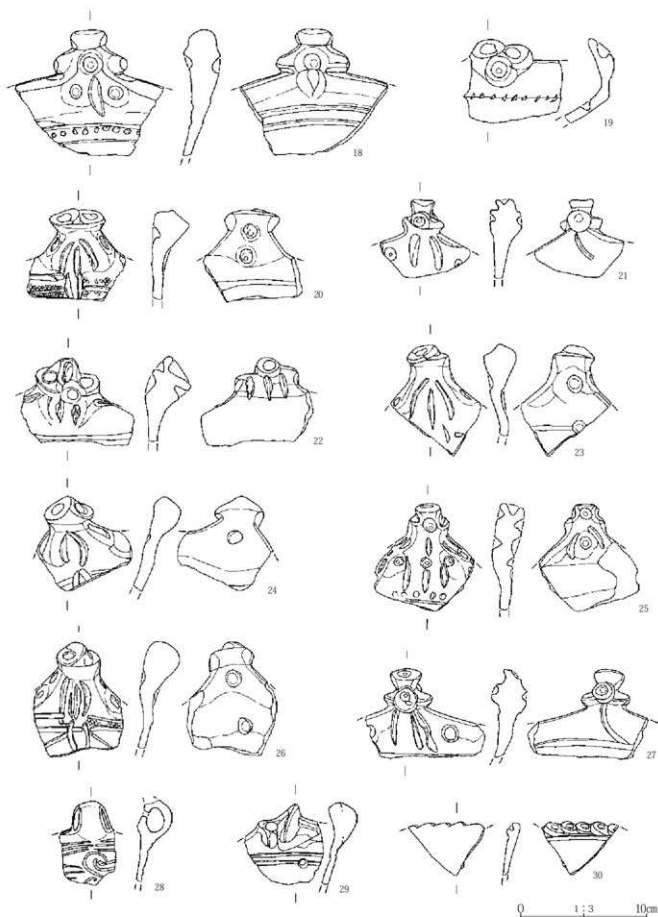
No.	出土位置	図・PL	部種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
159	020-795	105・62	浅鉢	口縁部	細砂 白色粒	にぶい褐	普通	沈線と爪形文による横位区画。区画内弧線文、磨り消し縄文。	加賀利B 2
160	015-785	105・62	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	灰褐	普通	波状口縁。口縁部に太さ3mmの沈線によるレンズ状の弧線文。磨り消し縄文。	加賀利B 2
161	33道横	105・62	浅鉢	口縁部	粗砂 白色・黒色粒	橙	普通	口縁部に沈線と衝突による横位区画線。口縁部は沈線と磨り消し縄文によるレンズ状の弧線文。	加賀利B 2
162	旧河邊	105・62	深鉢	口縁部	粗砂 白色粒	淡黄	普通	ソロバン形土器。肩部に太さ4mmの沈線によるレンズ状の弧線文。磨り消し縄文。縄文原体1R。	加賀利B 2
163	025-785	105・62	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	良好	ソロバン形土器。肩部に太さ3～4mmの沈線による弧線文。磨り消し縄文。	加賀利B 2
164	020-785	105・62	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	褐灰	普通	沈線による弧線文。磨り消し縄文。	加賀利B 2
165	050-835	105・62	深鉢	胴部	粗砂 白色粒	極暗赤褐	不良	沈線による横帯文。区切り縦線は「( )」状の対弧線。磨り消し縄文。	加賀利B 2
166	025-775	105・62	鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	にぶい橙	普通	太さ3mmの沈線による弧線文。「( )」状の対弧文。磨り消し縄文。	加賀利B 2
167	13道横	105・62	深鉢	胴部	粗砂 黒色粒	にぶい黄橙	普通	沈線による文様区画。	後期
168	025-785	105・62	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	にぶい黄橙	不良	太さ3mmの沈線による横帯文。沈線を対弧文で区切る。磨り消し縄文。	加賀利B 2
169	020-795	105・62	深鉢	口縁部	細砂 白色粒	灰褐	普通	ソロバン形土器。肩部に沈線による横位区画。区画内弧線文。磨り消し縄文。	加賀利B 2
170	020-785	105・62	浅鉢	口縁部～ 底部	粗砂 白色粒	灰褐	不良	横帯文。磨り消し縄文。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
171	025-780	106・62	深鉢	胴部	粗砂 白色・黒色粒	浅黄橙	普通	ソロバン形土器。	加賀利B 2
172	50道横	106・62	深鉢	口縁部	粗砂 黒色粒	灰白	普通	ソロバン形土器。肩部に沈線による横位区画。肩部弧線によるレンズ状文様。全体に摩滅が多く文様不鮮明。	加賀利B 2
173	095-795	106・62	浅鉢	口縁部～ 底部	粗砂	灰黄	普通	底部屈曲部に刻み列。	加賀利B
174	34道横	106・62	深鉢	胴部～ 底部	粗砂 φ1～3mmの 白色粒	明赤褐	普通	無文。底面副代痕。	加賀利B 2
175	040-830	106・62	深鉢	底部	粗砂 φ1mmの小石・ 白色粒	にぶい黄土	良好	無文。	後期
176	025-780	106・62	深鉢	底部	粗砂 細かい黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
177	32道横	106・62	深鉢	底部	粗砂 黒色粒	明褐	普通	底面副代痕。	加賀利B
178	030-835	106・62	深鉢	底部	粗砂 白色粒	灰褐	良好	底面副代痕。	加賀利B
179	010-780	106・62	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	淡橙	普通	底面副代痕。	後期
180	045-840	106・63	深鉢	底部	細砂 白色・黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
181	025-795	107・63	深鉢	胴部～ 底部	粗砂 白色粒	にぶい褐	普通	無文。	後期
182	030-795	107・63	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	灰褐	普通	底面副代痕。	後期
183	040-830	107・63	深鉢	胴部	粗砂 白色粒多い	明赤褐	良好	底面副代痕。	加賀利B
184	995-800	107・63	深鉢	底部	粗砂 細かい白色粒	灰褐	普通	底面副代痕。	後期
185	025-785	107・63	深鉢	底部	粗砂 細かい黒色粒	橙	良好	底面副代痕。	加賀利B
186	025-795	107・63	深鉢	底部	粗砂 細かい黒色粒	明黄褐	不良	底面副代痕。	後期
187	040-830	107・63	深鉢	底部	粗砂 細かい白色粒	にぶい褐	普通	底面副代痕。	加賀利B
188	040-805	107・63	深鉢	底部	細砂 黒色粒	明黄褐	普通	縄文原体R1。	後期
189	020-795	107・63	深鉢	底部	細砂 細かい黒色粒	にぶい黄橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
190	20道横	107・63	深鉢	胴部	細砂	灰オリーブ	普通	無文。	加賀利B
191	050-840	107・63	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	後期
192	020-790	107・63	深鉢	底部	粗砂	橙	普通	底面副代痕。	後期
193	045-845	107・63	深鉢	底部	粗砂 黒色粒	浅黄	普通	無文。	後期
194	095-795	107・63	深鉢	底部	細砂	浅黄橙	普通	底面副代痕。	後期
195	030-785	107・63	深鉢	底部	粗砂	褐灰	普通	底面副代痕。	加賀利B
196	14道横	108・63	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
197	040-815	108・64	深鉢	底部	粗砂 白色・黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
198	32道横	108・64	深鉢	底部	粗砂 細かい白色粒	にぶい橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
199	045-845	108・64	深鉢	底部	粗砂 白色粒多い	灰オリーブ	普通	無文。	後期
200	025-780	108・64	深鉢	底部	粗砂 白色粒多い	にぶい褐	普通	底面副代痕。	加賀利B
201	025-780	108・64	深鉢	底部	粗砂 白色粒多い	にぶい橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
202	旧河邊	108・64	深鉢	底部	粗砂 黒色粒	橙	普通	底面副代痕。	後期
203	045-805	108・64	深鉢	底部	粗砂 φ1mmの小石・ 白色粒	にぶい黄橙	普通	底面副代痕。	加賀利B 2
204	035-800	108・64	深鉢	底部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい橙	普通	底面副代痕。	加賀利B
205	025-820	108・64	深鉢	底部	粗砂	橙	普通	外面に縦位の整形痕。底面副代痕。	加賀利E
206	030-830	109・64	台付 土器	台部	粗砂 白色粒	橙	良好	胴部に沈線による横位施文。沈線間に衝突列。	加賀利B 2



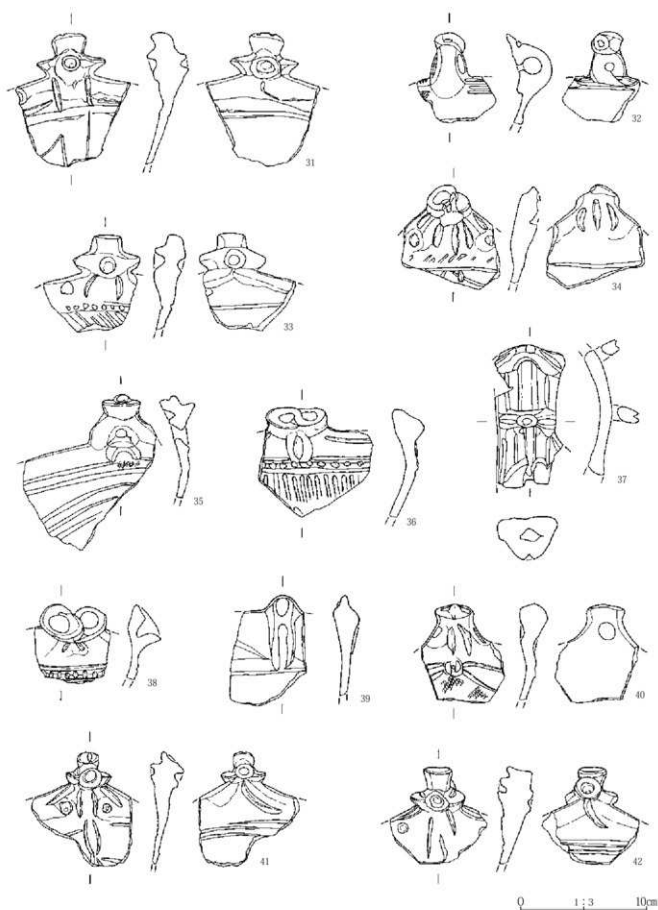
第92図 IV区道橋外出土土器(1)



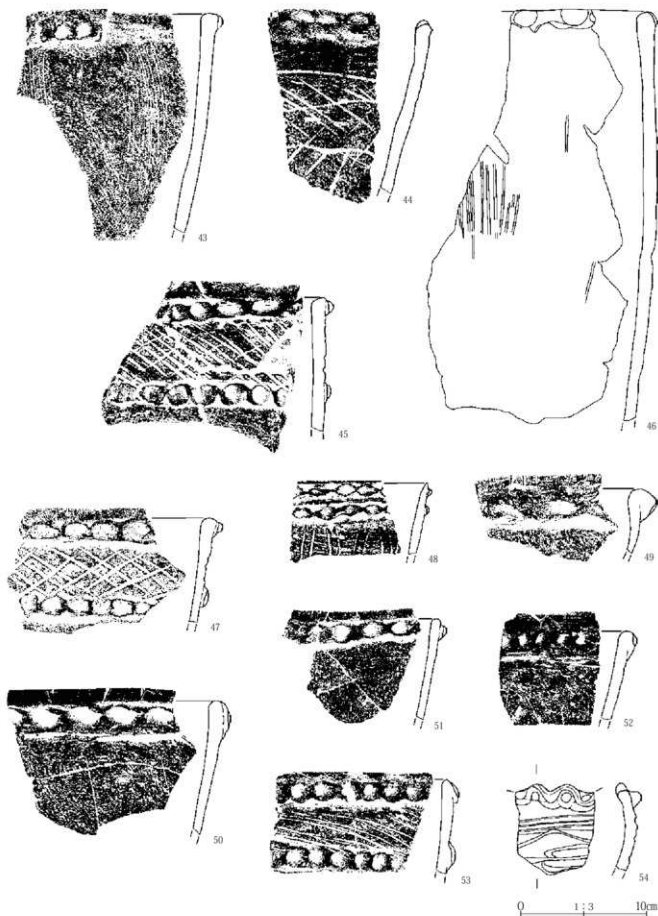
第93図 IV区道構外出土土器(2)



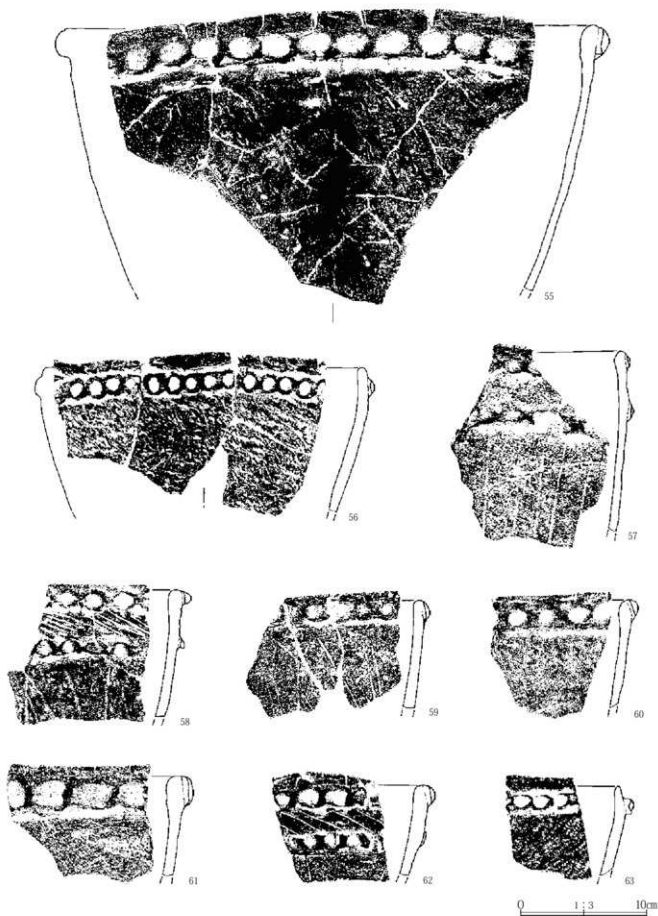
第94図 IV区道橋外出土土器(3)



第95図 IV区遺構外出土土器(4)

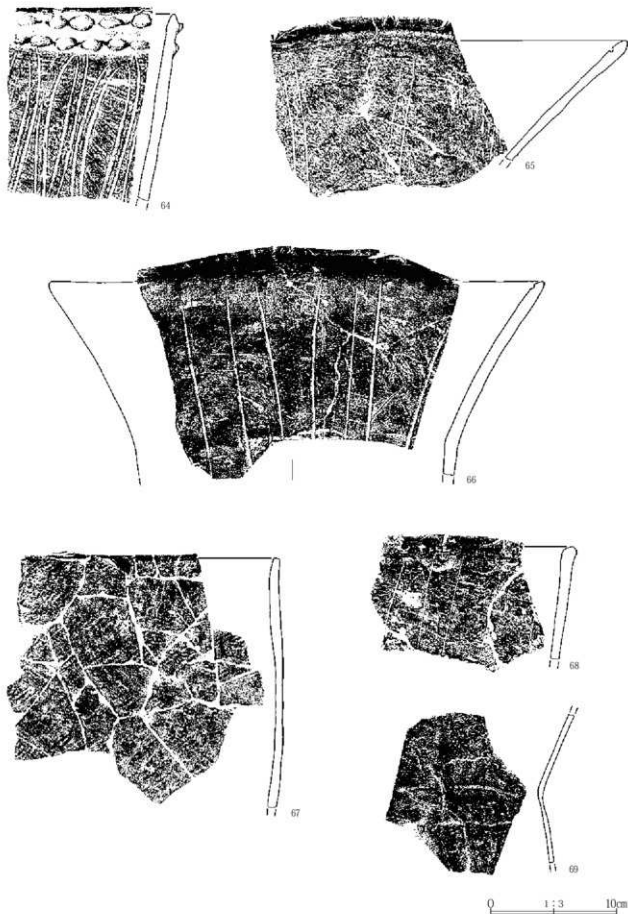


第96図 IV区道橋外出土土器(5)

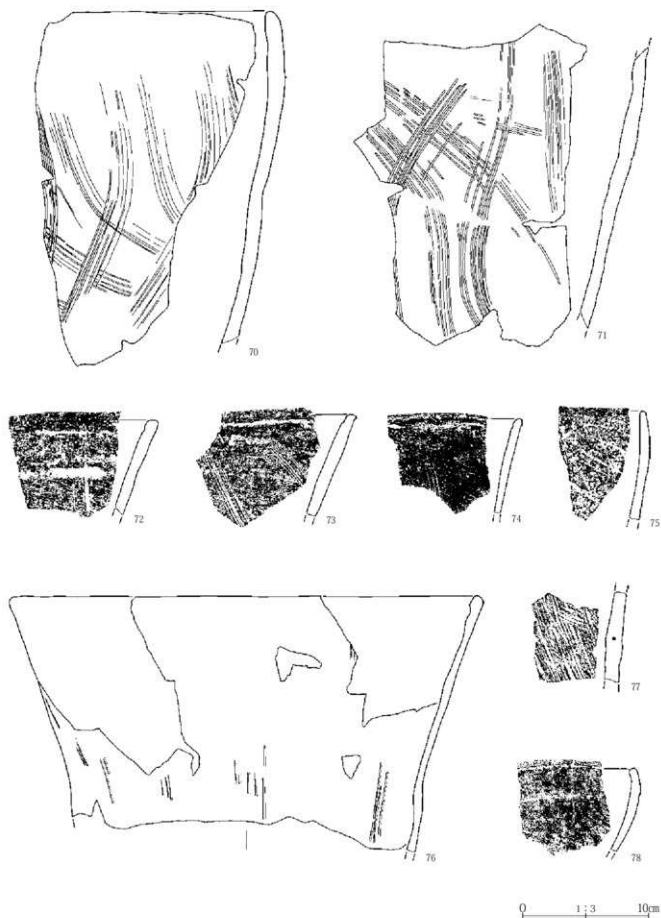


第97図 IV区遺構外出土土器(6)

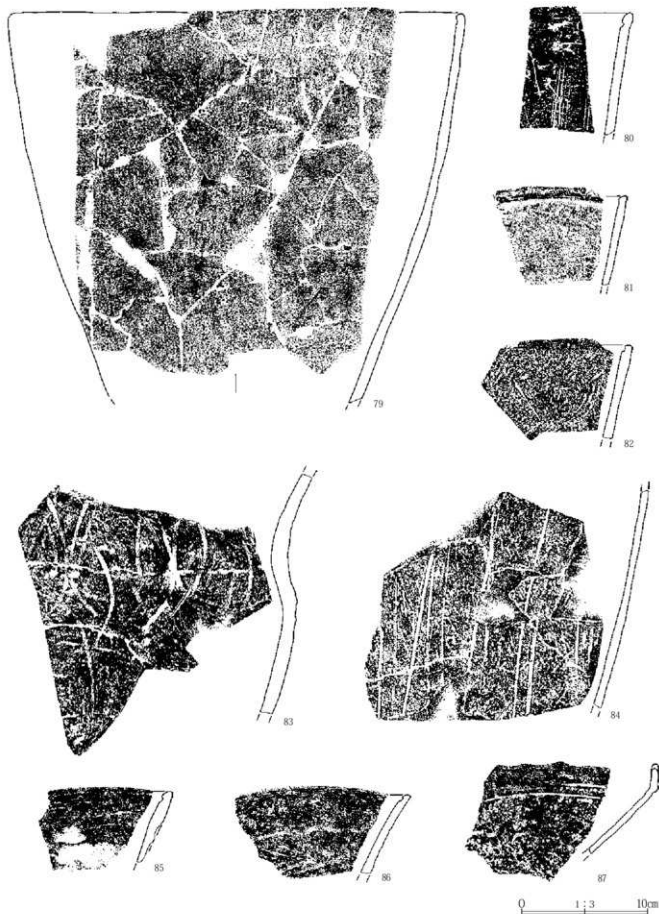




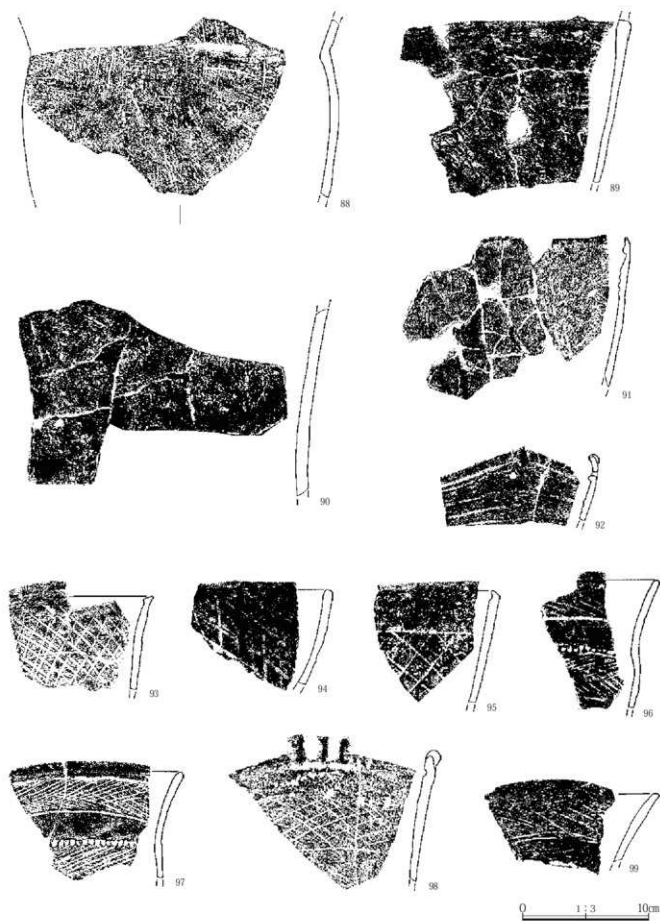
第98図 IV区道橋外出土土器(7)



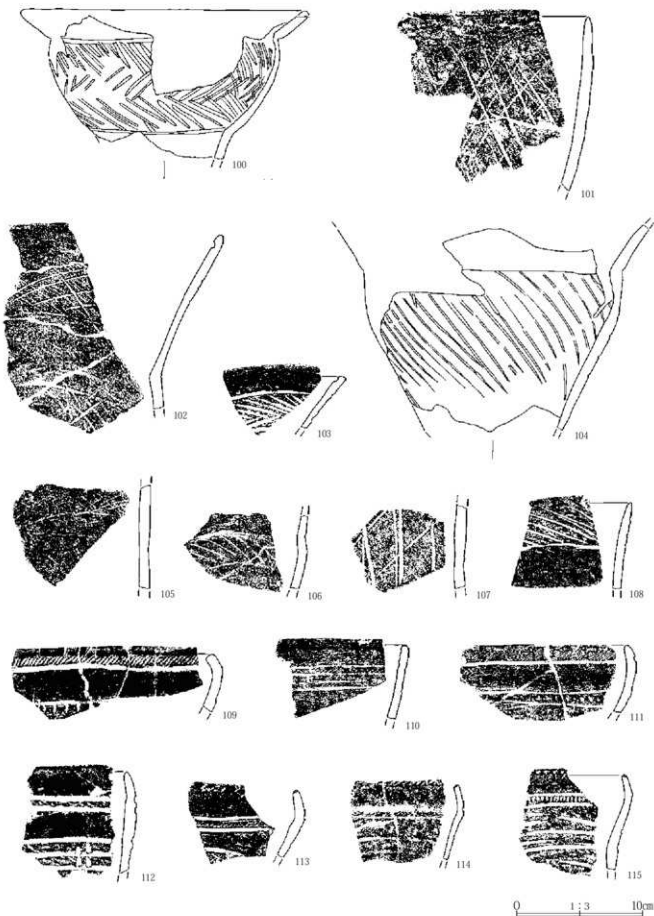
第99図 IV区遺構外出土土器(8)



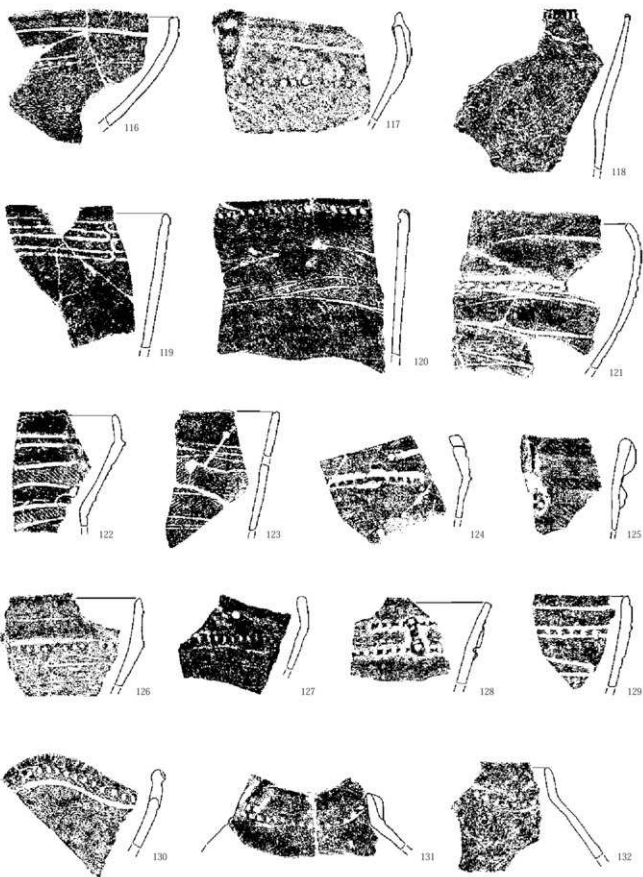
第100図 IV区遺構外出土土器(9)



第101図 IV区遺構外出土土器(10)

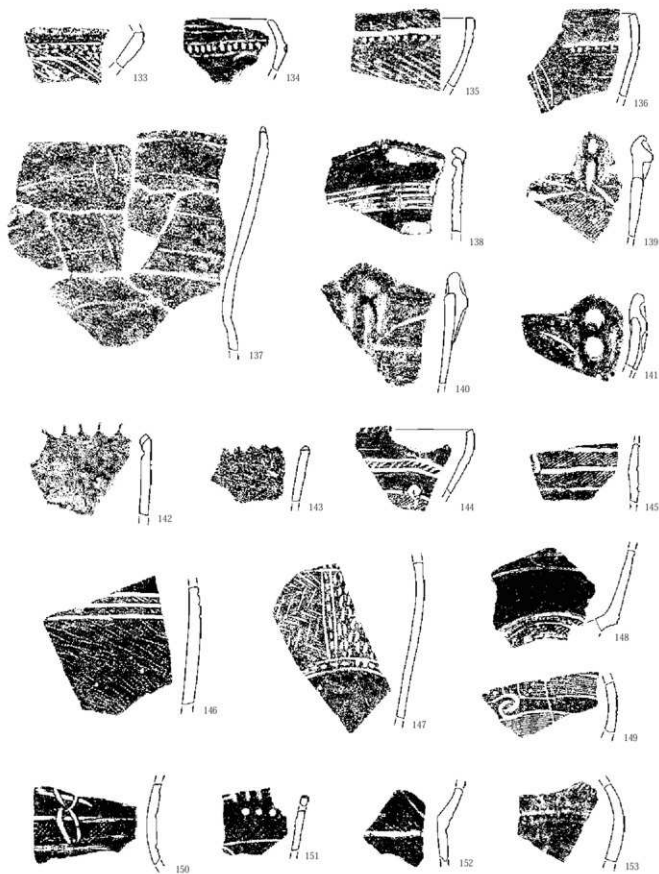


第102図 IV区遺構外出土土器 (11)



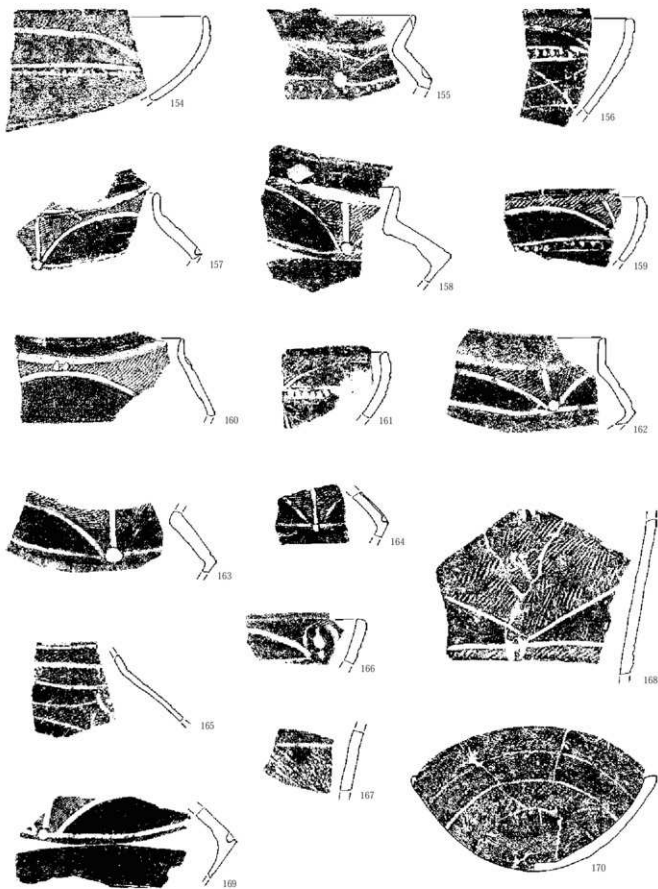
0 1:3 10cm

第103図 IV区遺構外出土土器 (12)



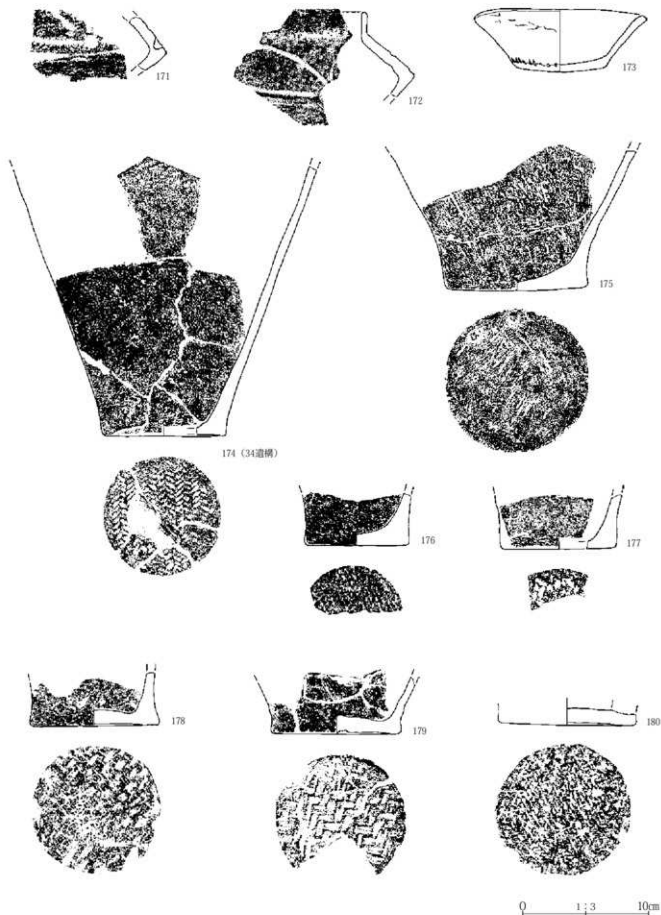
0 1:3 10cm

第104図 IV区遺構外出土土器 (13)

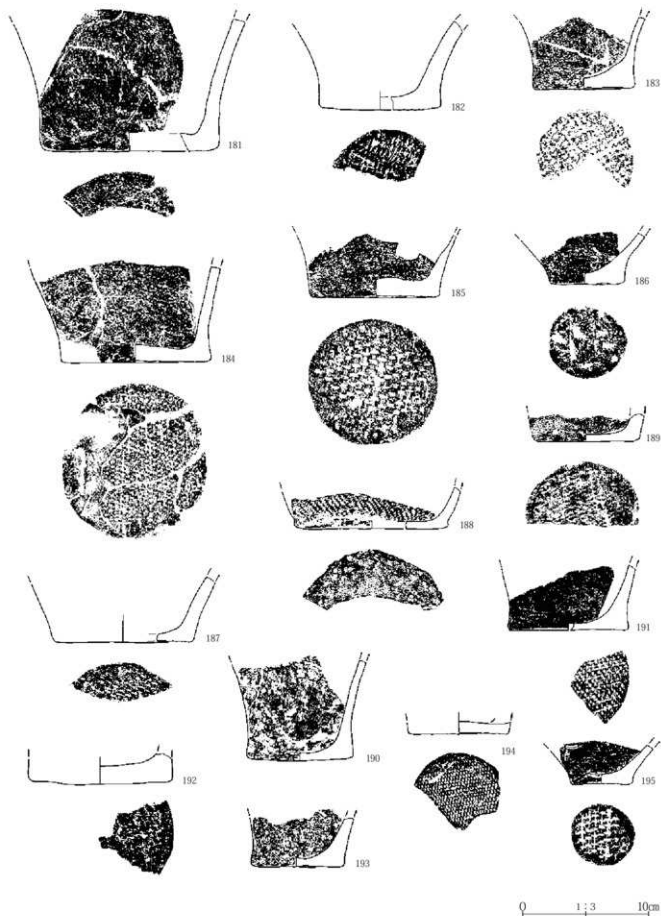


第105図 IV区遺構外出土土器(14)

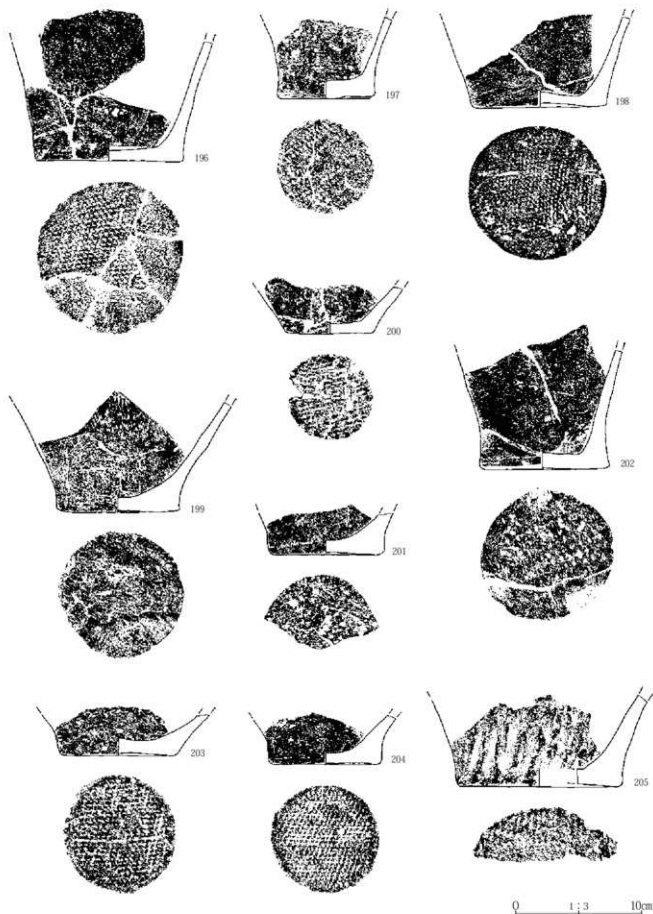




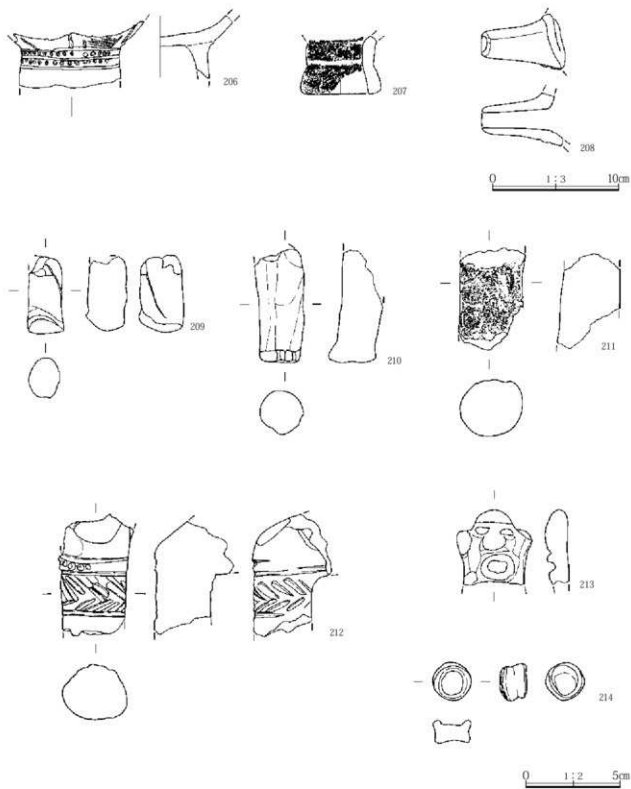
第106図 IV区道横外出土土器 (15)



第107図 IV区遺構外出土土器 (16)



第108図 IV区遺構外出土土器 (17)



第109図 IV区遺構外出土土器 (18)

No.	出土位置	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
207	040-840	109・64	異形 台付	脚部	細砂 細かい白色粒	灰白	普通	基部に縄文施文。縄文原体1.R.	加賀利B 2
208	050-840	109・64	注口	注口	粗砂 白色・黒色粒	にぶい橙	普通	無文。	加賀利B
209	020-790	109・64	土偶	足	細砂 白色粒・黒色粒	明褐色	良好	土偶の足。つま先部を若干たがらせて表現する。沈線が腹にあたる部分に施文される。	後期
210	030-800	109・64	土偶	足	細砂	明褐色	良好	無文。上下方向に整形痕。足部先端がとがり、つま先状の表現が見られる。	後期
211	090-842	109・64	土偶	足	φ1～2mmの小石・白色粒	明黄褐色	普通	土偶の足。上下方向の整形痕。上部は、股へ繋がると思われるように曲線になる。	後期
212	050-840	109・64	土偶	足	φ1～2mmの小石・白色粒	明褐色	普通	股から足にかけての部分。沈線で横位に区画し、矢羽状の文様施文。	後期
213	表探	109・64	土偶	顔	細かい白色粒	明赤褐色	普通	扁平な板状の粘土に顔の表現を作る。	後期
214	035-840	109・64	土製品	耳栓	細かい白色粒	明赤褐色	普通	外側のφ2.0cm、括れた部分φ1.6cm、高さ1.4cm。	後期

## IV区 遺構出土石器観察表

出土遺構	No.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
1遺構	1	110・65	石製品	建築用片岩	緑頁岩	13.0	2.0	41.9	表裏面に線状痕。左側縁は焼成痕。石割様。
5遺構	1	110・65	加工痕ある割片		黒曜石	2.8	1.2	1.3	裏面側の内端を浅く割削。先端内側縁は顕著に磨耗。割片側の線状痕は器体長軸と若干斜向。
5遺構	2	110・65	石核	分割片	チャート	4.8	6.8	129.4	上面・正面で小形割片を剥離する。
6遺構	1	110・65	石皿	有縁b	粗粒輝石安山岩	16.0	16.9	2504.6	表裏面に凹部が存在。内窪タイプの磨石が対応。
6遺構	2	110・65	凹石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	10.6	7.4	507.9	側面縁打は著しい。石磨型。
6遺構	3	110・65	石皿	有縁	粗粒輝石安山岩	13.6	20.3	1864.1	窪み方からみて内窪タイプの磨石が対応。
19遺構	1	110・65	石鏡	凹基無	黒曜石	2.1	1.5	0.8	加工は丁寧で、薄身。完成状態。調査時に先端を欠く。
19遺構	2	110・65	石鏡	凹基無	黒曜石	1.7	1.3	0.3	やや厚く周辺加工する。完成状態。
19遺構	3	110・65	打製石斧	分割型	ホルンフェルス	6.4	6.6	86.0	対面磨耗・接痕があり。再生使用は明らか。
19遺構	4	110・65	打製石斧	分割型	ホルンフェルス	7.5	6.6	92.4	器体下半を欠損。加工量は少ない。未製品？
19遺構	5	111・65	石皿	有縁	粗粒輝石安山岩	17.3	15.1	1517.7	凹部打痕が顕著。未使用？表面に孔を穿つ。
19遺構	6	111・65	多孔石	凹隆	粗粒輝石安山岩	19.6	19.4	5900.6	表裏面に孔。表面側は磨耗。裏面側は打痕が顕著。
24遺構	1	111・65	石皿	有縁a	緑色片岩	35.8	21.6	5450.0	中央の凹部に接して、凹部が存在。凹部は内窪タイプの磨石が対応。
24遺構	2	111・65	石皿	無縁	溶結凝灰岩	45.6	31.2	28650.0	
24遺構	3	111・65	石皿	無縁	石英閃緑岩	19.8	21.8	4099.9	表面側平坦面は顕著に磨耗。表面に孔を穿つ。
27遺構	1	111・65	多孔石	粗粒輝石安山岩	23.0	15.0	3027.2		
27遺構	2	111・65	打製石斧	分割型a	ホルンフェルス	13.2	12.6	1078.8	下半欠損。未製品。
37遺構	1	112・65	片刃石斧	黒色頁岩	8.0	4.5	66.4	完成後、刃部再生。エッジは若干磨耗。	
37遺構	2	112・65	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	27.2	21.4	10000.0	表裏面ともロート状の凹部。打痕。
40遺構	1	112・65	多孔石	偏平隆	粗粒輝石安山岩	26.0	18.0	4615.4	表裏面ともロート状の凹部。打痕。
45遺構	1	112・66	台石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	42.4	34.0	47000.0	表裏面とも打痕が集中。孔1を穿つ。
45遺構	2	112・65	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	17.2	15.8	2997.8	表裏面ともロート状の凹部。打痕。
54遺構	1	112・66	削器	黒色頁岩	4.8	4.4	46.3	周辺に粗い加工。割片の剥離面と周辺の小割離面には風化度が異なる。	
67遺構	1	112・66	石核	分割片	黒色頁岩	6.5	7.2	187.2	上下両端から幅広割片を剥離。
81遺構	1	112・66	削器	黒色頁岩	5.3	4.8	56.0	破損した石斧の側縁に刃部を作出。表面平坦削面。	
82遺構	1	112・66	多孔石	偏平隆	粗粒輝石安山岩	24.2	21.2	3682.8	表裏面に孔を穿つ。
83遺構	1	112・66	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	19.8	16.2	4041.7	表裏面に孔を穿つ。
57遺構	1	113・66	凹石	偏平隆	粗粒輝石安山岩	12.1	10.3	641.7	中央付近に集合打痕。上端付近にロート状の凹部。
57遺構	2	113・66	石皿	有縁	粗粒輝石安山岩	26.2	13.8	2851.4	裏面側に多数の孔を穿つ。
57遺構	3	113・66	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	21.0	19.8	7160.0	
57遺構	4	113・66	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	24.0	17.2	5188.1	
57遺構	5	113・66	台石	偏平隆	粗粒輝石安山岩	19.2	17.0	2825.9	
93遺構	1	112・66	石皿	有縁b	粗粒輝石安山岩	20.2	28.8	4756.2	表裏面に使用面が存在。内窪タイプの磨石が対応。
98遺構	1	114・66	石皿	有縁	緑色片岩	33.2	14.5	1717.0	中央の主機能部から浅い掻き出し口が鋭く。
100遺構	1	114・66	石皿	有縁	粗粒輝石安山岩	35.8	17.0	4750.0	凹部は深く、内窪タイプの磨石が対応。
101遺構	1	115・67	石皿	無縁	溶結凝灰岩	36.4	27.2	15590.0	
101遺構	2	115・67	石皿	有縁	粗粒輝石安山岩	17.1	12.4	1372.4	表裏面とも被熱剥離。
101遺構	3	115・67	割片	ぎょくすい	10.0	10.7	265.0	板状を呈する割片状原石。	
101遺構	4	115・67	削器	黒色頁岩	5.7	4.8	62.1	粗広割片の打面側に粗い刃部を作出。	
101遺構	5	115・67	削器	黒色頁岩	10.2	7.8	148.2	粗広割片の左側縁に粗い刃部を作出。	
104遺構	1	114・67	多孔石	楕円隆	粗粒輝石安山岩	23.8	13.6	4292.2	表裏面に孔を穿つ。
104遺構	2	114・67	凹石	長円隆	粗粒輝石安山岩	12.5	7.2	650.1	表裏面とも磨耗。側縁打。被熱。
106遺構	1	114・67	打製石斧	分割型a	ホルンフェルス	9.7	8.4	176.0	糸巻状を呈する。刃部は長軸に斜向する。
106遺構	2	114・67	石棒	単頭	デイヤサイト	13.4	13.4	2649.0	断面・表裏面に平坦面を作出。被熱。
107遺構	1	114・67	打製石斧	分割型a	ホルンフェルス	13.5	7.9	282.5	左辺を浅く削り、右側面を作出。未製品。

第2章 検出された遺構と遺物

出土遺構	No.	図・PL	器種	形態	石材	長さ	幅	重量	備考
115遺構	1	114・67	多孔石	楕円形	粗粒輝石安山岩	28.0	18.4	5600.0	表裏面に孔を穿つ。
128遺構	1	115・67	多孔石	楕円形	粗粒輝石安山岩	26.6	19.0	5560.0	表裏面に孔を穿つ。打痕が全面に存在。
132遺構	1	113・66	胴器		球質頁岩	4.9	4.0	15.8	左右内側縁に微細凹溝を施す。
133遺構	1	113・66	石皿	扁平形	粗粒輝石安山岩	15.4	13.0	992.2	内面磨打整形。裏面に孔を穿つ。ミニチュア。
133遺構	2	113・66	多孔石	楕円形	粗粒輝石安山岩	20.0	16.2	5065.4	表裏面にロータ状の凹部2を穿つ。
133遺構	3	113・66	磨石	楕円形	粗粒輝石安山岩	11.2	8.0	797.6	完形。
133遺構	4	113・66	凹石	扁平形	粗粒輝石安山岩	9.4	7.1	367.9	
135遺構	1	115・67	打製石斧	扇型	ホルンフェルス	13.6	7.5	234.5	風化が激しく、剥離面構成等は不明瞭。加工は初期状態にあり、未製品の可能性あり。
135遺構	2	115・67	多孔石	楕円形	粗粒輝石安山岩	17.1	14.9	2432.4	

IV区 遺構外出土石器観察表

No.	図・PL	器種	形態	出土遺構	石材	長さ	幅	重量	備考
1	116・67	石鏃	凹基無	020-800	黒色安山岩	2.8	1.9	1.5	完成状態。右辺の返し部欠損。
2	116・67	石鏃	凹基無	050-835	黒曜石	2.3	1.7	0.9	完成状態。完形。
3	116・67	石鏃	凹基無	025-830	赤碧玉	2.0	2.0	1.2	完成状態。完形。
4	116・67	石鏃	凹基無	040-820	チャート	2.2	1.6	0.5	完成状態。左辺の返し欠損。
5	116・67	石鏃	凹基無	025-790	チャート	1.8	1.0	0.4	未製品。左辺の返し欠損。
6	116・67	石鏃	凹基無	015-795	黒曜石	1.3	1.0	0.3	完成状態。完形。
7	116・67	石鏃	凹基無	025-790	黒色安山岩	1.7	1.8	1.0	完成状態。完形。
8	116・67	石鏃	凹基無	025-775	チャート	2.1	1.7	1.0	未製品。先端・右辺の返し欠損。
9	116・67	石鏃	凹基無	4号溝フク上	チャート	2.6	1.6	1.7	完成状態。完形。
10	116・67	石鏃	平基無	表採	チャート	2.0	1.4	1.7	完成状態。完形。
11	116・67	石鏃	凹基無	旧河道	チャート	2.4	1.5	1.3	完成状態。右辺先端が変形。エッジが摩耗。
12	116・67	石鏃	凹基無	古墳時代河道	チャート	1.7	1.4	0.9	完成状態。完形。
13	116・67	石鏃	凹基無	025-790	チャート	1.6	1.5	0.8	完成状態。完形。
14	116・67	石鏃	平基無	表採	チャート	2.0	1.8	1.3	完成状態。完形。
15	116・67	石鏃	平基無	表採	褐色碧玉	1.5	1.3	1.0	完成状態。完形。
16	116・67	石鏃	不明	025-785	チャート	2.4	1.8	2.8	未製品。
17	116・67	石鏃	凸基有	050-835	チャート	3.2	2.4	5.3	完成状態。完形。
18	116・67	石鏃	凹基無	045-830	黒色頁岩	3.2	2.7	2.8	完成状態。完形。
19	116・67	石鏃	平基無	025-775	チャート	2.7	1.8	2.5	未製品。右辺無基部を欠損。先端は尖り気味で、五角形状。
20	116・67	石鏃	凹基無	旧河道	チャート	1.5	1.3	0.8	未製品。
21	116・67	石鏃	平基無	表採	チャート	1.9	1.4	1.3	完成状態。完形。
22	116・68	石鏃	凸基有	010-78	チャート	2.5	1.3	0.8	完成状態。完形。返し部は左右非対称。
23	116・68	石鏃	凸基有	古墳時代河道	チャート	2.6	1.8	1.4	完成状態。先端部欠損。
24	116・68	石鏃	凸基有	表採	チャート	4.8	1.8	4.2	完成状態。磨耗痕。
25	116・68	石鏃	表採	黒曜石	2.6	1.1	0.7	完形。先端部の磨耗痕は見られない。	
26	116・68	石鏃	表採	チャート	2.5	1.5	2.5	先端部摩耗。	
27	116・68	石鏃	6号溝底部	チャート	1.5	1.0	0.9	先端部欠損。	
28	117・68	石鏃	035-84	チャート	4.7	1.7	7.7	完成状態。完形。	
29	117・68	胴器	幅広	040-845	黒色頁岩	7.2	2.6	19.5	内側縁を加工し、尖頭状に整形。
30	117・68	胴器	幅広	020-785	黒色頁岩	5.5	9.8	87.1	側片端部に粗い凹部を作出。対部磨耗。
31	117・68	胴器	幅広	030-825	黒色頁岩	5.3	4.4	49.0	右辺を厚く磨削し、対部を作出。
32	117・68	石核	角礫	040-830	黒曜石			127.8	上面の平坦面から小形剥片1を剥離。
33	117・68	打製石斧	分副型a	035-830	ホルンフェルス	13.0	7.7	255.9	完成状態。完形。対部磨耗あり。
34	117・68	打製石斧	分副型a	045-820	ホルンフェルス	10.7	10.0	240.8	完成状態。糸巻き状を呈す。
35	117・68	胴器	050-835	黒色頁岩	7.1	6.0	136.0	石斧を再生し、端部に凹部を作出。内側縁に「挟り」が磨耗している。上面に「挟り」が偏るタイプの石斧。	
36	117・68	打製石斧	分副型a	040-830	ホルンフェルス	6.6	4.7	65.3	完成状態。対部は大きく変形。再生は確定。
37	117・68	打製石斧	分副型a	040-805	ホルンフェルス	11.3	7.2	166.5	完成状態。対部磨耗・捨砕痕等は不明。
38	117・68	打製石斧	分副型a	020-785	ホルンフェルス	8.3	6.6	108.7	完成状態。対部は大きく変形。
39	118・68	打製石斧	分副型a	025-795	ホルンフェルス	13.2	8.5	189.6	完成状態。完形。対部磨耗・捨砕痕あり。
40	118・68	打製石斧	分副型a	040-805	ホルンフェルス	14.3	7.4	307.4	完成状態。完形。
41	118・68	打製石斧	分副型a	025-790	ホルンフェルス	16.0	11.1	674.4	完成状態。完形。
42	118・68	打製石斧	分副型a	050-830	ホルンフェルス	11.9	6.4	185.1	側縁を浅くノッチ状に挟る。風化して磨耗痕等は不明。
43	118・68	打製石斧	分副型a	025-775	ホルンフェルス	10.0	9.8	301.5	完成状態。完形。
44	118・68	打製石斧	分副型c	表採	ホルンフェルス	12.1	8.0	317.6	加工が粗く、未製品？
45	118・68	打製石斧	分副型a	025-805	ホルンフェルス	11.1	6.2	168.0	完成状態？風化が激しく、磨耗痕等は不明。
46	118・68	打製石斧	分副型a	025-810	ホルンフェルス	10.7	8.8	219.0	対部は大きく変形。再生の可能性あり。
47	119・68	打製石斧	分副型a	045-815	ホルンフェルス	13.6	6.3	139.0	完成状態？風化が激しく、磨耗痕等は不明。
48	119・68	打製石斧	分副型a	045-025	ホルンフェルス	13.1	9.0	574.3	完成状態。完形。

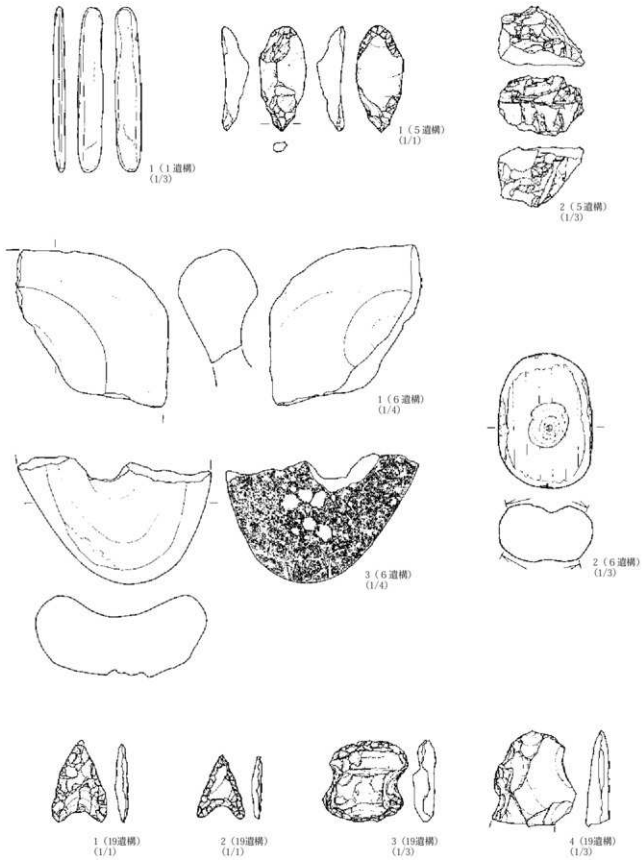
## 第5節 IV区の調査

No.	図・Pl.	器種	形態	出土遺構	石材	長さ	幅	重量	備考
49	119・68	打製石斧	分銅型a	025-800	ホルンフェルス	11.4	11.1	310.3	完成状態。上半欠損。
50	119・68	打製石斧	分銅型a	015-785	黒色頁岩	9.1	5.1	79.5	幅広削片を縦位に用い、無縁に括れ部を作出。
51	119・68	打製石斧	分銅型c	040-820	黒色頁岩	12.3	8.0	366.6	完成状態。完形。
52	119・68	打製石斧	分銅型a	030-830	粗粒輝石安山岩	10.9	7.3	213.4	完成状態。刃部磨耗は著しい。風化が激しい。
53	119・68	打製石斧	分銅型a	025-790	黒色頁岩	9.3	7.0	150.6	完成状態。刃部は大きく変形。再生？
54	119・68	打製石斧	分銅型a	表採	ホルンフェルス	122.0	9.2	216.5	加工が粗く、未製品。
55	120・69	打製石斧	分銅型a	050-835	ホルンフェルス	10.8	7.0	233.2	完成状態。刃部リダクション。
56	120・69	打製石斧	分銅型a	015-775	ホルンフェルス	10.9	7.5	213.3	完成状態。刃部再生は確実。
57	120・69	打製石斧	分銅型a	040-830	ホルンフェルス	9.6	9.8	308.3	上半部を欠損。無縁の括れ部は左右非対称。
58	120・69	打製石斧	分銅型a	030-810	ホルンフェルス	10.8	8.3	195.0	完成状態。完形。
59	120・69	打製石斧	分銅型a	005-745	ホルンフェルス	13.3	8.2	351.1	完成状態。完形。刃部再生。
60	120・69	打製石斧	分銅型a	040-845	ホルンフェルス	11.3	8.8	291.1	完成状態。完形。
61	120・69	打製石斧	分銅型b	015-780	ホルンフェルス	11.3	13.3	633.9	完成状態。完形。
62	120・69	打製石斧	分銅型a	025-795	黒色頁岩	5.6	6.1	87.0	括れ部で破損。磨面側は新鮮。上端は鋭熱剥離。
63	121・69	打製石斧	分銅型a	6号溝成	ホルンフェルス	13.4	8.0	262.6	完成状態。完形。
64	121・69	打製石斧	分銅型a	040-805	ホルンフェルス	14.3	7.4	307.4	完成状態。完形。
65	121・69	打製石斧	分銅型a	015-780	ホルンフェルス	10.3	7.6	202.8	風化で、磨耗面等は不明。刃部再生時に破損。
66	121・69	打製石斧	分銅型a	035-800	ホルンフェルス	9.8	7.4	221.6	完成状態。刃部変形。
67	121・69	打製石斧	分銅型a	表採	ホルンフェルス	10.6	6.2	147.2	完成状態。刃部磨耗・捨磨あり。
68	121・69	打製石斧	不明	020-800	ホルンフェルス	11.6	5.9	185.4	加工量が少なく、石斧製作初期を示す未製品。
69	121・69	打製石斧	短冊型	040-805	黒色頁岩	7.9	4.2	76.3	上半欠損。刃部磨耗・捨磨あり。刃部再生。
70	121・69	打製石斧	短冊型	990-710	ホルンフェルス	10.9	5.8	186.7	完成状態。両面欠損。刃部再生。捨磨あり。
71	121・69	打製石斧	短冊型	表採	ホルンフェルス	11.4	6.0	182.0	無縁加工は粗く、刃部は最終段階で作出。
72	121・69	片刃石斧	短冊型	025-800	粗粒輝石安山岩	7.8	6.2	125.2	裏面側からのみ加工。刃部は最終段階で作出。
73	121・69	片刃石斧	短冊型	020-805	黒色頁岩	8.6	5.0	97.3	両側面に微細な磨耗痕。刃部再生。裏面磨面。
74	122・69	加工用削片		025-785	黒色頁岩	14.3	9.4	340.6	裏面側面無縁に粗い加工を施す。
75	122・69	打製石斧	分銅型c	表採	ホルンフェルス	11.3	7.9	253.3	刃部は大きく変形。加工は粗い。未製品？
76	122・69	打製石斧	短冊型	035-835	ホルンフェルス	9.5	7.6	276.4	下半部欠損。風化で磨耗面等は不明。加工は粗い。
77	122・69	片刃石斧		965-645	黒色頁岩	9.0	4.8	105.3	無縁は踏向様の剥離。破損後、刃部再生。
78	122・69	片刃石斧		025-780	チャート	7.3	4.6	69.0	無縁部の弧状刃部を作出。
79	122・69	削器	幅広	020-785	黒色頁岩	6.0	4.0	39.4	縁部部の弧状刃部を作出。
80	122・69	打製石斧	短冊型	表採	黒色頁岩	5.9	4.9	93.2	破損面に粗い加工を施し、刃部を作出。
81	122・69	削器	幅広	旧甲遺4層	珪質頁岩	5.3	4.9	39.2	裏面側の削片端部に連続する小凹磨面を施す。
82	122・69	削器	偏平碟	表採	チャート	5.9	6.6	70.5	厚く粗い磨面を右辺に、やや厚い剥離を下辺に施す。
83	122・69	石核	幅広	030-815	黒色頁岩	10.4	10.8	289.1	裏面側無縁に粗く浅い剥離を施す。
84	123・69	砥石		020-790	砂岩	7.2	7.3	85.0	欠損。
85	123・69	砥石		—	砂岩	7.2	6.4	56.8	欠損。
86	123・69	砥石		—	砂岩	9.3	4.9	101.1	鋭熱剥離。
87	123・69	砥石		025-795	砂岩	7.1	4.3	42.9	完形。
88	123・69	砥石		025-785	砂岩	6.4	6.3	66.6	完形。
89	123・69	砥石		030-785	砂岩	5.0	3.3	21.1	欠損。
90	123・69	砥石		040-845	砂岩	10.0	6.8	67.9	欠損。
91	123・69	砥石		020-815	牛伏砂岩	11.8	5.9	120.7	エッジは両刃様。
92	123・69	砥石？		盛上遺構下	牛伏砂岩	14.7	7.6	216.6	エッジは両刃様。鋭熱して剥離が著しい。
93	123・69	磨製石斧	定角？	035-835	変多武岩	11.5	6.0	289.8	完成状態。完形。
94	123・69	砥石		025-790	砂岩	5.7	3.2	16.8	欠損。
95	123・69	門石	偏平碟	045-835	粗粒輝石安山岩	8.8	8.0	441.7	表裏面にロート状の凹部。
96	123・69	磨石	偏平碟	020-805	粗粒輝石安山岩	11.0	7.2	443.2	完形。
97	123・70	磨石	楕円碟	3遺構	浴槽凝灰岩	11.9	9.8	999.6	無縁は磨削により平坦化。
98	124・70	磨石	楕円碟	045-835	粗粒輝石安山岩	17.7	10.8	2481.0	表面面磨耗。無縁打痕。被熱。
99	124・70	磨石	楕円碟	030-815	粗粒輝石安山岩	15.8	10.0	2607.7	全面磨耗。小凹部に打痕あり。
100	124・70	門石	楕円碟	025-800	粗粒輝石安山岩	19.1	9.4	1504.0	表裏面、両側面に著しい打痕。
101	124・70	門石	楕円碟	030-795	粗粒輝石安山岩	14.1	12.0	1715.1	中央の孔はロート状とすると不明瞭。被熱。
102	124・70	磨石	棒状碟	30遺構	粗粒輝石安山岩	15.7	5.2	788.3	無縁は打痕・磨耗痕により平坦化。小凹部打痕。
103	124・70	磨石	楕円碟	表採	粗粒輝石安山岩	14.3	9.2	1033.4	完形。
104	124・70	磨石	円碟	030-790	粗粒輝石安山岩	8.9	7.5	581.6	表面側の磨耗が著しい。被熱。
105	124・70	磨石	円碟	035-830	粗粒輝石安山岩	10.4	9.1	1140.0	表面部中央・小凹部に打痕。全面磨耗？
106	125・70	磨石	偏平碟	035-835	粗粒輝石安山岩	10.2	9.8	798.4	表裏面とも磨耗。無縁部打痕。
107	125・70	磨石	楕円碟	030-790	粗粒輝石安山岩	10.6	9.0	816.9	完形。
108	125・70	磨石	楕円碟	030-830	粗粒輝石安山岩	10.0	6.4	454.3	表裏面とも磨耗。無縁の打痕は見られない。
109	125・70	磨石	楕円碟	035-81	粗粒輝石安山岩	9.7	7.9	559.0	裏面にロート状の凹部・磨耗痕。裏面に集合打痕。
110	125・70	門石	偏平碟	030-790	粗粒輝石安山岩	8.7	7.7	374.9	完形。
111	125・70	砥石	棒状碟	030-835	黒色片岩	11.2	3.6	142.5	小凹部両端に打痕・衝撃剥離痕。
112	125・70	砥石	不定形	030-795	粗粒輝石安山岩	10.0	7.1	483.0	完形。

第2章 検出された遺構と遺物

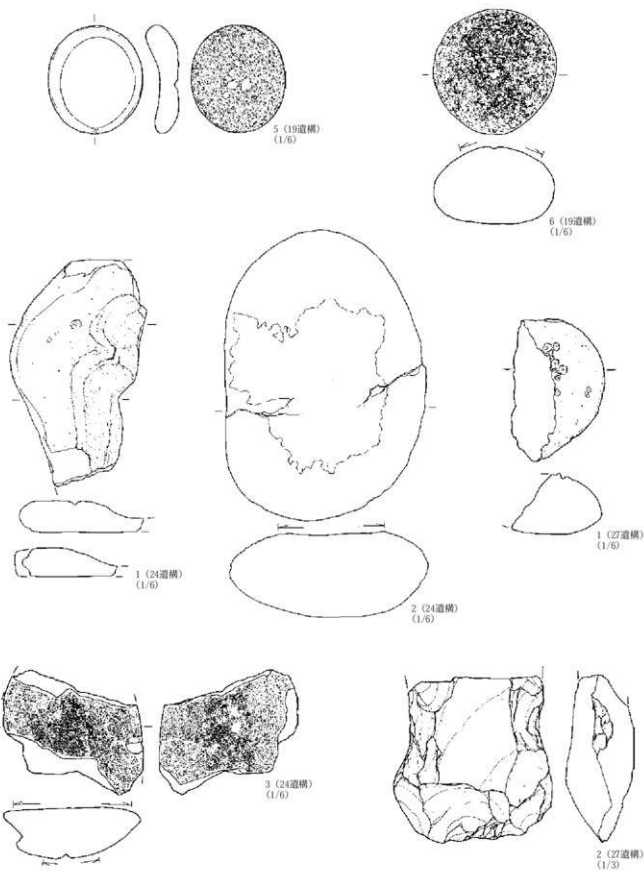
No.	図・PL	器種	形態	出土遺構	石材	長さ	幅	重量	備考
113	125・70	敲石	楕円盤	12遺構	粗粒輝石安山岩	15.0	11.5	1802.7	表面面摩擦。先端部漸次剥離。
114	125・70	敲石?	扁平盤	050-840	黒色片岩	16.9	5.8	291.6	小1部内端に打痕・磨耗痕。
115	125・70	多孔石	扁平盤	025-840	粗粒輝石安山岩	17.2	13.5	1510.6	表面側に孔1を穿つ。1穴の多孔石。
116	125・70	多孔石	楕円盤	表採	粗粒輝石安山岩	15.1	15.2	1978.2	表裏面に孔1を穿つ。1穴の多孔石。
117	125・70	多孔石	楕円盤	030-820	粗粒輝石安山岩	15.1	13.3	2540.2	表裏面に孔を穿つ。
118	126・70	多孔石	楕円盤	表採	浴槽凝灰岩	29.6	11.9	15000.0	表面側に孔1を穿つ。1穴の多孔石。
119	126・70	多孔石	扁平盤	040-815	粗粒輝石安山岩	21.0	19.8	1062.0	表面側に孔2を穿つ。裏面は摩耗。
120	126・70	多孔石	楕円盤	10遺構	粗粒輝石安山岩	22.4	18.4	4330.0	表裏面に多数の孔を穿つ。
121	126・70	多孔石	扁平盤	025-800	粗粒輝石安山岩	19.6	15.5	2615.3	表裏面に孔を穿つ。
122	126・71	台石	楕円盤	30遺構	粗粒輝石安山岩	21.8	18.0	4128.6	表裏面に打痕。
123	126・71	多孔石	楕円盤	6溝底	粗粒輝石安山岩	20.6	18.0	4116.3	表裏面に多数の孔を穿つ。
124	126・71	多孔石	楕円盤	045-835	粗粒輝石安山岩	20.2	132.0	4061.3	表面側中央に孔2を穿つ。
125	126・71	石皿	乳鉢状	69遺構	粗粒輝石安山岩	22.5	15.5	1787.8	背面側に孔を穿つ。裏面多孔石。
126	126・71	石皿	定型	050-825	粗粒輝石安山岩	15.2	9.1	962.6	磨付き。裏面側に孔を穿つ。
127	126・71	石皿	有縁a	045-815	粗粒輝石安山岩	31.2	19.2	5000.0	使用面最深部は中央より下に偏り、浅い。被熱?
128	127・71	石皿	有縁a	015-790	粗粒輝石安山岩	36.4	32.0	18400.0	使用面最深部は中央より下に偏る。
129	127・71	石皿	有縁	30遺構	粗粒輝石安山岩	25.4	26.8	4300.0	使用面は良く使い込んでいる。被熱。
130	127・71	石皿	有縁a	040-815	粗粒輝石安山岩	28.2	15.8	4000.0	使用面は非対称に立ち上がる。裏面に多数の孔。
131	127・71	石皿	有縁	040-835	粗粒輝石安山岩	19.0	16.6	2345.3	機能部の摩耗は顕著。掻き出し口に打痕。裏面に孔。
132	127・71	石皿	定型	1河道	粗粒輝石安山岩	21.8	20.0	4213.5	上縁は平坦に整形。裏面に孔を穿つ。
133	128・71	石皿	有縁	040-840	粗粒輝石安山岩	37.4	29.8	13480.0	使用面に円錐タイプの磨石に対応する孔2ヶ所。
134	128・71	石皿	有縁a	030-810	粗粒輝石安山岩	23.6	21.6	4150.0	使用面最深部は中央より下に偏る。被熱?
135	128・71	石製品		040-830	雲母石英片岩	17.6	3.8	156.0	
136	128・72	石棒?	棒状盤	32遺構	黒色片岩	14.8	6.2	480.2	裏面側に孔3を穿つ。磨縁最打はなく、分類が妥当か不安だが、140に類似する。
137	128・72	石棒	棒状盤	030-830	黒色片岩	11.0	10.2	1578.0	下部部破損面を部分研磨。体部に孔を穿つ。大形。
138	128・72	石棒	不明	025-795	ホルンフェルス	5.3	3.6	53.1	表面に整形痕(縦状痕)。被熱。推定径3.5cm。
139	129・72	石棒	不明	11河道	緑色片岩	14.2	5.3	623.9	上下両端を欠く。体部の研磨不良。
140	129・72	石棒		124遺構	緑色片岩	15.5	4.6	380.5	完成状態。完形。
141	129・72	石棒	単頭	050-835	牛伏砂岩	6.5	4.8	74.7	扁平な三角形の頭部を作出。表面に溝状の凹部。
142	129・72	石棒	単頭	020-785	緑色片岩	10.3	5.0	262.2	亀頭状。横位縁切間を縦位に分割(全体として円形の形み)
143	129・72	石製品?		10遺構	角閃石安山岩	8.0	13.7	788.6	中央に暗色含有物(角閃石安山岩、マグマの不混和現象)
144	129・72	石製品	扁平盤	025-830	粗粒輝石安山岩	14.4	14.2	1500.7	最打が礫面を全周。下部部を欠く。同種加工石皿は大遺東
145	129・72	打製石斧	不明	050-835	緑色片岩	17.9	10.4	740.2	無縁に括れ部。上下両端に粗い加工。石皿の転用?
146	129・72	加工遺物片		035-790	雲母石英片岩	24.1	16.0	1750.0	無縁にノッチ状の加工。



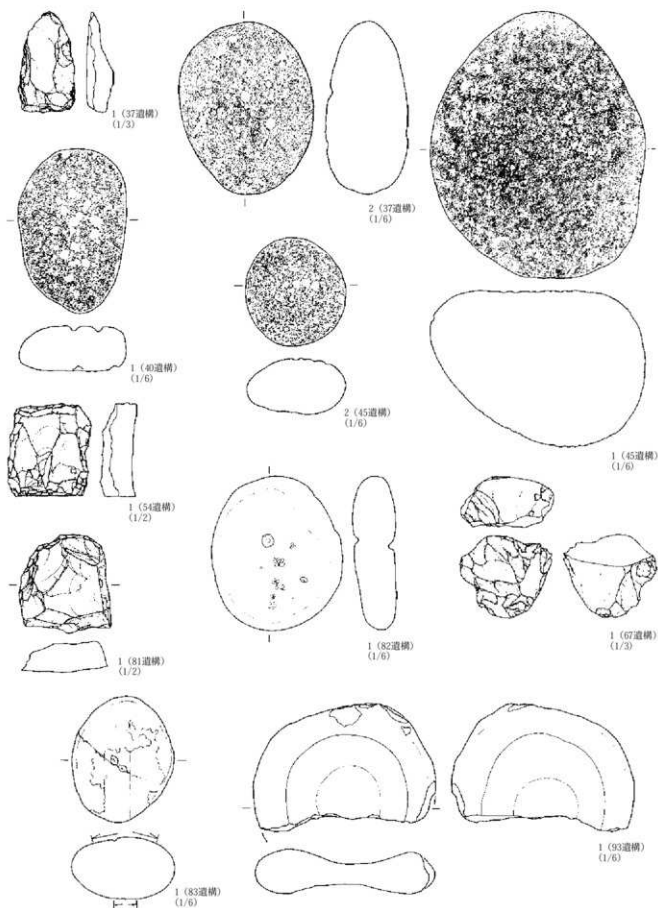


第110図 IV区1号・5号・6号・19号道横出土石器

第2章 検出された遺構と遺物

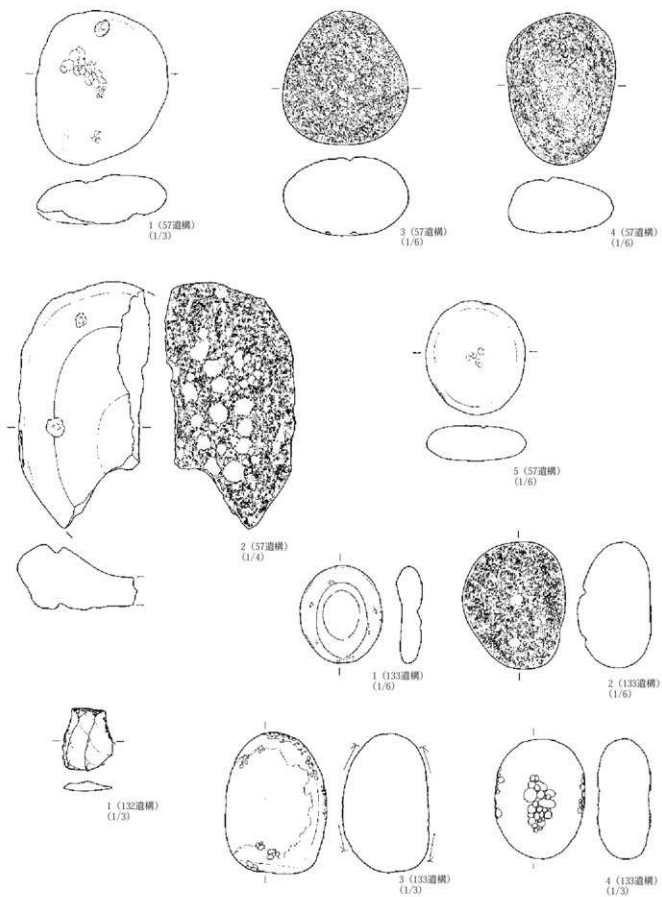


第111図 IV区19号・24号・27号遺構出土石器

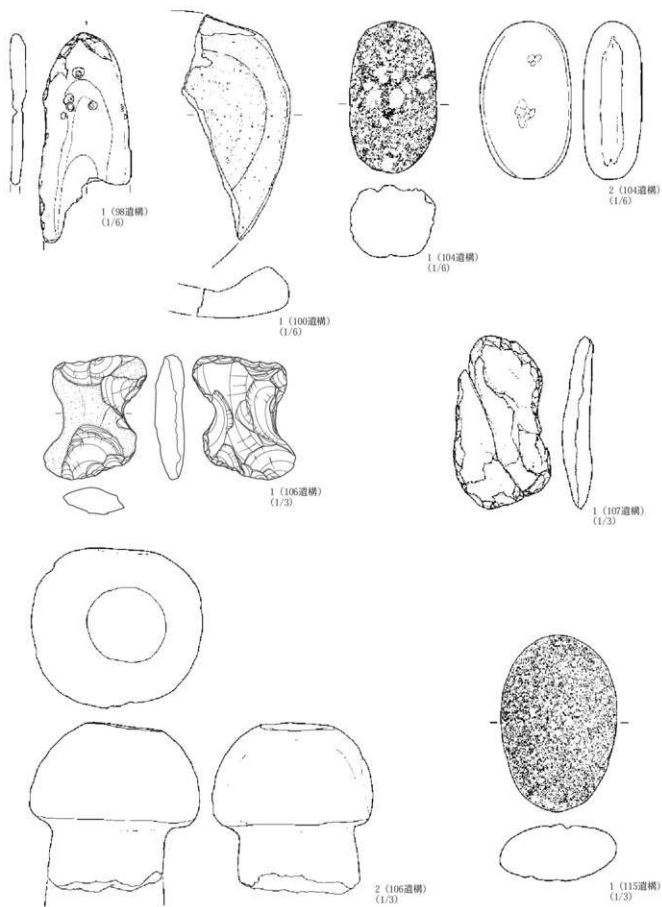


第112図 IV区37号・40号・45号・54号・67号・81号・82号・83号・93号道横出土石器

第2章 検出された遺構と遺物

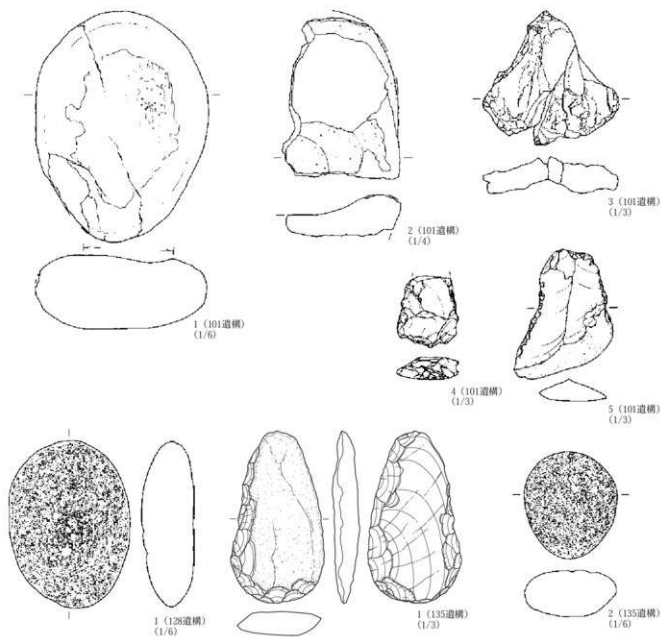


第113図 IV区57号・132号・133号遺構出土石器

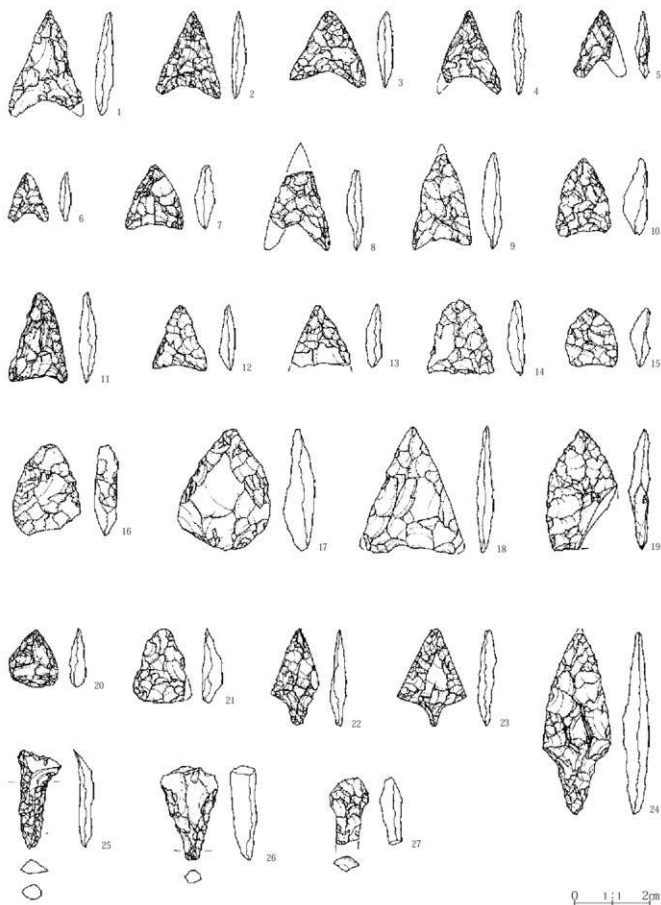


第114図 IV区98号・100号・104号・106号・107号・115号道横出土石器

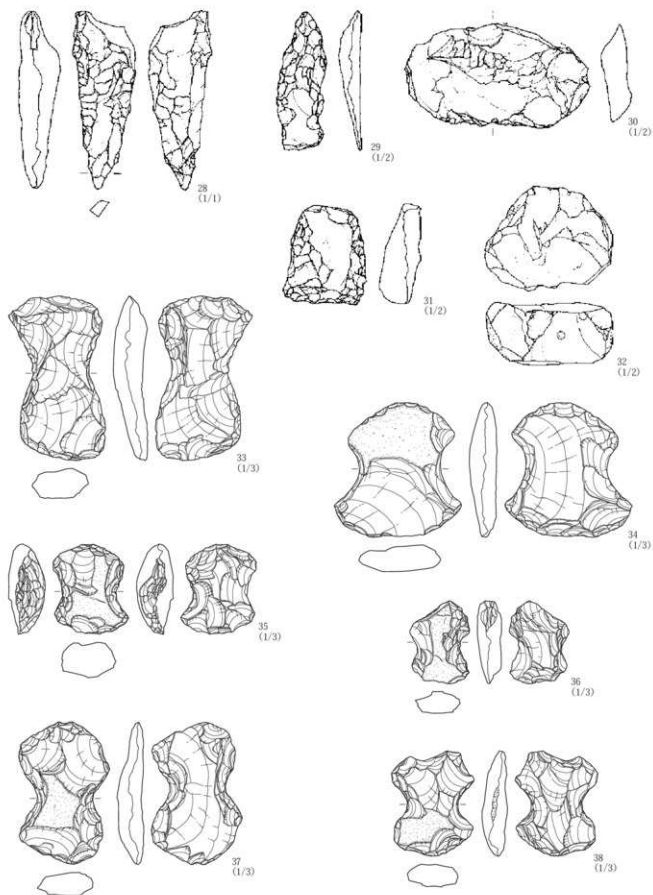
第2章 検出された遺構と遺物



第115図 IV区101号・128号・135号遺構出土石器

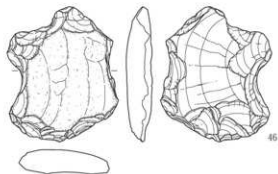
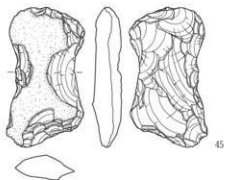
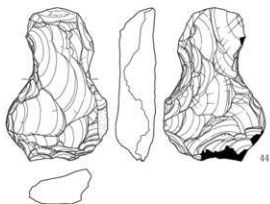
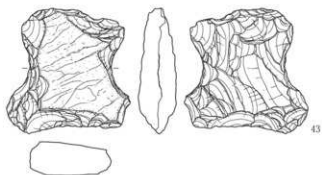
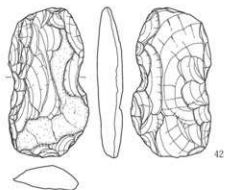
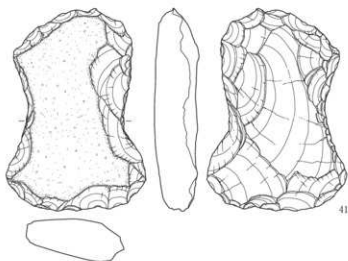
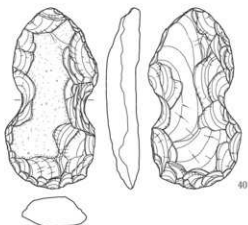
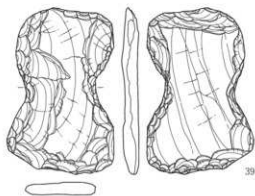


第116図 IV区遺構外出土石器(1)



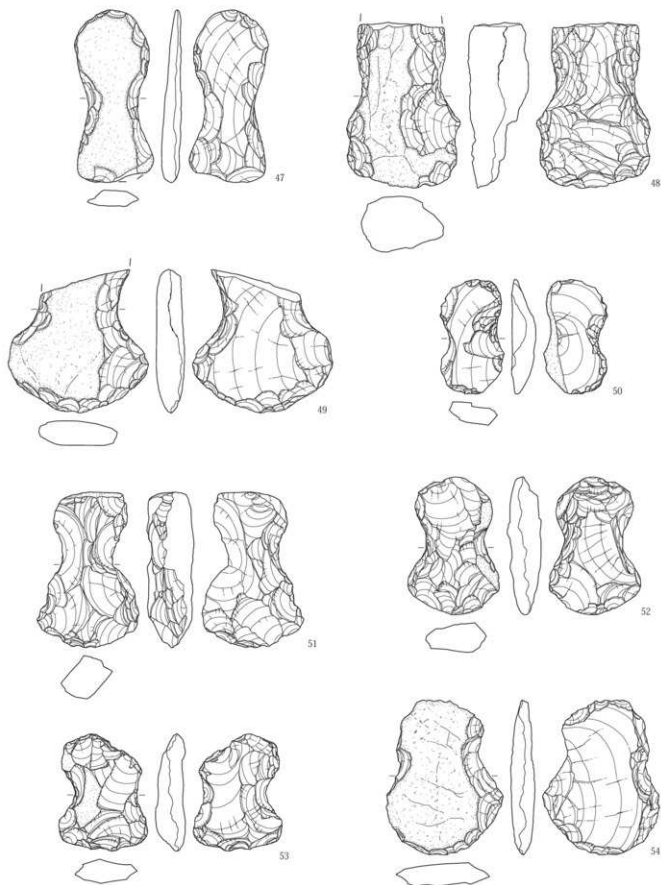
第117図 IV区遺構外出土石器(2)





第118図 IV区道構外出土石器(3)

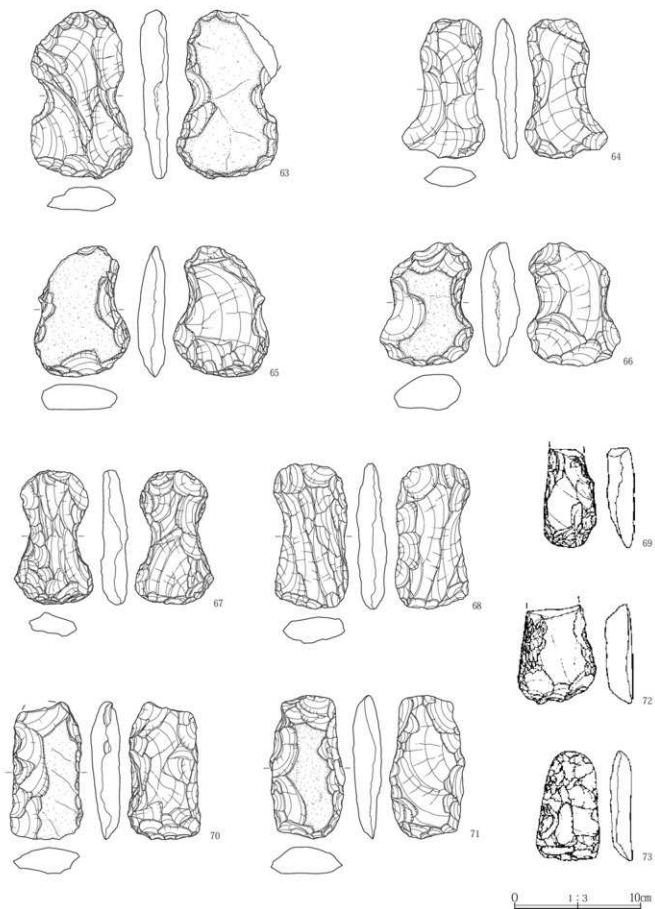
0 1:3 10cm



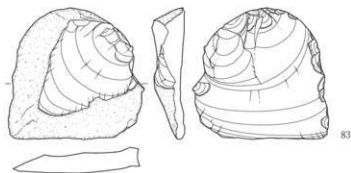
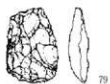
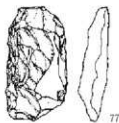
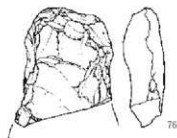
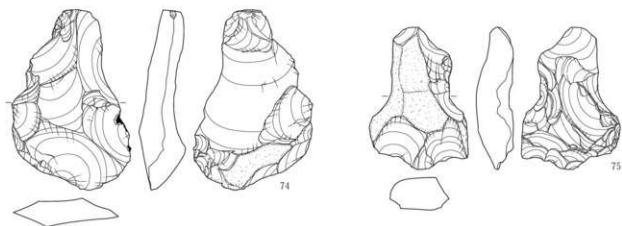
第119図 IV区遺構外出土石器(4)



第120図 IV区遺構外出土石器(5)

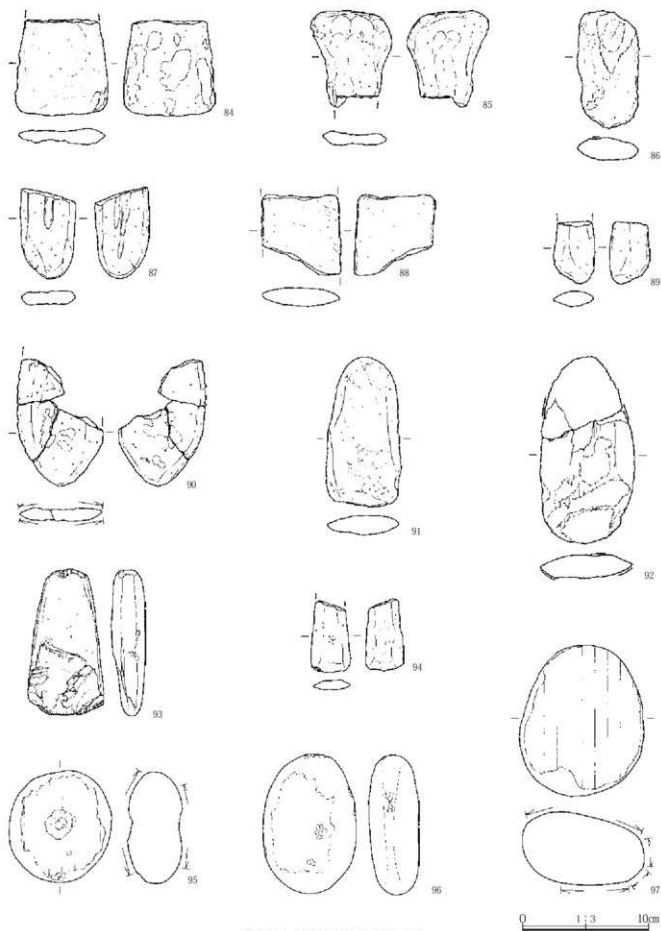


第121図 IV区遺構外出土石器(6)

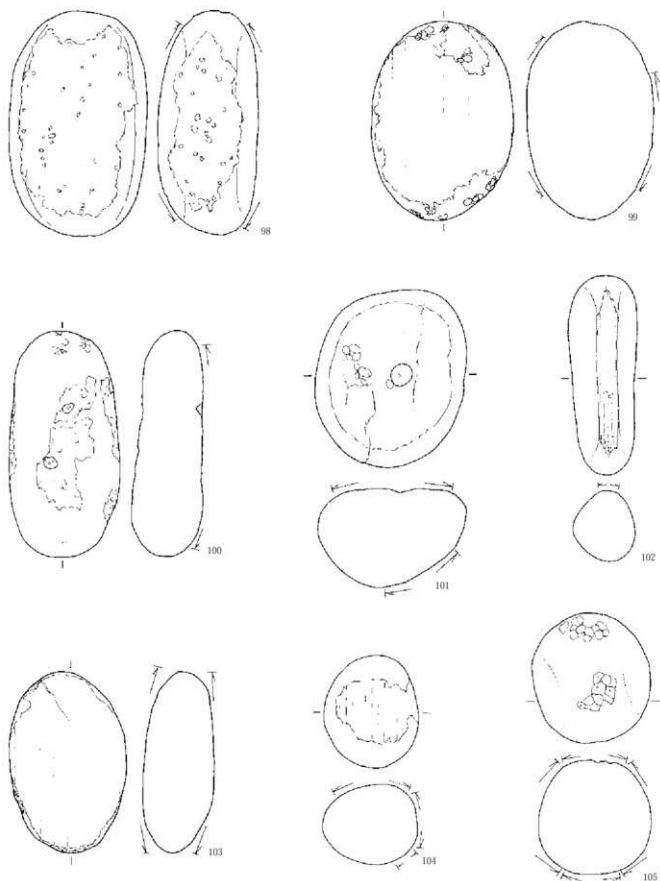


0 1:3 10cm

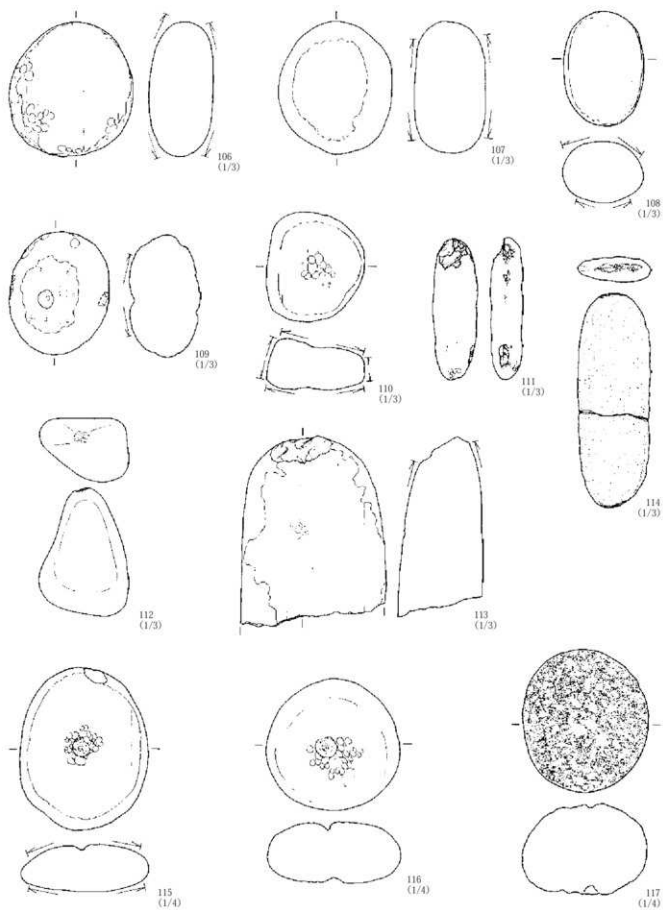
第122図 IV区遺構外出土石器(7)



第123図 IV区遺構外出土石器(8)

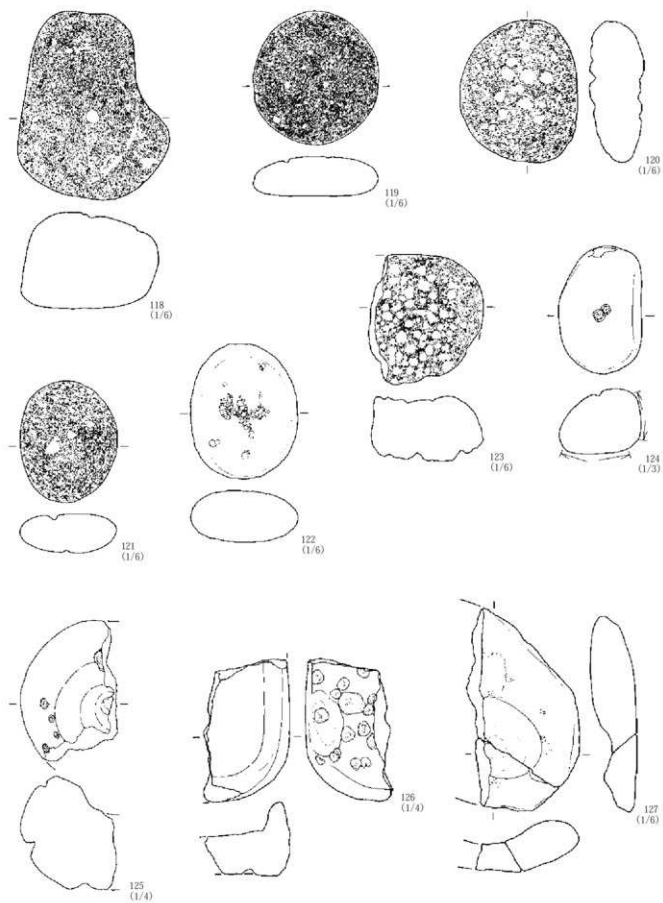


第124図 IV区遺構外出土石器(9)

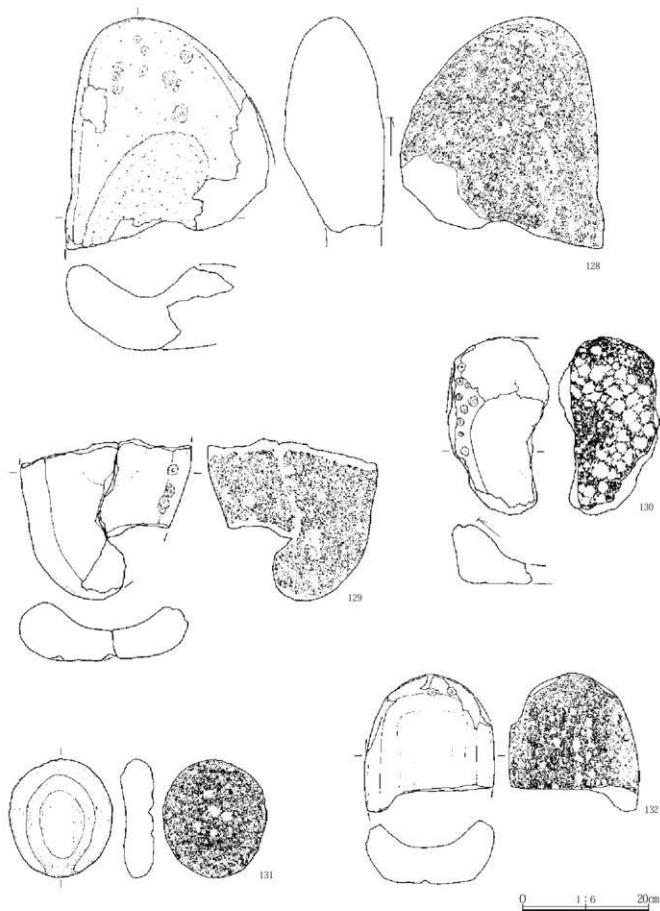


第125図 IV区遺構外出土石器 (10)





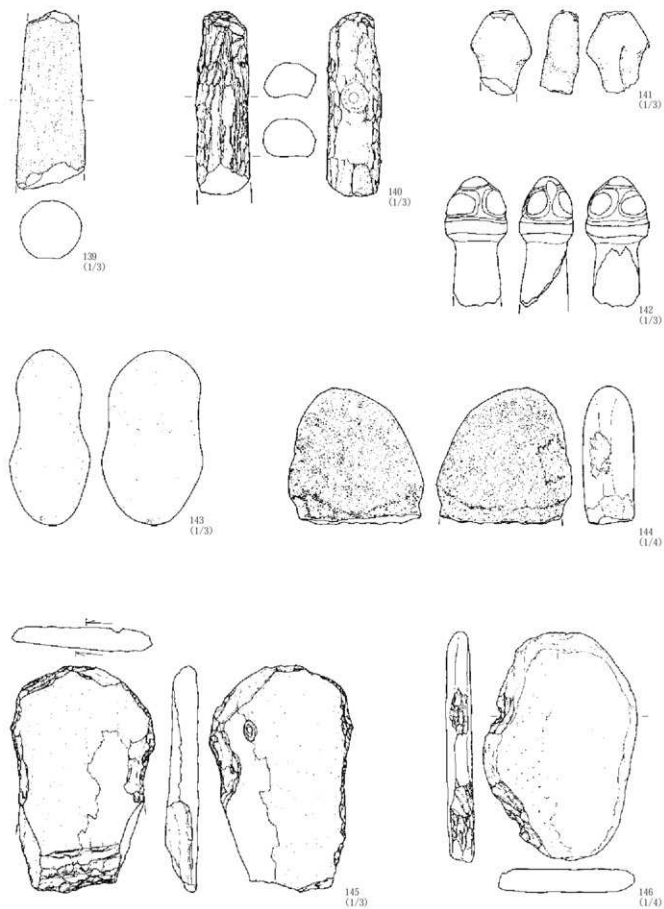
第126図 IV区遺構外出土石器 (11)



第127図 IV区遺構外出土石器(12)



第128図 IV区遺構外出土石器 (13)



第129図 IV区道構外出土石器 (14)

## 第6節 V区の調査

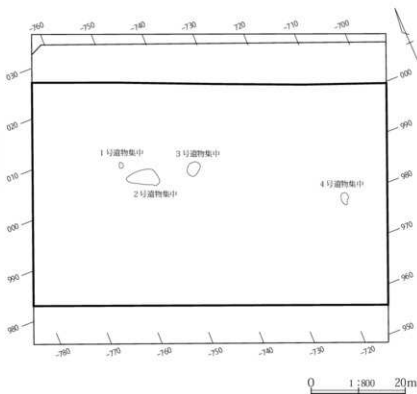
### 1 V区調査の概要と出土遺物

V区は、現地表標高が72m程で、調査区の北西から南東に緩やかに傾斜している。本調査区は、平成14年度・15年度に調査を行った。用地の関係から南北に二分割し、平成14年度は、北側部分の古墳時代面までの調査を行い、15年度に南側部分も含めて調査を行った。V区の調査では、As-B軽石は、表土からの耕作により攪乱されている状況であった。Hr-FA軽石層は、本調査区でははっきりしたものは確認出来なかった。検出された遺構は、二次堆積したAs-B軽石を覆土中を含むものが多く、近世以降のものである。調査区の北側に、西側のIV区から続く古墳時代の小河川が一部見られた他、古墳時代・古代の遺

構は確認されなかった。

本調査区の縄文時代の遺構は、遺物集中箇所である。調査区の4箇所から、遺物の集中して出土しているところが見られた。この遺物集中箇所は、掘り込みなどは検出されておらず、土層等のデータもないため、詳細は不明であるが、基本土層8層～11層（7図）の黄褐色土を主体とする地山面に加曽利B式期の大形粗製土器が集中して出土していることから、何らかの遺構があったと考えられる。

縄文時代の出土した遺物は、遺物集中箇所から比較的大形になる、加曽利B2式土器と思われる粗製深鉢が、14点出土している。他に包含層からは、早期後半の茅山下層式、前期後葉の有尾式、堀之内2式、加曽利B式土器が出土している。石器は、22点出土しており、石鏃4点、削器6点、打製石斧6点、磨石3点、石皿1点他である。



第130図 V区全体図

## 第2章 検出された遺構と遺物

### V区 1号遺物集中出土遺物観察表

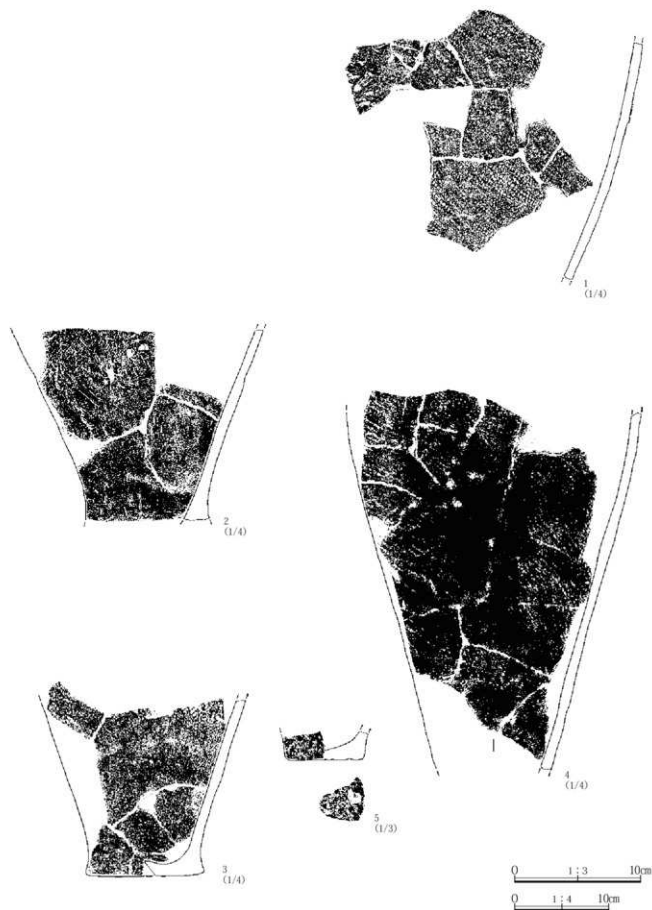
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	131・72	深鉢	胴部	φ1mmの白色粒・黒色粒	灰オリーブ	普通	縄文原体R L R 復部	縄文後期
2	131・72	深鉢	胴部～底部	細かい砂粒 白色粒	灰白	普通	内外面ナデによる整形。粗製土器。	縄文後期
3	131・72	深鉢	胴部～底部	φ1mm白色・黒色粒	橙	普通	内外面ナデによる整形。粗製土器。	縄文後期
4	131・72	深鉢	胴部～底部	白色粒多い	明赤褐	普通	縄文原体R L。	縄文後期
5	131・72	深鉢	底部破片	粗砂 φ1mm の白色粒	灰褐	普通	胴代直。	縄文後期

### V区 2号遺物集中出土遺物観察表

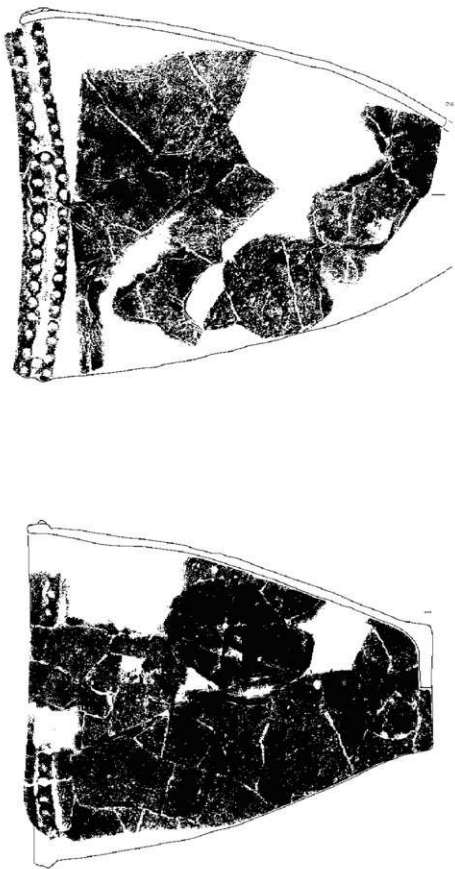
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	132・73	深鉢	口縁部～底部	粗砂 白色粒・黒色粒	黄橙	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～14mmの隆線が1条廻る。底面胴代直。全体に摩滅多い。	縄文後期
2	132・73	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 白色粒・黒色粒	黄橙	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～12mmの隆線が2条廻る。胴部には、幅3mmの平行沈線を2・3単位にした弧線が施される。	縄文後期
3	133・74	深鉢	口縁部～底部	粗砂 細かい 白色粒	明赤褐	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～14mmの隆線が1条廻る。底面胴代直。全体に摩滅多い。	縄文後期
4	133・74	深鉢	口縁部～底部	粗砂 φ1～ 3mmの小石多	にぶい橙	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～14mmの隆線が2条廻る。全体に摩滅多い。胴部中程に帯状に黒くなっている。	縄文後期
5	134・74	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細かい 黒色粒	にぶい黄	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～14mmの隆線が1条廻る。全体に摩滅多い。胴部中程に帯状に黒くなっている。胴部には、幅3～4mmの平行沈線による弧線文。	縄文後期
6	134・74	深鉢	口縁部～底部	粗砂 φ1～ 2mmの黒色粒	にぶい橙	普通	底面胴代直。胴部中央に帯状に復付着。縄文原体R L。	縄文後期
7	134・75	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細かい 黒色粒	にぶい黄	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ幅10～14mmの隆線が1条廻る。全体に摩滅多い。胴部中程に帯状に復付着。胴部には、幅3～4mmの平行沈線による弧線文。	縄文後期
8	135・74	深鉢	口縁部～胴部	φ1～2mmの 小石	にぶい黄	不良	口縁部に凹凸を持つ隆線が2条廻る。隆線の一部が剥落している。	加曾利B
9	135・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 白色粒・ 黒色粒	黄橙	普通	底面胴代直。	縄文後期
10	135・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 細かい 黒色粒	にぶい黄	普通	粗製土器。全体に摩滅多い。胴部中程の内外面帯状に復付着。底面胴代直。	縄文後期
11	136・75	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細かい 黒色粒	にぶい橙	普通	太さ3mmの沈線による横位区画。磨り消し縄文。外面に復付着。箆手状文で区画を切る。	船之内2
12	136・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1～ 2mmの黒色粒	橙	普通	無文。	縄文後期
13	136・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1～ 2mmの黒色粒	橙	普通	無文。底部付近に帯状に復付着。	縄文後期
14	136・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1～ 2mmの黒色粒	橙	普通	無文。底面胴代直。	縄文後期
15	136・75	深鉢	胴部～底部	φ1mmの小石	灰褐	普通	無文。	縄文後期

### V区 4号遺物集中出土遺物観察表

No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	136・75	深鉢	胴部～底部	粗砂 φ1mm の小石	灰褐	普通	無文。	縄文後期

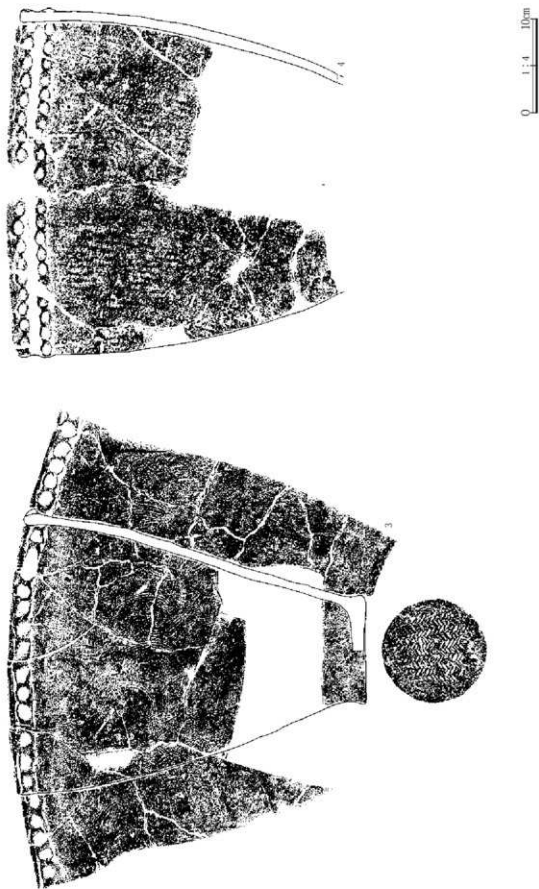


第131図 V区1号遺物集中出土土器

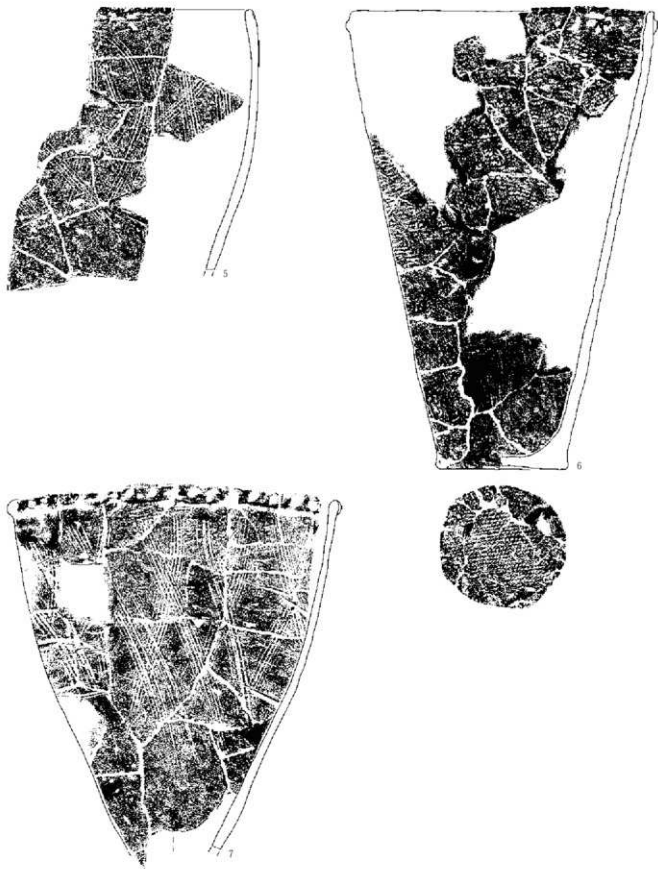


第132図 V区2号遺物集中出土器(1)





第133図 V区2号遺物集中出土器(2)

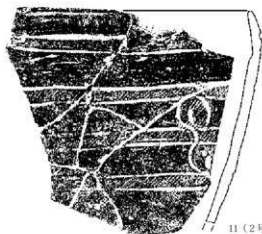


0 1:4 10cm

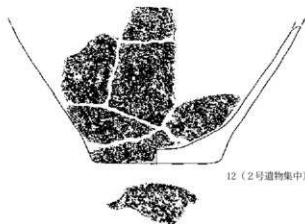
第134図 V区2号遺物集中出土器(3)



第135図 V区2号遺物集中出土土器(4)



11 (2号遺物集中)



12 (2号遺物集中)



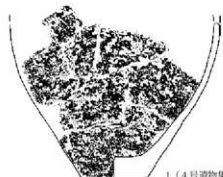
13 (2号遺物集中)



14 (2号遺物集中)



15 (2号遺物集中)



1 (4号遺物集中)



0 1:3 10cm

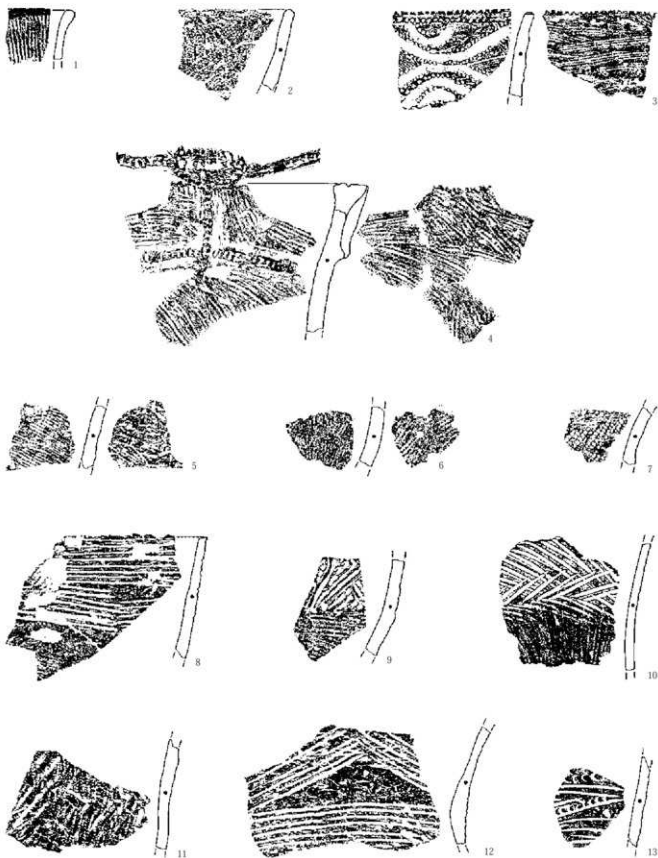
第136図 V区2号・4号遺物集中出土土器

V区 遺構外出土土器観察表

No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
1	137・76	深鉢	口縁部	粗砂	褐色	良好	黒系R1施文。	黒系文系
2	137・76	深鉢	口縁部	細砂 繊維	にぶい褐色	普通	貝殻陶粒・或いは櫛歯状工具による押し引きにより縄文を模倣し、条痕を施文。内面にも条痕施文。	茅山土層
3	137・76	深鉢	口縁部	繊維 φ1mmの 小石多い	褐色	良好	表裏に条痕文。隆起部縁にφ1mmの刺突を加え幾何学文様を施文。	鶴ヶ島台
4	137・76	深鉢	口縁部	繊維	にぶい褐色	良好	口縁部に台形の突起。口唇部から突起部に爪形文施文。隆帯により口縁部文様帯を区画し、突起から垂下する隆帯と交わる。隆帯上には、爪形文施文。内外面に条痕文施文。	茅山土層
5	137・76	深鉢	胴部	繊維 白色粒	褐色	普通	内外面に条痕文。	茅山土層
6	137・76	深鉢	胴部	細砂	浅黄褐色	普通	縄文施文。厚減多く原形不明。	協議
7	137・76	深鉢	胴部	繊維 白色粒	褐色	普通	縄文原形L R横。	有尾
8	137・76	深鉢	口縁部	繊維 φ1mmの 白色粒多い	黒褐色	良好	幅5mmの平行沈線が口縁部に沿って施文される。	有尾
9	137・76	深鉢	口縁部	繊維 φ1mmの 白色粒	褐色	普通	半軟竹管による平行沈線が口縁部文様区画。区画内を縦面状に施文し、押し引きの爪形文を充填する。	鶴ヶ島台
10	137・76	深鉢	胴部	細砂	灰褐色	良好	太さ3mmの沈線が矢羽状に施文。	加曾利B2
11	137・76	深鉢	胴部	繊維 白色粒	明褐色	良好	貝殻陶粒・或いは櫛歯状工具による押し引きにより縄文を模倣し、条痕を施文。内面にも条痕施文。	茅山土層
12	137・76	深鉢	口縁部	繊維 φ1mmの 白色粒多い	暗赤褐色	良好	幅6mmの平行沈線により頸部横位区画。口縁部は、山形・菱形に平行沈線施文。	有尾
13	137・76	深鉢	胴部	粗砂	褐色	良好	太さ1mmの細い沈線を横位施文。沈線間に幅4mmの爪形文。	沈線文系
14	138・76	深鉢	口縁部	細砂 細かい白 色粒	黒褐色	普通	口縁部突起。口縁内面に太さ2mmの沈線が廻る。口縁外面は、太さ8mmの隆帯による文様区画。突起下には対置文。胴部には太さ1mmの沈線による横位施文と付置文。	加曾利B2
15	138・76	深鉢	口縁部	細砂	にぶい褐色	普通	口縁部突起。内面に太さ2mmの沈線が2条廻る。口縁外面に刻みを持つ隆帯が廻る。太さ3mmの沈線による横位施文。	加曾利B2
16	138・76	浅鉢	口縁部	粗砂 細かい白 色粒	黒褐色	普通	太さ4mmの浅い沈線施文による弧線文。文様間は、磨り消し縄文。縄文原形L R。	加曾利B2
17	138・76	鉢	口縁部	細かい黒色粒	褐色	普通	口縁部突起。太さ2mmの沈線によるレンズ状の弧線文。	加曾利B2
18	138・76	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	普通	ソロバン玉形土器。口縁部内面に凹線。胴部に太さ3mmの沈線によるレンズ状の弧線文。	加曾利B2
19	138・76	浅鉢	口縁部	粗砂 φ1mm以 下の白色粒	褐色	不良	口唇部に刻み。太さ3mmの沈線が矢羽状文。	加曾利B2
20	138・76	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mmの 小石	にぶい黄 褐色	不良	太さ2mmの沈線によるレンズ状の弧線文。文様間に磨り消し縄文。	加曾利B2
21	138・76	深鉢	口縁部	細砂 細かい白 色粒	暗赤褐色	普通	ソロバン玉形土器。口縁部内面に凹線。胴部に太さ3mmの沈線によるレンズ状の弧線文。	加曾利B2
22	138・76	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	不良	口縁部に凹凸を持つ太さ12mmの隆帯廻る。全体に厚減多い。	加曾利B2
23	138・76	深鉢	口縁部	細砂 細かい黒 色粒	にぶい黄 褐色	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ隆帯が廻る。一部剥落している。太さ1mm以下の細い沈線による弧線文。	加曾利B
24	139・76	深鉢	口縁部～胴部	白色粒多い	暗赤褐色	普通	胴部のみ胴部に太さ2mmの矢羽状沈線。	加曾利B2
25	139・77	深鉢	口縁部	細砂 φ1mmの 白色粒	にぶい赤 褐色	普通	内面に太さ3～5mmの沈線が廻る。外面口縁部に刻みを持つ隆帯が廻る。太さ2mmの沈線が矢羽状に施文。	加曾利B2
26	139・77	深鉢	口縁部～胴部	φ1mmの小石・ 黄色粒	暗赤褐色	不良	口縁部突起。口縁部に沿って刺突の加えられた隆帯が廻る。胴部には太さ1mmの沈線による横位区画と磨り消し縄文。内面には、口縁部に沿って太さ3mmに沈線が2条廻る。縄文原形L R。	堀之内2
27	139・77	深鉢	口縁部～胴部	φ1mmの小石・ 黄色粒	暗赤褐色	不良	口縁部に沿って刺突の加えられた隆帯が廻る。胴部には太さ1mmの沈線による横位区画と磨り消し縄文。内面には、口縁部に沿って太さ3mmに沈線が2条廻る。縄文原形L R。	堀之内2
28	139・77	深鉢	口縁部～底部	粗砂 細かい黒 色粒	褐色	普通	粗製土器。口縁部に凹凸を持つ太さ10～14mmの隆帯が1条廻る。	加曾利B2
29	139・77	深鉢	胴部	粗砂 φ1mmの 小石	灰褐色	普通	浅い沈線が縦位に施文される。	加曾利B2
30	139・77	深鉢	胴部	粗砂 φ1mm以 下の黒色粒	灰褐色	普通	幅3mmの浅い沈線施文。	加曾利B2
31	140・77	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	不良	口縁部に凹凸を持つ太さ12mmの隆帯廻る。全体に厚減多い。	加曾利B2
32	140・77	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	不良	口縁部に凹凸を持つ太さ12mmの隆帯廻る。全体に厚減多い。	加曾利B2
33	140・77	深鉢	胴部	粗砂 細かい黒 色粒	にぶい褐色	不良	口縁部に凹凸を持つ太さ12mmの隆帯廻る。全体に厚減多い。	加曾利B2
34	140・77	深鉢	口縁部～胴部	細砂	黒褐色	良好	口唇部と口縁部に凹凸を持つ太さ6mmの隆帯を貼り付ける。外面保付着多い。	加曾利B2

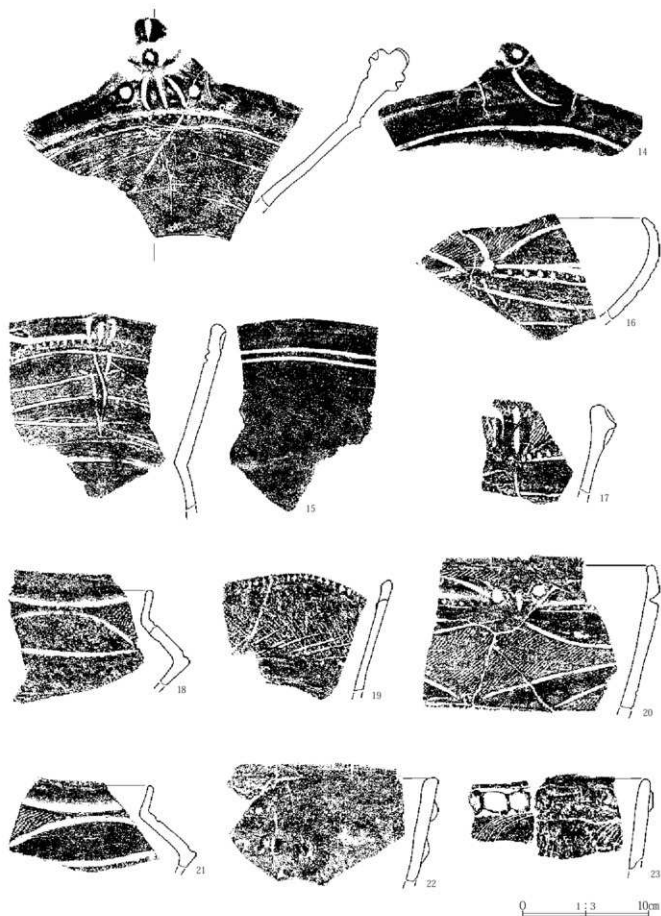
## 第2章 検出された遺構と遺物

No.	西・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	文様の特徴等	備考
35	140・77	深鉢	口縁部～胴部	細砂	黒褐色	普通	口唇部と口縁部に凹凸を持つ太さ6mmの隆帯を貼り付ける。外面保付着多い	加曾利B 2
36	140・78	深鉢	口縁部	粗砂 小石	灰褐色	普通	口縁部に凹凸を持つ隆帯が廻る。	加曾利B 2
37	140・78	深鉢	口縁部	細かい黒色粒	にぶい橙	不良	口縁部に凹凸を持つ太さ12mmの隆帯が2条廻る。全体に摩滅多い。	加曾利B 2
38	140・78	深鉢	口縁部	粗砂 細かい黒色粒	にぶい橙	普通	口縁部に凹凸を持つ太さ16～18mmの隆帯が2条廻る。	後期
39	141・78	深鉢	口縁部	粗砂 細かい白色粒	黒褐色	普通	内面に沈線が廻る。口唇部に突起。口縁部は幅4mmの隆帯に刺突を加えたものが2条廻る。胴部は太さ3mmの沈線による横位区画。磨り消し縄文。	堀之内2
40	141・78	深鉢	口縁部	細かい白色・黒色粒	明褐色	不良	口縁部内面に沈線が廻る。外面に刺突の加えられた隆帯が2条廻る。	堀之内2
41	141・78	浅鉢	口縁部	細砂 白色粒	焼灰	良好	口唇部に沈線が廻る。内面に沈線と刻み。外面隆帯起輪が2条廻り刺突が施される。	堀之内2
42	141・78	深鉢	口縁部	細砂 φ1mm以下の白色粒	明褐色	普通	粗製土器。縦位に条線をまばらに施文。口縁部に保付着。	後期
43	141・78	深鉢	口縁部	φ1mmの小石・白色粒	明褐色	普通	口縁部突起。突起下に外面に沈線による対弧状の文様。内面「ノ」の字状に沈線。口唇部にも沈線施文。	加曾利B 2
44	141・78	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	灰白	普通	口縁部突起。突起から外面に沈線による対弧文。内面「ノ」字状の文様。口縁部内面に沈線が廻る。口唇部には、突起部から沈線が施文される。	加曾利B
45	141・78	深鉢	口縁部	φ1mmの小石	暗褐色	普通	縦やかな対弧状。口縁部が肥厚し、沈線が廻る。外面は、太さ2mmの沈線が矢羽状に施文される。	加曾利B 2
46	141・78	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～2mmの小石	灰褐色	不良	口唇部肥厚し、斜位の刻み。口縁部には太さ2～3mmの沈線を平行させ斜位に施文。	加曾利B
47	141・78	深鉢	底部	繊維 φ1mmの小石	にぶい赤褐色	良好	底部やや上げ底。内面に条痕	茅山土層
48	141・78	深鉢	胴部	φ1mmの小石・白色粒	にぶい黄褐色	普通	縦位の段削り整形。	後期
49	141・78	浅鉢	胴部	粗砂	暗赤褐色	普通	胴部に突起を持つ。これに接続するように太さ2mmの沈線が施文される。文様帯は、φ1mmほどの細い円形の刺突。内面に保付着。	加曾利B 2
50	141・78	深鉢	口縁部	細砂 細かい白色粒	焼灰	普通	太さ3mmの沈線によるレンズ状の弧線文。文様間には、磨り消し縄文。	加曾利B 2
51	141・78	深鉢	胴部	細砂	灰褐色	普通	太さ3mmの沈線によるレンズ状の弧線文。	加曾利B 2
52	142・78	深鉢	底部	細砂 細かい白色粒	にぶい橙	良好	外面ナ字整形。底部付近の内外面に煤が帯状に付着。底面副代痕。	後期
53	142・78	深鉢	底部	細かい砂粒	にぶい橙	普通	ナデによる整形。底部付近に保付着。底面副代痕。	後期
54	142・78	深鉢	底部	細かい黒色粒	暗赤褐色	普通	底面副代痕。	後期
55	142・78	深鉢	底部	砂粒 φ1mmの白色粒多い	にぶい黄土	普通	無文。	後期
56	142・78	深鉢	底部	粗砂 φ1mm以下の白色粒	焼灰	不良	底面副代痕。	加曾利B 2
57	142・78	深鉢	底部	細かい白色粒多い	橙	不良	底面副代痕。	後期
58	142・78	深鉢	底部	粗砂 白色粒	にぶい橙	不良	無文。外面縦位のミガキ整形。	後期
59	142・78	深鉢	底部	φ1mm以下の白色粒	焼灰	普通	ナデによる整形。底面付近に保付着。	後期
60	142・78	注口	注口部	粗砂 φ1mm以下の白色粒	灰褐色	普通	胴上半部に太さ4mmの沈線による弧線文と刺突。胴下半部は無文。	加曾利B 2



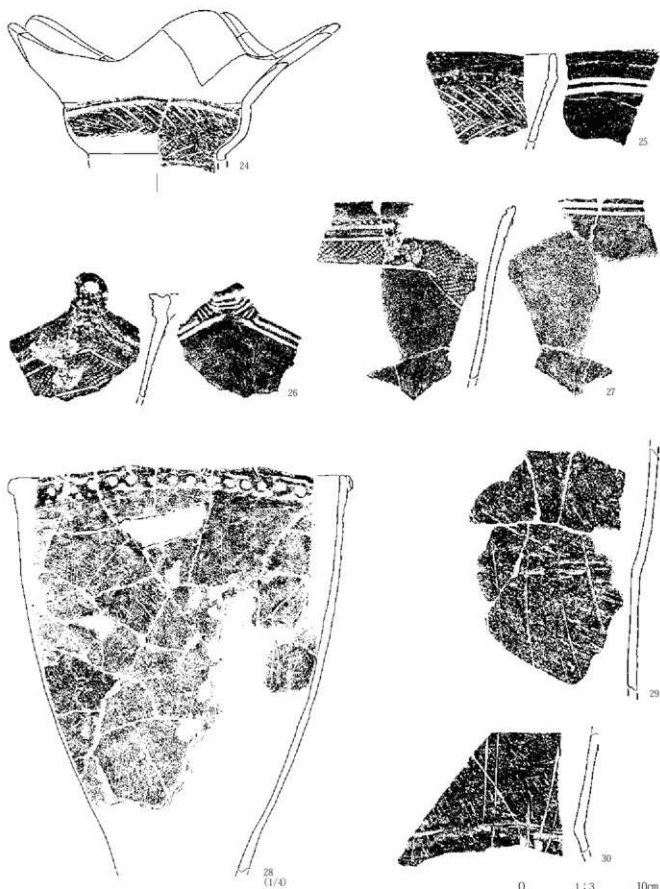
0 1:3 10cm

第137図 V区遺構外出土土器(1)

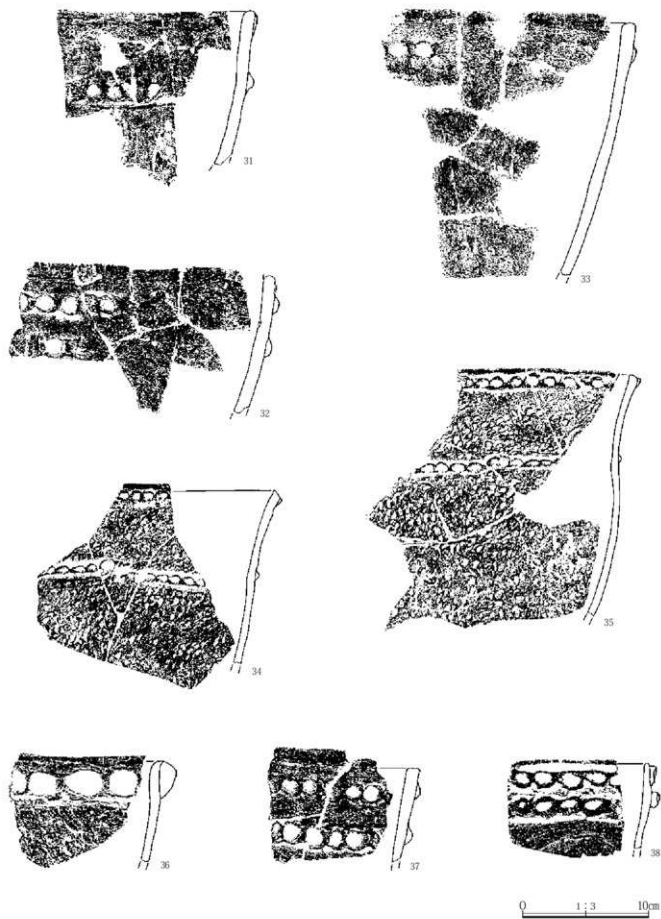


第138図 VI区遺構外出土土器(2)

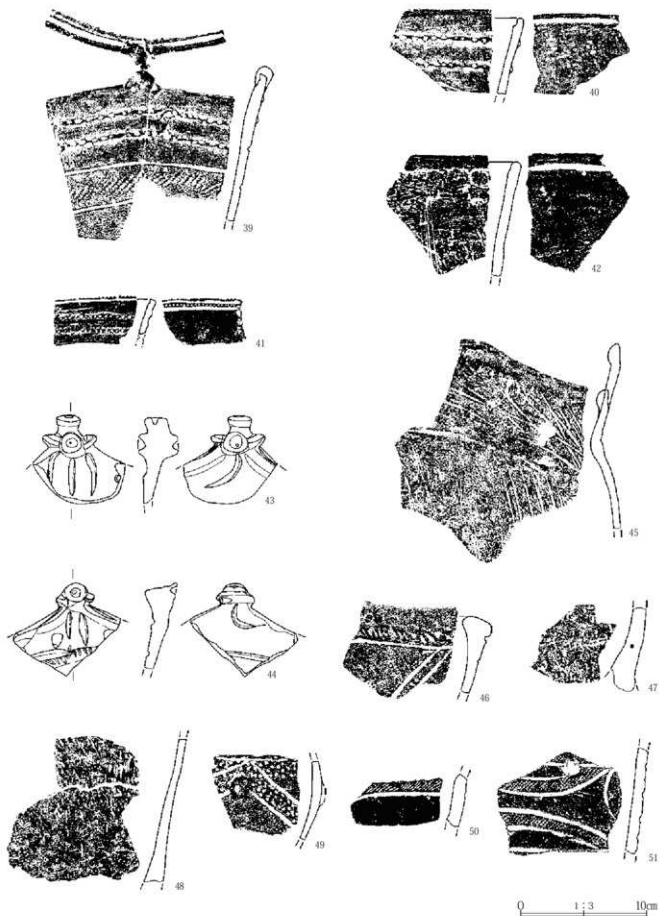




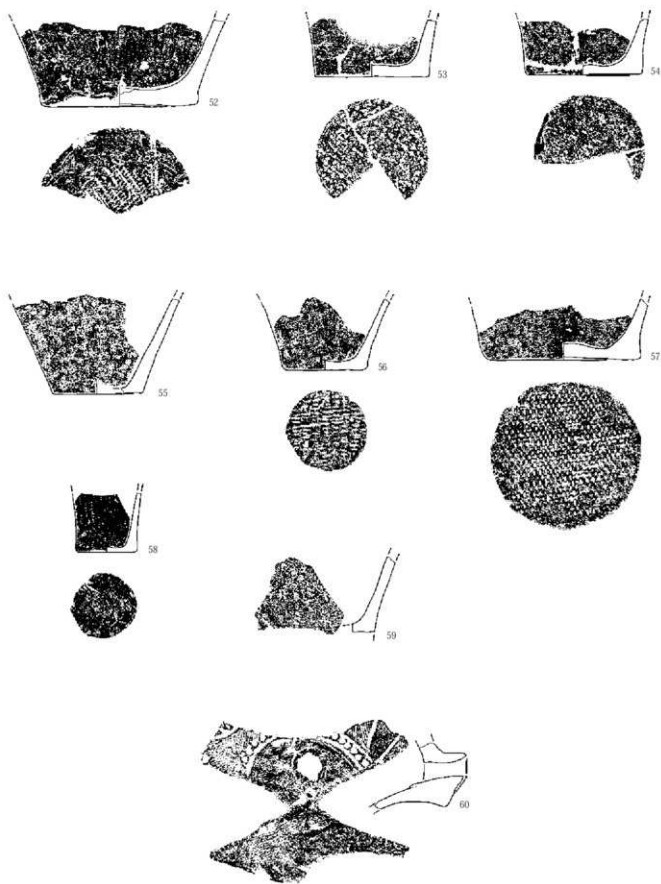
第139図 V区道橋外出土土器(3)



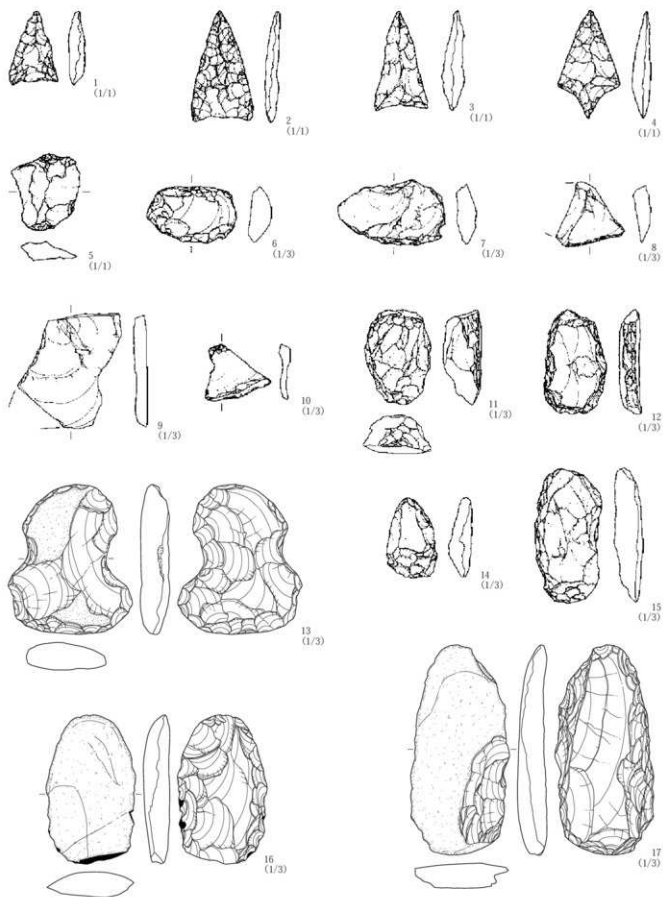
第140図 VI区遺構外出土土器(4)



第141図 V区遺構外出土土器(5)

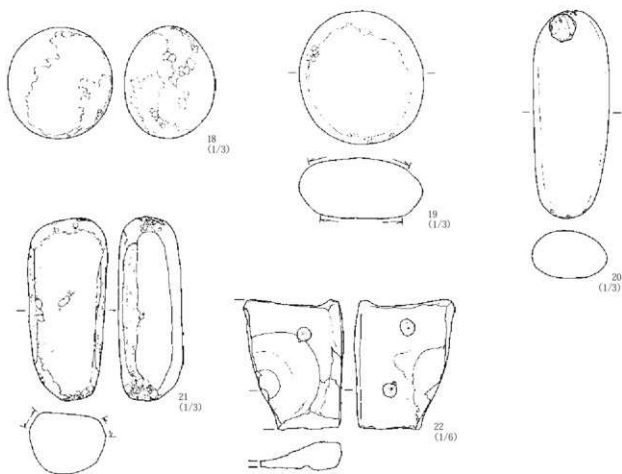


第142図 VI区遺構外出土土器(6)



第143図 V区遺構外出土石器(1)

第2章 検出された遺構と遺物



第14図 V区遺構外出土石器(2)

V区 遺構外出土石器観察表

no.	図・PL	器種	形態	出土位置	石材	長	幅	重	備考
1	143・79	石鏃	平基無	015-755	チャート	1.9	1.3	1.0	完成状態。完形。
2	143・79	石鏃	凹基無	990-700	チャート	2.9	1.6	1.5	完成状態。完形。
3	143・79	石鏃	凹基無	995-695	ホルンフェルス	2.7	1.4	1.5	完成状態。完形。
4	143・79	石鏃	凸基有	995-740	チャート	2.9	1.6	1.6	完成状態。完形。
5	143・79	楔形石器	005-740	チャート	2.1	1.8	2.0	表裏面に対向する割離面。	
6	143・79	削器	幅広	—	黒色頁岩	4.5	7.1	71.1	両側縁を粗く加工。下端は未加工。
7	143・79	削器	幅広	995-715	黒色頁岩	5.3	8.5	64.6	裏面側の割片端部を粗く加工。
8	143・79	削器	幅広	—	ホルンフェルス	5.1	5.4	26.4	裏面側の割片端部を加工。
9	143・79	削器	幅広	—	珪質頁岩	9.1	8.2	88.3	裏面側左側縁に連続割離して刃部を作出。
10	143・79	削器	幅広	旧河道	チャート	4.6	5.2	17.6	割片端部を連続割離して刃部を作出。
11	143・79	片対石斧	005-74	ホルンフェルス	7.5	5.2	137.9	縁器様の弧状刃部。裏面礫面。	
12	143・79	片対石斧	2号溝付土	ホルンフェルス	8.2	4.9	156.7	縁器様の弧状刃部。裏面礫面。	
13	143・79	打製石斧	分剝型a	4号溝縁上層	ホルンフェルス	11.9	9.8	314.0	完成状態。完形。
14	143・79	片対石斧	4号溝	珪質頁岩	6.8	3.9	45.9	縁器様の弧状刃部。裏面平坦割離。	
15	143・79	片対石斧	010-735	ホルンフェルス	10.6	5.3	156.6	両側縁リタクション。	
16	143・79	削器	幅広	3号遺物集中	ホルンフェルス	11.8	7.1	230.0	両側縁を粗く加工。裏面礫面。
17	143・79	打製石斧	短冊型	3号遺物集中	ホルンフェルス	16.6	7.8	372.8	左辺リタクション。刃部磨耗。
18	144・79	磨石	円盤	2号遺物集中	粗粒輝石安山岩	8.8	8.1	697.5	磨耗が著しく、良く使い込んでいる。
19	144・79	磨石	扁平盤	995-705	粗粒輝石安山岩	10.4	9.7	789.1	完形。
20	144・79	磨石	棒状盤	3号集石	デイサイト凝灰岩	16.3	6.0	653.4	破損。下端の破損面は風化摩耗が著しい。裏面中央付近は磨耗が著しく、わずかに窪む。再生利用？
21	144・79	磨石	棒状盤	995-700	砂岩	14.5	6.2	750.0	両側縁・先端とも磨打・磨耗が激しい。
22	144・79	石皿	有縁	2号遺物集中	緑色片岩	20.6	15.7	245.0	

## 第7節 VI・VII区の調査

## 1 VI区調査の概要と出土遺物

VI区は、現地表標高が71.5m～72m程で、調査区の北西から南東に緩やかに傾斜している。本地区は、平成15年度に調査を行った。VI区では、他地区に見られたAs-B軽石面は削平されており、表土下に僅かにHr-F A軽石混じり層が見られた。古墳時代以降の遺構は、この面に掘り込まれている。上層が削平されているため、検出されたものは少なかった。

縄文時代の遺構は、本調査区からは検出されなかったが、土器や石器等の遺物が、縄文土器を包含する褐色土を主体とする、基本土層の4層～6層中（7図）で、標高71m前後から出土している。

調査区の北東部にある微高地を中心に、早期中葉の沈線文系土器、早期後半の轆ヶ島台式土器、茅山下層式土器が、比較的まとまって出土している。その他の時期では、前期後半の諸磯a式、後期の加曾利B式土器が少量出土している。石器は、26点出土している。石錐1点、石鏃7点、打製石斧6点、削器4点、磨石3点、その他剥片類等が出土している。

## 2 VII区調査の概要と出土遺物

VII区は、現地表標高が71.5m程で、調査区の北西から南東に緩やかに傾斜している。本地区は、平成14年度・15年度に調査を行った。用地の関係から南北に二分し平成14年度は、北側部分を調査し、15年度に南側部分の調査を行った。VII区の調査では、表土からの耕作により攪乱されている状況であったが、一部As-B軽石が残るところが認められた。

縄文時代の遺構は、本調査区から検出されなかったが、土器や石器等の遺物が、縄文土器を包含する褐色土を主体とする基本土層3層（7図）を中心に、標高71m前後から出土している。

本調査区からの遺物出土量は少なく、調査区の遺物包含層からまばらに出土している状況であった。早期後半の条痕文土器、前期の諸磯b式、諸磯c式、後期の堀之内2式、加曾利B式土器の深鉢破片や注口土器が出土している。石器は、20点出土している。有舌尖頭器1点、石鏃5点、打製石斧8点、削器2点、石皿2点、磨石1点、垂れ飾り、その他剥片類等が出土している。

VI区 遺構外縄文土器観察表

No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
1	145・79	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 細礫	明赤褐色	普通	推定口径28.8cm。縦い波状口縁で、縦く外反する器形。波頂部下が肥厚する。2条1単位の工具を用いた縦位多段横成となり、2条の平行沈線、1条の短沈線を交互に重ねる。1箇所、短沈線と平行沈線の間に波状の平行沈線を介在させる部位が見られる。破片下端では短沈線が3条になっている。内面は丁寧に調整されて平滑である。	沈線紋系
2	145・79	深鉢	口縁部～胴部	粗砂 石英	明黄褐色	良好	推定口径19.8cm。折り返し状の肥厚口縁で、4単位と思われる突起を付す。肥厚部に最大4条の内押し突を横位にめぐらせ、肥厚部下に同様の刺突を縦方向に施した刺突列を1条めぐらす。口唇部には先端の鋭利な工具による細長い刺突を施す。肥厚部下に細かな条痕を施すが、内面の条痕調整は見られない。器壁5mmと薄く、繊維を含まず、焼成良好で堅い。	子母口式
3	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	明赤褐色	良好	波状口縁で、縦く外反する器形。口唇部、外削ぎ。波頂部から爪形状の刺突を垂下させ、縦位の沈線を施す。内面ミガキ。	田戸下層式
4	145・79	深鉢	胴部破片	粗砂	明赤褐色	良好	破片上位に横位、下位に斜位の沈線を施す。上端には刺突を施したような凹みが見られる。	田戸下層式
5	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 白色粒	にぶい赤褐色	普通	波状口縁。2条1単位の平行沈線を斜位に施す。内面横位のナデ。	沈線紋系
6	145・80	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	暗	普通	横位3条の平行沈線と斜位の対向する平行沈線を施す。	沈線紋系
7	145・80	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫	明赤褐色	良好	横位、弧状の平行沈線を施す。	沈線紋系
8	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	明赤褐色	普通	沈線により幾何学モチーフを描き、縦面状紋、貝殻縦線紋を充填施紋する。口縁下に貝殻の先端圧痕によると思われる縦位の刻みが見られる。口縁内面に貝殻縦線による斜位の刻みを付す。	田戸上層式
9	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂多 金雲母	浅黄褐色	普通	2条1単位を基調とした平行沈線を斜位に施し、円形刺突を施す。刺突はペン先状の丸く先端の尖った工具を用いて上から斜め下に向けて深めに刺している。口縁内面に刻みを付す。口縁内面にも鋭い刺突列が見られる。器壁4mmと薄手。	道徳森2類
10	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂多 金雲母	浅黄褐色	普通	No.9と同一個体。	道徳森2類

第2章 検出された遺構と遺物

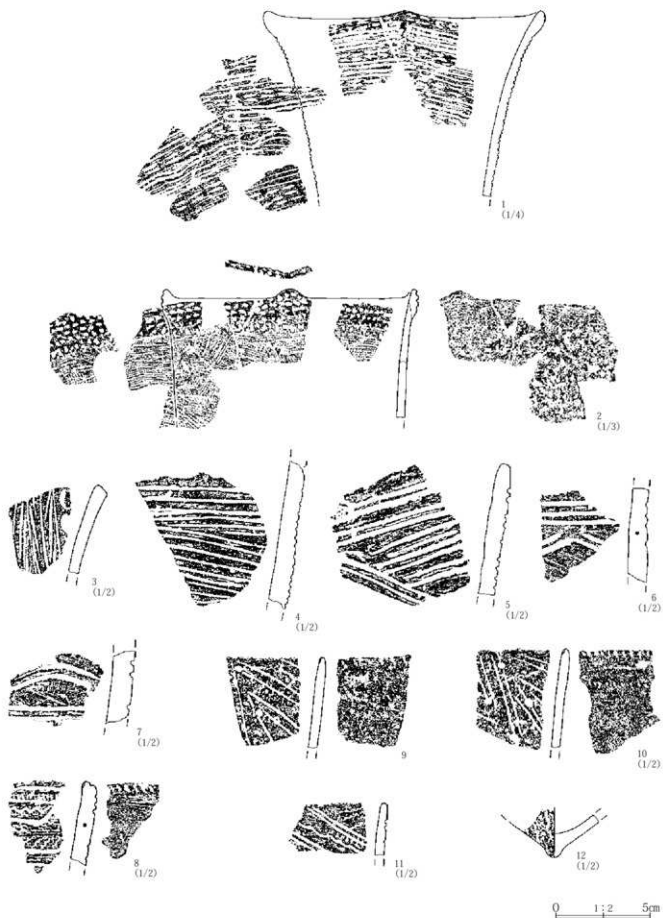
No.	図・Pl.	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
11	145・80	深鉢	口縁部破片	粗砂	浅黄橙	普通	波状沈線を挟んだ斜位の平行沈線、貝殻線紋を施す。器壁4mmと薄手。	道徳森2類
12	145・80	深鉢	底部破片	粗砂	にぶい橙	普通	乳房状の底部、貝殻線紋を縦位施しているようだ。器壁4mmと薄手。	常世系
13	146・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	にぶい黄橙	普通	無紋。内外面に押痕を施す。	沈線紋系
14	146・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	橙	普通	緩く外反する器形。無紋。内外面ナデ。	沈線紋系
15	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	無紋。	沈線紋系
16	146・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	にぶい黄橙	普通	折り返し状の段を有す。段部部に斜位の絡条体圧痕紋を施す。口唇部にも無紋。段部下部は横位の押痕。	子母口式
17	146・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	橙	普通	波状口縁で、内層する器形。襷降線を貼付して幾何学モチーフを施し、一部の区画内に斜位の沈線を充填施す。竹管工具による半円形の刺突を施す。口縁外端に刻み、地紋、内面糸痕施す。糸痕紋系。	鶴ヶ島台式
18	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	にぶい赤褐	普通	口縁部紋様帯の部位で内層する。襷降線を貼付して幾何学モチーフを施し、一部の区画内に斜位の沈線を充填施す。竹管工具による半円形の刺突を施す。地紋、内面糸痕施す。	鶴ヶ島台式
19	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	胴部紋様帯の部位。襷降線を貼付して幾何学モチーフを施し、一部の区画内に斜位の沈線を充填施す。竹管工具による円形刺突を施す。地紋、内面糸痕施す。	鶴ヶ島台式
20	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	内層する器形。屈曲部上位が紋様帯となり、襷降線を貼付して幾何学モチーフを施し、一部の区画内に沈線を充填施す。竹管工具による刺突を施す。屈曲部下、内面糸痕施す。	鶴ヶ島台式
21	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂多 繊維	明赤褐	普通	屈曲部の部位。横位襷降線をめぐらせて胴部紋様帯を区画、紋様帯内は細沈線により幾何学モチーフを描き、区画内に沈線を充填施す。竹管工具による半円形の刺突を施す。	鶴ヶ島台式
22	146・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	明赤褐	普通	口縁の丸い内削ぎ状の口唇部、沈線によりX字状など幾何学モチーフを描く。地紋横位の押痕。口唇部に刻みを付す。	茅山上層式
23	146・80	深鉢	口縁部破片	細砂 結晶片岩 繊維	赤褐	普通	尖頭状の口唇部。地紋に横位の糸痕を施し、沈線による弧状モチーフを描く。内面糸痕施す。	茅山上層式
24	146・80	深鉢	胴部破片	粗砂 細砂 繊維	橙	普通	段をもつ器形。屈曲部上位に斜格子目状の沈線を施す。地紋、内面糸痕施す。	茅山上層式
25	146・80	深鉢	胴部破片	細砂 結晶片岩 繊維	赤褐	普通	屈曲する器形。屈曲部上位は斜格子目状、屈曲部下位は横位に糸痕を施す。屈曲部下位にも一部上位からの続きがかかる。内面糸痕。	茅山上層式
26	147・80	深鉢	胴部破片	粗砂 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	No.27と同一個体。紋様帯内の部位。横位、縦位の刺突を施す。	茅山上層式
27	147・80	深鉢	胴部破片	粗砂 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	内層する器形。屈曲部に平截竹管状工具による2条1単位の刺突をめぐらせて口縁部紋様帯を区画、紋様帯内に同様の刺突を縦位に施す。地紋糸痕。	茅山上層式
28	147・80	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	橙	普通	緩く内層する器形を呈し、口縁部に内湾する突起を付す。屈曲部に押捺部を尖らせた半截竹管状工具による刺突をめぐらす。波頂部から屈曲部にかかる縦位の隆帯が割れた痕跡が見られる。口唇部に刻みを付す。地紋、内面糸痕施す。	茅山上層式
29	147・80	深鉢	口縁部破片	細砂多 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	胴部で緩く外屈し、口縁は内湾。突起を付す器形。屈曲部に2条1単位の角形刺突をめぐらせて口縁部紋様帯を区画、紋様帯内は縦位の刺突列を充填施す。波頂部にはやや斜めに施される。地紋、内面糸痕施す。	茅山上層式
30	147・80	深鉢	口縁部破片	細砂多 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	緩く外屈する器形。2条1単位の刺突列を横位並行させて口縁部紋様帯を区画、紋様帯内は縦位2条と斜位の刺突列を施す。地紋、内面糸痕施す。	茅山上層式
31	147・80	深鉢	胴部破片	粗砂 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	No.30と同一個体。	茅山上層式
32	147・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	横位の押痕を施したのち、貝殻弁痕を施す。内面にも貝殻弁圧痕が施される。	糸痕紋系
33	147・80	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	普通	No.32と同一個体。	糸痕紋系
34	148・81	深鉢	胴部破片	粗砂 繊維	橙	不良	斜位の糸痕を施し、且殻の先端圧痕を施す。内面糸痕施す。	糸痕紋系
35	148・81	深鉢	底部破片	粗砂 繊維	明赤褐	普通	底径7.0cmで上7度。底部付近にも貝殻弁圧痕を施す。	糸痕紋系
36	148・81	深鉢	口縁部破片	粗砂 細砂 繊維	橙	普通	口唇部内削ぎで、外端に刻みを付す。内外面に糸痕を施す。破片下端に段が認められる。補修孔あり。	糸痕紋系
37	148・81	深鉢	口縁部破片	粗砂 細砂 繊維	明赤褐	普通	胴部に段をもつ器形。口唇部内削ぎで、外端に刻みを付す。内外面に糸痕を施す。	茅山上層式
38	148・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細砂 繊維	明赤褐	普通	No.37と同一個体。	糸痕紋系
39	148・81	深鉢	口縁部破片	細砂多 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	尖頭状の口唇部で、刻みを付す。内外面糸痕。	糸痕紋系
40	148・81	深鉢	口縁部破片	粗砂 繊維	にぶい赤褐	普通	外面に横位の糸痕を施す。口唇部に刻みを付す。	糸痕紋系
41	148・81	深鉢	口縁部破片	細砂 結晶片岩 繊維	明赤褐	普通	緩く外反する器形。内外面に糸痕を施すようだが、緩く割然としない。口唇部に刻みを付す。	糸痕紋系



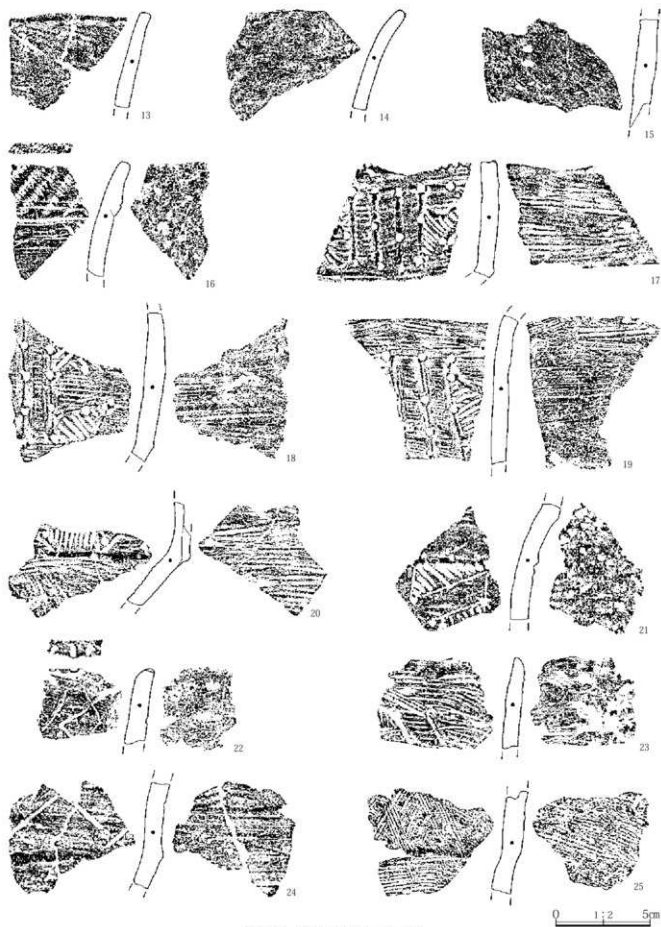
No.	図・PL	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
42	149・81	深鉢	口縁部破片	細礫 結晶片岩 織裡	明赤褐	普通	No.41と同一個体。	糸痕紋系
43	149・81	深鉢	口縁部破片	粗砂 細礫 織裡	橙	普通	緩く内湾する筒形。内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
44	149・81	深鉢	口縁部破片	赤チャート 細礫多 織裡	にぶい黄橙	普通	外面横位の押痕。内面指ナデのような横位の調整痕が施され、凹凸顯著。	糸痕紋系
45	149・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	橙	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
46	149・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫多 織裡	明赤褐	普通	緩く外反する筒形。外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
47	149・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫多 織裡	明赤褐	普通	No.46と同一個体。	糸痕紋系
48	149・81	深鉢	胴部破片	細礫多 織裡	明赤褐	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
49	149・81	深鉢	胴部破片	細礫多 織裡	橙	普通	外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
50	149・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
51	149・81	深鉢	胴部破片	細砂 中礫 織裡	橙	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
52	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 白色粒 織裡	橙	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
53	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 織裡	にぶい黄橙	普通	内外面に押痕を施す。	糸痕紋系
54	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
55	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 織裡	橙	普通	縦位、横位の押痕を施す。	糸痕紋系
56	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 織裡	にぶい赤褐	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
57	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	橙	普通	底部に近い部位。外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
58	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	橙	普通	内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
59	150・81	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 織裡	明赤褐	普通	底部に近い部位。内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
60	150・82	深鉢	胴部破片	粗砂 細礫 織裡	明赤褐	普通	外面に縦位の糸痕を施す。外面の凹凸顯著。	糸痕紋系
61	151・81	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	底部に近い部位。内外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
62	151・82	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	推定底径4.6cm。外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
63	151・82	深鉢	底部破片	粗砂 織裡	橙	普通	推定底径6.0cm。底部が若干張り出す筒形。外面に糸痕を施す。	糸痕紋系
64	151・82	深鉢	底部破片	粗砂 細礫 織裡	橙	普通	推定底径6.4cm。上げ底。内外面および底面に糸痕を施す。	糸痕紋系
65	151・82	深鉢	底部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	推定底径8.0cm。内外面に斜位の糸痕を施す。	糸痕紋系
66	151・82	深鉢	口縁部破片	粗砂 織裡	明赤褐	普通	全体に摩滅しており原形不詳明。	有尾
67	151・82	深鉢	胴部破片	細砂 φ1mmの小石 織裡	にぶい赤褐	普通	全体に摩滅しており原形不詳明。	有尾
68	151・82	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	にぶい黄橙	普通	全体に摩滅しており原形不詳明。	有尾
69	151・82	深鉢	胴部破片	粗砂 織裡	にぶい赤橙	普通	原形R上、LRの羽状残文。	有尾
70	151・82	深鉢	胴部破片	細砂	浅黄橙	普通	幅3mmの平行沈線彫文による木の葉文。	諸説a
71	151・82	深鉢	胴部破片	細砂	浅黄橙	普通	幅3mmの平行沈線彫文による木の葉文。	諸説a
72	151・82	深鉢	口縁部破片	粗砂	にぶい赤褐	普通	口唇部に2単位の突起。幅2mmの沈線が弧状に施文される。三叉文。	加智川B 2
73	151・82	深鉢	底部	細砂 黒色粒	にぶい黄橙	普通	底面削代痕。	後期

Ⅷ区 遺構外出土石器調査表

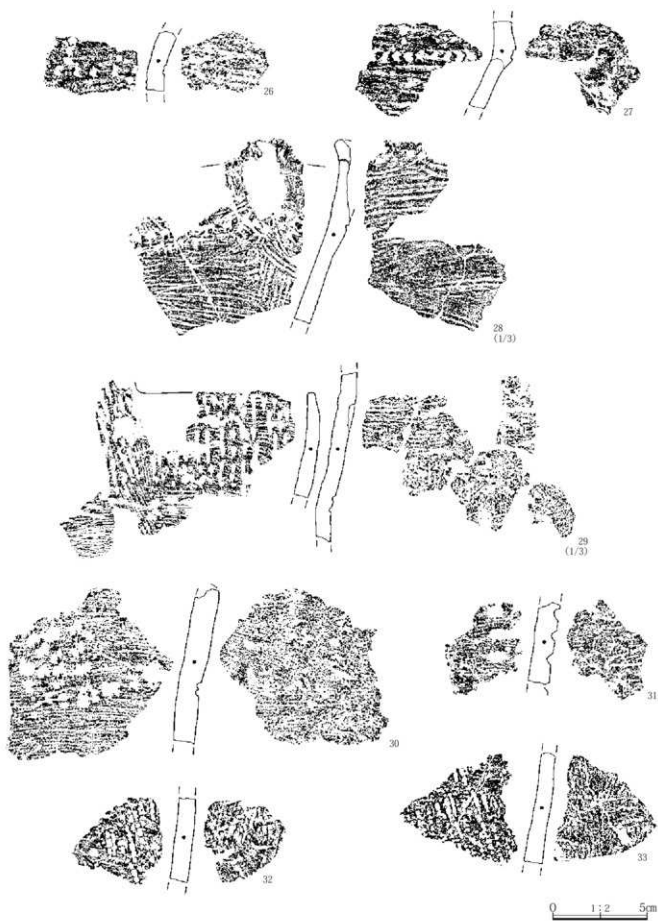
No.	図・PL	器種	形態	出土位置	石材	長さ	幅	重量	備考
1	151・82	石鏃	平基無	970-650	チャート	3.2	2.7	6.0	未製品。
2	151・82	石鏃	凹基無	975-655	チャート	3.0	1.7	1.3	完成状態。完形。
3	151・82	石鏃	凹基無	970-655	黒曜石	2.4	1.5	0.9	完成状態。右辺の返し部を欠く。
4	151・82	石鏃	凹基無	表探	チャート	2.0	1.5	1.0	完成状態。完形。
5	151・82	石鏃	凹基有	380-670	チャート	1.8	1.3	0.7	完成状態。先端部・茎を欠損。
6	152・82	石鏃	尖基無	包含層	チャート	2.5	1.0	1.4	完成状態。完形。
7	152・82	石鏃	凹基無	970-645	黒曜石	1.2	1.2	0.3	完成状態。完形。
8	152・82	石鏃		965-645	チャート	3.1	2.5	6.0	先端部磨耗痕は見られない。
9	152・82	石鏃	横型	970-65	チャート	3.6	5.4	17.4	右辺を欠く。未製品。
10	152・82	楔形石器		980-660	チャート	3.6	2.7	11.6	表裏面に向向する押痕。
11	152・82	削器	横長	970-640	珪質頁岩	9.1	5.0	76.0	裏面側削片端部を厚く加工。刃部を作出。
12	152・82	片刃石斧		975-650	黒色頁岩	8.3	4.6	86.7	やや厚い加工で、突出気味の弧状刃部作出。
13	152・82	加工痕ある削片	幅広	表探	細粒輝石安山岩	9.5	4.6	123.8	
14	152・82	削器	縦長	980-660	黒色頁岩	8.4	3.2	32.0	内縁を浅く加工。裏面磨面。
15	152・82	打製石斧	分銅型a	980-675	ホルンフェルス	10.1	5.6	154.4	完成状態。右側磨面・投擲部を欠く。
16	152・82	打製石斧	分銅型b	980-655	ホルンフェルス	10.8	6.5	180.1	刃部磨耗・投擲部あり。
17	152・82	片刃石斧		975-680	黒色頁岩	9.5	5.0	96.5	弧状刃部を作出。裏面は平坦な分銅面。
18	152・82	片刃石斧		975-650	細粒輝石安山岩	6.3	5.0	56.4	弧状刃部を作出。裏面磨面。上平欠損。
19	152・82	片刃石斧	表探		黒色頁岩	7.1	4.7	76.3	弧状の刃部を作出。裏面磨面。
20	152・82	削器	幅広	960-660	黒色頁岩	4.5	6.0	21.8	下縁を浅く加工し、刃部を作出。
21	152・82	削器	幅広	900-585	黒色頁岩	8.2	5.3	87.4	左辺に連続削痕を加え、刃部を作出。
22	152・82	砥石		No.985	牛伏砂岩	11.1	7.3	101.0	裏面は被熱して割落。
23	152・82	磨石	扁平礫	970-655	細粒輝石安山岩	8.7	8.2	417.0	
24	152・82	磨石	扁平礫	970-655	細粒輝石安山岩	9.2	8.3	404.2	完形。
25	152・82	磨石	長円礫	表探	溶結黒灰岩	8.4	11.0	408.7	側面で敲打重・磨耗痕で平坦化。
26	152・82	多孔石	扁平礫	960-650	細粒輝石安山岩	23.6	20.6	3351.8	表裏面に多数の孔を穿つ。



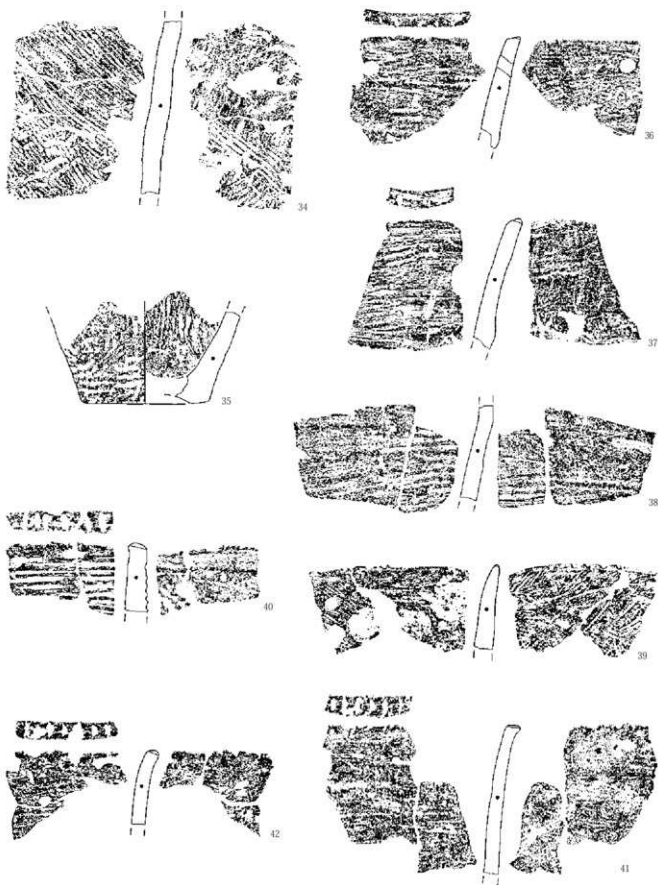
第145図 VI区遺構外出土土器(1)



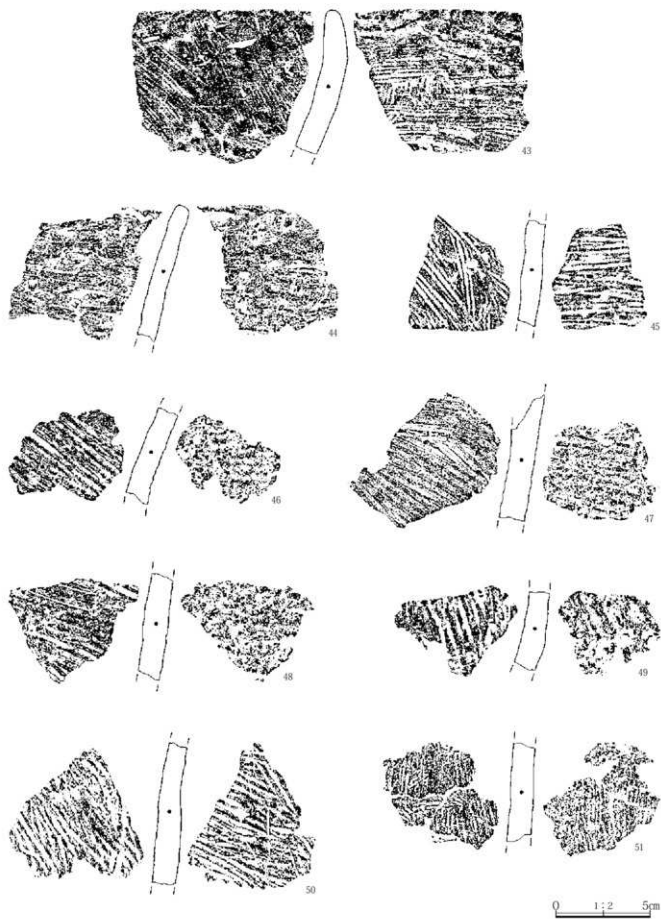
第146図 VI区道橋外出土土器(2)



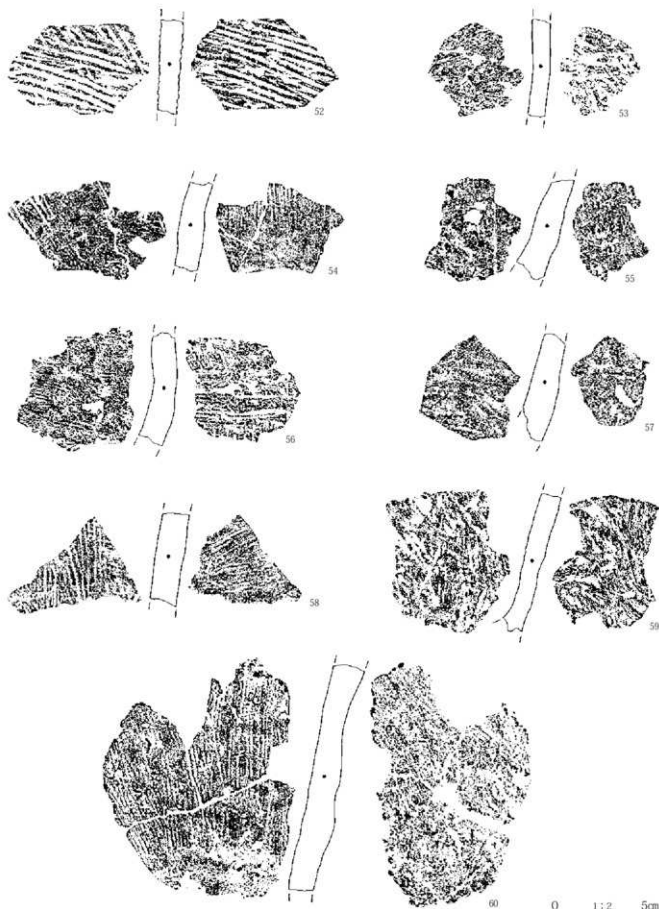
第147図 VI区遺構外出土土器(3)



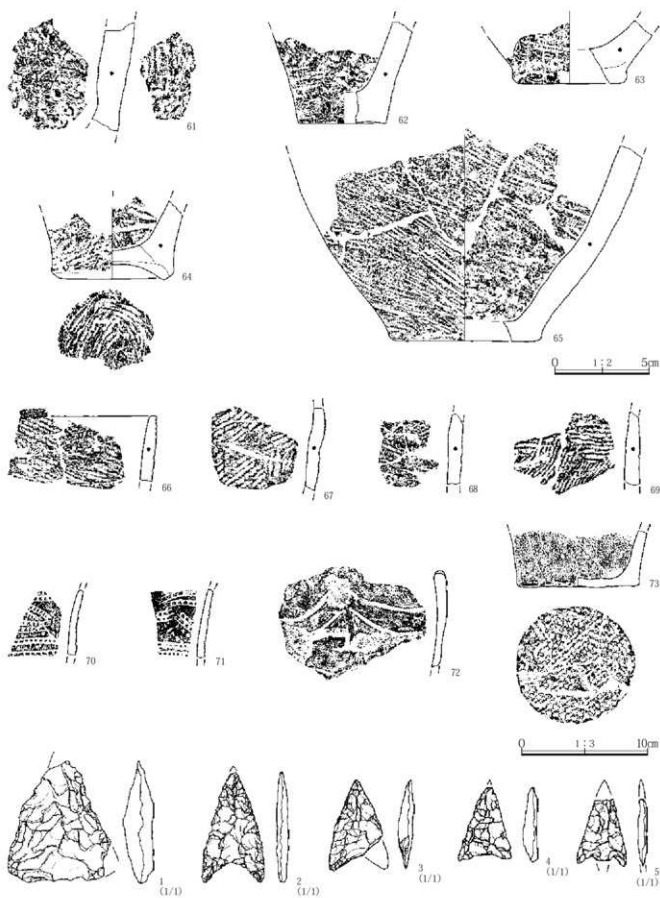
第148図 VI区道橋外出土土器(4)



第149図 VI区遺構外出土土器(5)

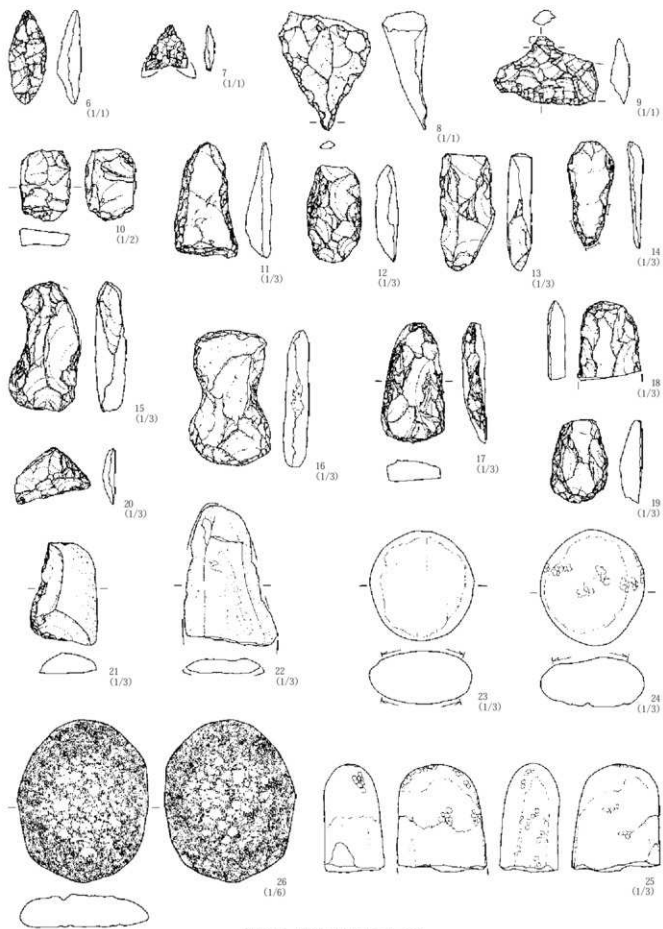


第150図 VI区遺構外出土土器(6)



第151図 VI区遺構外出土土器(7)・石器(1)





第152図 VII区道橋外出土石器(2)

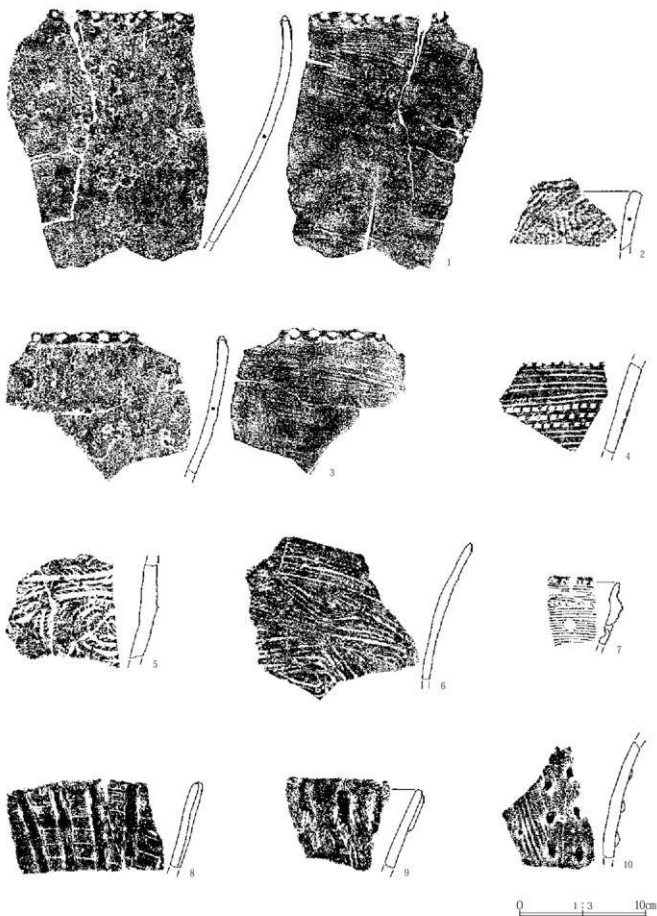
第2章 検出された遺構と遺物

Ⅵ区 遺構外出土縄文土器観察表

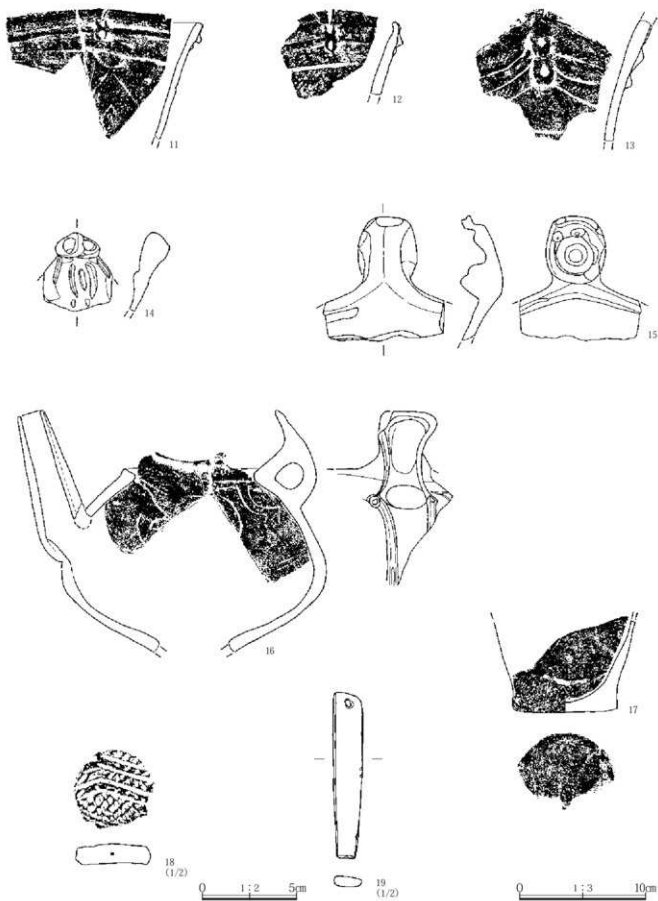
No.	図・P.L	器種	部位	胎土	色調	焼成	紋様の特徴等	備考
1	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 織維	赤黒	普通	口唇部竹管刺突による小波状。全体に保付着している。彫製土器。	加曾利B
2	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 細かい 白色粒 織維	褐	普通	全体に摩滅多く原形不鮮明。	有尾
3	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 織維	赤黒	普通	口唇部竹管刺突による小波状。全体に保付着している。彫製土器。	加曾利B
4	153・83	深鉢	胴部	粗砂 細かい 白色粒多い	灰黄褐	良好	幅5mmの平行沈線横位施文。沈線間に3段の刺突列。	前期後半
5	153・83	深鉢	胴部	粗砂 φ1mm の小石	橙	普通	浮線による渦巻文。浮線には、矢羽状の刻み。	諸磯b
6	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1～ 2mmの小石	赤褐	普通	幅5mmの平行沈線により口縁部文様区画。区画内を菱形に施文。	諸磯b
7	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 細かい 白色粒	浅黄	良好	幅3mmの平行沈線を集合させ横位に施文。口唇と屈曲部に爪形刺突。補修孔。	諸磯c
8	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mm の小石多い	にぶい、褐	不良	太さ1mmの沈線を横位に施文。棒状の貼付文。	諸磯c
9	153・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mm の小石多い	浅黄橙	不良	集合沈線による矢羽状文。棒状の貼付文。	諸磯c
10	153・83	深鉢	胴部	粗砂 φ1mm の小石多い	浅黄橙	不良	集合沈線による矢羽状文。棒状の貼付文。	諸磯c
11	154・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mm の小石多い	灰褐	不良	口縁部に隆線が廻り「8」の字状の貼付文。口縁内面に沈線が廻る。	堀之内2
12	154・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mm の小石多い	褐灰	不良	口縁部に隆線が廻り「8」の字状の貼付文。口縁内面に沈線が廻る。	堀之内2
13	154・83	深鉢	口縁部	粗砂 φ1mm の小石多い	淡黄	普通	波頂部が山形にとがり隆起部を持つ。隆起帯には縄文が施文される。	加曾利B 2
14	154・83	深鉢	口縁部	粗砂	にぶい、褐	良好	波状口縁部に対弧状の沈線。内面に円形の凹み。	加曾利B 2
15	154・83	深鉢	口縁部	粗砂 細かい 黒色粒	にぶい、橙	普通	外面無文。把手内面に円形の凹みと弧線文。	加曾利B 2
16	154・83	注口	口縁部～胴部	粗砂 φ1mm の小石	灰褐	普通	沈線による弧線文。	堀之内2
17	154・83	深鉢	底部	粗砂 φ1mm の白色粒	にぶい、赤 褐	普通	無文。	後期前半
18	154・83	土製 円盤	完形	粗砂 織維	にぶい、褐	普通	幅6mmの平行沈線による山形文。縄文原形L.R。	有尾
19	154・83	垂れ 飾り	完形				5×3mmの孔。孔のある上部先端が磨製石斧の先端と同じように薄くなっている。	加曾利B

Ⅶ区 遺構外出土縄文土器観察表

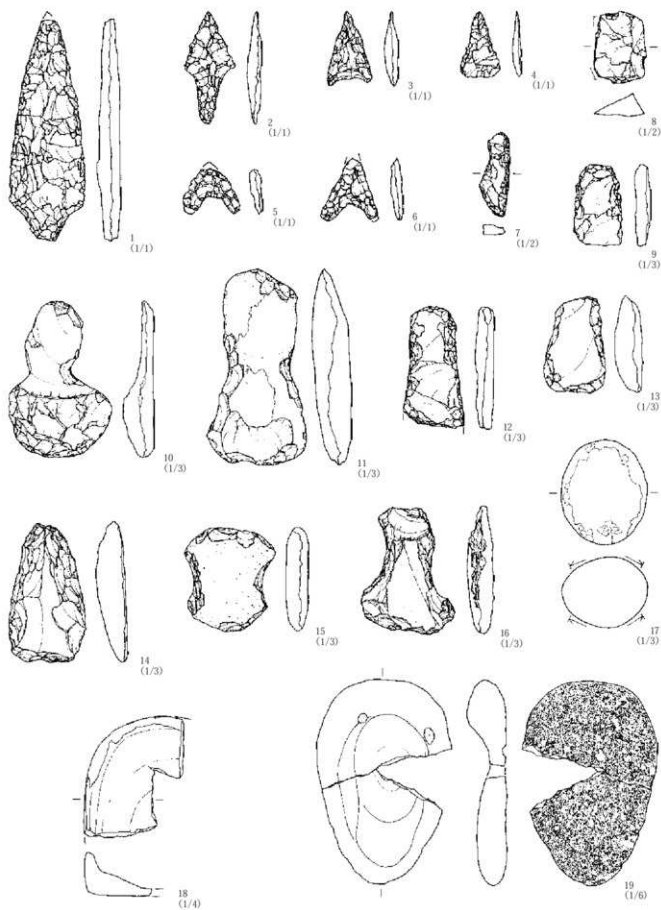
No.	図・P.L	器種	形態	出土位置	石材	長さ	幅	重量	備考
1	155・84	有蓋尖頭器	形無	表採	珪質頁岩?	5.8	2.0	6.8	完成状態。先端・基部欠損。
2	155・84	石磯	凸縁有	905-590	チャート	3.0	1.4	1.0	完成状態。完形。
3	155・84	石磯	凹縁無	表採	チャート	2.0	1.2	0.7	完成状態。完形。
4	155・84	石磯	平縁無	900-590	チャート	1.7	1.1	0.4	完成状態。完形。
5	155・84	石磯	凹縁無	表採	チャート	1.2	1.5	0.4	未製品。先端・左辺の返し欠損。
6	155・84	石磯	凹縁無	表採	チャート	1.6	1.5	0.5	完成状態。完形。
7	155・84	削器	不明	8号溝	黒色頁岩	6.6	2.4	14.8	上部に顕著な磨耗痕。石斧破片を再生利用?
8	155・84	削器	幅広	表採	チャート	3.8	2.7	13.2	左辺に連続的磨を加え、刃部を作出。
9	155・84	片刃石斧		965-630	黒色頁岩	6.4	3.9	25.2	両側縁を粗く加工。刃部は直刃様。未製品?
10	155・84	打製石斧	分銅型c	905-585	ホルンフェルス	12.3	8.2	169.7	裏面側を大きく破損後、形状作出。
11	155・84	打製石斧	分銅型c	表採	黒色頁岩	16.6	8.4	431.6	完成状態。加工は粗い。確面に磨耗痕。
12	155・84	打製石斧	短冊型	表採	ホルンフェルス	9.6	4.7	91.3	完成状態。接合痕あり。刃部破損。
13	155・84	打製石斧	短冊型	905-585	ホルンフェルス	7.7	4.8	104.5	完成状態。刃部リタクション。
14	155・84	片刃石斧		表採	ホルンフェルス	11.2	6.0	174.5	刃部は直刃様。裏面無確面から磨縁加工。
15	155・84	打製石斧	分銅型a	915-615	ホルンフェルス	8.3	7.1	138.4	刃部磨耗・接合痕が顕著。形状変形度は大。
16	155・84	打製石斧	分銅型c	890-585	ホルンフェルス	10.1	7.4	147.7	完成状態。刃部再生。
17	155・84	磨石	円盤	表採	粗粒輝石安山岩	8.3	6.8	407.7	完形。
18	155・84	石皿	定型	905-585	粗粒輝石安山岩	12.8	9.9	319.2	破損。
19	155・84	石皿	有縁	905-585- 895-580	粗粒輝石安山岩	32.4	21.2	5379.2	破損。



第153図 VII区遺構外出土土器(1)



第154図 VII区遺構外出土遺物(2)



第155図 VII区遺構外出土石器

## 第3章 発掘調査の成果と課題

### 第1節 縄紋早期 沈線紋土器について

本遺跡からは縄紋時代早期沈線紋土器がまとめて出土した。いわゆる関東編年でいうところの三戸式、田戸下層式、田戸上層式であるが、これ以外に見慣れない土器群が出土しているので若干触れておきたい(第156図)。

1は第16図67~74を、図上で半ば強引に推定復元したものである。誤りがあれば当然筆者の責であるが、気になる方は是非実物を見ていただければ幸いである。遺物観察の項でも記したとおり、波状口縁を呈し、緩いキャリパー状の器形を呈すと思われる。頸部を境に口縁部と胴部の2帯の紋様帯をもつ構成であり、口縁部紋様帯はV字状押引紋を用いて横位に連続するモチーフを施す。5条の押引紋が確認でき、2段の波状紋を横位にめぐらすものと推定した。上段はやや大振り、下段は条間が密接していることから小振りになるものと判断される。その下から頸部にかけては無紋帯とし、胴部紋様へと続く。胴部紋様帯は上位は頸部にめぐらせた3条のV字状押引紋、下位は複数条の沈線をめぐらせて区画、紋様帯内に1本書きによる鋸歯状の集合沈線を施す。胴部紋様帯下は欠損しているため横位沈線が続くのか、あるいは無紋となるのかは不明である。口唇部にもV字状押引紋が施されている。内面は平滑に調整されており、胎土には繊維を含んでいる。

2は1と似たような器形となるが口縁は内湾せず、まったく開く器形となる。図上では4単位波状口縁として復元したが、モチーフの流れを見る限り、5単位あるいは6単位の可能性も否定できない。くびれ部上位に1帯の紋様帯をもち、くびれ部以下は無紋となる。紋様は2条1単位の沈線を基調とし、平行沈線と短沈線を交互に重ねる。地紋として頸部付近と一部口縁部紋様帯内のみ縦位の条痕を施すが、胴部下半には施されない。内面は丁寧に調整されて平滑である。胎土には繊維を含む。

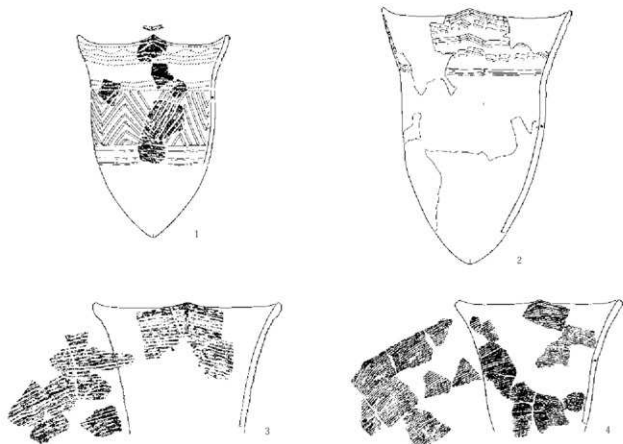
3は緩い波状口縁で口縁に向かって緩やかに外反する器形を呈し、波頂部下が肥厚する。2条1単位の工具を

用いた横位多段構成となり、2条の平行沈線、1条の短沈線を交互に重ねる。1ヶ所、短沈線と平行沈線の間に波状紋を介在させる部位が見られる。破片下端では短沈線が3条1単位になっている。内面は丁寧に調整されて平滑である。胎土に繊維の含有は認められない。

4は3と似たような器形であり、同じように波頂部が肥厚する。波底部の口唇は外割ぎとなる。外面は全面に横位の条痕を施すが、2条1単位の平行沈線を浅く多段に施すことによって、条痕状にしているようだ。弧状を描く部分も見られる。内面は丁寧に調整されて平滑である。胎土に微量の繊維を含んでいる。

1~4のすべてが同時期という保証はどこにもないが、2と3については器形や紋様帯幅に違いがあるものの、半截竹管ではない2条1単位の棒状工具による平行沈線、短沈線を交互にめぐらす手法は共通しており、同時期あるいは比較的近い時期ととらえてもよいであろう。また3と4については、口縁が緩く外反し、波頂部が肥厚する器形や内面調整が類似することから同時期の所産と考えられる。1については紋様帯構成や紋様要素が2~4とは異なることから、同時期とする根拠はどこにもない。あえて共通点を挙げるとすれば、比較的太い沈線を施紋することくらいだろうか。ただ1に関しては帰属時期を推定しうる特徴を有しており、緩いキャリパー状の器形や、口縁部と胴部の2帯の紋様帯をもつ構成は、田戸上層式〈古〉段階(橋本1995)にもっとも様相が近いといえる。しかし、口縁部紋様帯の横位に連続するV字状押引紋は、東北地方南部の明神裏Ⅲ式と関連する可能性が高いと考えられるし、また胴部紋様帯の集合鋸歯状紋も田戸上層式には見られないものであり、より古層を示すものといえるかもしれない。

さて、これら土器群の類例を探索してみると、関東地方では神奈川県北西部の宮ヶ瀬遺跡群でまとまった資料がみられる(第157図)。1は当該期には珍しい平底の深鉢であるが、V字状押引紋による横位に連続する人組状のモチーフを施している。口唇部にもV字状押引紋を施しており、第156図1との関連がうかがえるだろう。2は口縁が緩く内湾する器形を呈し、口縁部に紋様帯を1



第156図 本遺跡出土の縄紋早期沈線紋土器 (s=1/6)

帯もつ。2条1単位の工具を用いた平行沈線、波状紋を交互にめぐらせ、紋様帯下端付近には縦方向の短沈線も見られる。紋様帯下はL R縄紋を施している。3は6単位波状口縁で、口縁が緩く外反する器形を呈す。口縁部に1帯の紋様帯をもち、2条1単位の沈線、押し紋を横位にめぐらす。波頂部から縦位区画様の沈線を垂下させる。4は胴下位が大きく膨らみ、口縁に向かって緩く外反する器形を呈す。やはり1帯の紋様帯をもち、2条1単位の平行沈線、波状紋を横位にめぐらす。口縁は波状を呈すと思われる。波頂部下に平行沈線による渦巻紋を配していると考えられる。紋様帯下端付近には横位の短沈線がめぐらされている。紋様帯下はR L縄紋を施する。5は胴下位に膨らみをもち、口縁に向かって緩やかに外反する器形を呈す。緩い波状口縁で、口縁部に1帯の紋様帯をもち、紋様帯内は2条1単位の工具を用いた平行沈線、波状紋、コンパス紋、押し紋を横位多段に施す。基本は横位平行沈線で、平行沈線間に波状紋やコンパス紋を介在させる構成といえるだろう。地紋に胴上位に縦位の捺痕を施しており、第156図2と共通する。6

は5と似た器形、紋様帯構成となる。緩い波状口縁を呈し、波頂部から平行沈線を垂下させて縦位区画する。紋様帯内は横位平行沈線を多段に重ね、平行沈線間にハの字状刺突を充填施紋する。紋様帯下端には短沈線を横位にめぐらせ、一部縦位に施す部分も見られる。紋様帯下はR L縄紋を施紋する。

1を除いた宮ヶ瀬遺跡群出土土器に共通することは、①口縁から胴上位にかけて1帯の紋様帯をもつこと、②一部縦位施紋もあるが、2条1単位の沈線で横位多段のモチーフを施すこと、③横位多段のモチーフは単に平行沈線を重ねるのではなく、平行沈線間に波状紋、コンパス紋、押し紋、短沈線、刺突列を挟むこと、④2条1単位の平行沈線は半截竹管ではなく、丸棒状工具を2本束ねたもので施紋すること、に要約できるであろう。これら土器群の検討を行った久保ノ坂遺跡の報告者である恩田勇氏は、「平行沈線文・平行押し文土器群」として神奈川県内出土資料の集成・分析を行い、暫定的に「久保ノ坂式」の名称を与え、田戸上層式併行に位置付けている(恩田2002)。



1~4 久保ノ取道跡 5 ナラサス道跡 6 サザランケ道跡

第157図 神奈川県宮ヶ瀬道跡群出土土器 (s=1/6)



宮ヶ瀬遺跡群出土土器の諸特徴と本遺跡出土土器とを比較してみると、①については第156図2に共通し、②、③、④については第156図2、3に共通しており、よく似た様相を示している。第156図1、第157図1を除く本遺跡出土土器と宮ヶ瀬遺跡群出土土器は、ほぼ同一時期の土器群のまとまりといえるであろう。

以上のように本遺跡出土の沈線紋土器は、現時点では「久保ノ坂式」にもっとも様相が近いと判断される。一方、今回は取り上げなかったが東北地方に目を向ければ、南部を中心に分布する田戸下層式後半段階とされる土器群とも共通する部分があるようにも見受けられる。また上述した通り、V字状押印紋は田戸上層式のみならず、東北地方南部の明神裏Ⅲ式との関連を追及する必要があるであろう。今後さらに範囲を広げた集成を行い、稿を改めて詳細な検討を加えていきたい。

## 第2節 後期中葉の出土遺物

本遺跡の残された縄文時代の痕跡は、縄文時代早期後半段階に遡る。遺構については、残念ながら明確なものの検出に至っていないが、出土土器については、前節にまとめた。その後、縄文時代前期の資料についても散見するのみで、遺構の検出には至っていない。本遺跡で、縄文時代の人々が集落を形成する明らかな時期は、縄文後期中葉になる。この時期の検出された遺構は、住居址8軒、墓壇6基、その他、配石遺構102箇所と多数の遺構を検出されたことから、住居、墓壇、配石など、集落としての施設をそろえた遺跡であることがわかった。

本遺跡の縄文時代後期集落を分析するため、始めに本遺跡から検出された土器の中で、完形品を中心に、器形に分かる土器について時期別、器形別に集成する。次いで、石器について石材・器種などのデータを示して、遺跡から出土した遺物についての傾向を分析する。次に検出遺構の性格や傾向について検討し調査の成果とした。

### 1 縄文時代後期の土器

本遺跡で、出土した主な土器を158・159図に示した。この図で見るとおり、遺構数に比較して器形の復元できる土器の出土量が少ないことが分かる。

堀之内式土器は、1～5の土器が相当する。Ⅰ区・Ⅱ区に多く出土している。1、2の土器は、口縁部に単沈線による横位の区画を持ち、口縁部が無文もしくは、刺突の付けられた縦位の貼付文が施文される土器である。これらの土器に類似する資料として新田町にある矢太神沼遺跡1号住居出土例（小保方1988）がある。1は、遺物廃棄場と思われる遺構から出土している。二段三角文等と呼ばれる幾何学文様を持つ土器等と共に出土している（11図4）。この土器は、「連続幾何学文の外側に充填施文する」という共通性から、堀之内2式土器の成立に関係する土器と言われている（註1）。2は、Ⅱ区の敷石住居から出土している土器である。供半している土器が、沈線による菱形文を構成する堀之内2式土器である（23図2）。3の土器は、胴部下半で横位の文様帯区画を作り、口縁部文様に三角文等の幾何学文を持っていることから、堀之内2式土器となる。一方、矢太神沼遺跡1号住居例では、堀之内1式の新しい土器に伴って出土していることから、本遺跡の1、2の土器は、矢太神沼遺跡より新しい傾向を持つ土器と考えられる（註2）。

4の土器は、口縁部文様帯に横位の区画線を引き、その上から曲線文を施文する土器である。類例に乏しく、時期判定が難しいが、口縁部に文様の断手状になる曲線など、堀之内式土器を思わせる文様である。同じ遺構で堀之内2式と思われる土器（88図5）が伴っていることから、堀之内2式に比定される。5の浅鉢は、3と同様に遺構外出土である。4単位の突起があり、口縁が「く」の字状に折れ曲がる。突起は、橋状になり、内側に穴が開いている。深鉢の編年については、近年の研究によりかなり詳しくなっているが、浅鉢については不明な点が多いと感じる。本遺跡からは、堀之内1式の古い部分が出していないことから、この浅鉢についても堀之内1式の新段階から堀之内2式になるのではないかと考える。

加曾利B式土器は、本遺跡で主体となって出土しているが、器形の復元できるものは少なく、その大半は小破片であった。

6、7に見られる区切り縦線文と横線文が連結する形でクラック状の文様を持つことから、加曾利B1式の新しい段階に比定される。

9の土器は、ソロバン玉形土器である。加曾利B2式

中段階の始まりは、秋田かな子によると、ソロバン玉形土器の成立を指標としている（秋田2008）。10～14の土器は、口縁部の半円状の弧線文などの文様構成から、9とほぼ同時期の鉢類である。9のソロバン玉形土器の体部に見られる羽状沈線文は、18～22の羽状縄文類型とも呼ばれる土器との関連性を示していると考えられる。18は、5単位波状口縁の土器で、19～22は、平口縁であるが、口縁部下で胴部が括れ、腰の張る器形の土器で加曾利B2式の特徴を表している。23～32の土器は、粗製土器である。凹凸を持つ隆帯貼り付けを特徴としている。粗製土器の位置づけは難しいが、いずれも加曾利B2式前後に伴うものであろう。その他、15～17の浅鉢や注口土器などが単発的に出土している。

## 2 出土土器の概要

出土土器は、打製石斧91点、片刃石斧19点、磨製石斧1点、有舌尖頭器1点、石鏃93点、石匙1点、石鏝5点、椀形石器3点、削器46点、石核64点、加工痕のある剥片146点、使用痕のある剥片1点、凹石21点、磨石52点、敲石8点、石皿61点、台石9点、多孔石59点、石製品6点、石棒12点、砥石20点である。各機種の利用石材構成は表に示した。

本文中にある、石器観察表の器種毎の形態は、以下のとおりである。

打製石斧は従来型の短冊・撥・分銅に加えて、分銅型をa～dに細分、分銅aは従来同様の典型的分銅タイプ、分銅bは上端側に「挟り」が偏るもの、分銅cは細身の基部（装着部）に幅広の体部が付くタイプである。分銅dは、上記のいずれにも属さないものである。本遺跡出土の91点中の形状は、短冊形12点、撥形1点、分銅a形56点、分銅b形3点、分銅c形8点、分銅d形4点になる。打製石斧の多くは、使用による欠損や摩滅などが確認される。片面に自然面を残すものが多い。

石鏃は、基部の形と茎（柄）の有無によって凹基無茎鏃、平基無茎鏃、凸基有茎鏃、凹基有茎鏃、円基鏃、尖基鏃とした。出土93点中、凹基無茎鏃46点、平基無茎鏃12点、凸基有茎鏃22点、凹基有茎鏃1点、円基鏃1点、尖基鏃1点、不明10点である。

石皿は、有縁・無縁・定型石皿に大別、有縁タイプのそれは有縁a（鏢の中心から外れて機能部を有するもの）、

複数個所に機能部を有するもの）、有縁bは表裏面に機能部を有する両面石皿に細分。削器類は素材剥片の形状、磨石・凹石・敲石・多孔石は礫形状を示した。石核は、石核素材の形状をベースに分類した。

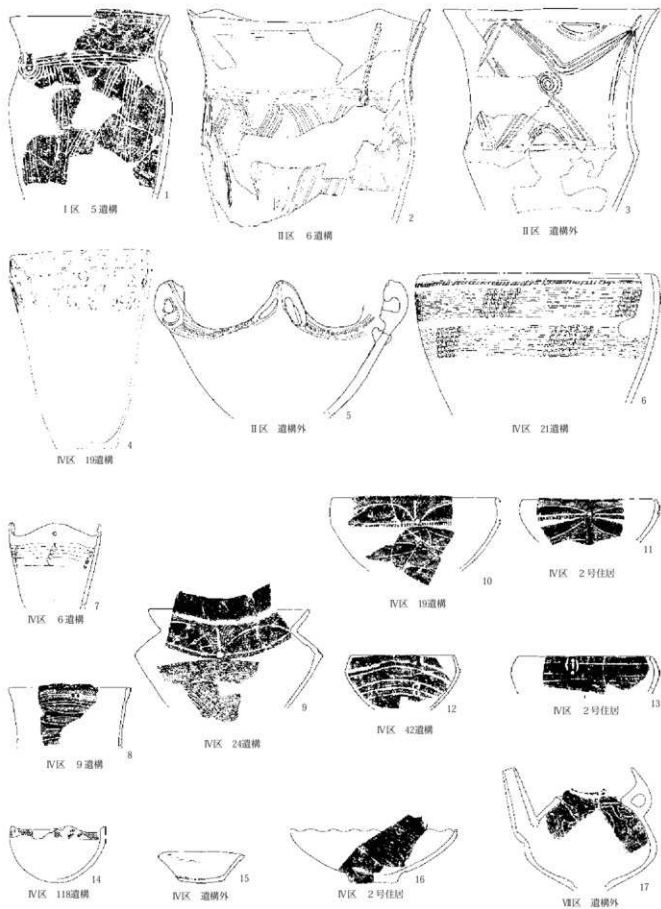
以下、特徴的な石器器種について、個別的に記述を行う。

### 剥片石器石材

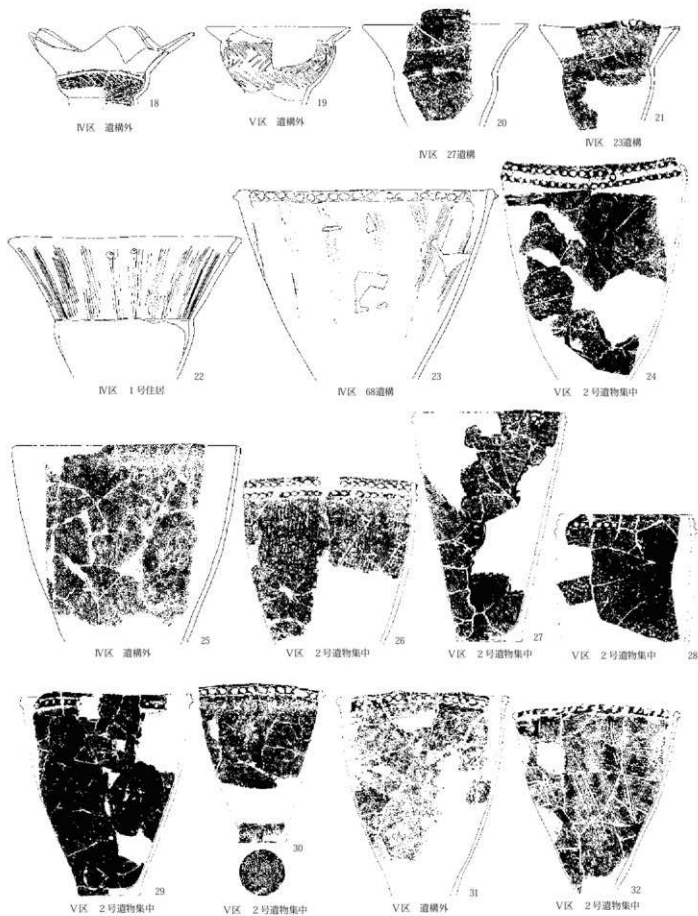
打製石斧の石材は、西長岡遺跡では、ホルンフェルスが74点（82%）、黒色頁岩が12点（13%）、その他、細粒輝石安山岩2点、砂岩1点、緑色片岩2点である。打製石斧の主要な石材であるホルンフェルスは、82%をしめるが、石核は、3%と遺跡からの出土量が少ないことから、多くの打製石斧は、扁平な礫を直接素材として製作したことが考えられる。石器石材のホルンフェルス・チャートは、渡良瀬川流域に主として分布し、黒色頁岩・安山岩は、利根川流域に多いことが知られている（註3）。これらの機種別に占める石材の割合を周辺の遺跡と比較し、群馬県内における使用石材の地域差について、検討してみよう。

本遺跡は、渡良瀬川右岸にあり、大間々扇状地Ⅱ面の東側に位置する。本遺跡よりさらに東側、渡良瀬川に近いところに位置する大道東遺跡では、打製石斧118点の石材は、ホルンフェルス115点（97.5%）、その他2.5%となっている。一方、本遺跡の西側にある、大間々扇状地Ⅰ面に位置する下田遺跡では、581点中の石材は、ホルンフェルス67点（11.5%）、黒色頁岩292点（50%）、細粒輝石安山岩167点（35.9%）と黒色頁岩や細粒輝石安山岩の割合が多くなっている。さらに西に位置する、天ヶ堤遺跡では、965点中ホルンフェルス64点（6%）、黒色頁岩634点（65.6%）、細粒輝石安山岩209点（21.6%）となっている。これは、ホルンフェルスの産地である渡良瀬川と、黒色頁岩の産地である利根川との距離に相関関係を示していることになる。

石鏃の西長岡遺跡での使用石材は、93点中、チャート70点（75%）、黒曜石10点（10.7%）、黒色頁岩7点（3%）、黒色安山岩8点（3%）、その他となっており、石鏃でのチャートの占める割合が多い。これも石斧同様に他遺跡と比較すると、大道東遺跡では、35点中、チャート31点（88.5%）、黒曜石1点（2.8%）、黒色安山岩3点（5.7%）、下田遺跡では、37点中チャート18点（48.6%）、



第158図 縄文土器集成図(1)



第159図 縄文土器集成図(2)

黒色安山岩8点(21.6%)、黒曜石7点(18.9%)。天ヶ堤遺跡では、チャート178点(33.2%)、黒色安山岩163点(30.4%)、黒曜石116点(21.6%)、黒色頁岩69点(12.8%)となっている。石蔵においても使用石材が渡瀬川に近い遺跡では、チャートが多く、利根川に近い遺跡では、チャートについて黒色安山岩も増えていることが分かる。黒曜石についても信州産の黒曜石が多く使用されていることが考えられ、西にある遺跡でその比率が多くなっている。ただし、黒色頁岩や黒色安山岩ほど減少量の変異が少ないことを考えると、黒曜石の供給については、地元産の黒色頁岩や黒色安山岩とは異なる供給形態があったと推定される。

剥片類の西長岡遺跡から出土した146点の石材の内訳は、チャート70点(47.96%)、ホルンフェルス32点(21.9%)、黒色頁岩30点(20.5%)、黒曜石7点(4%)である。大道東遺跡では158点中、ホルンフェルス86点(54.4%)。チャート57点(36%)、珪質頁岩・頁岩各4点(2.5%)。下田遺跡では、771点中、黒色頁岩419点(54.3%)、ホルンフェルス103点(13.3%)、黒色安山岩64点(8.3%)、チャート55点(7.1%)、細粒輝石安山岩46点(5.9%)、珪質頁岩21点(2.7%)となり、黒色頁岩が剥片類では、大半を占めている。天ヶ堤遺跡では、364点中、黒色頁岩285点(78.2%)、黒色安山岩32点(8.8%)、チャート27点(7.4%)となっている。天ヶ堤遺跡では、黒色頁岩が下田よりも多い割合となっている。チャートが少なくなっていることが分かる。

#### 礫石器石材

西長岡遺跡では、石皿61点中、粗粒輝石安山岩52点(85.2%)、緑色片岩4点(6.5%)。多孔石59点中、粗粒輝石安山岩54点(91.5%)、溶結凝灰岩5点(8.4%)である。石棒12点中緑色片岩6点(50%)、黒色片岩2点(16.6%)、デイサイト、牛伏砂岩、頁岩、ホルンフェルス、各1点である。磨石52点中、粗粒輝石安山岩47点(90.3%)、溶結凝灰岩4点(7.6%)、砂岩1点(0.5%)。凹石21点中、粗粒輝石安山岩19点(90.4%)、溶結凝灰岩2点(9.5%)。敲石8点中、粗粒輝石安山岩・黒色片岩各2点(25%)、ホルンフェルス・溶結凝灰岩・デイサイト質凝灰岩・ひん岩各1点(12.5%)。大道東遺跡では、石皿32点中、粗粒輝石安山岩32点(100%)、多孔石44点中、粗粒輝石安山岩37点(84%)となってい

る。石棒は、3点中緑色片岩2点(66.6%)である。凹石120点中、粗粒輝石安山岩117点(97.52%)、溶結凝灰岩2点(1.6%)。磨石124点中、粗粒輝石安山岩123点(99%)。敲石44点中、ホルンフェルス・石英閃緑岩各17点(38.6%)、溶結凝灰岩4点(9%)、砂岩・珪質頁岩各2点(4.5%)。下田遺跡では、石皿46点中、粗粒輝石安山岩45点(97.8%)。緑色片岩1点(2%)。多孔石36点中、粗粒輝石安山岩36点(100%)である。石棒は、7点出土しており、緑色片岩は、3点(42.8%)、デイサイト、黒色片岩・変質安山岩、その他各1点である。凹石41点中、粗粒輝石安山岩41点(100%)、磨石170点中、粗粒輝石安山岩151点(88.8%)、ホルンフェルス・溶結凝灰岩各5点(2.9%)、敲石38点中、粗粒輝石安山岩22点(57.8%)、ホルンフェルス4点(10.5%)、黒色頁岩3点(7.8%)、砂岩2点(5.2%)。天ヶ堤遺跡では、石皿85点中粗粒輝石安山岩77点(90.5%)、緑色片岩3点(3.5%)、その他である。多孔石は、106点中粗粒輝石安山岩104点(98.1%)、その他である。石棒は、17点出土しており、緑色片岩6点(35.2%)、変質玄武岩3点(17.6%)、デイサイト2点(11.7%)である。凹石102点中、粗粒輝石安山岩93点(91.1%)、砂岩3点(2.9%)、磨石291点中、粗粒輝石安山岩260点(89.3%)、石英閃緑岩8点(2.6%)、砂岩・ひん岩各7点(1.3%)、ホルンフェルス3点(1%)。敲石61点中、粗粒輝石安山岩21点(34.4%)、砂岩・雲母片岩各7点(11.4%)、黒色頁岩6点(9.8%)、ホルンフェルス・変質玄武岩・変質玄武岩・ひん岩、各3点(4.9%)。

石皿、多孔石、磨石、凹石の石材は、赤城山を起源とする粗粒輝石安山岩が主体となり、使用石材のほとんどを占めることが分かる。その一方で、石皿に緑色片岩製のものがどの遺跡にも一定量持ち込まれていることがわかる。このことは、多孔石や磨石、凹石については、地元にある石材を使用することを原則としている。石皿の大半についても同様に地元の石材を使用するのであるが、緑色片岩製の石皿が必ずと言っていいほど、各遺跡から出土していることは、この緑色片岩製石皿に特別な意味合いがあり、流通においても、粗粒輝石安山岩製の石皿とは異なる流通過程が推測される。石棒についても緑色片岩製のものが多く占めることから、緑色片岩製の石皿と石棒は、セットとなって各遺跡に持ち込まれてい

第3章 発掘調査の成果と課題

西長岡宿遺跡出土石器 器種・石材表

石材	打製石片	片刃石片	磨製石片	有舌尖石器	石鏃	石匙	石鏃	楔形	削器	石核	加工痕	使用痕	凹石	磨石	石皿	石皿	多孔石	石製品	石種	破石	総計		
ホルンフェルス	74	7			2				4	2	32				1					1		123	
チャート		1			70	1	4	3	10	44	70		1									204	
珪質頁岩		1		1	3				4	1	2											12	
頁岩																					1	1	
黒色頁岩	12	8			3				24	6	30											83	
黒色安山岩					3				3													6	
赤碧玉					1					1	1											3	
褐色碧玉					1																	1	
黒曜石					10		1			9	7											27	
玉髄									1													1	
細粒輝石安山岩	2	2									1											5	
変玄武岩			1																			1	
粗粒輝石安山岩													19	47	2	52	8	54	2			184	
溶結凝灰岩													2	4	1	2	1	5				15	
牛体砂岩																					1	8	
砂岩	1											2		1								12	
デイサイト																					1	1	
デイサイト質凝灰岩															1							1	
ひん岩															1							1	
角閃石安山岩															1							1	
緑色片岩	2														4						6	12	
黒色片岩															2						2	4	
雲母石英片岩										1					1						2	4	
珪質準片岩																					1	1	
軽石																					1	1	
石英										1												1	
石英閃緑岩															1							1	
総計	91	19	1	1	93	1	5	3	46	64	146		1	21	52	8	61	9	59	6	12	20	719

下田遺跡出土石器 器種・石材表

石材	打製石片	石鏃	加工痕	凹石	磨石	石皿	多孔石	石種	総計
ホルンフェルス	67		103		5	4			179
チャート		18	55		1				74
珪質頁岩	13		21						34
凝灰質珪質頁岩	1								1
頁岩	2		2						4
黒色頁岩	292	2	419		1	3			717
黒色安山岩	2	8	64						74
黒曜石	7	11							18
細粒輝石安山岩	167		46		2				215
変玄武岩	7		9			1			17
粗粒輝石安山岩	6		5	41	151	22	45	36	306
溶結凝灰岩			5		5				10
砂岩	2		11			2			15
デイサイト			1		1			1	3
緑色片岩						1	1	3	5
黒色片岩					1			1	2
雲母石英片岩	3								3
硬質泥岩	15		1						16
変質安山岩	1		2		1	1			6
輝緑岩	1		10						11
その他	2	2	6		3	3			17
総計	581	37	771	41	170	38	46	36	7 1727

天ヶ堤遺跡出土石器 器種・石材表

石材	打製石片	石鏃	加工痕	凹石	磨石	石皿	多孔石	石種	総計
ホルンフェルス	64		3		3	3			73
チャート		178	27						205
珪質頁岩	15	8	4			2			29
頁岩	1						1		2
黒色頁岩	634	69	285		2	6		1	997
黒色安山岩	6	163	32						201
黒曜石		116	5						121
玉髄		2							2
細粒輝石安山岩	209		7				1		217
変質玄武岩	16					3			19
変質頁岩	1				1	3	1		3
粗粒輝石安山岩	2		1	93	260	21	77	104	1 559
溶結凝灰岩						1	2	1	1 5
砂岩	10			3	4	7	1		1 26
デイサイト									2 2
ひん岩	1			1	4	3		1	10
角閃石安山岩						2		1	3
緑色片岩				2	1	1	3		6 13
雲母石英片岩							7		1 1 9
石英閃緑岩						1	8	1	10
変質安山岩	2			1	2	1			6
その他	4			1	3				1 9
総計	965	536	304	102	291	61	85	106	17 2527

ることが推測される。敲石に石材のぼらつきが見られる。このことは敲石が、敲打するという性格上、敲打する対象物に対して、敲石石材の持つ特性を合わせて、使用しているのではないかと考える。

註1 堀之内2式土器の成立の一つに、「千曲川の中流域や群馬の西側、西毛エリア」の中で帯状の磨り消し縄文が成立すると論じている。(鈴木2002)

註2 鈴木徳雄は矢大神沼遺跡1号住居の上部を矢大神沼類型としている(鈴木2002)。本遺跡出土の1、2も同様に矢大神沼類型の範疇にある。註3 櫻井美枝(1995)によると利根川流域では、黒色安山岩、渡良瀬川流域では、ホルンフェルスが、礫組成に占める割合が比較的多いとしている。

大道東遺跡出土石器 器種・石材表

石材	打製石	石礫	加工痕跡	閃石	磨石	敲石	石皿	多孔石	総計
ホルンフェルス	115		86			17			218
チャート		31	57			1			89
珪質頁岩	1	1	4			2			8
頁岩	1		4						5
黒色頁岩			1						1
黒色安山岩		2	2						4
黒曜石		1							1
粗粒輝石安山岩	1			117	123		32	37	310
溶結凝灰岩				2	1	4		1	8
砂岩		1				2			3
角閃石安山岩				1					1
石英閃緑岩						17			17
その他			3				1		6
総計	118	35	158	120	124	44	32	44	675

## 第3節 後期中葉の遺構

### 1 配石遺構の形態と性格について

本遺跡からは、石塊や石材を組み合わせて、構築している遺構が多数検出された。本遺跡から検出された石を組み合わせた遺構は、敷石住居、住居のが、石椁状石組になるもの、配石に規則性を持って並べたもの、配石に規則性を持たず何らかの区画を意識したもの、配石に規則性を持たず集石状になるものなど様々な形態の遺構がある。

広義の配石遺構には、環状、列状、方形、円形等様々な形態があり、形態や出土遺物、付属する土坑などの施設や検出状況によって、祭祀関係、居住関係、墓関係、ある種の区画をするための物など様々な性格を持つものである。配石遺構の多様な形態から、その性格についても一様ではないことは、多く述べられているところである。

本項では、これらの礫を組み合わせた遺構を配石遺構とした。これらの配石遺構についての性格を検討するため、平面形態について分類し、遺構の性格について考えてみたい。

#### 配石遺構の形態分類

##### 1類 石椁状組石で長方形の形態を作るもの。

Ⅲ区3、4、5、6、7号配石、Ⅳ区39、77、95、118、120、121、122、123、124、125、126、127、128、129、130、131号遺構。

礫の短径面を接続させて組石を作るものが多いが、Ⅲ区5号配石のように長径面を接続させて形作るものもある。

2類 石椁状組石で長方形の形態を作り、底面に敷石が認められるもの。

Ⅳ区9、37、40・56、55、48、61、93、115号遺構。

周囲は、礫の短径面を接続させて、石椁状に組石を作る。40・55号遺構のように、内部に小さい砂利状の礫を敷く形のもの。93号遺構のように細長い礫を規則性を持たない形、37号遺構は、礫を立てる様にし、長径面を接続させ、内面に礫を置いているものがある。

##### 3類 石椁状組石で楕円形の形態を作るもの。

Ⅲ区1号配石、Ⅳ区38、43、44、57、59、85、86、87号遺構。

石組列は、57・59号遺構のように礫の短径面を接続させるものと、43号遺構のように円形に礫を置いたものがある。

4類 石椁状組石で楕円形の形態を作り、底面に敷石が認められるもの。

Ⅳ区78、89、57・94、138号遺構。

94号遺構は、砂利状の小礫を敷石にしている。78・138号遺構は、外側と同様の大きさの礫を内面に敷いている。

5類 敷石が長方形で、礫の組み方に規則性が見られないもの。

Ⅳ区63、79、92、104・105、111号遺構。

10～15cmの細長い礫を規則性を持たず、長方形に置いている。遺構を囲うような、組石は見られない。

6類 敷石が円形で、礫の組み方に規則性が見られないもの。

Ⅲ区8号配石、Ⅳ区1、24・98、34、58、80、81、82、

83、112、135号遺構。

24号遺構は、立石を伴っている。

**7類** 形状は、不定形で、30～40cmの大形の礫を数個集石するもの。

IV区110、113、117号遺構

**8類** 形状は、不定形で、10cm程の礫が密集したもの。

IV区116、132、140、141号遺構。

**9類** 不定形で何かを囲う様に置かれる。

II区36号遺構、IV区4、6、21・22、42、54、88、90、91、100、103、142号遺構

103号遺構は、立石を伴っている。

**10類** 不定形で礫が間隔を開けてまばらに置かれ、土器片などが一緒に検出される。

II区35、37号遺構、III区1、2、3、4、5、6号遺構、IV区23、27、45、64、107、108号遺構

108号遺構は、立石を伴う。

**11類** 組石の形状が石垣状になる。

I区14号遺構、IV区5、134号遺構

**12類** 組石の形状が大形で、住居の敷石状になる。

II区6号遺構、IV区19、101・102、106号遺構

#### 配石遺構の性格について

本遺跡から検出された配石遺構について形態別に1類から12類にした。これらの形態からみた、配石遺構について蓋然性の強い遺構の性格を当てはめてみたい。

1類から4類は、組石が石棺状になるものである。鈴木保彦（鈴木2006）は、配石墓の形態分類を大きく5群に分類している。その中の第1群は、土坑内に何らかの形で石が配置されるものとしている。さらに、石棺状の組石をもつものを組石の状態によって細分型式に分けている。本遺跡の1類から4類の形態は、鈴木分類した配石墓の第1群の各細分型式に類似していることから、形態上から見れば配石墓としての蓋然性が強いといえる。しかし、形態上の類似性以外については、墓である条件の遺体、副葬品、組石の掘り方等未検出であることから、配石墓と確定するには至っていない。

次に5・6類であるが、長方形や円形の敷石の形態は、敷石の下に土壌があるタイプの配石墓と考えられるが、調査時点では、土壌は確認出来ていない。また、1～4類とした石棺状の配石墓の敷石とも考えられる。石

棺に相当する側石が無いのは、調査時に側石を検出出来なかった、何らかの理由で抜き取られていたことが考えられる。いずれにしても、1～4類としたものより、配石墓としての蓋然性は低いと考えられる。

7・8類は、土壌の上に配石を置くタイプの配石墓に形態は似るが、本類の配石についても下部に土壌は検出されていない。地山に礫の多いという地形的環境を考えると、自然に礫が集まったとする可能性も考えられることから、さらに配石墓の蓋然性は低くなると思われる。

9・10類は、礫の配置や土器などが出土していたり、柱状の立石があることから、何らかの人為的遺構と捉えることも出来る。立石や土器が密集して出土することから、祭祀的な性格も考えることが出来る。しかし、本類の遺構についても、他に判断の資料が無く、地山に礫が多く見られるという地形的環境から、自然の礫の集まりに土器などの遺物が廃棄されたり、流れ込んだものと見られることも出来る遺構である。

11類は、遺構の覆土中から焼土などが認められることから、炉と考えられる。屋内にあったものなのか、屋外にあったものなのかは、確定できない。

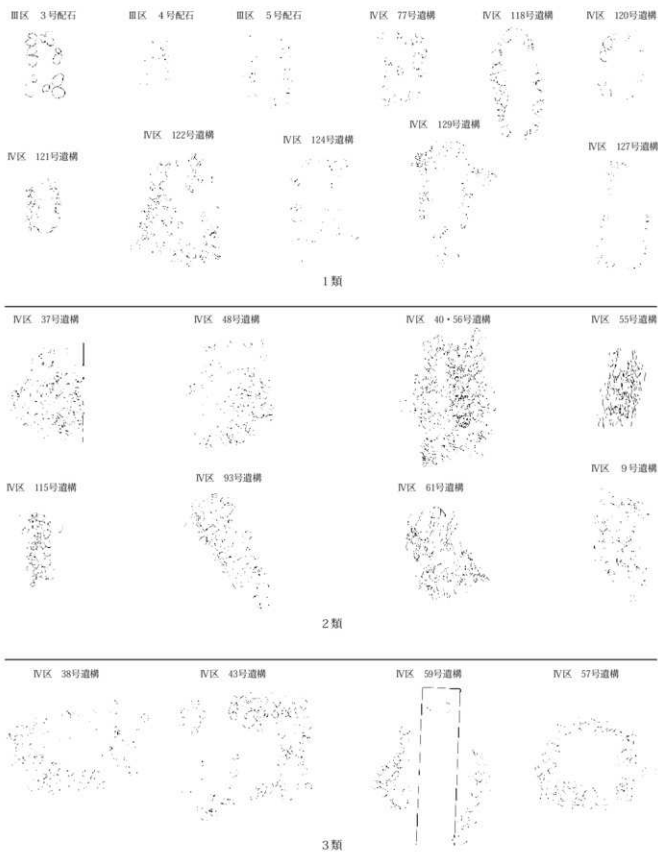
12類は、敷石の大きさや形状から、住居に伴うものと考えられる。

## 2 各調査区における遺構のありかた

前項で、分類した配石遺構の性格を前提（仮定）にした時に、遺跡全体の遺構のあり方は、どうなっているのか概観する。

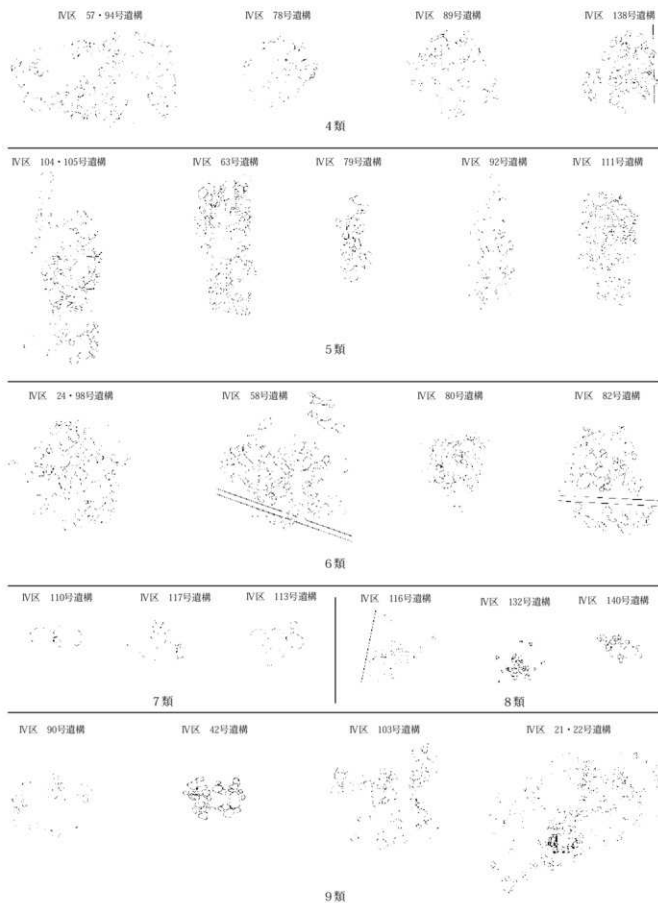
本遺跡の調査は、八王子丘陵の南裾部を南北幅約50m、東西幅約600mの範囲を調査した。その結果、調査区により谷地部、微高地部と地形の変化が大きいためであった。地形は、調査区の西から東へ傾斜している。I～V区の調査区では、北側に微高地があり、南側に河川による谷地地形が認められる。また、南北方向には、八王子丘陵からの谷地地形によって南北に分断されている。そのため、北側の微高地に作られた縄文時代後期の遺構は、南北の谷地地形に影響されたため、間を開けて遺構が検出されている（付図）。VII区～VIII区では、調査区全体が谷地部になっており、遺構は検出されず、遺物包含層が広がっている状況であった。II区からIV区の遺構が検出された場所は、南側の小河川によって出来た



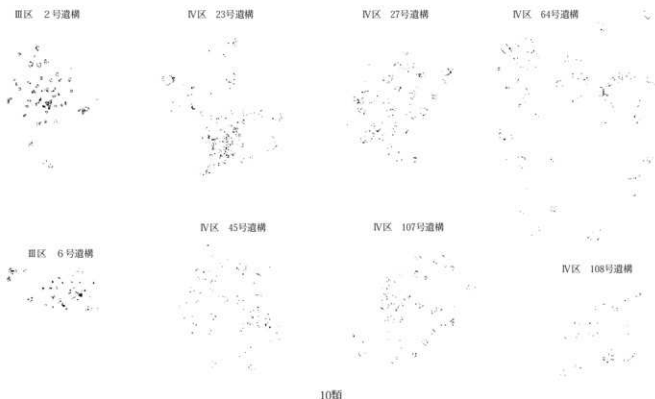


第160図 配石遺構分類図(1)

第3章 発掘調査の成果と課題



第161図 配石遺構分類図(2)



10類

第162図 陪石遺構分類図(3)

礫を多く含む自然堤防状の高まりに作られている。地山にある礫を利用して、住居、陪石墓や陪石遺構などが作られている。そのため、人為的に移動して作られた陪石と、自然礫との区別に難しいものがあった。

II区では、6号遺構とした敷石住居から、堀之内1式新段階から2式にかけての遺物が出土しており、これを取り囲むように、陪石遺構が検出された。陪石遺構やその周辺からは、堀之内2式土器が多く出土していることから、この遺構群は、堀之内2式期と考えられる。

III区では、西よりの遺構群と、IV区へ繋がる遺構群の二群に分かれる。西よりの遺構群、1～5号遺構としたものは、土器の廃棄場或いは何らかの遺構が壊された痕跡である。縄文中期中葉の黒浜式土器や後期の加曾利B2式土器が出土していることから、比較的安定した地形で断続的に遺構が作られていた場所である。ここからは、加曾利B2式期の陪石墓と思われる遺構も検出されている。

東側の遺構群は、IV区に繋がるもので、加曾利B2式期の陪石墓群である。

IV区西側に、2号住居～6号住居が作られている。住

居に囲まれた空間は、陪石墓遺構が少なくなっている。住居は、出土遺物から加曾利B2式期のものである。これらの住居群と相対するように1号住居が東側にあり、その間の空間に、立石などを含む陪石墓群が数多く作られている。1号住居の東側でも、陪石遺構が認められるが、量的に少なくなっている。IV区は、北半分の地山に礫が多く含まれている(附図中段)が、人為的に作られた陪石遺構などを抽出すると、遺構群と遺構群の間に、空間が認められることがわかる。(附図下段)

## 参考文献

- 秋田かな子 1999 「関東地方後期(加曾利B式-曾谷式)『縄文時代』第10号 P332-341 縄文時代研究会  
 秋田かな子 2008 「加曾利B式土器」『総覧 縄文土器』P604-611 アム・プロモーション  
 安孫子昭二 1981 「関東・中部地方」『縄文土器大成3 後期』P144-152 講談社  
 安孫子昭二 1988 「加曾利B様式土器の変遷と年代(上)」『東京考古』6 P1-33 東京考古談話会  
 安孫子昭二 1989 「加曾利B様式土器の変遷と年代(下)」『東京考古』7 P29-37 東京考古談話会  
 阿部昭典 2008 「縄文後期集落の形成と環状列石」『縄文時代の社会変動』P211-237 アムプロモーション  
 阿部昭典 2009 「新潟県における縄文時代後期前葉集落と陪石遺

### 第3章 発掘調査の成果と課題

横の隆盛 『国学院大学考古学資料館紀要』第25輯 国学院大学考古学資料館

阿部義平 1983 『配石』『縄文部下の研究 9』P32-45 雄山閣

阿部芳郎 1998 『堀之内式土器の構成と地域性』『縄文時代』第9号 縄文時代研究会

石井 寛 1984 『堀之内式土器の研究(予察)』『調査研究集録5』P1-47 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

石坂 茂 2004 『関東・中部地方の環状列石』『研究紀要』22 P51-94 群馬県埋蔵文化財調査事業団

岩崎泰一 2009 『大道東遺跡—縄文時代編』『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第464集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

大塚達明 1989 『加曾利B式三層別における釧路の解消—学史的考察とは何か—』『先史考古学研究』2号 P119-146 阿佐ヶ谷先史学研究会

大塚達明 1996 『加曾利B式土器』『日本土器事典』P284-285 雄山閣

照田 勇ほか 1996 『宮ヶ瀬遺跡群VIサザランケ(№12)遺跡』かながわ考古学財団

照田 勇ほか 1998 『宮ヶ瀬遺跡群VIII久保ノ坂(№4)遺跡』かながわ考古学財団

照田 勇 2002 『縄文早期沈線文土器群後集期の真相—「久保ノ坂式土器」設定へ向けての予備的検討—』『神奈川考古』第38号

加納 実 2002 『南関東に於ける堀之内式土器の様相』『後期前半の再検討縄文セミナー—第15回資料集 縄文セミナーの会』

加納 実 2008 『堀之内式土器』『総覧 縄文土器』P586-603 アム・プロモーション

小林達雄 1994 『縄文土器の研究』小学館

小林 敬 2008 『下田遺跡(2)』『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第444集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

櫻井美枝 1995 『河川における石器石材のあり方』『石器石材』予稿集 P13-16 岩宿フォーラム実行委員会

縄文セミナーの会1996 『第9回縄文セミナー—後期中葉の諸様相—資料集—』

縄文セミナーの会1996 『第9回縄文セミナー—後期後半の諸様相—記録集—』

縄文セミナーの会2002 『第15回縄文セミナー—後期後半の再検討—資料集—』

縄文セミナーの会2002 『第15回縄文セミナー—後期後半の再検討—記録集—』

鈴木徳雄 2000 『縄紋後期浅鉢形土器の意義』『縄文時代』第11号 P69-102 縄文時代研究会

鈴木徳雄 2002 『北関東における堀之内式の様相』『後期前半の再検討』第15回資料集 縄文セミナーの会

鈴木徳雄 2008 『浅鉢』『総覧 縄文土器』P1049-1054 アム・プロモーション

鈴木保彦 2006 『縄文集落に於ける祭祀と墓』『縄文時代集落の研究』P129-184 雄山閣

菅谷通保 1999 『加曾利B 3式の考え方—南関東からの視点—』『土曜考古』23号 P21-30 土曜考古学研究会

関根慎二 2007 『天ヶ塚遺跡(1)』『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第390集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

関根慎二 2008 『天ヶ塚遺跡(2)』『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第430集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

谷口康浩 2005 『環状集落と縄紋社会構造』学生社

長岡文紀ほか 1991 『宮ヶ瀬遺跡群VIIナラサス遺跡・ナラサス北遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター

西田泰民 1989 『堀之内・加曾利B式土器様式』『縄文土器大観』4 P281-285 小学館

西田泰民 1996 『堀之内式土器』『日本土器事典』P282-283 雄山閣

橋本 淳 1995 『考察 田戸上層式土器(第Ⅱ群土器)について』『城ノ山貝塚発掘調査報告書』千歳大学考古学研究室

橋本 淳 2005 『北関東における比較線紋土器の様相』『早期中葉の再検討 第18回縄文セミナー—資料集』P185-231 縄文セミナーの会

橋本 淳 2005 『北関東における比較線紋土器の様相』『早期中葉の再検討 第18回縄文セミナー—資料集』P68-79 縄文セミナーの会

宮下健司 2009 『屋外祭祀馬配石と祭祀』『季刊考古学』第107号 P52-55 雄山閣

山内清男 1967 『堀之内式』『日本先史土器図譜』P16-18 先史考古学会

山内清男 1967 『加曾利B式』『日本先史土器図譜』P10-13 先史考古学会

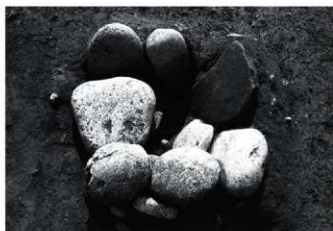
山本理久 2010 『石台石遺跡と縄文時代の配石墓』『新編紀(配石)住居と縄文時代』P185-203 六一書房

## 写真図版





I区調査区全景 (東)



I区14号遺構石囲炉 (北)



I区14号遺構石囲炉 (南西)



I区14号遺構石囲炉 (東)



I区14号遺構石囲炉 (西)



I区13号遺構遺物出土状況(東)



I区13号遺構遺物出土状況(南)



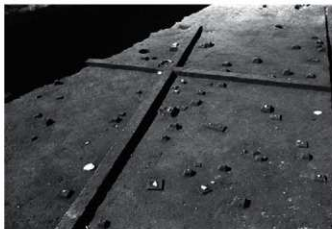
I区13号遺構遺物出土状況(北東)



I区13号遺構遺物出土状況(北東)



I区13号遺構遺物出土状況(南西)



I区5号遺構遺物出土状況(東)



I区5号遺構遺物出土状況(西)



I区16号遺構全景(南西)





II区調査区全景（東）



II区調査区全景（南）



II区6号遺構(南)



II区6号遺構埋裏(南)



II区29号遺構(東)



II区35号遺構(西)



II区36号遺構(東)



川区調査区全景 (東)



川区縄文時代露層面 (東)



Ⅲ区縄文時代礫層面（南）



Ⅲ区縄文時代礫層面（北）



Ⅲ区1号配石全景(東)



Ⅲ区1号配石全景(南)



Ⅲ区1号配石中央土坑掘り方(南)



Ⅲ区1号配石中央土坑掘り方(南)



Ⅲ区2号配石全景(南)



Ⅲ区2号配石全景(東)



Ⅲ区2号配石断ち割り状況(北)



Ⅲ区2号配石断ち割り状況(東)



Ⅲ区3号配石全景(西)



Ⅲ区3号配石全景(北)



Ⅲ区4号配石全景(南)



Ⅲ区4号配石全景(西)



Ⅲ区5号配石全景(南東)



Ⅲ区5号配石全景(東)



Ⅲ区6・7号配石全景(南)



Ⅲ区8号配石全景(南)



III区1号集石全景(南)



III区2号集石全景(南)



III区1号遺構全景(東)



III区1号遺構全景(西)



III区2号遺構遺物出土状況(北)



III区2号遺構遺物出土状況(北)



III区3号遺構遺物出土状況(北)



III区4号遺構遺物出土状況(東)



Ⅲ区5号遺構遺物出土状況（西）



Ⅲ区5号遺構遺物出土状況（西）



Ⅲ区6号遺構遺物出土状況（東）



Ⅲ区6号遺構遺物出土状況（西）



Ⅲ区b1号住居石囲炉（南）



Ⅲ区b1号住居石囲炉掘り方（南）



Ⅲ区b1号配石遺構（西）



Ⅲ区b1号配石遺構（南西）





IV区調査区全景 (東)



IV区調査区全景 (南)



IV区1号住居全景（東）



IV区1号住居炉（南東）



IV区1号住居炉（南東）



IV区1号住居遺物出土状況



IV区2号住居全景（南）



IV区2号住居炉（南西）



IV区3・4号住居全景（南西）



IV区3・4号住居炉（南西）



IV区3・4号住居炉 (西)



IV区3・4号住居炉 (東)



IV区5号住居全景 (東)



IV区5号住居炉 (南)



IV区6号住居全景 (東)



IV区6号住居全景 (南)



IV区1号遺構 (東)



IV区4号遺構 (東)



IV区5号遺構 (西)



IV区9号遺構 (南東)



IV区9号遺構 (南西)



IV区9号遺構 (南)



IV区21号遺構 (南)



IV区21号遺構 (南)



IV区21号遺構 (南)



IV区21号遺構 (南)



IV区23号遺構 (東)



IV区24・98号遺構 (南)



IV区24・98号遺構 (北)



IV区24・98号遺構 (南)



IV区24・98号遺構立石復元 (南)



IV区24・98号遺構立石復元 (北)



IV区34号遺構 (南西)



IV区34号遺構 (南西)



IV区37号遺構 (東)



IV区37号遺構掘り方 (東)



IV区38号遺構 (南)



IV区39号遺構 (北)



IV区40・56号遺構 (東)



IV区43号遺構 (南)



IV区44号遺構 (東)



IV区45号遺構 (東)



IV区48号遺構 (北)



IV区55号遺構 (東)



IV区57号遺構 (東)



IV区58号遺構 (東)



IV区59号遺構 (東)



IV区61号遺構 (西)



IV区63号遺構 (東)



IV区64号遺構 (東)



IV区67号遺構 (東)



IV区68号遺構 (西)



IV区77・78・79・80号遺構 (東)



IV区77・78・79・80号遺構 (東)



IV区81号遺構 (北東)



IV区82号遺構 (北東)



IV区85号遺構 (南)



IV区88号遺構 (東)





IV区89・90号遺構 (東)



IV区91号遺構 (東)



IV区95号遺構 (東)



IV区95号遺構 (西)



IV区100号遺構 (東)



IV区100号遺構 (西)



IV区106号遺構 (南)



IV区106号遺構 (東)



IV区108号遺構 (南)



IV区109号遺構 (東)



IV区110号遺構 (西)



IV区111号遺構 (北)



IV区111号遺構 (東)



IV区112号遺構 (南東)



IV区113号遺構 (東)



IV区114号遺構 (南)



IV区115号遺構 (東)



IV区116号遺構 (北)



IV区117号遺構 (南)



IV区118号・120号・121号遺構 (東)



IV区118号遺構 (東)



IV区118号遺構掘り方 (北)



IV区119号遺構 (東)



IV区120号遺構 (東)



IV区120号遺構 (北)



IV区120号遺構 (東)



IV区121号遺構 (北)



IV区121号遺構 (東)



IV区121号遺構掘り方 (北)



IV区122号遺構 (東)



IV区123号遺構 (東)



IV区123号遺構 (北東)



IV区123号遺構掘り方 (北東)



IV区124号遺構 (北東)



IV区125号遺構 (北西)



IV区125号遺構掘り方 (北西)



IV区126号遺構 (北東)



IV区127号遺構 (西)



IV区128号遺構 (西)



IV区129号遺構 (北)



IV区129号遺構 (南)



IV区129号遺構 (北)



IV区130号遺構 (北東)



IV区130号遺構 (北)



IV区131号遺構 (北東)



IV区132号遺構 (北)



IV区133号遺構 (南東)



IV区134号遺構 (東)



IV区135号遺構 (北)



IV区136号遺構 (北)



IV区138号遺構 (北)



IV区139号遺構 (南)



IV区140号遺構 (南東)



IV区141号遺構 (南東)



IV区142号遺構 (東)



IV区142号遺構 (東)



IV区1号煨土 (南西)



IV区2号煨土 (西)



IV区3号煨土 (南西)



IV区4号煨土 (南)



IV区19号遗構 (西)





IV区盛土調査状況A地区(東)



IV区盛土調査状況A地区(東)



IV区盛土調査状況B地区(東)



IV区盛土調査状況B地区(西)



IV区盛土調査状況D地区(南)



IV区盛土調査状況D地区(南東)



IV区盛土調査状況E地区(西)



IV区盛土調査状況E地区(西)



IV・V区調査区全景(西)



V区縄文包含層(南)



V区西部縄文包含層 (南)



V区北東部縄文包含層 (南)



V区1号遺物集中 (東)



V区2号遺物集中 (東)



V区2号遺物集中 (東)



V区2号遺物集中 (東)



V区3号遺物集中 (東)



V区4号遺物集中 (東)



VI区縄文包含層（空撮）



VI区縄文包含層（東）



VI区織文包含層 (西)



VI区織文包含層 (西)



VII区繡文包含層 (空攝)



VII区繡文包含層 (北東)



VII区縄文包含層 (空撮)



VII区縄文包含層 (空撮)



1 5号遺構



2 5号遺構



3 5号遺構



6 5号遺構



4 5号遺構



5 5号遺構



2 遺構外



1 遺構外



3 遺構外



1区出土遺物(1)



4 遺構外

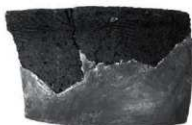




5 遺構外



6 遺構外



7 遺構外



8 遺構外



9 遺構外



10 遺構外



11 遺構外



12 遺構外



13 遺構外



14 遺構外



15 遺構外



16 遺構外



17 遺構外



18 遺構外



19 遺構外



20 遺構外



21 遺構外



22 遺構外



23 遺構外



24 遺構外



25 遺構外



26 遺構外



27 遺構外



28 遺構外



29 遺構外



30 遺構外



31 遺構外



32 遺構外



33 遺構外



34 遺構外



35 遺構外



36 遺構外



37 遺構外



38 遺構外



39 遺構外



40 遺構外



41 遺構外



42 遺構外



43 遺構外



44 遺構外



45 遺構外



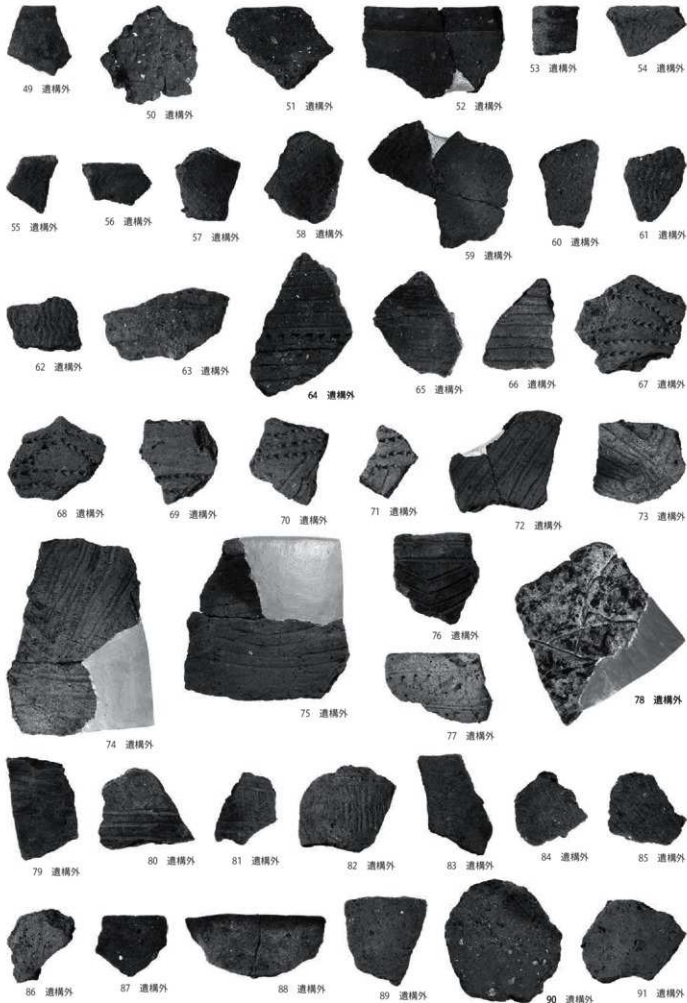
46 遺構外

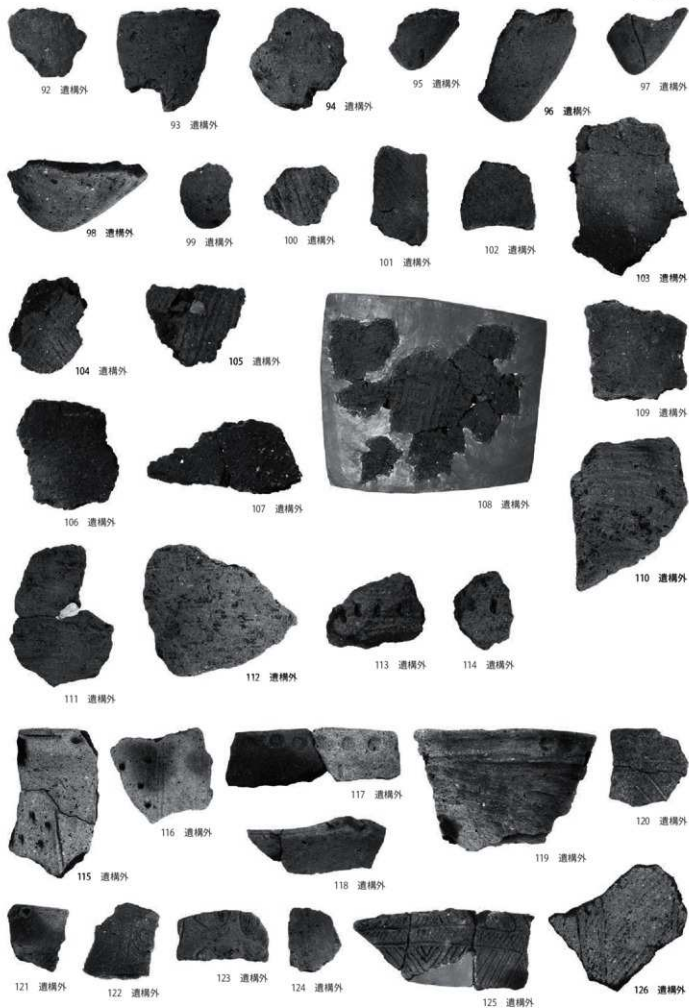


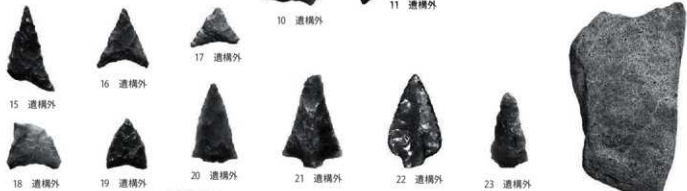
47 遺構外



48 遺構外







I区出土遺物(5)・II区出土遺物(1)



3 6号遺構



4 6号遺構



1 遺構外



2 遺構外



3 遺構外



4 遺構外



5 遺構外



6 遺構外



7 遺構外



8 遺構外



9 遺構外



10 遺構外



13 遺構外



14 遺構外



11 遺構外



12 遺構外



15 遺構外



16 遺構外



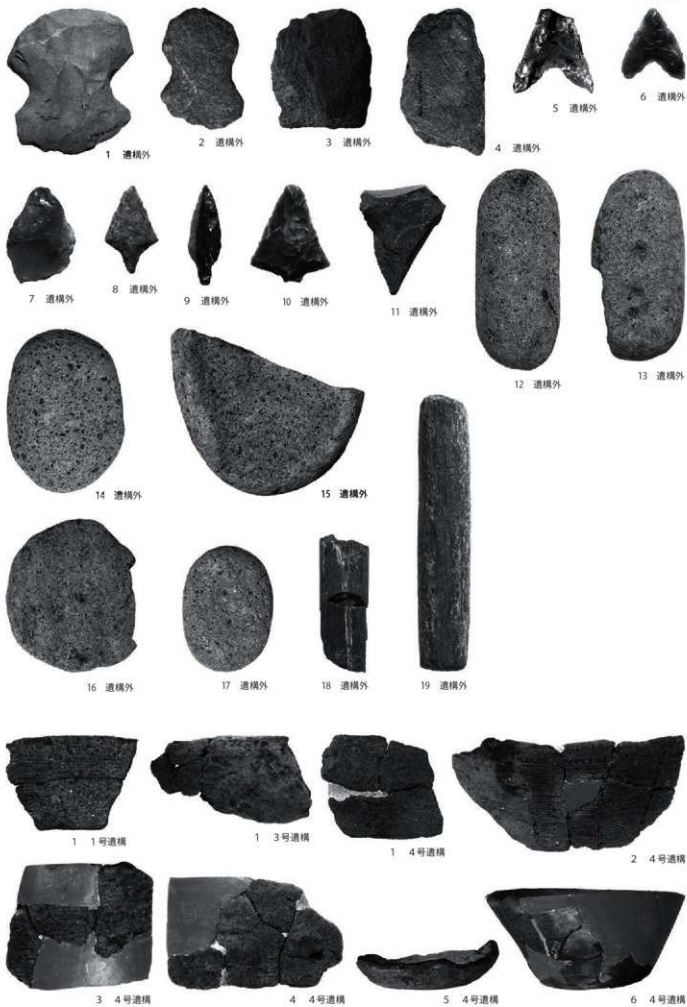
17 遺構外



18 遺構外



19 遺構外



II区出土遺物(4)・III区出土遺物(1)



1 5号遺構



2 5号遺構



3 5号遺構



5 5号遺構



6 5号遺構



4 5号遺構



1 1号住居



2 1号住居



3 1号住居



1 遺構外



3 遺構外



2 遺構外

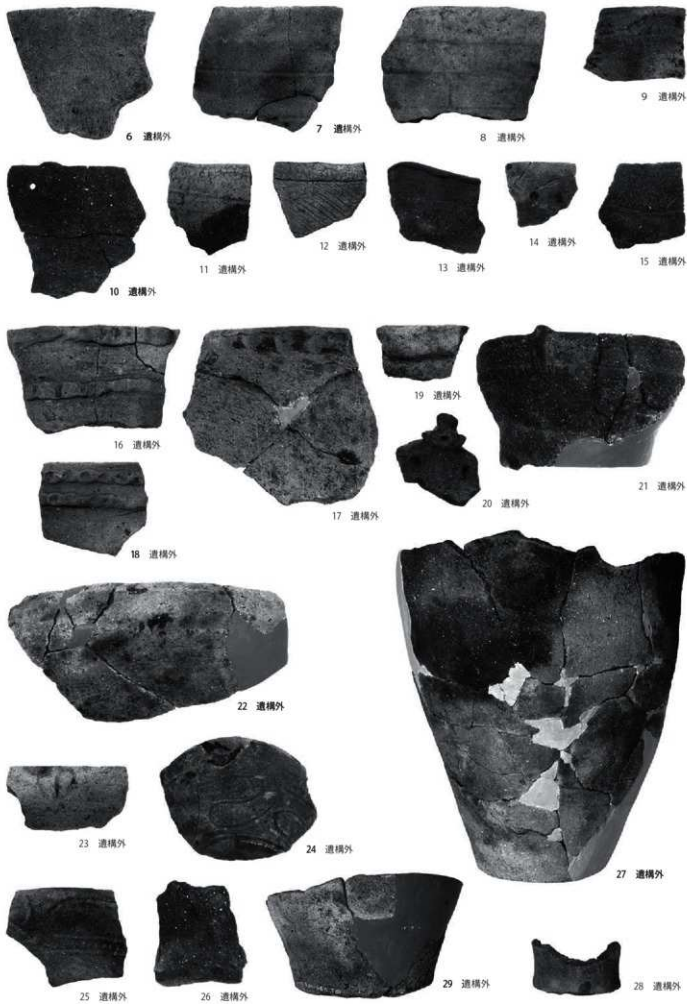


5 遺構外



4 遺構外





III区出土遺物(3)

PL.44



30 遺構外



31 遺構外



32 遺構外



33 遺構外



1 遺構外



2 遺構外



3 遺構外



4 遺構外



5 遺構外



6 遺構外



7 遺構外



8 遺構外



9 遺構外



10 遺構外



11 遺構外



12 遺構外



13 遺構外



14 遺構外



15 遺構外



16 遺構外



17 遺構外



18 遺構外



19 遺構外



20 遺構外



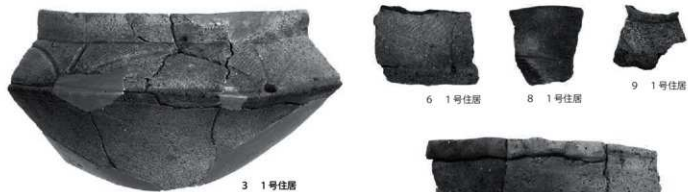
21 遺構外



22 遺構外



23 遺構外





1 1号住居



2 1号住居



3 1号住居



1 2号住居



2 2号住居



3 2号住居



4 2号住居



5 2号住居



6 2号住居



7 2号住居



8 2号住居



9 2号住居



10 2号住居



11 2号住居



12 2号住居



13 2号住居



14 2号住居



17 2号住居



15 2号住居



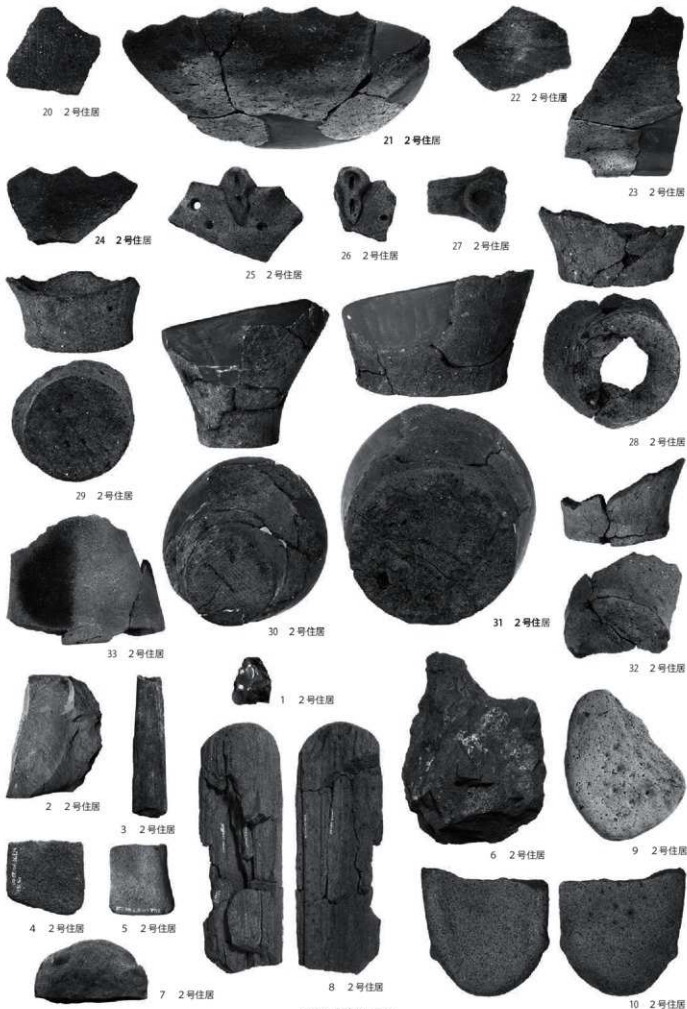
16 2号住居

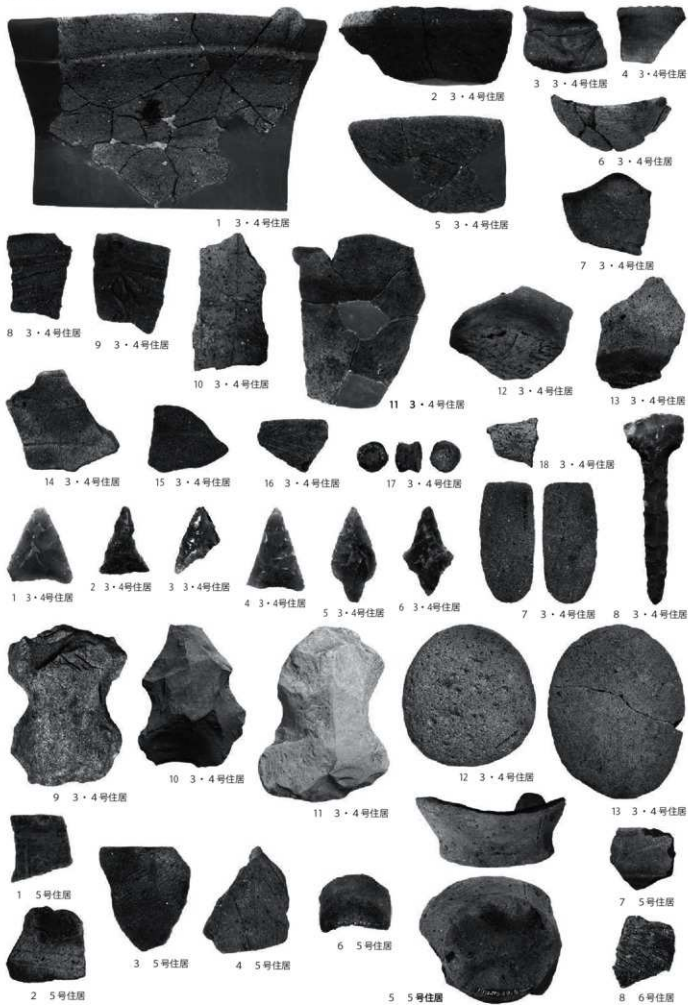


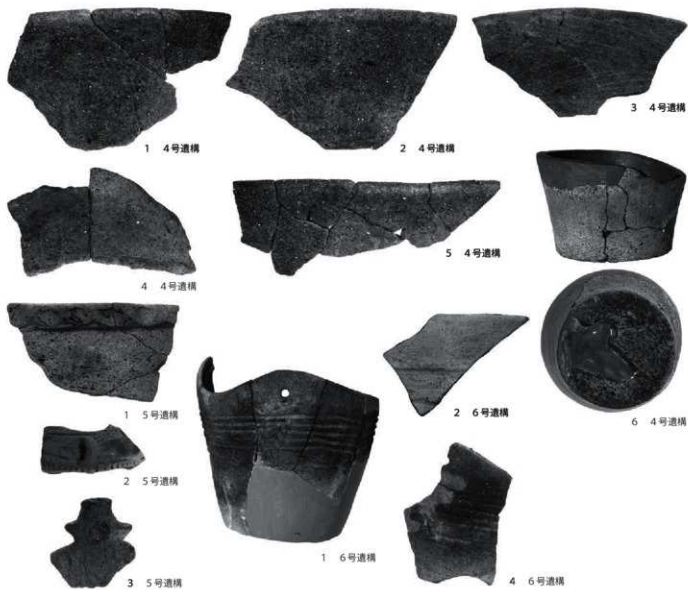
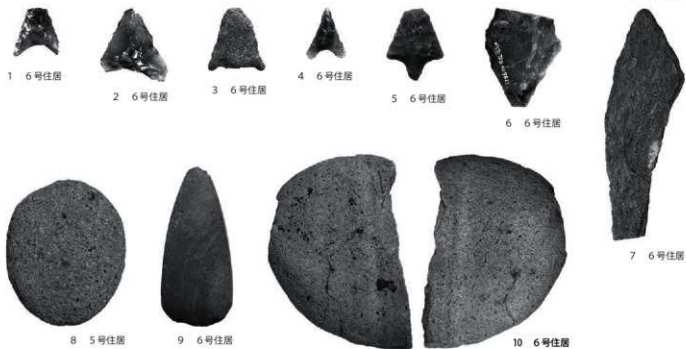
18 2号住居

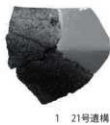


19 2号住居













1 23号遺構



2 23号遺構



3 23号遺構



4 23号遺構



5 23号遺構



6 23号遺構



7 23号遺構



1 24号遺構



3 24号遺構



2 24号遺構



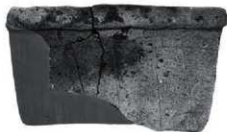
1 27号遺構



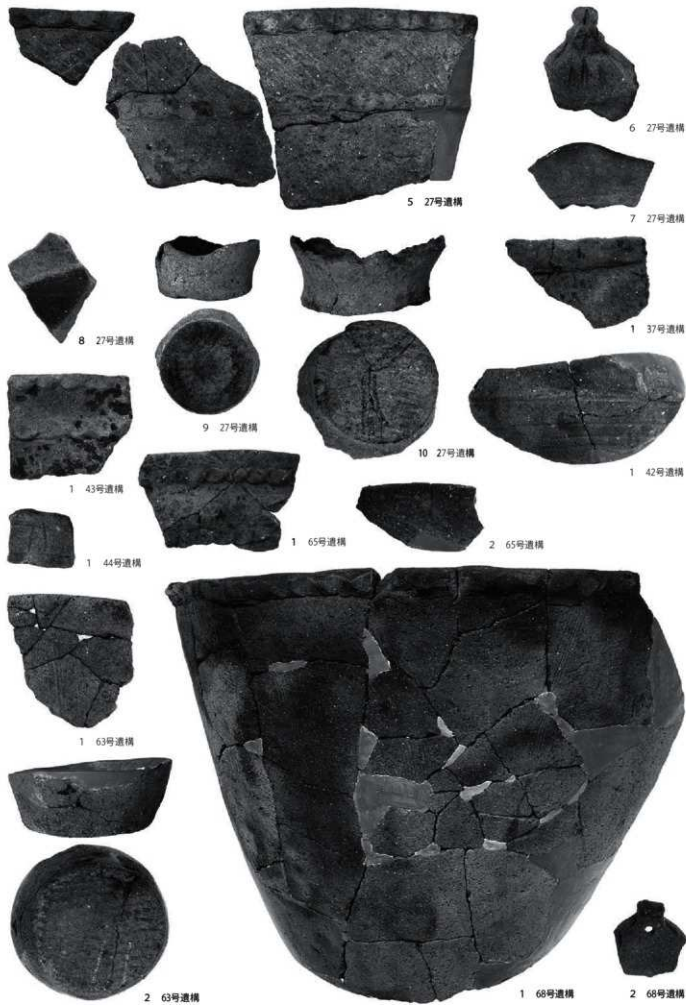
2 27号遺構



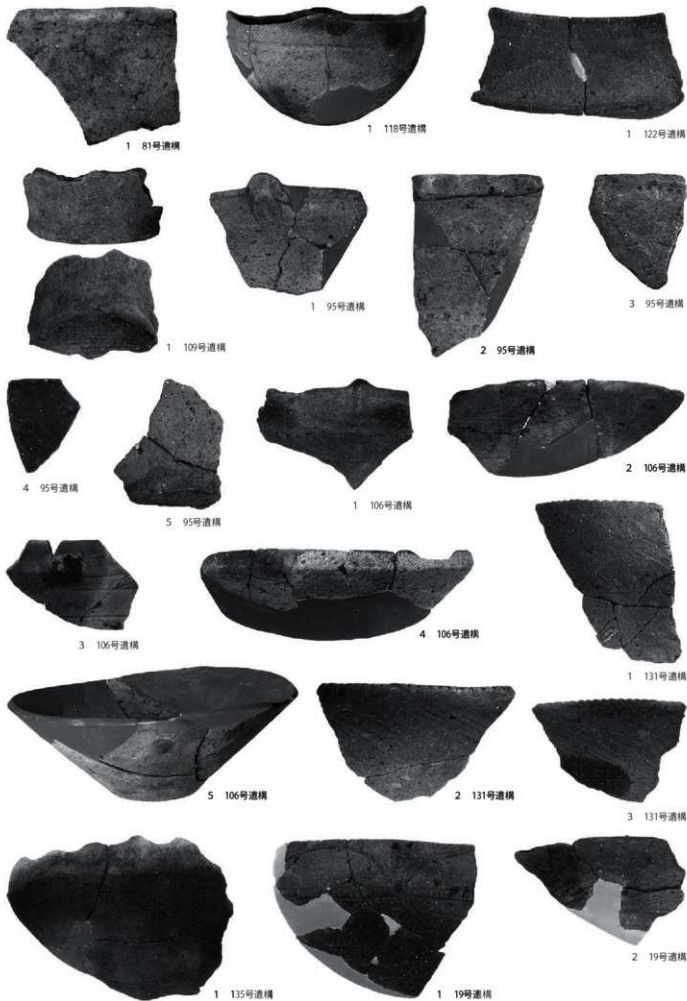
4 27号遺構



3 27号遺構



IV区出土遺物 (8)





3 19号遺構



4 19号遺構



6 19号遺構



5 19号遺構



1 盛土遺構



2 盛土遺構



3 盛土遺構



4 盛土遺構



1 遺構外



2 遺構外



3 遺構外



1 遺構外



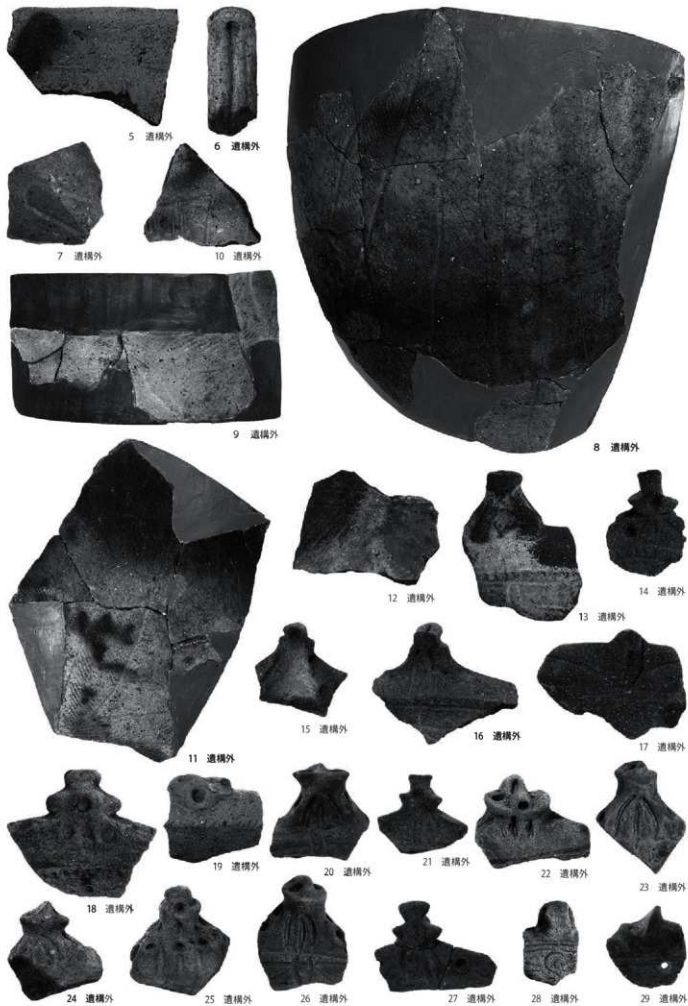
2 遺構外



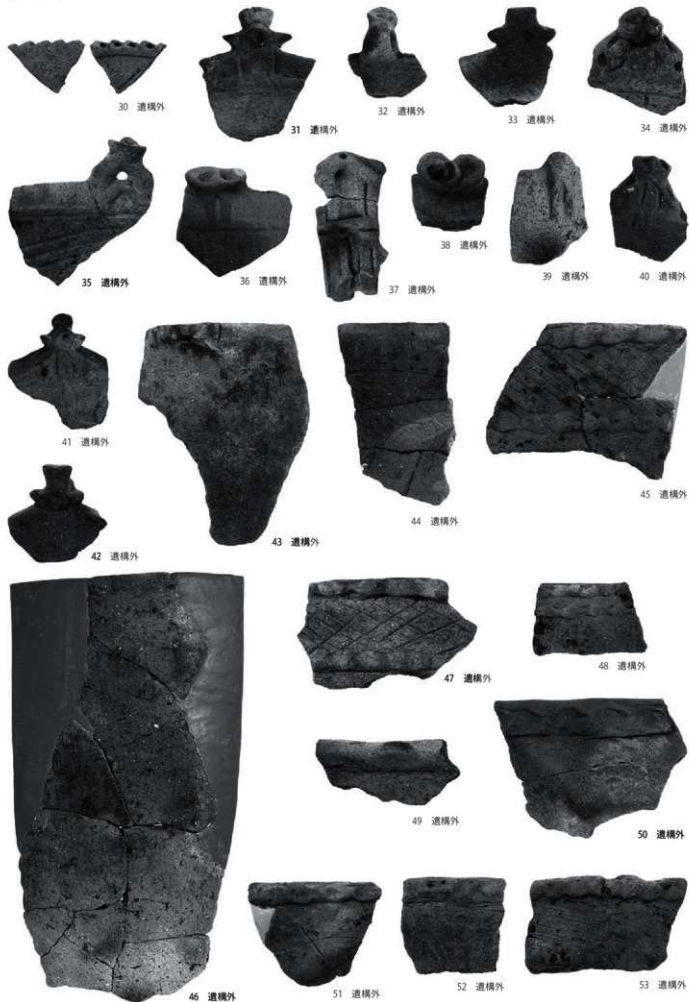
3 遺構外



4 遺構外



IV区出土遗物 (11)





54 遺構外



55 遺構外



56 遺構外



57 遺構外



58 遺構外



59 遺構外



60 遺構外



61 遺構外



63 遺構外



64 遺構外



65 遺構外



62 遺構外



66 遺構外



67 遺構外



68 遺構外



69 遺構外



70 遺構外



71 遺構外



72 遺構外



73 遺構外



74 遺構外



75 遺構外



76 遺構外



77 遺構外



78 遺構外



80 遺構外



81 遺構外



82 遺構外



85 遺構外



86 遺構外





79 遺構外



87 遺構外



84 遺構外



83 遺構外



88 遺構外



89 遺構外



90 遺構外



91 遺構外



92 遺構外



93 遺構外



94 遺構外



95 遺構外



96 遺構外



97 遺構外



98 遺構外



99 遺構外



101 遺構外



100 遺構外



102 遺構外



103 遺構外



104 遺構外



106 遺構外



107 遺構外



105 遺構外



108 遺構外



109 遺構外



110 遺構外



111 遺構外



112 遺構外



116 遺構外



113 遺構外



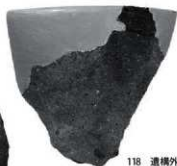
114 遺構外



115 遺構外



117 遺構外



118 遺構外



119 遺構外



120 遺構外



121 遺構外



122 遺構外



123 遺構外



124 遺構外



125 遺構外



126 遺構外



127 遺構外



128 遺構外



129 遺構外



130 遺構外



131 遺構外



132 遺構外



133 遺構外



134 遺構外



137 遺構外



138 遺構外



139 遺構外



135 遺構外



136 遺構外



140 遺構外



141 遺構外



142 遺構外



143 遺構外



144 遺構外



145 遺構外



146 遺構外



147 遺構外



148 遺構外



149 遺構外



150 遺構外



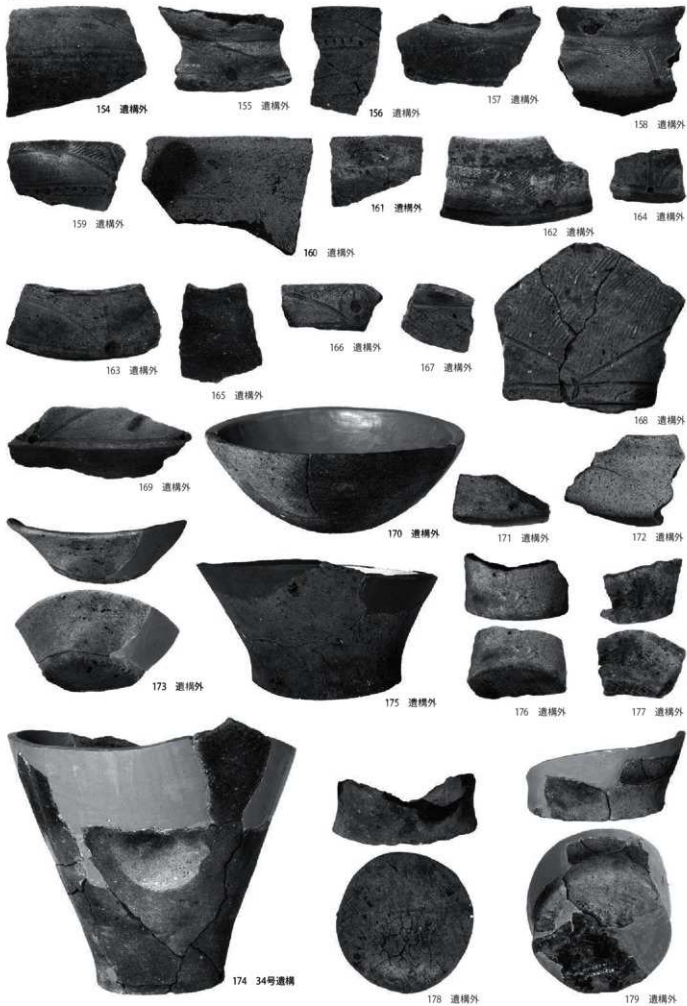
151 遺構外



152 遺構外



153 遺構外





180 遺構外



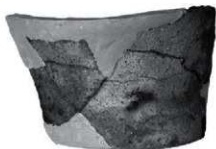
182 遺構外



183 遺構外



184 遺構外



181 遺構外



185 遺構外



186 遺構外



187 遺構外



188 遺構外



189 遺構外



190 遺構外



191 遺構外



192 遺構外



193 遺構外



194 遺構外

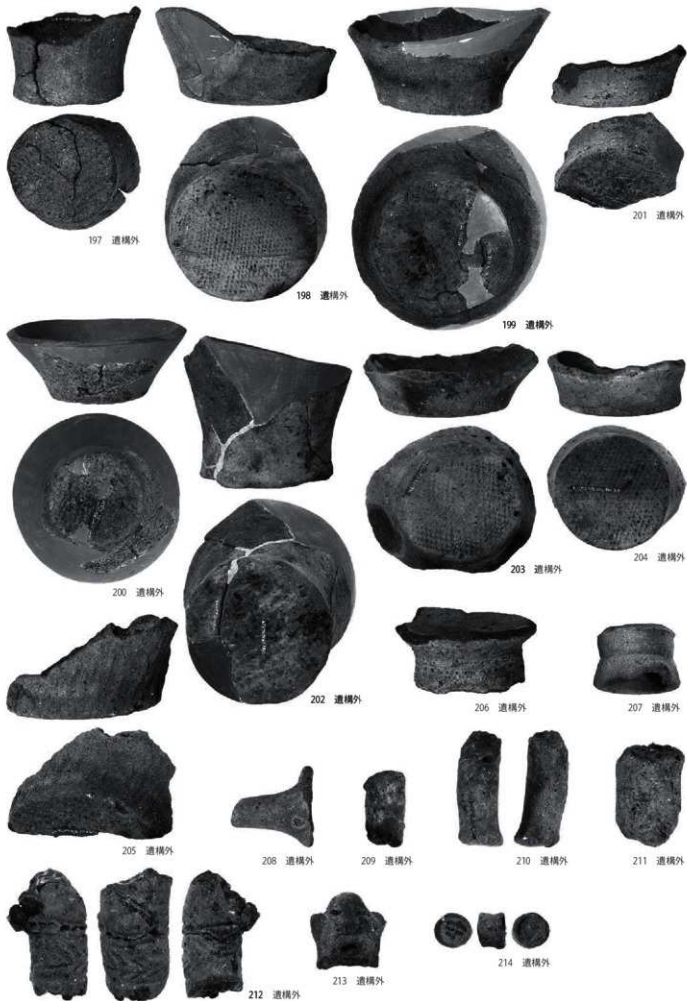


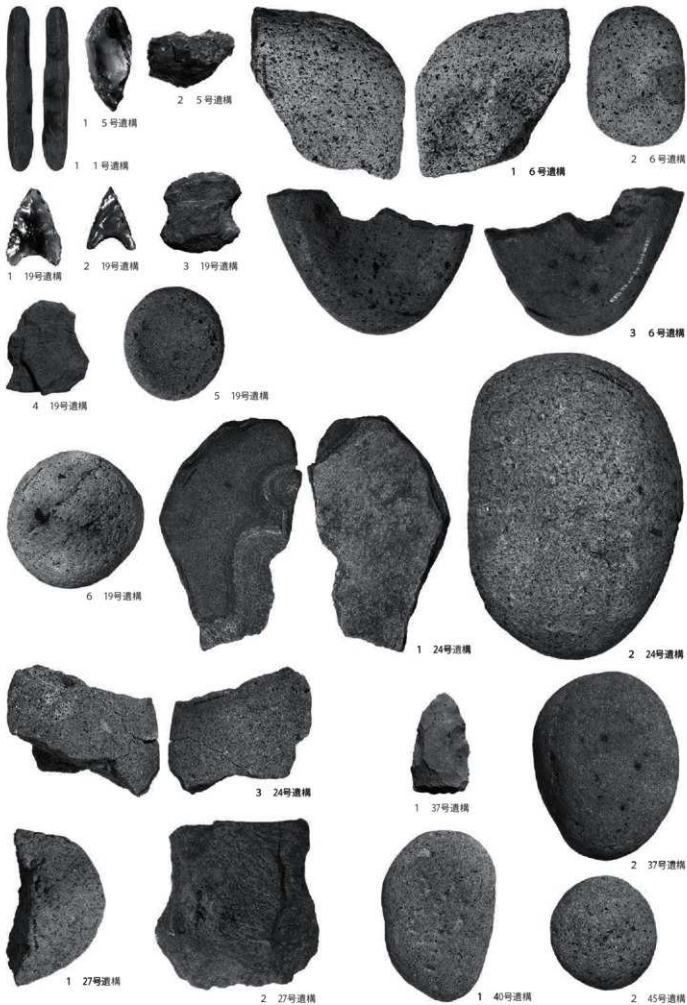
195 遺構外



196 遺構外









1 45号遺構



1 54号遺構



1 67号遺構



1 81号遺構



1 132号遺構



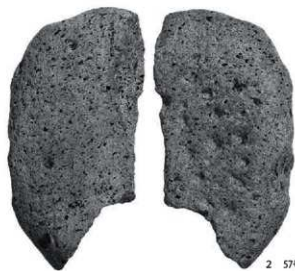
1 82号遺構



1 83号遺構



1 57号遺構



2 57号遺構



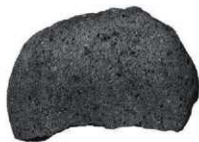
3 57号遺構



4 57号遺構



5 57号遺構



1 93号遺構



1 98号遺構



1 100号遺構



1 133号遺構



2 133号遺構

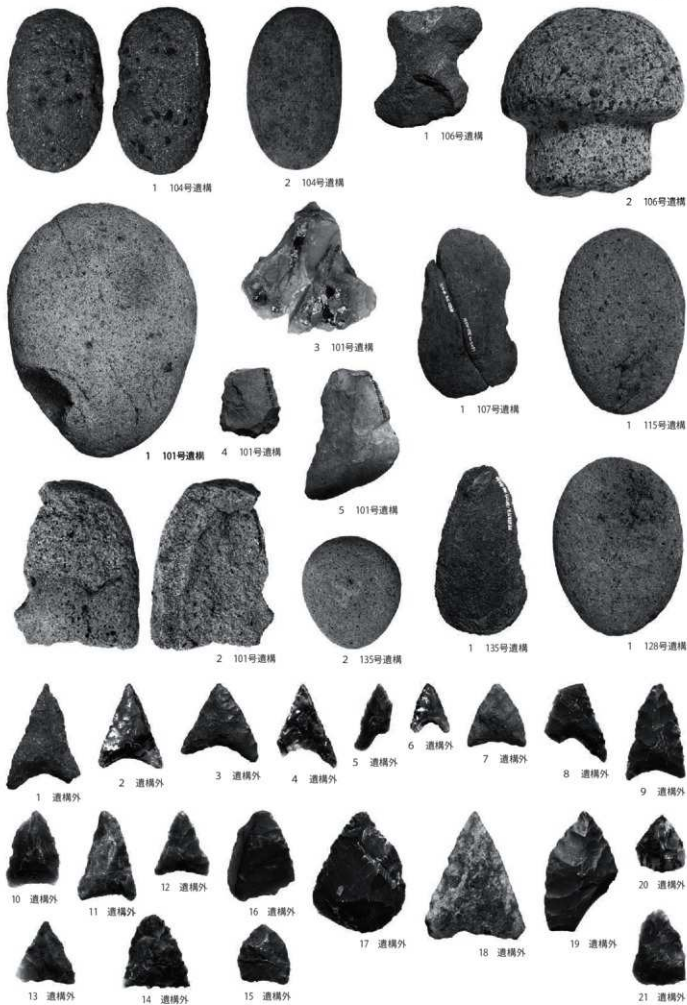


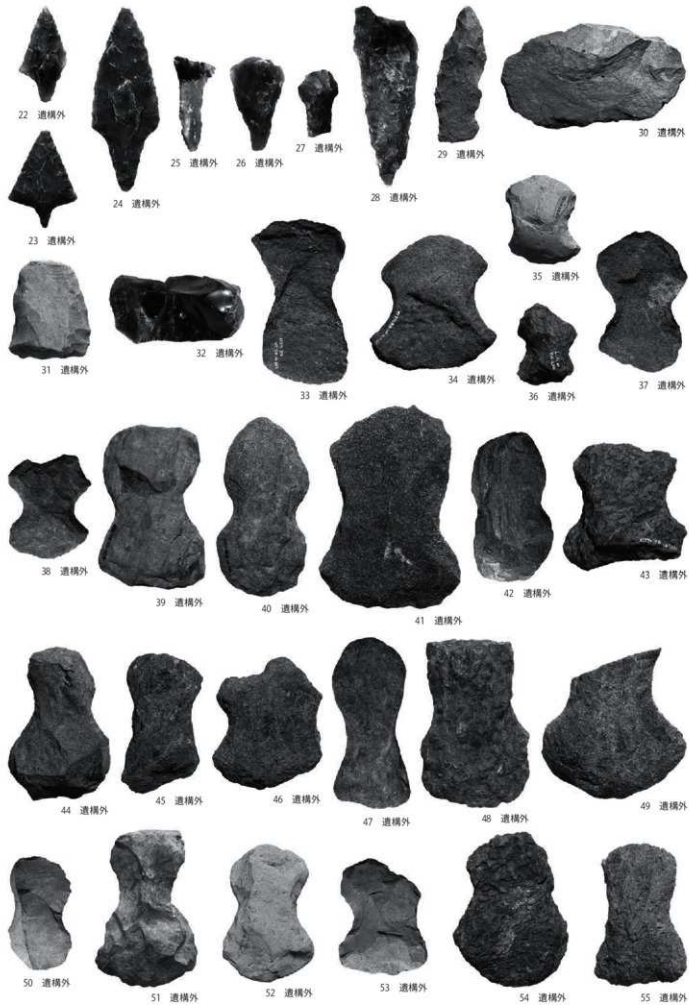
3 133号遺構

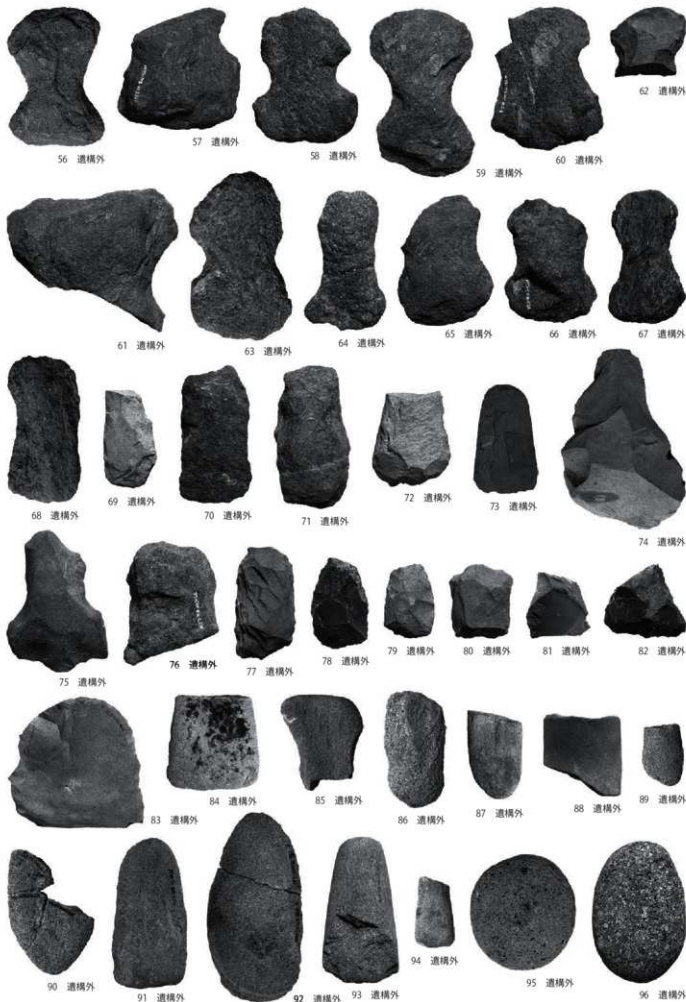


4 133号遺構











97 遺構外



98 遺構外



99 遺構外



100 遺構外



101 遺構外



102 遺構外



103 遺構外



104 遺構外



105 遺構外



106 遺構外



107 遺構外



108 遺構外



109 遺構外



110 遺構外



111 遺構外



112 遺構外



113 遺構外



114 遺構外



115 遺構外



118 遺構外



116 遺構外



117 遺構外



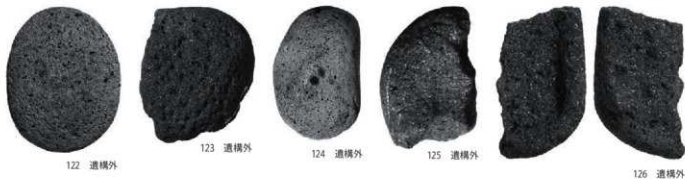
119 遺構外



120 遺構外



121 遺構外







4 1号遗物集中



1 2号遗物集中



2 2号遗物集中

V区出土遗物(2)



3 2号遺物集中



4 2号遺物集中



5 2号遺物集中



8 2号遺物集中



6 2号遺物集中





7 2号遺物集中



9 2号遺物集中



11 2号遺物集中



10 2号遺物集中



12 2号遺物集中



13 2号遺物集中



14 2号遺物集中

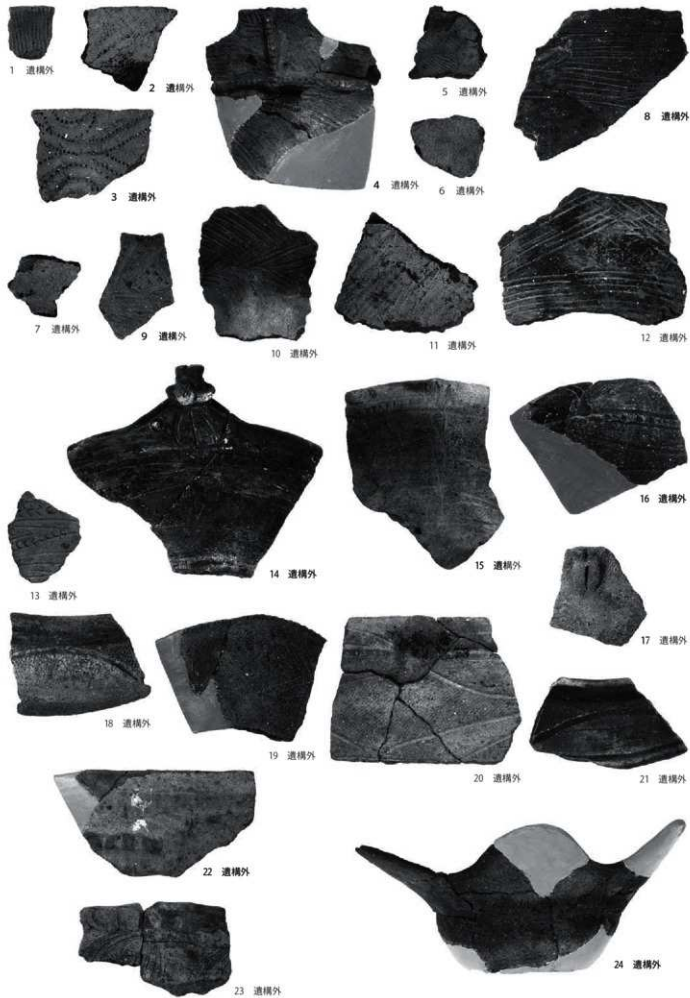


15 2号遺物集中



1 4号遺物集中

PL.76





25 遺構外



26 遺構外



28 遺構外



27 遺構外



29 遺構外



30 遺構外



31 遺構外



32 遺構外



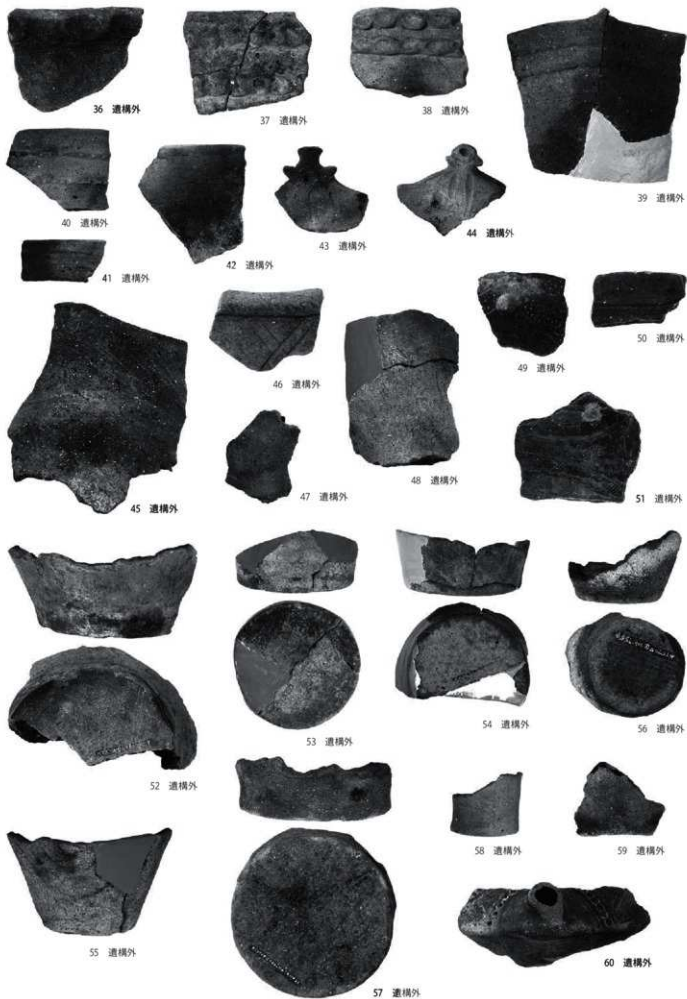
33 遺構外



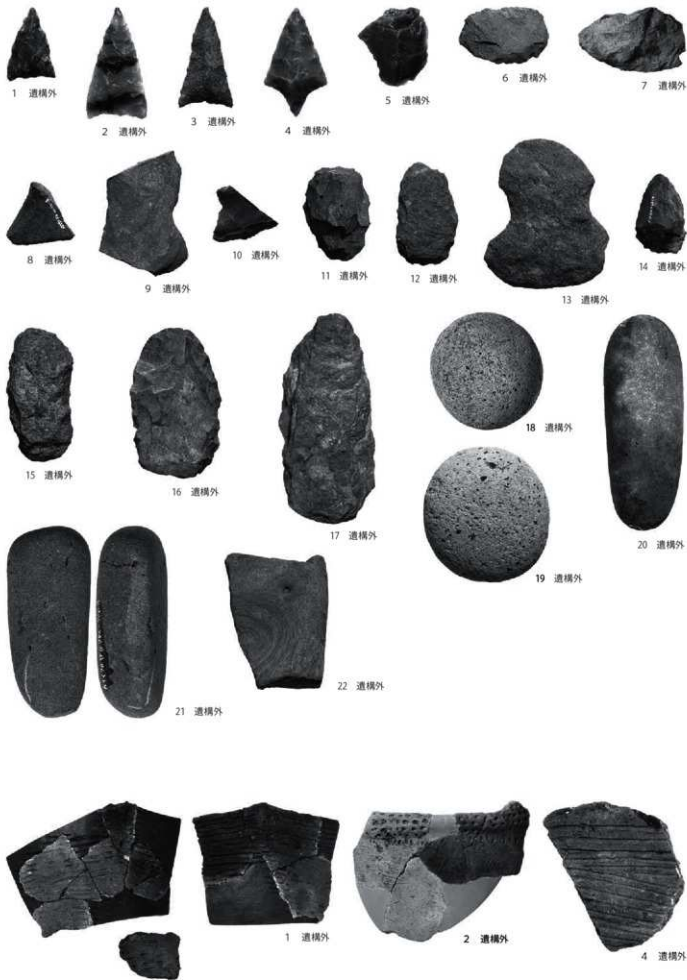
34 遺構外

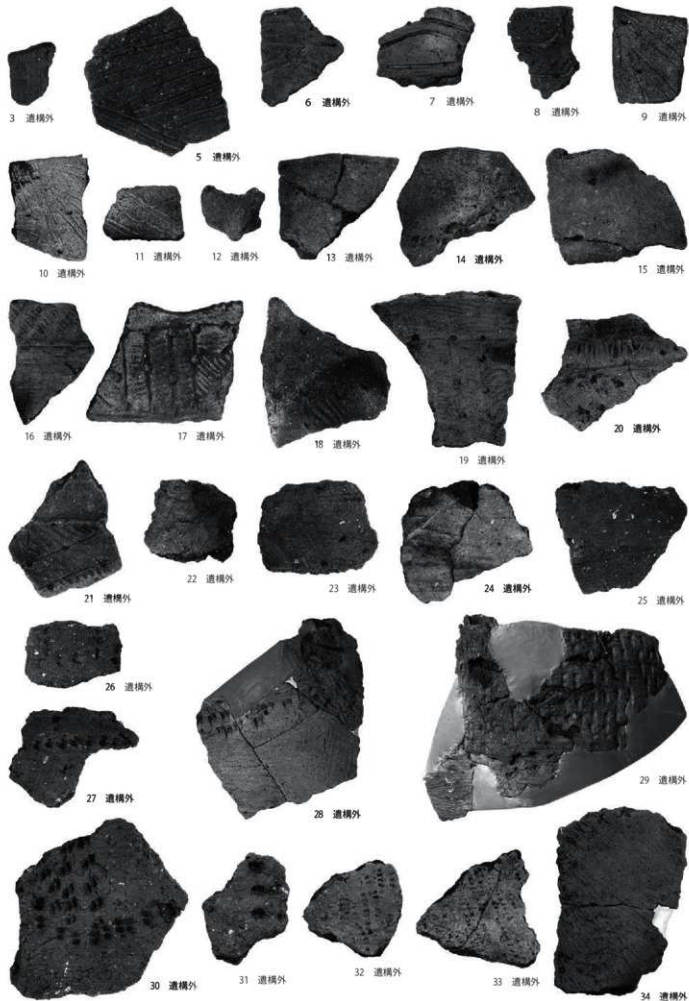


35 遺構外



V区出土遺物 (7)







35 遺構外



36 遺構外



37 遺構外



38 遺構外



39 遺構外



40 遺構外



41 遺構外



42 遺構外



43 遺構外



44 遺構外



45 遺構外



46 遺構外



47 遺構外



48 遺構外



49 遺構外



50 遺構外



51 遺構外



52 遺構外



53 遺構外



54 遺構外



55 遺構外



56 遺構外



57 遺構外



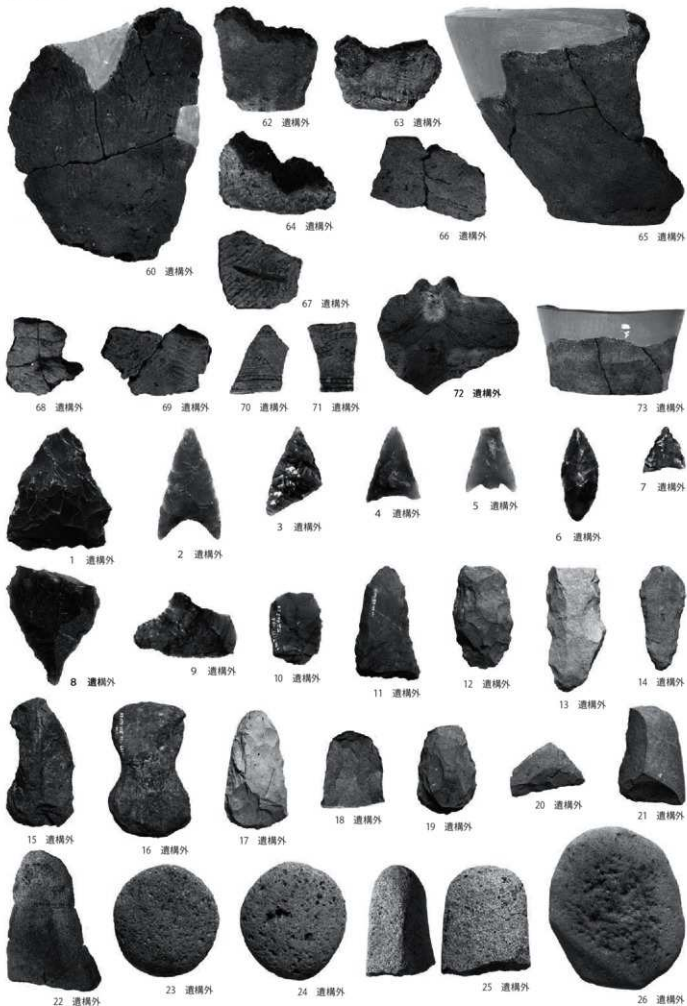
58 遺構外



59 遺構外



61 遺構外



VI区出土遺物 (4)





1 遺構外



2 遺構外



4 遺構外



5 遺構外



3 遺構外



6 遺構外



7 遺構外



8 遺構外



9 遺構外



10 遺構外



11 遺構外



12 遺構外



13 遺構外



14 遺構外



15 遺構外



16 遺構外



17 遺構外



18 遺構外



19 遺構外





1 遺構外



2 遺構外



3 遺構外



4 遺構外



5 遺構外



10 遺構外



11 遺構外



6 遺構外



7 遺構外



8 遺構外



9 遺構外



12 遺構外



13 遺構外



14 遺構外



15 遺構外



16 遺構外



17 遺構外



18 遺構外



19 遺構外

## 報告書抄録

書名ふりがな	にしながおかしゅくいせきに
書名	西長岡宿遺跡(2)
副書名	北関東自動車道(伊勢崎～県境)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	504
編著者名	関根徹二/齊田智彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20101022
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	にしながおかしゅく
遺跡名	西長岡宿
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしにしながおか
遺跡所在地	群馬県太田市西長岡 395 他
市町村コード	10205
遺跡番号	T0388
北緯(日本測地系)	362037-362038
東経(日本測地系)	1391936-1392008
北緯(世界測地系)	362048-362038
東経(世界測地系)	1391924-1391956
調査期間	20010401-20040131、20040601-20040630
調査面積	27,876㎡
調査原因	道路建設工事
種別	集落
主な時代	縄文時代
遺跡概要	包蔵地-縄文-土器+石器/集落-竪穴住居 8+土坑 6+溝 1+配石遺構102+焼土痕 4+遺物集中箇所 5
特記事項	縄文時代集落と墓域群、配石遺構
要約	太田市の八王子丘陵南麓にある縄文時代集落。縄文時代早期中葉の土器資料に本地域とは異なる。東関東や南関東の様相を示す土器が出土している。縄文時代後期には、縄文時代住居と配石墓群、立石を含む配石遺構が作られ、集落内を住居域と墓域の構造を示す。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第504集

## 西長岡宿遺跡(2) (縄文時代編)

北関東自動車道(伊勢崎～県境)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年(2010)10月15日 印刷

平成22年(2010)10月22日 発行

編集・発行/財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷/杉浦印刷株式会社